

平成 4 年度調査の概観

平成 4 年度の緊急発掘調査実施件数は12件で、対象面積は、2155m²であった。前年度の12件、5837m²と比較すると件数は変わらないものの、面積の減少が目立つ。これは3 年度の本稿でその兆候を指摘した経済情勢の後退現象が具体的に反映した結果であると考えられる。

本市では昭和46年度から緊急発掘調査を本格的に開始し、昭和59年度からは国庫補助事業調査を実施しているが、調査量は平成 2 年度まで常に増加傾向を保っていた。それが3 年度でやや減少し、今年度は事業者負担調査については激減といえる状況を呈している。緊急発掘調査の宿命的な側面が露呈した年度であったといえよう。

4 年度の調査原因の内訳は、専用住宅が 5 件、店舗併用住宅が 2 件、自己用店舗が 1 件、共同住宅との併用住宅が 3 件、そして自己用事務所併用住宅が 1 件であった。この10数年の鎌倉市内の傾向として顕著な、家屋の老朽化に伴う建て替えに際し新たな事業を計画に採り入れ、土地の有効活用を図ろうとする動向に変化はないが、昨年度に比し共同住宅との併用ケースが減少している。やはり、経済状況の反映であろう。

4 年度調査の特記事項としては、公方屋敷跡（地点 1）で足利公方関連の可能性を窺わせる礎石建物遺構を検出したことや、永福寺跡（地点 2）で僧坊と思われる堀立柱建物の遺構及び火葬遺構が検出された事例などが挙げられる。また、若宮大路周辺遺跡群（地点 8）で小町大路に沿って検出された14世紀代の方形竪穴建物群は、鎌倉の中世都市造営研究上貴重な資料が得られたと評価し得る成果であった。

1 公方屋敷跡

同遺跡内の浄明寺三丁目143番 2 に所在する。平成 3 年度からの継続調査で14世紀中半期の大溝や建物跡、そして稻荷小路と思しき道路跡を検出した。公方屋敷跡に係わる発掘調査はやぐら以外は殆ど前例がなく、本調査は足利公方本拠地の考古学的解明作業の端緒となるものである。

2 永福寺跡

同遺跡内の二階堂字杉ヶ谷520番 1 外に所在する。本件も 3 年度からの継続調査である。調査により15世紀中半～後半期の火葬場遺構と14世紀代の堀立柱建物・井戸・道路・石垣等の諸遺構が検出された。堀立柱建物は永福寺の僧坊と推定され、これに伴う井戸からは弓の断欠と多量の鹿の骨が出土し、その特異な在り方が注目される。また火葬場遺構は当該地西側の谷戸からも発見されており、永福寺史研究上意義ある調査であった。

3 若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心として広範囲に所在する当遺跡内の、小町二丁目63番3に位置する。

平成2年10月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、地下室を含めた計画であるので試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は10月22～23日に実施され、中世及び古代の遺構面が検出された。11月2日、設計変更の可否を協議したが不可能であると判明し、自己用区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの県の指導を得た上で、改めて事前調査の実施を前提に細部に亘る打ち合わせを行った。12月1日、調査期間等を提示し事業者負担分調査も含めた調査全般の協議をした。その後事業者側の事由により協議が中断していたが、平成3年10月14日協議を再開し、平成4年2月からの調査実施要望が事業者から提示された。10月22日、調査に伴う土木工事等の詳細を打ち合わせし、10月23日に文化財保護法第57条の2の届出が提出され、続いて11月15日、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付された。そして細部の調整をすすめた後、翌4年2月13日調査実施依頼書が市教育長宛提出された。然し乍ら、他の国庫補助事業調査との調整のため、同調査については平成4年度分調査とし、3月23日から事業者負担分調査を開始し、続いて相当分を対象に4月1日から本調査を実施したものである。

調査によって14世紀代の建物跡などが検出され、新たな都市遺跡資料が得られたと評される。

4 大倉幕府周辺遺跡群

国指定史跡源頼朝墓の南方一帯は、我が国史上最初の幕府である大倉幕府が開かれた地として知られている。その周辺には幕府関係機関や主要御家人の居館などが建ち並んでいたと推察され、標記の遺跡名が付されている。本調査地点は幕府跡の正面を東西に走行する六浦路に面した一角、雪ノ下三丁目607番外に所在する。平成4年4月、自己用店舗併用住宅建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。4月27日から5月13日にかけて試掘調査を行ったところ、4～6面の中世遺構面と古代面の存在が確認された。このため設計変更の可否について検討依頼するが不可能であることが判明した。そこで国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導にもとづき、5月25日事業者と協議し調査方法等についての調整を進め、土木工事等の協力を得ながら杭打箇所を先行調査し、次に残余の区域の掘削範囲内を調査することで合意した。5月28日、文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、続いて6月8日、事業者から調査実施依頼書が市教育長宛に提出された。そして6月25日付けで県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付されたのを受けて、6月9日から8月25日にかけて、発掘調査が実施されたのである。

調査により14世紀代を中心とする建物遺構や井戸などが検出され、大倉幕府移転後の鎌倉期・南北朝期のこの区域の考古学的様相を解明する上で良好な資料が得られた。

5 北条政村屋敷跡

鎌倉市庁舎から常盤へ通ずる市道（通称市役所通り）を挟んだ常盤一帯は、北条政村邸跡と伝承され、道路の北側は国指定史跡北条氏常盤亭跡、南側は包蔵地（北条政村屋敷跡・No.131）となっている。調査地点は包蔵地内の常盤字殿入下643番4外に所在する。

平成4年7月、専用住宅建設に係わる確認申請の事前相談があり、掘削深度が1mを超える基礎工事を伴う計画であるので、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は7月23日～24日に実施され、中世及び古代の遺構面が検出された。このため設計変更の可否を協議したが不可能であると判明したので、7月27日県教育委員会と対処方法を検討したところ、国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。このため7月30日、改めて事前調査の実施を前提に事業者と調査方法等の細部に亘る打合わせを行った。8月1日、文化財保護法第57条の2の届出が提出され、続いて8月20日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付された。また、同日付で調査実施依頼書が市教育長宛提出された。そして細部の事項を整えた後、9月4日から本調査を実施したものである。

調査によって14世紀代の溝跡と11世紀末期～12世紀初頭の溝・道路跡が検出され、当地域の新たな考古学的資料が得られたのである。

6 長谷小路周辺遺跡

六地蔵から長谷寺に至る国道134号線沿いに広がる同遺跡は、砂丘上に形成された庶民居住施設或いは生産工房的な建物遺構の発見例が多い。調査地点は江の電由比ヶ浜駅の東側、由比ヶ浜三丁目1175番2外に所在する。

平成4年3月、住居併用共同住宅の建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。3月27、28日に試掘調査を行い、地表下100cmで中世遺構面の存在を確認した。このため設計変更の可否について検討依頼したところ、建物本体については埋蔵文化財に対する影響を排除した形の設計が可能であることが判明した。然し乍ら敷地内に設置する雨水貯留槽は3m近い掘削が予定されるため、その対処方法を県教育委員会と協議したところ、貯留槽設置箇所を対象に国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。これにもとづき直ちに、事業者と調査方法等についての調整を進め土木工事等の協力を得た上で調査を実施することで合意した。5月15日、文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、続いて5月28日付けで県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付された。そして6月26日調査実施依頼書が市教育長宛に提出されたのを受けて、9月10日から発掘調査が開始されたのである。

調査により14世紀代を中心とする方形竪穴建物遺構や井戸などが検出され、同遺跡に係わる新たな資料が得られたと評される。

7 長谷觀音堂周辺遺跡

淨土宗海光山慈照院長谷寺は觀音礼場坂東三十三箇所の第四位として本尊十一面觀音への信仰が厚く、一年を通して參詣者で賑わう名刹である。当遺跡は、長谷寺正面区域一帯を占め、調査地点は参道入口近くの長谷三丁目41番イに所在する。

平成4年4月、自己用店舗改築に係わる確認申請の事前相談があり掘削深度が1㍍を超える基礎工事を伴う計画であるので、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は4月23日に実施され、中世及び古代の遺構面が検出された。このため設計変更の可否を協議したが不可能であると判明したので、県教育委員会と対処方法を検討したところ、従来からの自己用店舗の改築であるので土木工事等の協力を得た上で国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。このため事業者と改めて事前調査の実施を前提に協議を開始した。6月16日、文化財保護法第57条の2の届出が提出され、続いて6月30日付けで、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送された。その後、施工担当者の決定を待って9月2日、調査実施に際しての具体的細目について調整を進め、9月7日付けで調査実施依頼書が市教育長宛提出されたのを受けて、細部の事項を整えた後、9月25日から本調査を実施したものである。

調査によって14世紀から15世紀にかけての土壌と掘立柱建物、8世紀中半の掘立柱建物と竪穴住居跡が検出され、寺伝の古い長谷寺にふさわしい新たな考古学的資料が得られたものと評される。

8 若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心として広範囲に所在する当遺跡内の、小町大路に面した小町一丁目325番イ外に位置する。

平成4年4月、住居併用共同住宅建設に係わる開発申請の事前相談があり、設計内容に鑑みて文化財保護法にもとづく協議が必要であることを説明する。その後開発申請の手続きを経た上で、6月24日施工方法についての最終的な説明を受け、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は7月16~17日に実施され、3面以上に及ぶ中世遺構面を検出し、現計画の下では事前調査が不可避であると判明した。8月7日、設計変更の可否を協議したが不可能であると確認され、自己用住宅区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの県の指導を得た上で、改めて事前調査の実施を前提に協議を開始した。8月20日・24日の協議を経て、9月14日に文化財保護法第57条の2の届出が提出された。9月20日、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送され、続いて10月15日調査実施依頼書が市教育長宛提出された。そして調査に伴う土木工事等の詳細の調整を進めた後、11月2日から調査が開始されたのである。

調査によって13世紀後半期から14世紀代にかけての年代に属する、20数件に及ぶ方形竪穴建物遺構を発見し、小町大路沿いの都市構造に関する貴重な資料が得られたと評される。

9 妙本寺遺跡

日蓮宗長興山妙本寺の旧境内域と目される遺跡内の、妙本寺から八雲神社へと通ずる旧道沿いの大町一丁目1146番に所在する。

平成4年9月25日、専用住宅の建築確認申請に係わる事前相談があり、隣接地の調査結果（昭和62年度実施・調査報告書4所収）に鑑みて、発掘調査が必要であることを説明した。そして直ちに設計変更の検討も含む協議を開始するが、変更が不可能であると判明したので県教育委員会と協議し、国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。9月30日文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、続いて10月13日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。12月4日、調査方法等を協議し既存家屋の解体時に立ち会って、具体的な工程を定めることで合意した。翌12月5日、事業者から調査実施依頼書が市教育長宛に提出されたのを受けて、12月7日に現地立ち会いを行い、12月15日から調査を開始したのである。

調査により道路遺構と共に、方形竪穴建物跡などが検出され、同遺跡に関する新たな資料が得られたのであった。

10 天神山下城

頂上近くに北野神社が建つ山崎天神山は、良好な山城遺構として良く知られている。本遺跡はその南山麓に接する区域にあり、調査地点は山崎字宮廻708番1外に所在する。

平成4年11月、自己用住居併用共同住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、試掘調査を経た上で協議を進めることとした。12月3～4日、同調査を実施したところ地表下80cmで包含層が検出されたので、これを超える掘削深度が予定される駐車場等の区域については事前調査の実施が不可避であることが判明した。このため12月8日、設計変更の可否について検討を依頼したところ、困難である旨の回答を得たので、自己用住居区域を対象にした国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導にもとづき、直ちに調査方法等の打ち合わせを開始したのである。12月15日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、続いて平成5年1月7日付けでこれに対する県教育長名の調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。以上の経過を経て1月25日に事業者から調査実施依頼書が市教育長宛に提出され、2月2日から調査が実施されたのである。

調査によって古代遺構面等が検出され、同遺跡内の新たな考古学的知見が得られたのである。

11 若宮大路周辺遺跡群

遺跡内の今小路に西面した、扇ガ谷一丁目74番9外に所在する。

平成4年11月、自己用事務所併用住宅建設に係わる建築確認申請の事前相談があり、隣接地の試掘調査結果に鑑みて基礎杭を打つ現計画では一定の事前調査の実施が必要であることを説明する。その後の協議の中で、杭打箇所が隣地境に接しており、同箇所を対象とした調査は困難を伴うため建築予定地内の適切な区域を選定して調査する事で合意した。平成5年1月8日、国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導にもとづき調査方法等の打合せを開始した。1月11日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、1月26日付で県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後、1月28日土木工事等の細目について協議し、2月1日に調査実施依頼書が事業者から市教育長宛に提出されたのを受けて、2月8日から調査が開始されたのである。

調査により今小路に直交する14世紀代の道路遺構等が発見され、中世都市構造に関する新たな考古学的資料が得られたのであった。

12 笹目遺跡

長谷小路北側の山間を占める笹目遺跡内の、笹目町425番1外に所在する。

平成4年9月、自己用住宅建設に係わる確認申請の事前相談があり、基礎工事の掘削深度から推して埋蔵文化財に対する影響は希薄であるので、着工時に立会い調査を実施することとした。平成5年1月12日、事業者から一部地盤が軟弱な区域に杭を打ったとの報告があり、1月16日に現地を確認の上、県教育委員会と協議して対処方法を定めることとした。そして1月18日、県と協議した結果、適切な範囲を対象に国庫補助事業調査を実施すべきとの指導をうけたので、直ちに実施方法等を施工担当者と打ち合せをした。1月21日、文化財保護法第57条の2の届出書が顛末書を添えて提出され、続いて1月28日付で県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後調査方法等の細部にわたる協議を重ね、2月1日に調査実施依頼書が事業者から市教育長宛に提出され、2月15日から調査が開始されたのである。

調査により、基壇状遺構等が発見され、遺跡内でも調査の事例が比較的希少であった調査地点周辺区域の、考古学的にも貴重な資料が得られたのである。

平成4年度発掘調査地点一覧

(※印は本書第3分冊所収遺跡)

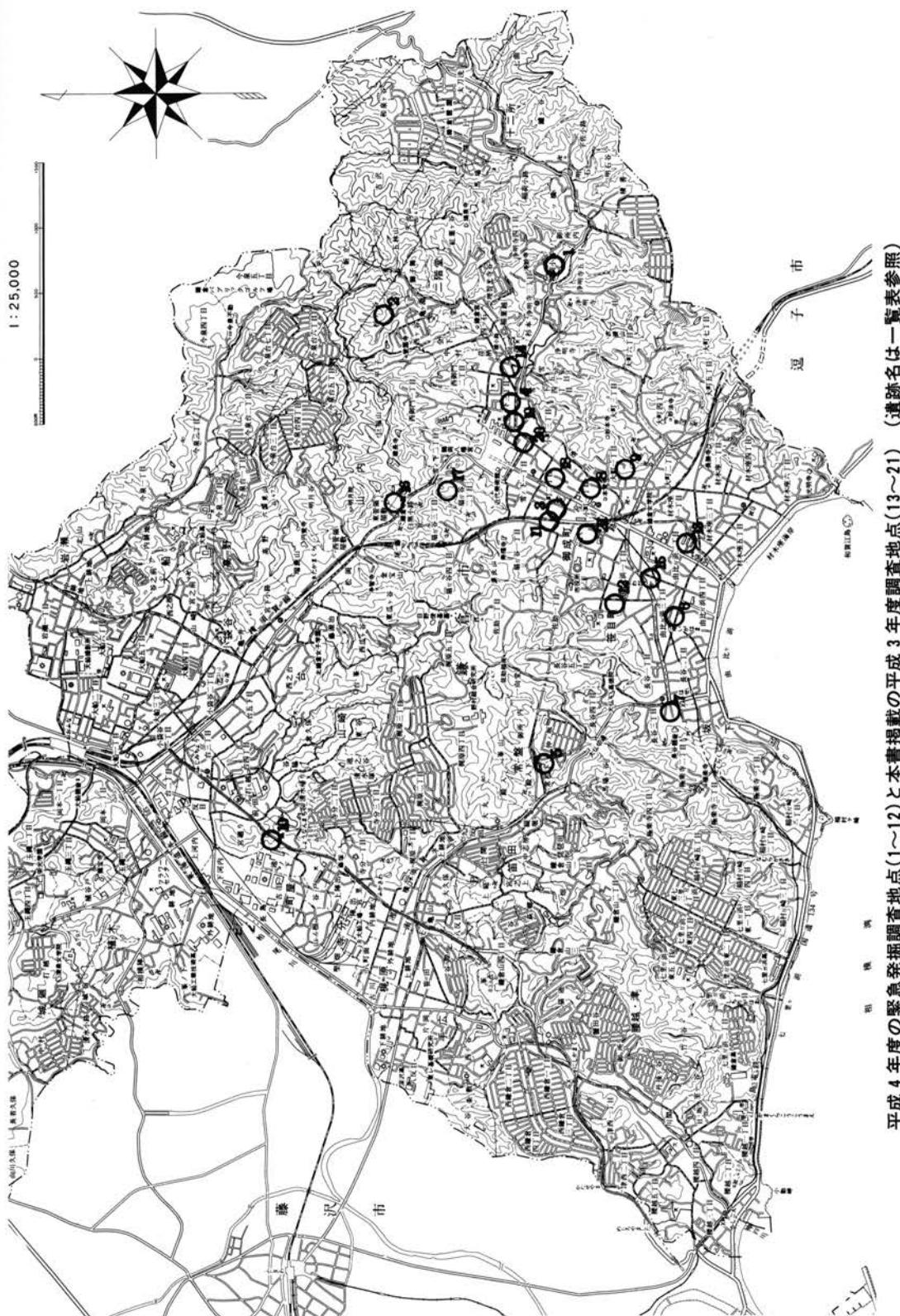
No.	遺 跡 名	所 在 地	事 業 者	調 査 原 因	種 別	面 積	調 査 期 間
1	公方屋敷跡 (No.268)	淨明寺三丁目 143番2	横塚ヒロ子	専用住宅	城館	200m ²	4.1.6～ 4.4.9
2	永福寺跡 (No.61)	二階堂字杉ヶ谷 520番1外	井出光二	専用住宅	寺院	1012m ²	4.3.13～ 4.7.28
※3	若宮大路周辺遺 跡群 (No.242)	小町二丁目 63番3	桜井龍吉	店舗併用住宅	都市	60m ²	4.4.1～ 4.5.23
4	大倉幕府周辺遺 跡群 (No.49)	雪ノ下三丁目 607番外	五十嵐 繢	店舗併用住宅	官衙	140m ²	4.6.9～ 4.8.25
5	北条政村屋敷跡 (No.131)	常盤字殿入下 643番4外	高野礼二	専用住宅	城館	150m ²	4.9.4～ 4.10.17
6	長谷小路周辺遺 跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目 1175番2外	小栗啓三郎	住居併用共同 住宅・雨水槽	都市	90m ²	4.9.10～ 4.10.28
7	長谷觀音堂周辺 遺跡 (No.296)	長谷三丁目 41番1	山上由美	自己用店舗	都市	100m ²	4.9.25～ 4.10.26
8	若宮大路周辺遺 跡群 (No.242)	小町一丁目 325番1外	秋月利子	住居併用 共同住宅	都市	188m ²	4.11.2～ 5.3.31
9	妙本寺遺跡 (No.232)	大町一丁目 1146番	大松義典	専用住宅	社寺	25m ²	4.12.15～ 4.12.22
10	天神山下城 (No.358)	山崎字宮廻 708番1外	西山 清 外	住居併用 共同住宅	城館	130m ²	5.2.2～ 5.2.16
11	若宮大路周辺遺 跡群 (No.242)	扇ガ谷一丁目 74番9外	佐野洋之	自己用事務所 併用住宅	都市	30m ²	5.2.8～ 5.3.3
12	笹目遺跡 (No.207)	笹目町 425番1外	近江和夫	専用住宅	都市	30m ²	5.2.15～ 5.3.6

本書所収の平成3年度調査地点

(掲載順)

No.	遺 跡 名	所 在 地	事 業 者	調 査 原 因	種 別	面 積	調 査 期 間
13 ①	由比ヶ浜中世集 団墓地 (No.372)	由比ヶ浜二丁目 1034番1外	岡田雅雄 外	住居併用 共同住宅	墓地 外	3800m ²	2.10.5～ 3.9.15
14 ②	大倉幕府周辺遺 跡群 (No.49)	二階堂字荏柄 38番1	神田兼太郎	住居併用 共同住宅	官 衙	80m ²	3.5.28～ 4.1.31
15 ②	長谷小路周辺遺 跡 (No.236)	由比ヶ浜三丁目 229番外	二階堂昌喜	住居併用 共同住宅	都 市	150m ²	3.7.15～ 3.12.28
16 ③	保寧寺跡 (No.175)	山ノ内字菅領屋 敷 133番3外	大和 豊	店舗併用住宅	社 寺	85m ²	3.4.15～ 3.7.20
17 ③	多宝寺跡 (No.187)	扇ガ谷二丁目 250番6外	中島千波	専用住宅	社 寺	140m ²	3.7.1～ 3.8.15
18 ③	宇津宮辻子幕府 跡 (No.239)	小町二丁目 354番12外	石渡敏三	住居併用 共同住宅	官 衙	80m ²	3.9.23～ 3.10.31
19 ③	大倉幕府周辺遺 跡群 (No.49)	雪ノ下三丁目 606番1	安田八郎	住居併用 共同住宅	官 衙	120m ²	3.8.19～ 3.12.17
20 ③	政 所 跡 (No.247)	雪ノ下三丁目 988番	酒井駿一	住居併用店舗 ・共同住宅	官 衙	40m ²	3.11.5～ 4.2.17
21 ③	若宮大路周辺遺 跡群 (No.242)	御 成 町 811番	谷口政雄	店舗併用住宅	都 市	60m ²	3.11.1～ 3.12.29

- ①……第1分冊
②……第2分冊
③……第3分冊



I. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372)

由比ガ浜二丁目1034番1外地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市由比が浜二丁目1034番1外における自己兼共同住宅建設に伴う発掘調査のうち、専用住居区域を対象にした報告書である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が行い、調査期間は平成2年10月5日から平成3年9月15日にかけて実施した。
3. 本報の執筆は、小林重子・佐藤仁彦・須佐直子・早野慈子・田代幸子・原 廣志が分担し、分末にその名を記した。図版作成には、執筆者以外に福田 誠・田代郁夫・継 実・菊川 泉・川嶋実佳子・熊谷洋一・浜野洋一・佐々木 靖・土屋浩美・丸井宏子・新山久美子・橋場君男の協力をえた。
4. 本文及び挿図中に使用した遺構名称は、以下の略称を用いた。

方形竪穴建築址・・・方形竪穴又HT 土壙・・・D 溝状土壙・・・MD 井戸・・・井

5. 本報に使用した写真は、遺構写真を木村美代治と調査員が、遺物写真を山田健二が撮影し、遺跡遠景は（株）サンシャイン工業に依頼した。

6. 現地調査及び資料整理に際し、以下の方々に多大なる御教示をいただいた。

吉田章一郎・網野善彦・森本岩太郎・大三輪龍彦・亀井明徳・河野喜映・大塚真弘・中三川 昇
関口欣也・鈴木 旦・中村 勉・河野一也・近藤真佐夫・手塚直樹・大河内 勉・河野真知郎

7. 調査体制は以下の通りである。

主任調査員 原 廣志

調査員 汐見一夫・小林重子・佐藤仁彦

調査補助員 須佐直子・早野慈子・田代幸子・安田博人・佐久間康一・清水顕史・岩崎卓治・根本志保・橋場君男・土居奈緒美・新舟洋子・内海なお子・糸 健一・川野辺和雄・松永佳代・平井真弓・青木綾子・蒲谷由利子・池谷ツル・成田初枝・渋谷智子・小宮恵美子・川嶋実佳子

協力機関 (社)シルバー人材センター (株)齊藤建設 (株)新日本製鐵

そのほか多くの方々が参加され、調査の進展に尽力頂いた。記して謝意を表す。

8. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

例 言	12
目 次	13

本 文 目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	20
第二章 調査の経過と概要	27
第三章 検出した遺構・遺物	28
(1) 上層遺構	28
a. 方形竪穴建築址	28
b. 土壙	159
c. 井戸	165
d. 人骨	167
e. その他の遺物	173
(2) 下層遺構	182
a. 中世	182
掘立柱建物	182
柵状遺溝	182
人骨	184
b. 古代	186
土壙10	186
祭祀遺構1・2	189
卜骨	195
第四章 まとめ	196

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 図1 調査地点位置図 | 図32 方形竪穴39出土遺物(1) |
| 図2 調査地点周辺図 | 図33 方形竪穴39出土遺物(2) |
| 図3 グリット配置図 | 図34 方形竪穴39出土遺物(3) |
| 図4 上層遺構全体図 折り込み | 図35 方形竪穴41 |
| 図5 方形竪穴1・2 | 図36 方形竪穴41出土遺物(1) |
| 図6 方形竪穴1出土遺物 | 図37 方形竪穴41出土遺物(2) |
| 図7 方形竪穴2出土遺物 | 図38 方形竪穴41出土遺物(3) |
| 図8 方形竪穴6 | 図39 方形竪穴43 |
| 図9 方形竪穴6出土遺物 | 図40 方形竪穴43出土遺物(1) |
| 図10 方形竪穴8 折り込み | 図41 方形竪穴43出土遺物(2) |
| 図11 方形竪穴8出土遺物(1) | 図42 方形竪穴48 |
| 図12 方形竪穴8出土遺物(2) | 図43 方形竪穴48出土遺物(1) |
| 図13 方形竪穴9・15 | 図44 方形竪穴48出土遺物(2) |
| 図14 方形竪穴9出土遺物 | 図45 方形竪穴50 |
| 図15 方形竪穴10 | 図46 方形竪穴50出土遺物(1) |
| 図16 方形竪穴10出土遺物 | 図47 方形竪穴50出土遺物(2) |
| 図17 方形竪穴12・13 | 図48 方形竪穴58 |
| 図18 方形竪穴12出土遺物 | 図49 方形竪穴58出土遺物(1) |
| 図19 方形竪穴16・21 | 図50 方形竪穴58出土遺物(2) |
| 図20 方形竪穴16出土遺物 | 図51 方形竪穴58出土遺物(3) |
| 図21 方形竪穴20 | 図52 方形竪穴63・64 |
| 図22 方形竪穴20出土遺物 | 図53 方形竪穴63出土遺物 |
| 図23 方形竪穴21出土遺物 | 図54 方形竪穴64出土遺物(1) |
| 図24 方形竪穴33 | 図55 方形竪穴64出土遺物(2) |
| 図25 方形竪穴33出土遺物(1) | 図56 方形竪穴65 |
| 図26 方形竪穴33出土遺物(2) | 図57 方形竪穴65出土遺物(1) |
| 図27 方形竪穴33出土遺物(3) | 図58 方形竪穴65出土遺物(2) |
| 図28 方形竪穴38・39 折り込み | 図59 方形竪穴66 |
| 図29 方形竪穴38出土遺物(1) | 図60 方形竪穴67・69 |
| 図30 方形竪穴38出土遺物(2) | 図61 方形竪穴67出土遺物 |
| 図31 方形竪穴38出土遺物(3) | 図62 方形竪穴69出土遺物(1) |

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 図63 方形豎穴69出土遺物(2) | 図97 方形豎穴118 出土遺物 |
| 図64 方形豎穴72 | 図98 方形豎穴123 |
| 図65 方形豎穴72出土遺物 | 図99 方形豎穴125・129 |
| 図66 方形豎穴82 | 図100 方形豎穴125 出土遺物 |
| 図67 方形豎穴82出土遺物 | 図101 方形豎穴129 出土遺物 |
| 図68 方形豎穴84・90 | 図102 土壙・溝状土壙 |
| 図69 方形豎穴84出土遺物(1) | 図103 土壙70出土遺物 |
| 図70 方形豎穴84出土遺物(2) | 図104 土壙127 出土遺物 |
| 図71 方形豎穴85 | 図105 土壙167 出土遺物 |
| 図72 方形豎穴85出土遺物(1) | 図106 土壙170 出土遺物 |
| 図73 方形豎穴85出土遺物(2) | 図107 溝状土壙出土遺物 |
| 図74 方形豎穴90出土遺物(1) | 図108 井戸1・3 |
| 図75 方形豎穴90出土遺物(2) | 図109 井戸2・5・6 |
| 図76 方形豎穴91・99 | 図110 井戸4 |
| 図77 方形豎穴91出土遺物(1) | 図111 人骨出土地点概念図 |
| 図78 方形豎穴91出土遺物(2) | 図112 出土人骨(1) |
| 図79 方形豎穴99出土遺物(1) | 図113 出土人骨(2) |
| 図80 方形豎穴99出土遺物(2) | 図114 出土人骨(3) |
| 図81 方形豎穴99出土遺物(3) | 図115 集積人骨土壙 |
| 図82 方形豎穴99出土遺物(4) | 図116 集積人骨土壙出土遺物 |
| 図83 方形豎穴108 | 図117 その他の出土遺物(1) |
| 図84 方形豎穴108 出土遺物(1) | 図118 その他の出土遺物(2) |
| 図85 方形豎穴108 出土遺物(2) | 図119 トレンチ配置図 |
| 図86 方形豎穴108 出土遺物(3) | 図120 各トレンチ出土遺物 |
| 図87 方形豎穴108 出土遺物(4) | 図121 地震断層土層図 |
| 図88 方形豎穴109 | 図122 下層遺構全体図 |
| 図89 方形豎穴109 出土遺物 | 図123 柵状遺構1・4出土遺物 |
| 図90 方形豎穴111 | 図124 人骨36 |
| 図91 方形豎穴111 出土遺物(1) | 図125 人骨37 |
| 図92 方形豎穴111 出土遺物(2) | 図126 人骨36・37出土遺物 |
| 図93 方形豎穴116 | 図127 土壙10 |
| 図94 方形豎穴116 出土遺物(1) | 図128 土壙10出土遺物(1) |
| 図95 方形豎穴116 出土遺物(2) | 図129 土壙10出土遺物(2) |
| 図96 方形豎穴118 | 図130 祭祀遺構1 |

図131 祭祀遺構1出土遺物(1)

図132 祭祀遺構1出土遺物(2)

図133 祭祀遺構2

図134 祭祀遺構2出土遺物

図135 下層遺構確認面上出土卜骨

図版目次

- 図版1 調査地点全景
- 図版2 I区全景、和賀江の津を望む
- 図版3 方形竪穴1・2
- 図版4 方形竪穴1・2
- 図版5 方形竪穴6・8
- 図版6 方形竪穴8
- 図版7 方形竪穴6・8・9・10・11
- 図版8 方形竪穴16・20
- 図版9 方形竪穴21・33
- 図版10 方形竪穴38・39
- 図版11 方形竪穴39
- 図版12 方形竪穴33・39・41・48
- 図版13 方形竪穴48
- 図版14 方形竪穴50・58
- 図版15 B・C-7・8グリット付近から
- 図版16 方形竪穴72
- 図版17 方形竪穴82・84・90
- 図版18 方形竪穴91・108
- 図版19 方形竪穴99
- 図版20 方形竪穴111・116
- 図版21 方形竪穴118・123
- 図版22 方形竪穴129、溝状土壙1
- 図版23 土壙127・167・170
- 図版24 井戸1・2・4~8
- 図版25 井戸3・4
- 図版26 人骨2・7・9・30
- 図版27 人骨4・5・6
- 図版28 G・H-9グリット付近人骨群人骨12
- 図版29 人骨31・32・33・39
- 図版30 集積人骨土壙
- 図版31 斬首人骨、犬埋葬・馬頭骨出土状況
- 図版32 第6トレンチ検出の地震活断層

図版33 I区下層遺構全景、柵状遺構全景

図版47 方形竪穴48・50出土遺物

図版34 柵状遺構1～4

図版48 方形竪穴58・64出土遺物

図版35 挖立柱建物1・2

図版49 方形竪穴65・67出土遺物

図版36 人骨36・37

図版50 方形竪穴69・72他出土遺物

図版37 古代土壤10

図版51 方形竪穴82・84・85出土遺物

図版38 祭祀遺構1

図版52 方形竪穴90・91出土遺物

図版39 祭祀遺構2

図版53 方形竪穴99・104・124出土遺物

図版40 遺物出土状況

図版54 方形竪穴108・111出土遺物

図版41 方形竪穴1・6出土遺物

図版55 方形竪穴118・125土壤70出土遺物

図版42 方形竪穴8・10出土遺物

図版56 土壤127・167・170他出土遺物

図版43 方形竪穴2・12・16出土遺物

図版57 その他の出土遺物(1)

図版44 方形竪穴20・21・41出土遺物

図版58 その他の出土遺物(2)

図版45 方形竪穴33・38出土遺物

図版59 土壤10(古代)出土遺物

図版46 方形竪穴39・43出土遺物

図版60 祭祀遺構1・2出土遺物

表 目 次

- 表1 方形竪穴2出土かわらけ法量
- 表2 方形竪穴6出土かわらけ法量
- 表3 方形竪穴8出土かわらけ法量
- 表4 方形竪穴20出土かわらけ法量
- 表5 方形竪穴21出土かわらけ法量
- 表6 方形竪穴33出土かわらけ法量
- 表7 方形竪穴38出土かわらけ法量
- 表8 方形竪穴39出土かわらけ法量
- 表9 方形竪穴41出土かわらけ法量
- 表10 方形竪穴43出土かわらけ法量
- 表11 方形竪穴48出土かわらけ法量
- 表12 方形竪穴50出土かわらけ法量
- 表13 方形竪穴58出土かわらけ法量
- 表14 方形竪穴64出土かわらけ法量
- 表15 方形竪穴65出土かわらけ法量
- 表16 方形竪穴67出土かわらけ法量
- 表17 方形竪穴69出土かわらけ法量
- 表18 方形竪穴72出土かわらけ法量
- 表19 方形竪穴82出土かわらけ法量
- 表20 方形竪穴84出土かわらけ法量

- 表21 方形竪穴85出土かわらけ法量
- 表22 方形竪穴90出土かわらけ法量
- 表23 方形竪穴91出土かわらけ法量
- 表24 方形竪穴99出土かわらけ法量
- 表25 方形竪穴108出土かわらけ法量
- 表26 方形竪穴109出土かわらけ法量
- 表27 方形竪穴111出土かわらけ法量
- 表28 方形竪穴118出土かわらけ法量
- 表29 方形竪穴129出土かわらけ法量
- 表30 土壙70出土かわらけ法量
- 表31 土壙127出土かわらけ法量
- 表32 土壙167出土かわらけ法量
- 表33 土壙170出土かわらけ法量
- 表34 集積人骨土壙出土かわらけ法量
- 表35 各トレンチ出土かわらけ法量
- 表36 栅状遺構1出土かわらけ法量
- 表37 土壙10出土土器法量
- 表38 祭祀遺構1出土土器法量
- 表39 祭祀遺構2出土土器法量

本地点周辺の主な調査地点

1. 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡・本調査地点（由比ヶ浜二丁目1034番1外）
2. 同上（由比ヶ浜二丁目1015番29外地点）
3. 同上（材木座遺跡）
4. 同上（由比ヶ浜四丁目1134番1地点）
5. 同上（静養館用地）
6. 同上（由比ヶ浜四丁目1136番11外地点）
7. 同上（鳥かつ用地）
8. 同上（由比ヶ浜二丁目1037番1外地点）
9. 下馬周辺遺跡（由比ヶ浜二丁目1011番1外地点）

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は、鎌倉市街地の南端、相模湾を望む滑川の右岸に位置する。由比ヶ浜を形成する砂丘の頂部（二ノ鳥居から以西で長谷寺付近まで延びる）付近から海側一帯の地域で、由比ヶ浜の東側2／3を占めた東西700m、南北300mを測る広大な面積を持つ。今回の調査地点は本遺跡の北西隅に位置し、若宮大路と滑川に挟まれた一角である。

本遺跡は市街を南北に流れ相模湾に注ぐ滑川の河口以西に広がる由比ヶ浜砂丘地帯に立地している。この地一帯は現在では保養施設や高級マンション・住宅などが建ち並び、海岸線は海水浴場で賑わっている。調査地点はJR鎌倉駅の南東方約600m、若宮大路一ノ鳥居に近接し東は滑川を臨み、西は若宮大路に面した7000m²にも及ぶ一画である。砂丘頂部より海に向かう緩斜面上にあり、現地表の海拔は9m前後で、東側を流れる滑川にも緩やかな傾斜を示した地形である。

相模湾に面する由比ヶ浜の地域一帯は、中世前期には前浜とも呼ばれ、都市鎌倉の周縁風景が営まれた場である。ところで現在、由比ヶ浜と呼称されるのは鎌倉市街の海岸線のうち、滑川からその西方の稻瀬川付近までの地域に限られているが、当時は前浜と同様に稻村ヶ崎から和賀江島までの海岸線全域をさしていたと考えられる。由比ヶ浜東端には、貞永元年（1232）築港という和賀江＝飯島津がある。この港湾は国内外との貿易の拠点として大きな役割を果たしていた。人工築港を示す玉石積みが現在も見られ、材木座辺りを中心とした海岸一帯にはこの時代に輸入された中国陶磁器の破片が、つい最近まで大量に散らばっていた。このことは当時の鎌倉が海外特に中国との貿易を盛んに行っていた証拠品ということができよう。『極楽律寺要文録』や『足利尊氏書状案』によると和賀江も含め前浜は忍性以来極楽寺が管領していたことが知られる。極楽寺には「嶋築興業」、「舛米」など港の維持管理や津料（関料）徴収といった権限が与えられていた。さらに「殺生禁断、可被致嚴沙汰」という権利を得て、前浜における全面的な支配権までも委ねられていたのである。また材木座から大町にかけて今も日蓮宗の寺院が多く、材木座の実相寺の地には浜土の法華

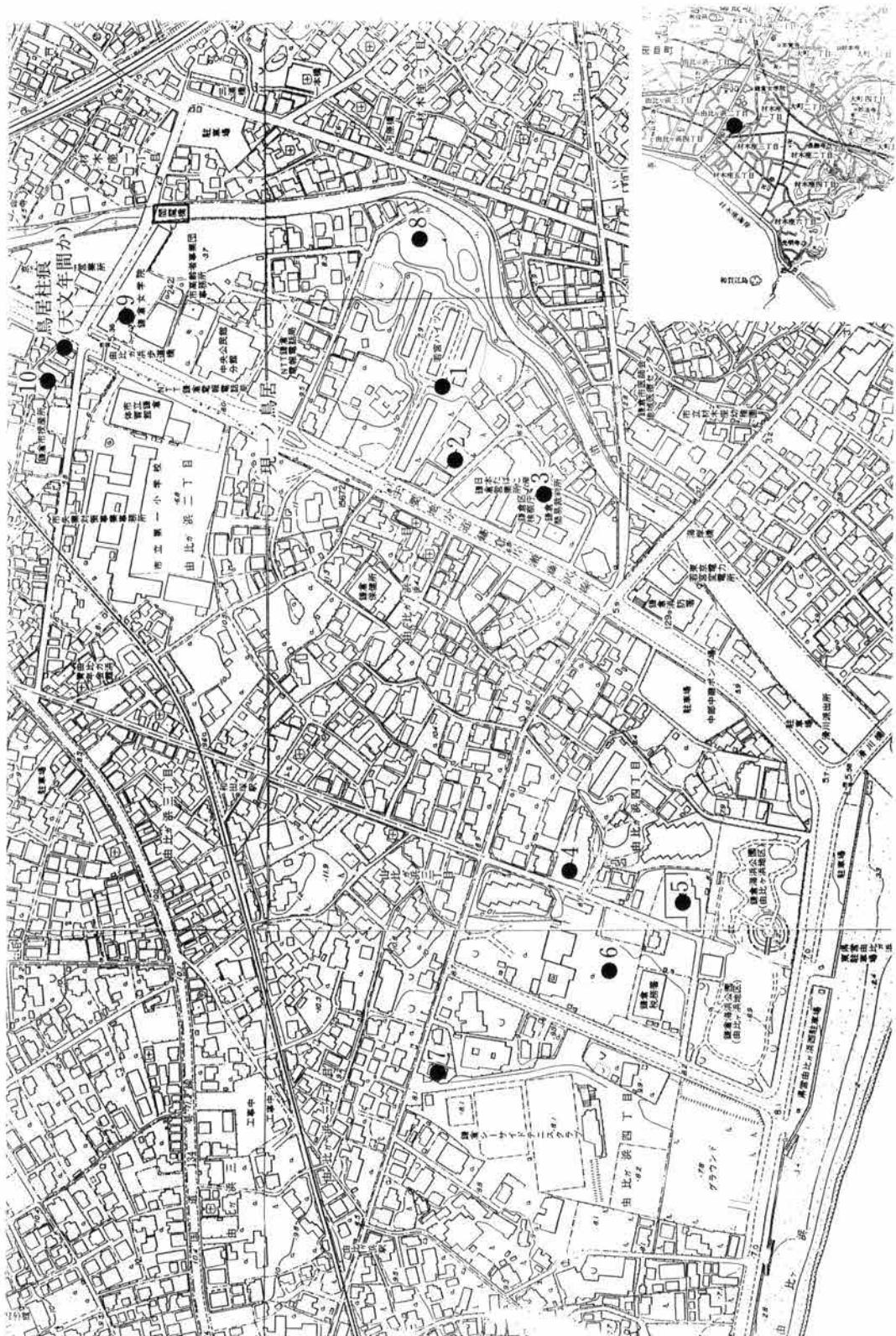


図1 調査地点位置図

堂が建てられていた。和賀江島に近い材木座海岸一帯は、当時の賑やかな商業港湾地区で、その付近は松葉ヶ谷の法難（念佛宗徒松葉ヶ谷草庵の襲撃、現長勝寺か）でも知られるように日蓮信徒の拠点となっていた。一方、『新田義貞証判軍忠状』には義貞鎌倉攻めの折、代官後藤信明が前浜の一向堂前で奮戦したとある。一向とは浄土教系の一向専修を旨とする宗派である。この一向堂が前浜の何処にあったか解らないが、いずれにしても庶民の多く集まりすむこの地域に一向専修を広める宗派が信徒を獲得していたことを示すものであろう。また閻魔堂もあった。調査区東側を流れる滑川のこの付近を別名閻魔川と呼び、近くには閻魔橋が今も架かる。砂丘の高みにかつて円応寺と云われた新居閻魔堂が建っていたが、元禄年間に大津波に遭い、現在の北鎌倉の地に移った。同寺には閻魔像や初江王像などの地獄の十王像が安置されている。

『吾妻鏡』には由比ヶ浜や前浜に關係する記事が散見しておりそれによると、鎌倉時代当地では武士たちの必須武芸の一種である笠懸や流鏑馬、牛・犬追物などの馬上の三物（みつもの）や祭事・船の着岸・舟遊びなどが行われていたことが知られる。また『海道記』の作者は「申の斜に湯井の浜に落着ぬ、しばらく休みて、此所をみれば数百艘の舟どもつなをくさりて大津のうらに似たり。千万宇の宅軒をならべて大淀のわたりに異ならずし」と形容し、さらに「おろおろ歴覧すれば、東南の角の一道は舟楫の津、商賈の商人百族のにぎはひ」と貞応2年ごろの前浜の様子を伝えている。正応2年（1288年）鎌倉を訪れた『とはずがたり』の作者は「由比の浜といふところへ出てみれば、大きなる鳥居あり。若宮の御社はるかにみえ給へば」と記し、この地が活気に満ちて繁栄した場であったことが想像されよう。

本遺跡やその周辺地域で実施した、数地点の発掘調査について簡単に触れる。材木座遺跡（3地点・1953・56年）は二度に亘る調査で人骨群や馬骨・犬骨等の獣骨が発見されているが、人骨は両調査合わせると合計910体以上を数える。また5地点（1982年）静養館用地の調査では集合埋葬を含む91体の人骨が発見されている。4地点（1986年）の調査では方形竪穴建築址（以後、方形竪穴と省略して呼ぶ）55軒・墓址41基（全て単独埋葬）などを検出した。本地点の調査区西端では南北に延びる道路遺構（13~14C）を検出したが、2地点（1989年）からも道路とそれに伴う柵列状の溝や轍の跡などが検出された。また本地点東端に隣接する8地点（1992年）でも数軒の方形竪穴・墓址や旧滑川の西岸などを確認している。9地点（下馬周辺遺跡・1989年）では大別して2面の中世遺構面が発見され、第1面は概ね14世紀代で方形竪穴が34軒と密集するが、13世紀代の第2面には方形竪穴は無く、建物としては掘立柱建物2棟が検出されたに過ぎない。2面とも墓址は出土しておらず上記地点とは異なる様相を示している。大路際の10地点（若宮大路遺跡・1990年）からは径1.6m程の中世後期の一ノ鳥居の柱根が確認されている。この一帯は、従来の発掘調査成果では遺跡名が示すとおり中世を通じて葬地的な印象が深く持たれていた。しかし最近の考古学的成果では、14世紀代を中心に墓址ばかりでは無く、方形竪穴・井戸・土壙や他に道路・動物遺体などの濃厚な遺跡の営みが確認されている。従って、当地は人々の日常的な生活の場と、より宗教色の強い非日常的な場が共存していたことが窺える。

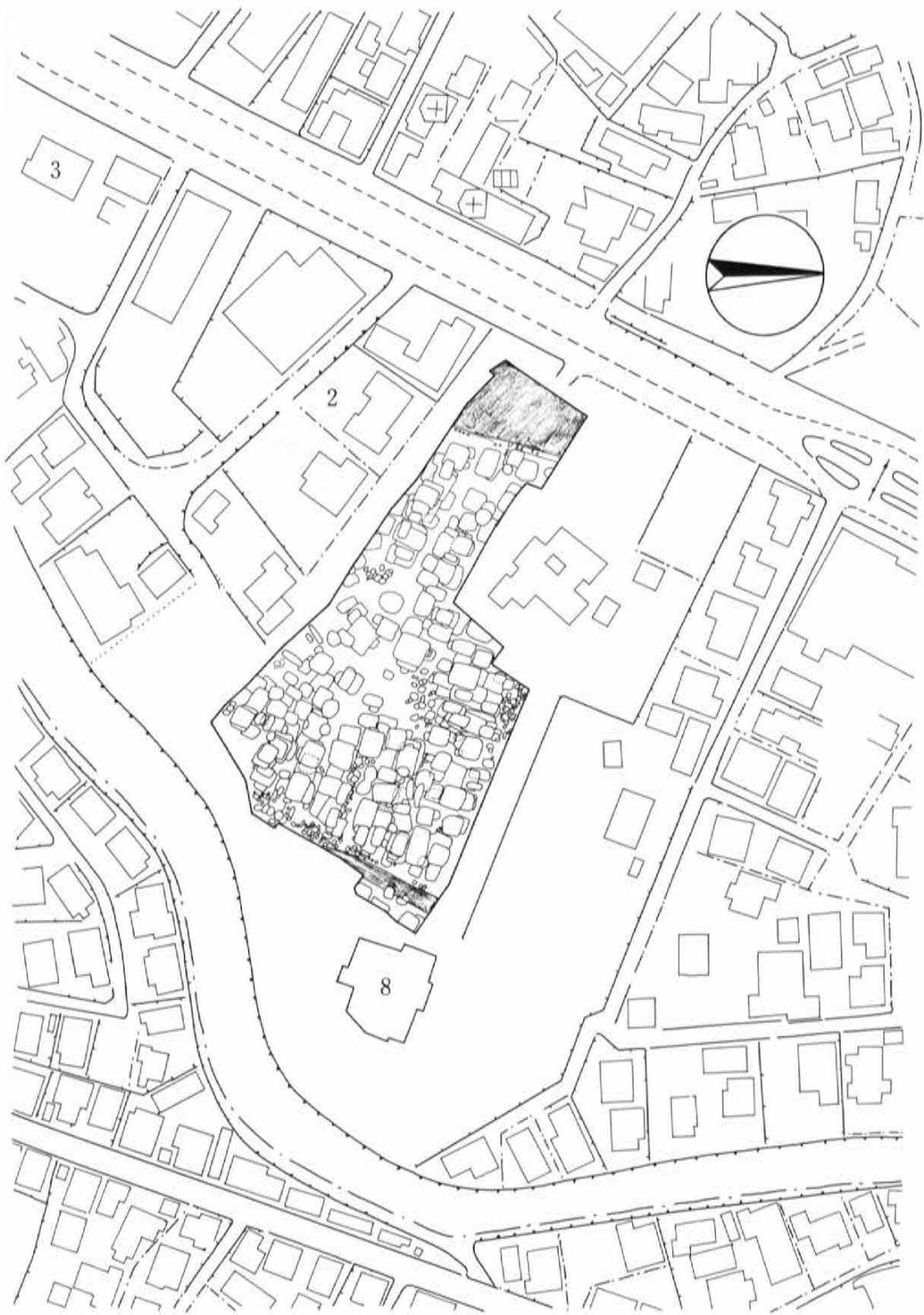


図2 調査地点周辺図（番号は周辺の主要な地点に準ずる）

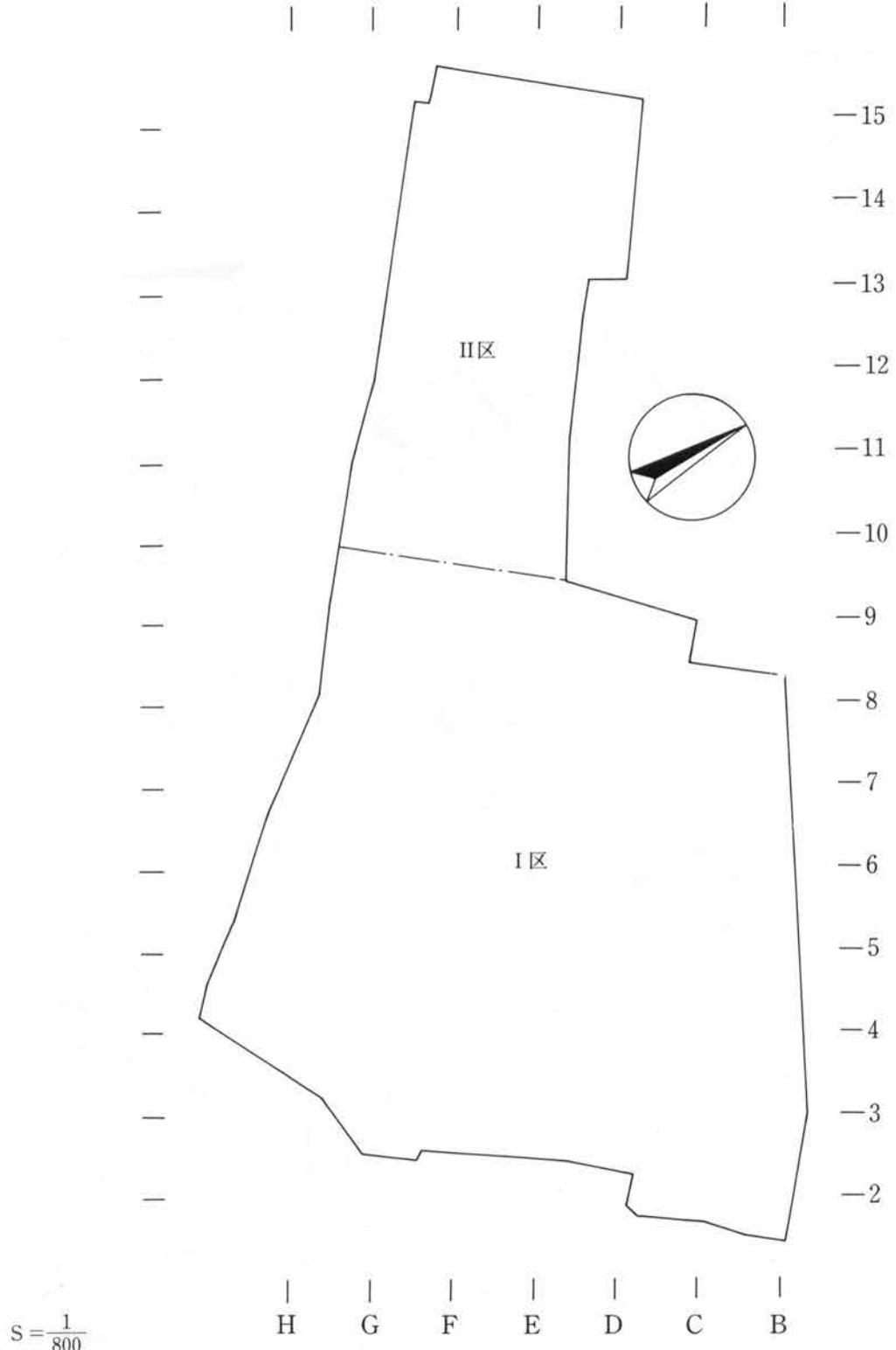


図3 グリッド配置図



図4 上層造構全体図

第二章 調査の経過と概要

発掘調査は1990年10月5日から開始し、例年ない頻繁な台風到来に悩まされながら、1991年9月15日に無事終了した。

前年に鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果から、現地表下約50～70cmまで近・現代の客土及び灰白色砂の近世風成砂層が堆積し、さらに若宮ハイツ建設に際し、既存建物部分は基礎工事で3m程の深さで壊されていることが判明していたため、この部分に重機を導入して掘削を始めた。調査面積は約3800m²である。

調査にあたっては、まず調査区北辺に沿う東西方向の基準軸線を設け、南に向けて10m間隔で軸線を配した。さらにこれに直交する軸線を10mおきに配した。便宜上前者を東西軸、後者を南北軸と呼び、東から西に向けてアラビア数字を、北から南に向けてアルファベットを付した。各々の方眼区画の呼称にはその北西角の軸線交点を充てた。

現地表面から50～70cm程の表土除去後、遺物を含まない灰白色の風成砂層（近世に堆積か）が1m～1.5m程堆積し、その下に0.8m～1m程の厚い中世遺物包含層が認められた。調査は、この包含層を除去して表出する灰白色・黄灰色系の風成砂層の上面で検出された中世遺構群を上層遺構とした。この確認面で検出した遺構は、道路2条、方形竪穴190軒以上、土壙約230基、井戸21基、墓址40基以上、溝2条の他、動物遺体6カ所などである。

この上層遺構の基盤層である風成砂層は1m～1.4m程堆積し、その下から茶褐色ないし黒褐色の若干土壙化した砂層が堆積している。第1面下の中世遺構は風成砂層中の為、第1面のような遺構の拡がりは把み得ず部分的であるので中世以前の遺構を含めて、確認は殆どがこの層の上面で行った。下層遺構で検出した遺構は、掘立柱建物2棟以上、柵状遺構、土壙、墓址2基などである。また中世以前の遺構としては土壙6基、祭祀址2カ所などを検出した。

以上のように本調査地点で検出した遺構の時期は、出土遺物などから中世は上層遺構が14世紀代を中心に前後した時期、下層遺構は中世期が概ね13世紀代、古代（中世以前）が7世紀後半から10世紀頃と考えられる。今回の調査の整理作業は今後本格的に着手する予定であり、現在詳細なデータを提示することはご容赦願いたい。今後、遺物整理等を通じて検討を加えつつ、本報告で明らかにする予定である。

第三章 検出した遺構と遺物

(1) 上層遺構

a. 方形堅穴建築址

方形堅穴1 (図5)

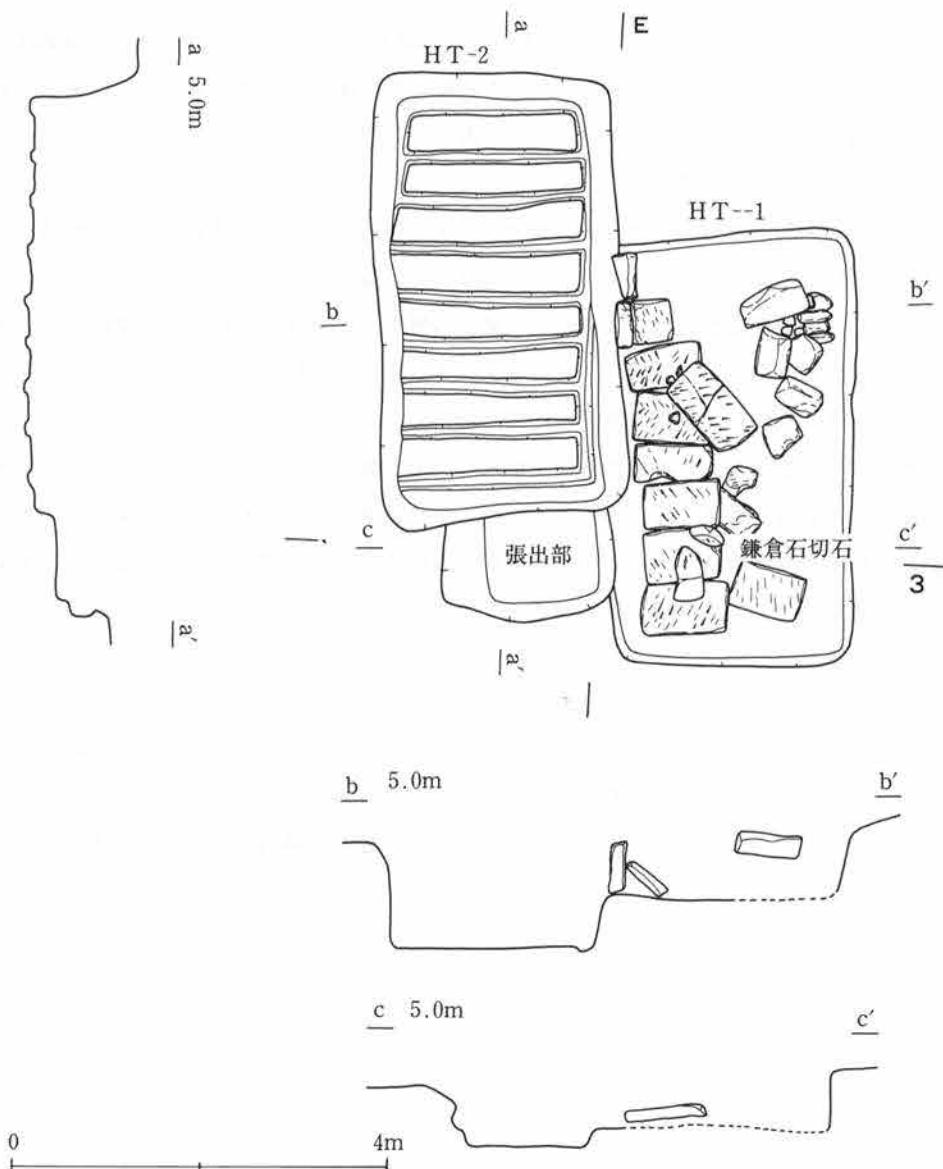


図5 方形堅穴1・2

調査区東端、D-2・3グリッドにおいて検出された。南西部で方形竪穴2と重複し、方形竪穴2より古い。

平面形は東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し東西4.65m、南北2.6m、確認面からの深さ0.6mを測る。東辺（短軸）は、東側に検出された道路状遺構に平行した方位を示し、道路との間には土壌群が形成されている。

床面は、ほぼ平坦で標高3.90mを測る。竪穴内からは床面のやや上方で約30個の鎌倉石の板状切り石が検出された。その内約8石は幅約40~50cm、長さ80~100cm、厚さ10~15cmを測る。他は同様の規模の鎌倉石切り石が破碎されたものであると考えられる。これらはいずれもノミ痕が明瞭であり、一部に火を受けた痕跡がみられる。

南壁付近で検出された鎌倉石の切り石列は、内6石は原形を保ち、長辺を上下に壁に添って立てられていたものが倒れこんだと考えられる。南壁周辺ではさらに原形を保つ鎌倉石2石を含む約6石が検出された。東西北の三壁においては、壁の状態を直接推定し得る遺構は検出されなかった。

その他には、遺構北西隅において破碎鎌倉石が約13石検出された。これらの鎌倉石は、床面から約50cm程度浮いた状態にあるため、原位置を留めているとは考えられない。あるいは本方形竪穴を廃棄する際に東西北の三壁いずれからか抜き取られ、投げ込まれたものであろうか。

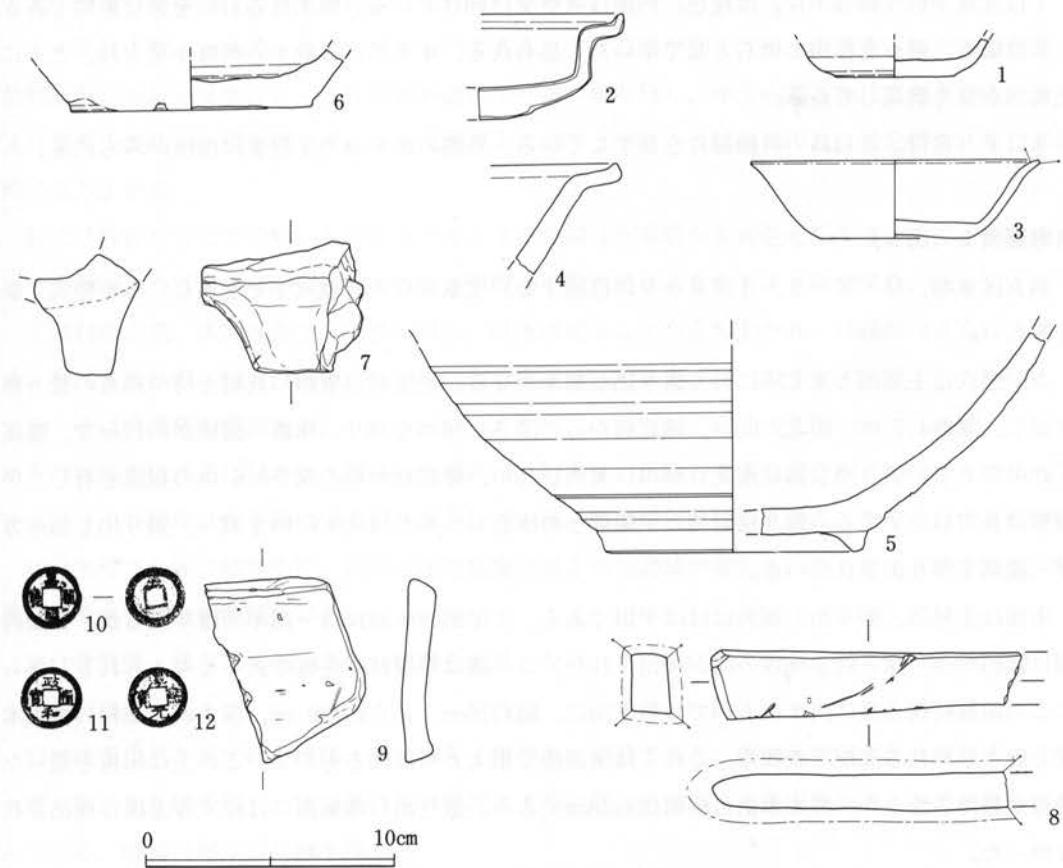


図6 方形竪穴1出土遺物

方形竪穴 1 出土遺物（図 6）

図 6-1 は瀬戸入子底部片。底径4.6m²。外底面には回転糸切り痕、スノコ痕が残る。降灰による自然釉は灰緑色で斑状を呈する。胎土は淡橙茶色を呈し、少量の微砂、長石粒を含む。

2 は青磁腰折れ鉢片。低い高台脇を外に開いた器壁は急角度で立ち上がり、口片部で外方へ大きく開いてから口縁部を上方へ引き上げられる。釉は不透明な明緑青色で、全体にかけられる。釉層は厚い。胎土はやや赤味を帯びた明灰色で、砂を少量含み、やや粗く細かい気泡を持つ。

3 は白磁口兀皿。口径11.1cm、底径5.9cm、器高3.1cm。口縁は外反し、口唇はや角張る。釉は明乳白色で、ごく薄く。外底部は施釉の後、搔き落としている。胎土は白濁色で砂を交えやや粗い
4・6 は瀬戸窯の製品である。

4 は瀬戸折縁皿口縁部小片。口縁部は外方へ折り曲げられ、口唇はやや肥厚する。釉は灰白色を呈する。胎土は少量の砂粒、気泡を持つ。6 は瀬戸水注底部片。底径9.6 cm。外底面には回転糸切り痕が残り、内底面のロクロ目痕は明瞭である。釉は緑褐色を呈する。胎土は淡茶灰色で少量の砂粒気泡を含む。

5 は山茶碗系こね鉢。高台径10.3cm。内面は使用頻度の高さから磨滅が激しい。灰白色を呈し、胎土は0.2~0.3cm大の長石粒、石英、砂粒を含み硬質。

7 は瓦質手焙り脚部小片。淡橙色。内面は火を受け剥げている。胎土は赤石粒を含む粗胎である。

8 は砥石、硯石を転用し砥石として用いたと思われる。中央部には数本の削痕が見られ、とくに先端部が良く磨滅している。

9 はすり常滑。こね鉢の口縁部片を加工している。外周の約2分の1程度に擦痕がみられる。

方形竪穴 2（図 5）

調査区東端、D・E-2・3 グリッドに位置する。北東部で方形竪穴 1 と重複し、方形竪穴 1 より新しい。

方形竪穴は主屋部と東北隅に付く張り出し部からなる。主屋部は東西に長軸を持つ隅丸の長方形を呈し、東西4.7 m、南北2.65m、確認面からの深さ1.16mを測り、床面の面積が約12m²で、標高3.40mである。張り出し部は南北1.85m、東西1.15m、確認面からの深さ0.6 mの規模を有し、平面形は長方形を呈する。張り出し部と主屋部との床面レベル差は約0.6 mを測り、張り出し部の方が一段高く作り出されている。

床面は主屋部、張り出し部共にはほぼ平坦である。主屋部の床面には一部不明瞭であるが、各壁内側に幅約20cm、深さ約3cm程の溝が検出された。この溝は地覆材据え痕であると考えられる。さらにこの地覆材据え痕に挟まれる形で短軸方向に、幅約16cm、長さ約180 cm、深さ約3cm程の根太木据え痕と思われる溝が7条残る。これらは所謂捨て根太と呼ばれるもので、この上に床板を張った構造が想像されよう。根太木据え痕間は約28cmである。張り出し部床面には柱穴等遺構は検出されなかった。

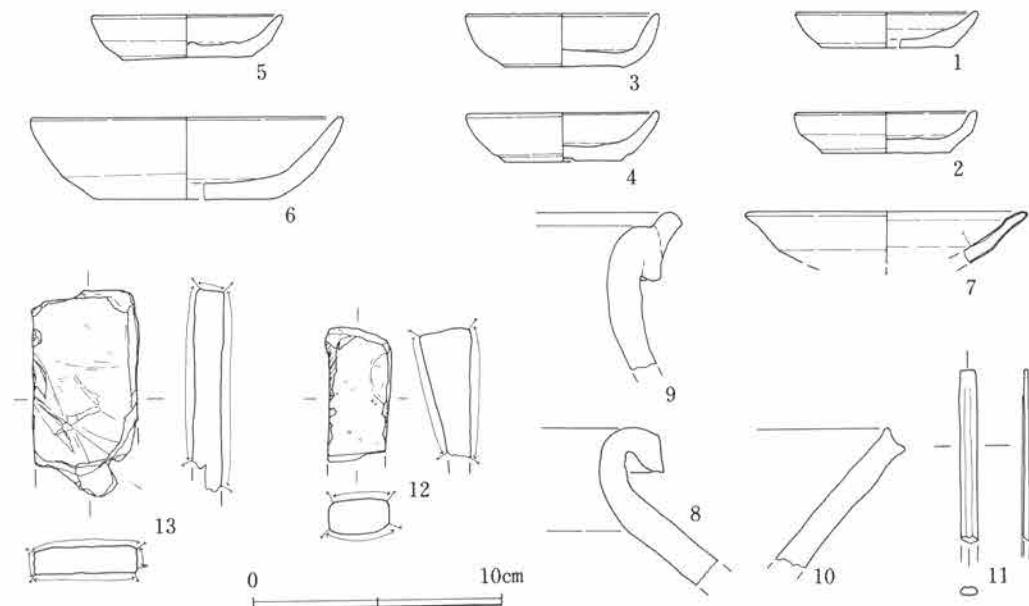


図7 方形豎穴2出土遺物

方形豎穴2出土遺物（図7）

図7-1～6は、ロクロ成型によるかわらけである。

1～5は小型のもので、6は大型のものである。1は器高が低く、やや内湾ぎみにたちあがり、底部断面三角形を呈す。2・5は体部外面にやや強い稜を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。3・4は器高やや高く、稜を持たず、やや内湾ぎみに立ち上がる。6は体部下方に稜を持ち、やや直線的に立ち上がる。

胎土は砂粒を含むやや粗いものがほとんどで、色調は灰褐色か茶褐色を呈する。全て、内底面にはナデ痕が、外底面には回転糸切り痕と、明瞭不明瞭の差はあるがスノコ痕が残る。

7は白磁小皿。体部外面下方に稜を持ち、外方に開きながら立ち上がり、口縁部はさらに外反する。釉は黄灰色で、釉層は薄い。胎土は白色で精良堅緻である。

8・9は常滑窯の甕である。

8の口縁部は外方に引かれ、縁帶はやや狭い。胎土は白色微石を多く含むがきめ細かく締まっている。9の口縁部はN字状に強く折り返されている。胎土は白色微石を含み、ややがさつくが硬質。

10は常滑こね鉢口縁部小片。内面は使用頻度の高さから磨滅が激しい。胎土は混入物少なく、気泡がやや多いが緻密で硬質である。

11は骨製笄。残存長7cm。あまり研磨されていない。

12、13は砥石。

12は淡茶白色を呈す仕上げ砥。砥面は良く使用され平滑である。側面も使用された痕跡をのこす。上端に擦り切り痕を残す。13は灰白色の泥岩による中砥。砥面は良く使用され滑らかで中央部が窪んでいる。側面に擦り切り痕を残す。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-2	7-4	7.6	4.7	2.0
HT-2	7-1	7.2	5.2	1.4		5	7.6	4.7	2.0
	2	7.2	5.2	1.6		6	12.5	7.1	3.3
	3	7.7	4.8	2.1					単位(cm)

表1 方形竪穴2出土かわらけ法量

方形竪穴6(図8)

調査区東端、C・D-3グリッドに位置する。方形竪穴15と重複関係にあり、これより新しい。

平面形は東西に長軸を持つ隅丸の長方形を呈し、規模は東西5.0m、南北2.8m、確認面からの深さ0.7mを測る。

床面はほぼ平坦である。床面には17条の溝、21口の柱穴が検出された。

溝の内3条は、東西北壁の内側に位置し、幅20~30cm、深さ6~10cmの規模を有する。これらは地覆材据え痕であると考えられる。南壁内側にも幅約20cm、深さ6~10cmの溝状の遺構が4条検出されたが、それぞれの東西に45~105cmと短く直線上に並ばないため、地覆材据え痕であるかは確定できない。

これらの地覆材据え痕に挟まれる形で短軸方向に幅13~20cm、長さ85~185cm、深さ約10cm程度の溝が10条検出された。これらは根太木据え痕であると考えられる。根太木据え痕の間隔は15cm~20cmである。

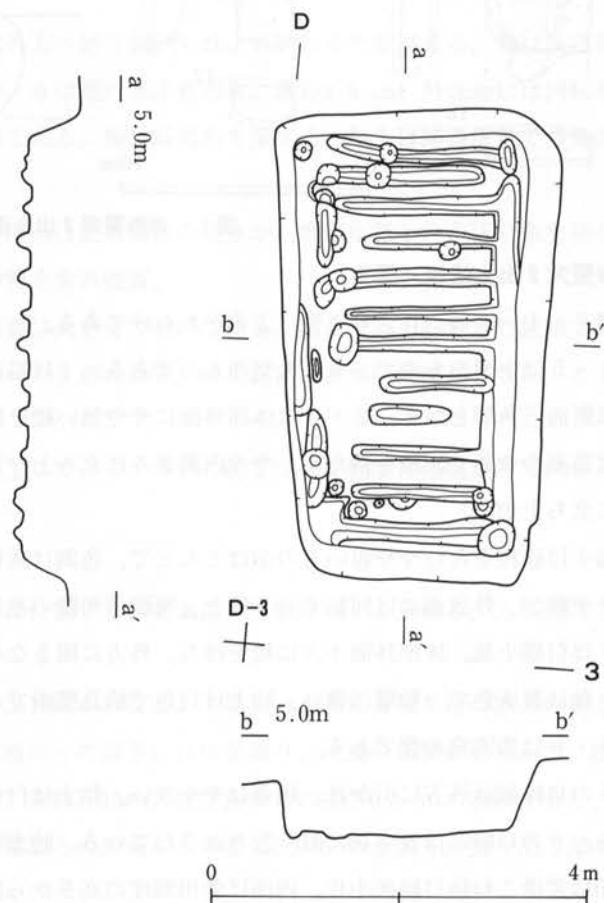


図8 方形竪穴6

柱穴の規模は最小で径約12cm、深さ約4cm、最大で径約45cm、深さ約10cmを測る。柱穴の配列は北東、北西、南西隅に1口ずつ配される。これらはほぼ地覆材据え痕の軸線上に位置し、壁板の支えとして打ち込まれた杭の痕跡である可能性が考えられる。柱穴間の距離（芯々）は、北壁で410cm、西壁で220cmを測る。他の数口の柱穴をのぞいて、南壁寄りに配されたものが多く見受けられるが、さほど整然とした配置は認められない。

方形竪穴 6 出土遺物（図9）

図9-1～13はロクロ成型のかわらけである。

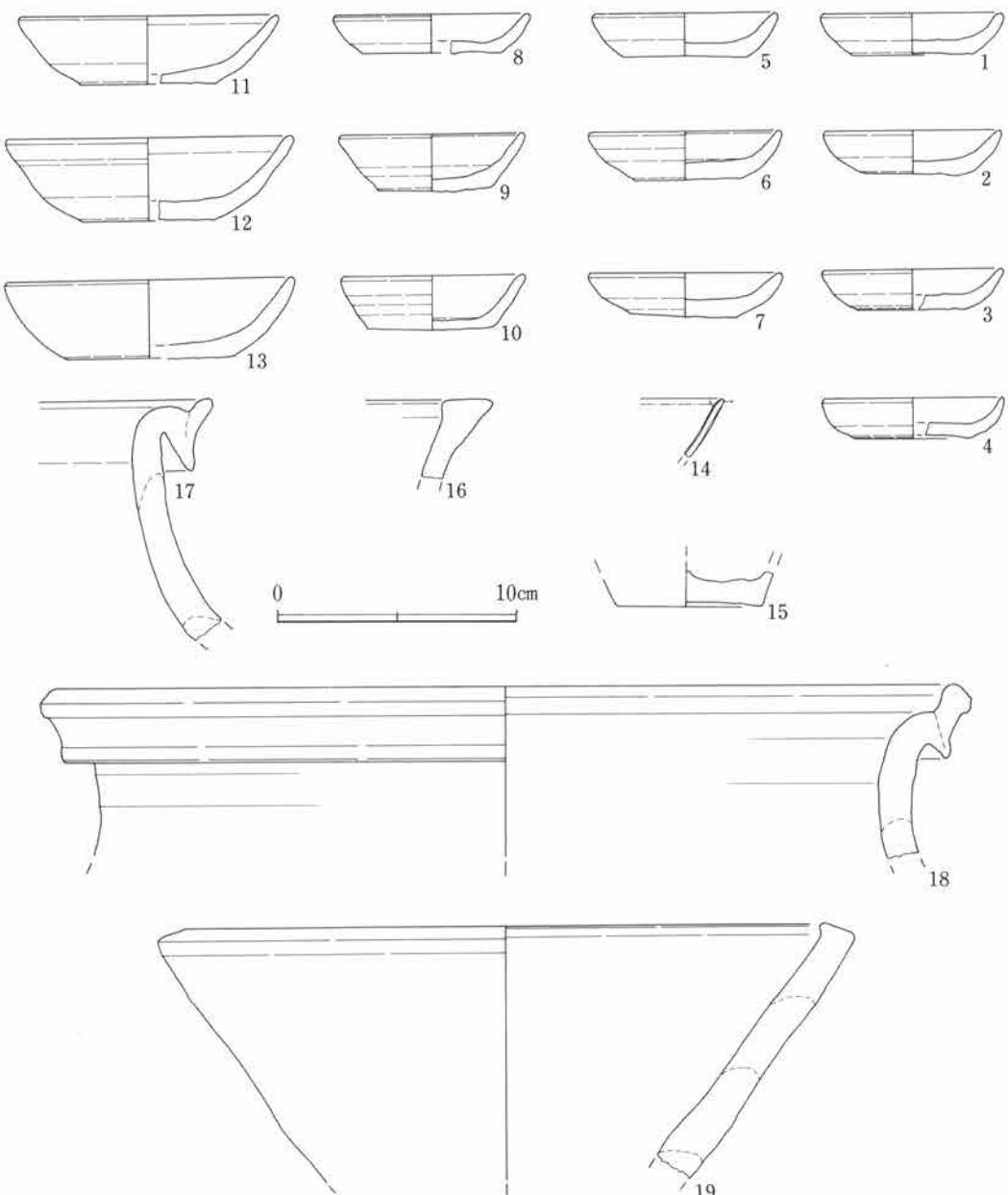


図9 方形竪穴 6 出土遺物

1～10は小型のもので、11は中型、12～13は大型のものである。1～5は器高が低く、体部外面下方に弱い稜を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。6～8は器高が低く、底部がやや高台上に張り出し、やや内湾ぎみに立ち上がる。9、10は器高が高く、底径・口径比やや大きく、体部外面に稜を持ち、直線的に外傾する。11は体部下方に弱い稜を持ち、やや直線的に立ち上がる。底部断面三角形を呈する。12は体部にロクロ目がやや強めに残り、やや内湾ぎみにゆるやかに立ち上がる。13は稜を持たず、やや内湾ぎみにゆるやかに立ち上がる。

胎土は砂粒を含むやや粗いものがほとんどである。色調は淡橙色、淡橙茶色を呈する。すべて内底面には一様にナデの痕跡をとどめ、外底面には回転糸切り痕と、明瞭、不明瞭の差はあるがスノコ痕が残る。

14は白磁口兀皿口縁部小片。口縁部はやや外反し、口唇部は角張る。釉は緑灰白色を呈し、釉層は薄い。胎土は暗灰色を呈する。

15は瀬戸小壺の底部片。底径6.1 cm。内底面にロクロ目痕が極めて明瞭に残り、中心は突起している。外底面の回転糸切り痕も明瞭である。暗赤茶褐色を呈する。胎土は微砂粒を多く含むが堅緻な良土である。

16は土器質手焙りの口縁部小片。口縁部はやや肥厚する。器表は淡橙茶色を呈する。胎土は多量の白色微砂、金雲母を含み、芯部においては灰黒色を呈する。

17・18は常滑窯の甕である。

17は口縁部小片。口縁部はN字状に折り曲げられている。胎土は白色微砂、気泡を含みややねつとりしている。

18は口縁部片。口径39cm。口縁部はN字状に折り曲げられている。胎土は白色微砂、黒色砂粒を含み、ややがさついた割れ口を見せる。

19は常滑こね鉢。口径26cm。胎土は白色微砂を含み、表面がややがさつく。体部内面においては、かなり使用頻度が高いせいか剥落が目立つ。

(早野)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-6	9-7	7.9	4.4	1.8
HT-6	9-1	7.4	5.0	1.8		8	8.0	5.8	1.6
	2	7.3	4.5	1.8		9	7.5	4.8	2.4
	3	7.4	4.7	1.7		10	7.5	5.3	2.3
	4	7.4	4.9	1.7		11	10.8	5.6	2.9
	5	7.5	5.0	1.8		12	12.0	5.5	3.5
	6	8.0	4.5	2.0		13	12.0	6.9	3.3

表2 方形竪穴6出土かわらけ法量

単位(cm)

方形竪穴8(図10)

調査区の東端中央部、D-4グリッド付近で検出された。方形竪穴9および21と重複関係にあり、方形竪穴9よりも古く、方形竪穴21よりも新しい。

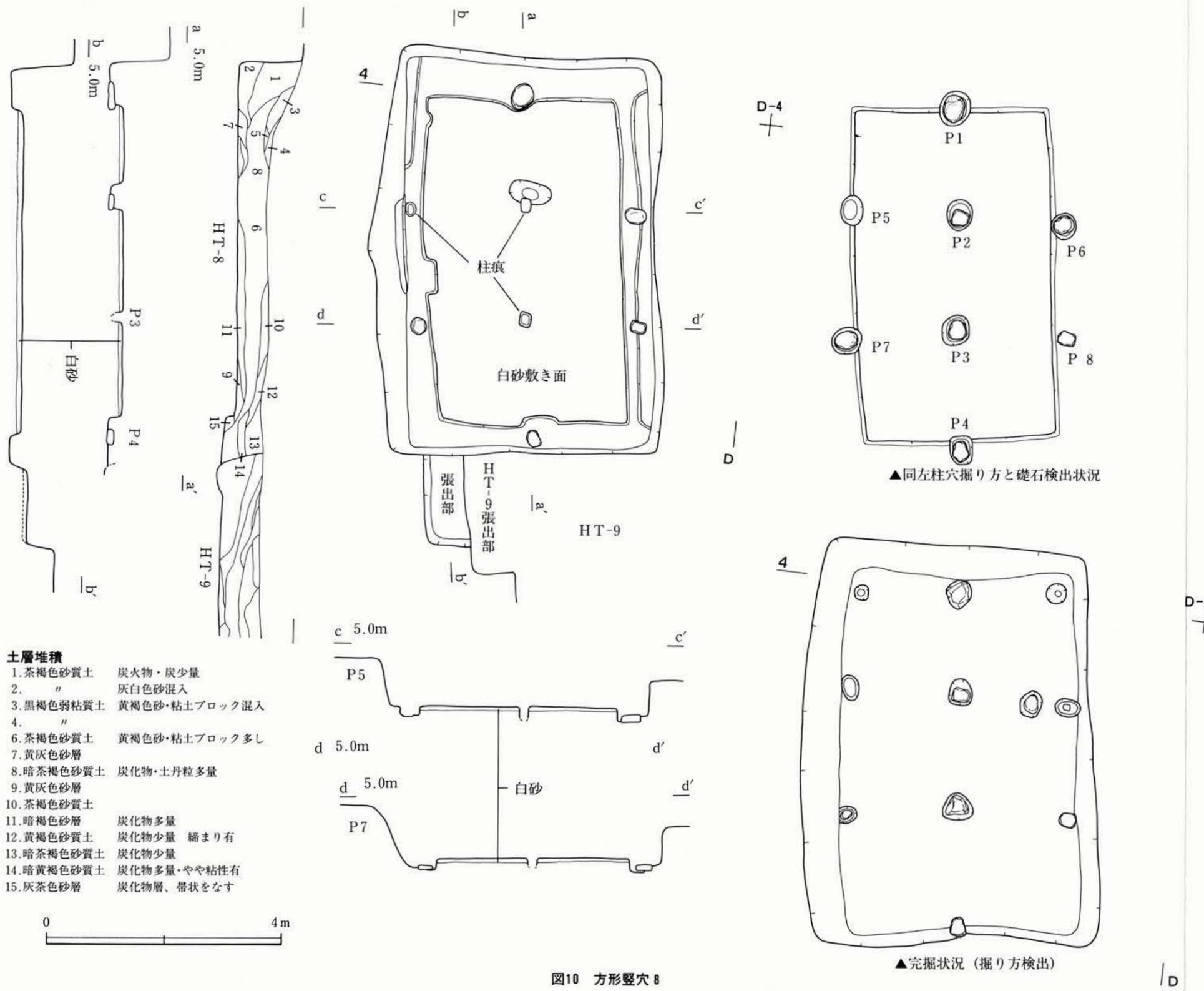


図10 方形豎穴8

本方形竪穴は、主屋部と張り出し部から成る。主屋部の規模は東西6.8m、南北4.8m、確認面より深さ0.72mを測る。平面形は東西に長軸を持つ長方形で、床面積は白砂の範囲から推定して約18m²、標高は3.9m程である。

床面には、厚さ10cm程の白砂が一面に敷かれており、柱あたりの痕跡がこの白砂の面上で確認できたことから、柱を建てたあと撒かれたものと思われる。またその痕跡から、柱は角材が使用されたと思われ、角柱は縦10cm、横6cm程である。

床面に敷かれた白砂を取り除いたところ、礎石を伴う柱穴列が検出された。柱穴列は東西、南北に整然と並んでおり、西よりP1・2間は1.3m、P2・3間は1.4m、P3・4間は1.5mを測る。P2の南北方向並びにP5・6が検出され、P5は南に1.4m、P6は北に1.3mを測る。P3の南北方向並びにP7・8が検出され、P7は南に1.4m、P8は北に1.5mを測る。深さはそれぞれP1が8cm、P2が20cm、P3が12cm、P4が18cm、P5が14cm、P6が9cm、P7が7cm、P8が9cmを測る。以上の配置から考えて、P1～4は棟柱と考えられる。このうちP5を除いたすべてのピットに、礎石が据えられていた。礎石はすべて安山岩系の伊豆石と呼ばれるもので、そのうちP6に伴うものには、柱痕が残っていた。

さらに掘り方を出したところ、P1の並びで南北にそれぞれ1.3mの位置に柱穴が2つと、P2・6間でP2より北へ0.8mの位置に、やはり礎石を伴う柱穴が検出された。

張り出し部については、そのほとんどが方形竪穴9の張り出し部によって切られているため明らかではない。

方形竪穴8出土遺物（図11・12）

図11-1～12は小型の、13～21は大型のロクロ成型のかわらけである。

1～4は体部外面に稜を持たず、器壁はやや外反しながら立ち上がる。5～12は体部外面中程に弱い稜を持ち、口縁部はやや内湾する。13・14は体部外面に強い稜を持ち、底部が高台状に作られている。15・19は体部外面に稜を持ち、口縁部はやや外反する。16・17は体部外面中程に弱い稜を持ち、口縁部はやや内湾する。18は体部外面に稜を持たず、口縁部は内湾する。20は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。21は中心部に貫通する穿孔が1ヶ所ある。体部外面に稜を持たず、器壁はやや外反しながら立ち上がる。胎土は砂粒を含むやや粗いものが殆どで、色調は橙茶色か淡橙茶色を呈する。全て内底面にはナデ痕が、外底面には回転糸きり痕と、明瞭、不明瞭の差はあるがスノコ状圧痕が残る。

22～26は舶載磁器である。

22は青磁碗の底部。高台径4.2cm。素地は暗灰色を呈し堅緻。釉は青灰色で高台までかけられている。

23～26は白磁口兀小皿の小片。23は復元口径9.7cm、底径6.2cm、器高2.4cm。素地は灰色を呈し堅緻。釉は淡青灰色。体部外面下位から底部は露胎で褐色に発色する。24は復元底径6.1cm。素地は黄白色を呈し粘性に欠ける。釉は灰白色で外底部までかけられている。内底面に1本の沈線が巡

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-8	11-11	7.7	4.8	2.2
HT-8	11-1	7.4	5.5	1.5		12	7.7	5.4	2.2
	2	8.0	5.7	1.7		13	11.7	6.2	3.5
	3	8.5	6.5	1.5		14	11.3	6.6	3.1
	4	7.6	6.0	1.9		15	11.7	7.0	3.1
	5	7.7	5.2	1.8		16	11.7	6.9	3.2
	6	7.3	5.0	1.6		17	12.4	7.0	3.0
	7	7.0	4.8	1.8		18	12.9	7.8	3.2
	8	2.3	4.6	2.1		19	12.8	7.3	3.5
	9	6.9	4.1	2.0		20	12.8	7.9	3.3
	10	7.0	4.1	1.9					単位(cm)

表3 方形竪穴8出土かわらけ法量

る。25は復元不可能。素地は灰白色を呈し堅緻。釉は淡乳灰色で外面下位までかけられている。26は復元不可能。素地は灰白色を呈し堅緻。釉は淡灰白色。

27~31は瀬戸窯の製品である。

27・28は折縁皿で、27は外面口縁部の折り返しが強い。釉はハケ塗りで緑褐色。28は外面口縁部の折り返しが弱い。釉は灰釉で薄くかけられ淡緑灰色。

29は仏華瓶で底径4.0cm。底は糸引きのままである。釉は鉄釉で厚くかけられている。良く溶け切り黒色を呈する。胎土は軟質で灰白色である。

30・31は鉗し皿。30は復元口径15.6cm。側壁がゆるやかに内湾気味に立ち上がり、口唇端が外向きの縁帯をなす。釉は非常に薄くかけられ、黄味がかった茶灰色。31は底部で底径10.4cm。底は糸引き。釉は灰釉で灰緑色を呈する。鉗し目は粗雑で鋭くへラで斜めに切り込んである。

32・33は常滑の甕。32は復元口径48.6cm。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえる。器表は黒茶灰色を呈する。33は口縁部の破片。胎土は白色微石を多く混じえる。器表は暗茶褐色を呈する。

34~37は常滑の、38~41は山茶碗窯の捏ね鉢。34~39は小片のため復元不可能。

34の胎土は白色微石、赤色粒、黒色粒を混じえる。器表は暗黒茶色。35の胎土は白色微石を多く混じえる灰色土。器表は茶褐色。36の胎土は白色微石を少量混じえる灰色土。口唇部から体部内面にかけて降灰が見られる。降灰部は灰緑色。器表は茶褐色。37の胎土は白色微石、黒色微粒を混じえる。器表は茶褐色。38の胎土は黒色微石、白色微石を多く混じえる。器表は灰白色。内底面は良く磨滅している。39の胎土は白色微石、黒色微粒を混じえる。口縁部から体部内面にかけて自然釉が見られる。器表は暗灰色。40は復元底径16.8cm。胎土は黒色微粒、白色微粒を多く混じえる。器表は灰色。内底面は非常に良く磨滅している。体部外面には強いナデが見られる。41は復元底径16.9cm。胎土は黒色微粒、白色微粒を混じえる。器表は暗灰色。体部内面は全体的に自然釉が見られ、内底面だけ良く磨滅している。

42は備前の擂り鉢。胎土は黒色微粒を多く混じえる。器表は外面は灰緑色、内面および口縁部は灰色。体部外面には降灰が見られる。体部内面の条線は7条。

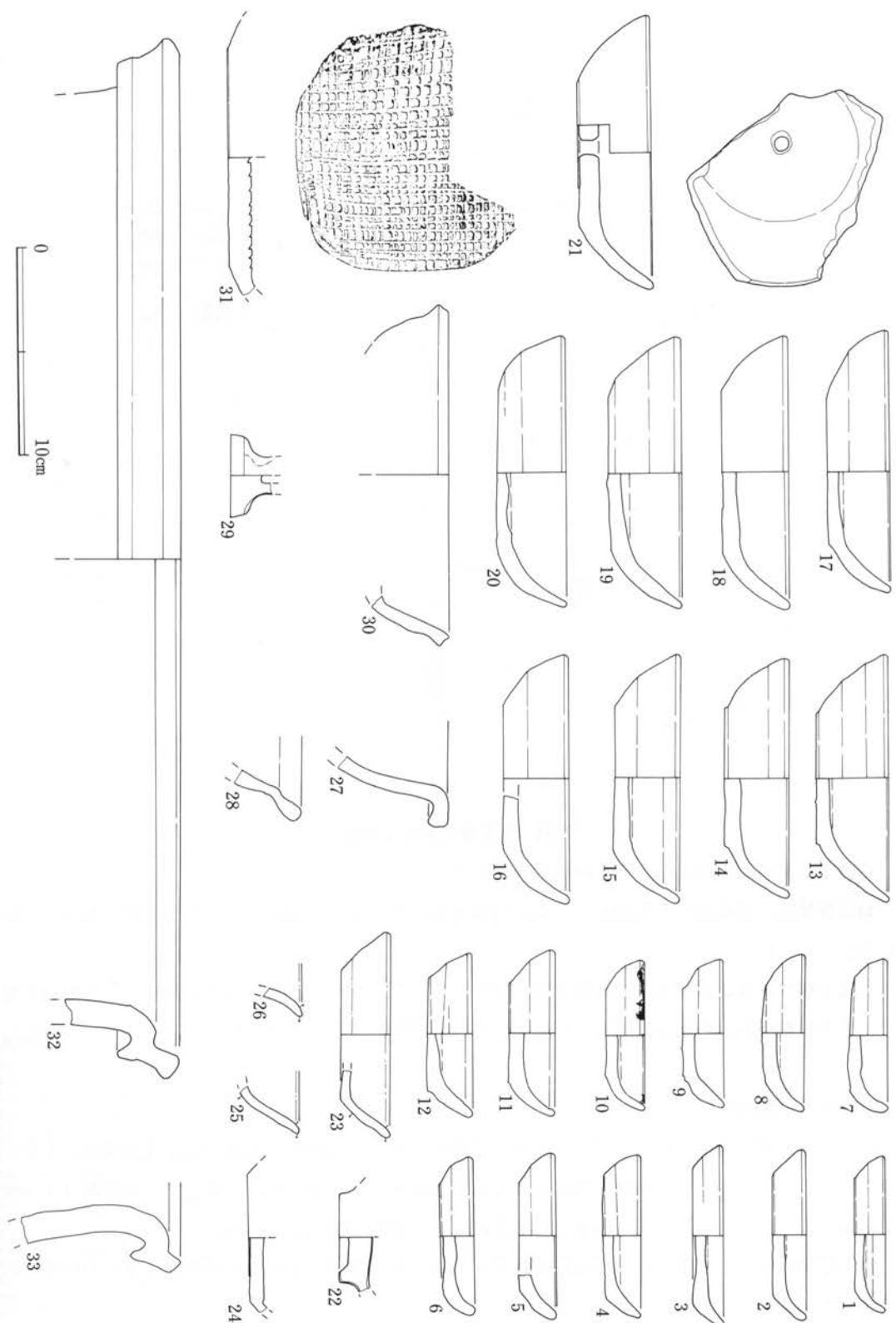


図11 方形竪穴8出土遺物(1)

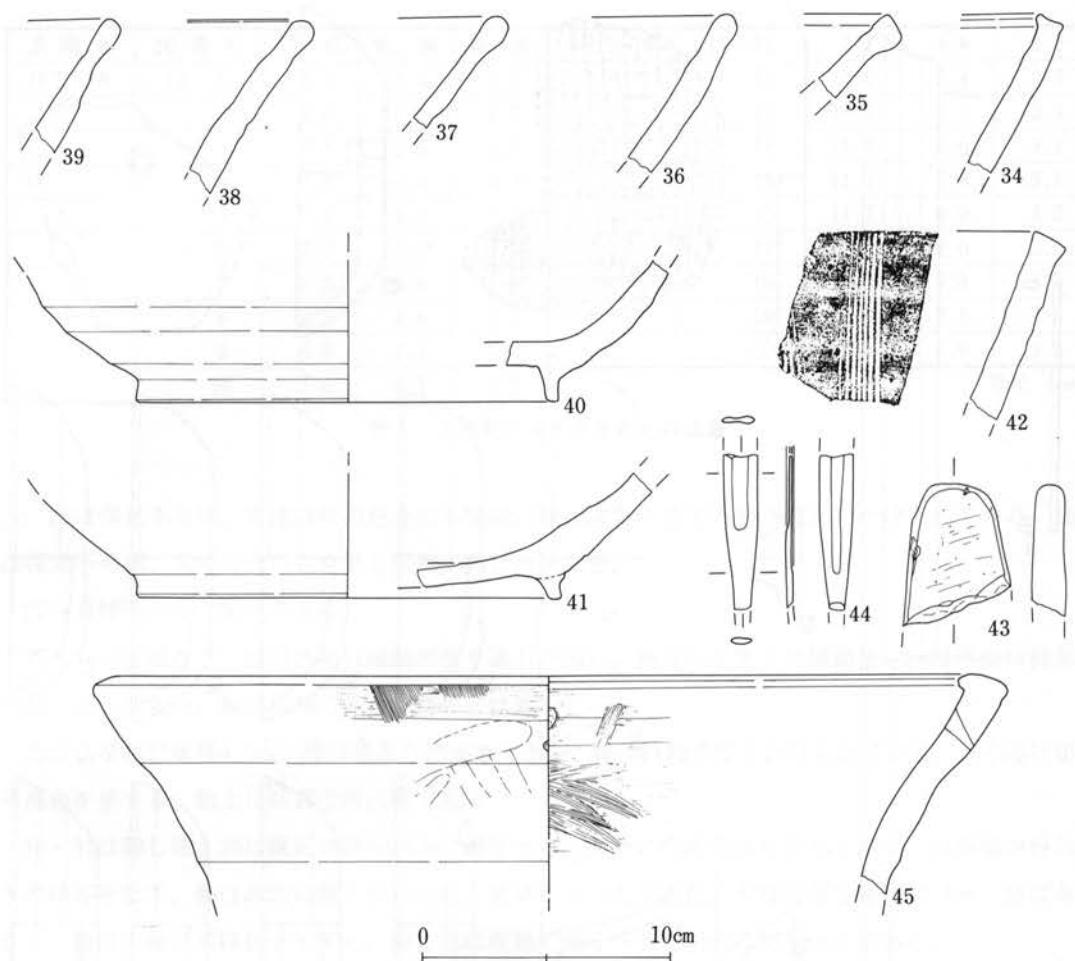


図12 方形竪穴8出土遺物(2)

43はすり常滑。周縁部と片面に擦痕が見られる。

44は骨製笄。両端部とも欠損している。両面中央に溝を持つ。両面とも丁寧な研磨で光沢が見られる。

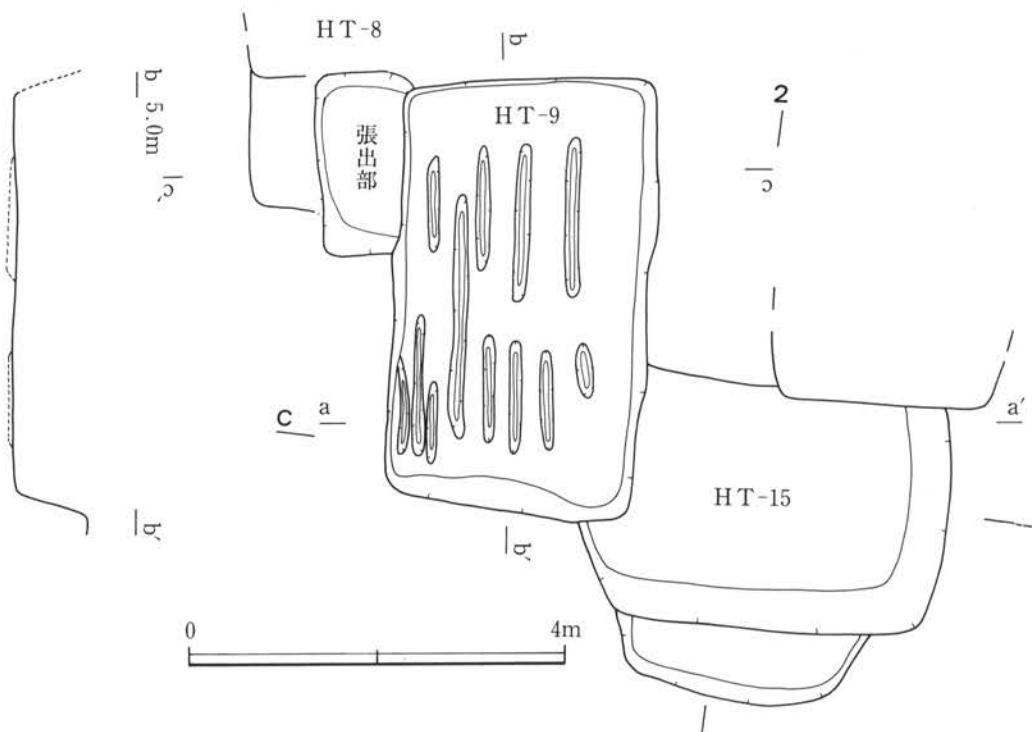
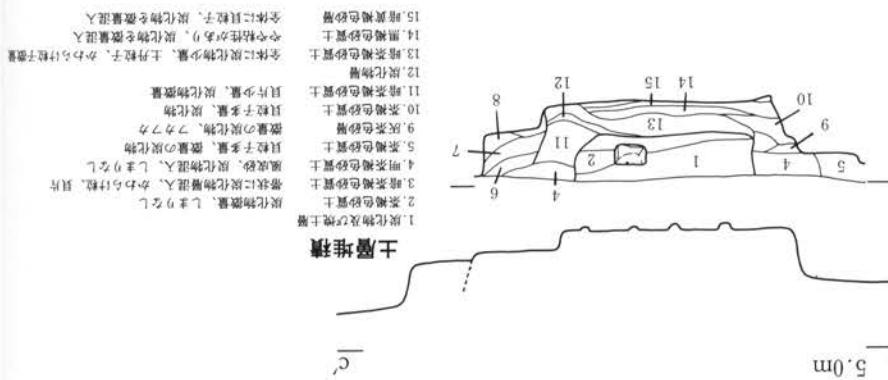
45は手焙り。復元口径35cm。瓦質で浅い鉢型のものと思われる。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえるやや粗い土。色調は黒灰色。口縁下に外方へ傾斜して孔があけられている。 (須佐)

方形竪穴9 (図13)

調査区の東端中央部、D-3グリッド付近で検出された。方形竪穴8及び15と重複関係にあり、そのどちらよりも新しい。東側に南北に走る道路状遺構から、本方形竪穴東辺までの距離は3m程度である。なおその間にはゴミを廃棄したと思われる土壠群が掘られていた。

本方形竪穴は、主屋部と張り出し部から成り、張り出し部は主屋部の南西隅側に寄った位置に取り付いている。

主屋部の規模は東西4.6m、南北2.7m、確認面より深さ0.8mを測る。平面形は東西に長軸を



土層堆積

- 1.茶褐色砂質土
 - 1.茶褐色砂質土
 - 2.棕茶褐色砂質土
 - 2.棕茶褐色砂質土
 - 3.灰褐色茶褐色砂質土
 - 3.灰褐色茶褐色砂質土
 - 4.白灰色砂層
 - 4.白灰色砂層
 - 5.棕茶褐色砂質土
 - 5.棕茶褐色砂質土
 - 6.灰白色弱粘質土
 - 7.柔色砂質土
 - 8.黑褐色砂質土
 - 9.灰茶褐色砂質土
 - 10.灰茶褐色砂質土
 - 11.黄茶褐色砂質土
 - 12.黑褐色砂質土
 - 13.棕茶褐色砂質土
 - 14.灰茶褐色砂質土
 - 15.茶色砂質土
- かわらけ粒、炭化物少量、貝殻粒、5cm大の土丹1個
黄灰茶白の砂混入、炭化物1層より多い
炭化前の灰1点、炭化物、貝殻粒少量、微量のかわらけ粒
黄灰茶褐色の砂ブロック状に混入、炭化物2層より多い
底部に帯状に炭化物が入る、貝殻粒、少量の土丹
混入物なし
炭化物、茶褐色砂質土極めて少量混入
微量のかわらけ粒、炭化物少量
貼床面、粒性良
黄灰砂層ブロック状に多量に混入、かわらけ片少量の炭化物
多量の炭化物、少量の貝殻粒、極少量の土丹粒
貝殻片、かわらけ片少量、炭化物、少量の砂層状に混入、しまり良
微量の炭化物
貝殻、微量の常滑片、炭化物
少量の炭化物、貝殻粒
黄灰色砂層、貝殻片、炭化物
貝殻粒、少量の炭化物
多くの炭化物、かわらけ片、貝殻片

図13 方形堅穴9・15

持つ長方形で、掘り方床面積は約10m²、標高は3.7 m程である。

張り出し部の規模は東西1.9 m、南北0.95m、確認面より深さ0.55mを測る。張り出し部と主屋部との床面レベル差は0.25mを測り、張り出し部の方が一段高く作り出されている。

床面はほぼ平坦であり、12条の溝状遺構が検出された。この溝状遺構は全てが東西方向を意識して、2列に並んでいる。このうち南よりの1条の溝は長いもので、2.65mを測り、北よりの1条は0.6 mと短い。その他は1.1 m~1.6 m、幅はほぼ均一で15cm、深さは7 cm前後を測る。これらの溝は根太木据え痕と思われ、この上に床板を張った構造が想像される。

土層観察によると、覆土上層では炭化物及び焼土層が厚く堆積した土壤状の遺構が認められた。本方形竪穴の上部は茶褐色の砂質土、中程に炭化物層をはさんで茶褐色の遺物混じりの砂質土がやや厚めに堆積する。床面上には、やや粘性の強い黒褐色土が水平に堆積し、床面を思わせる。

方形竪穴 9 出土遺物（図14）

図14-1・2は舶載磁器である。

1は青磁蓮弁文碗の小片である。復元口径16.0cmを測る。素地は暗灰色を呈し、堅緻である。釉は暗緑色を呈する。

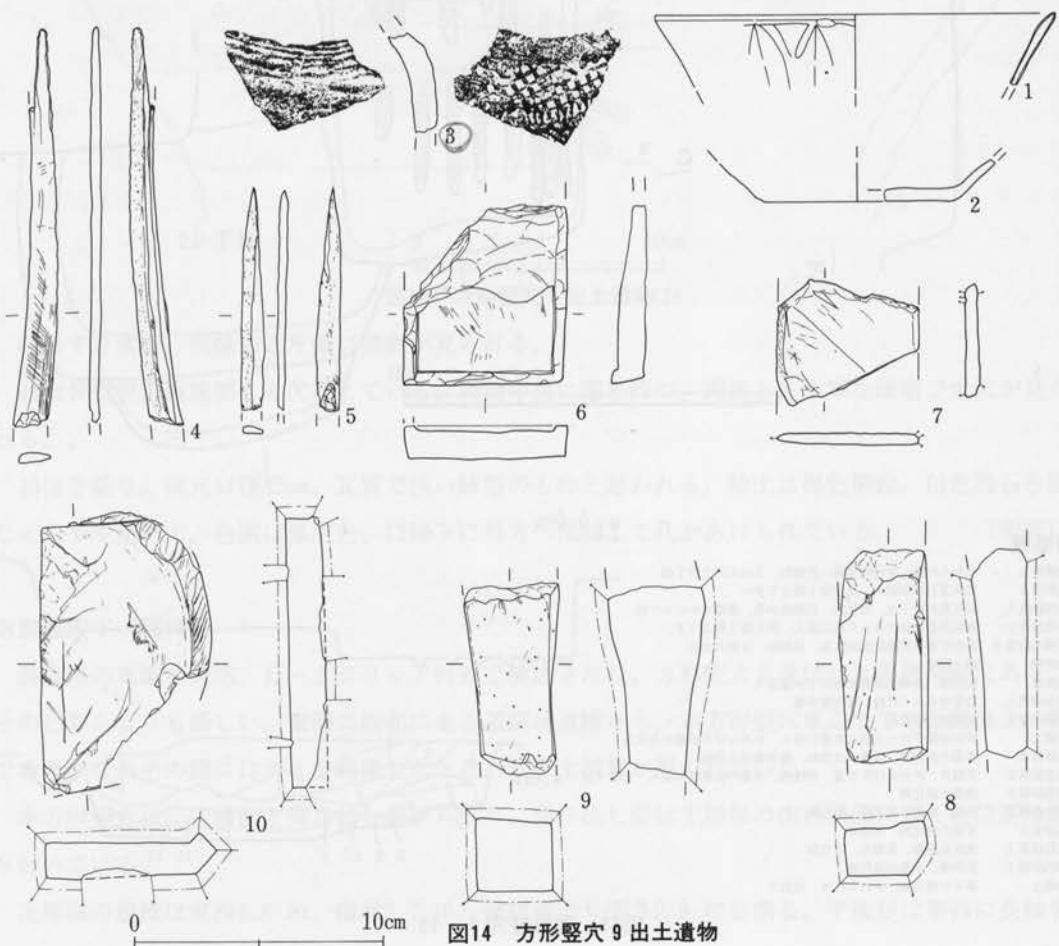


図14 方形竪穴 9 出土遺物

2は白磁口元小皿の小片である。素地は白色を呈し、堅緻である。釉は乳白色を呈し、外底部までかけられている。

3は亀山系陶器の小片である。胎土は砂粒を多く混じえたやや粗い土。色調は灰黒色を呈する。外面には細かい格子叩き目が施され、内面には同心円弧の叩き目を残す。

4・5は骨製品である。

4は茶灰色を呈する。加工途中もしくは割れてしまったかの様である。5は乳白色を呈する。先端部が尖っている。両面に研磨の擦痕が残る。

6は硯である。幅6.5cm、厚さ1.25~1.5cmの陸の部分である。断面は台形を呈する。粘板岩製で、色調は灰黒色を呈する。

7~9は砥石である。

7は灰緑色を呈す泥岩製の仕上砥である。砥面は平滑で、細い鋭利な削痕を残す。側面は擦り切りの痕を残す。8は黄灰色を呈する中砥である。方柱状の中央部が磨滅してへこんでいる。各面を良く使用している。9は黄褐色を呈する中砥である。気泡を含みやや硬質で、赤色の粒子を含んだ石材を使用している。

10は滑石鍋転用製品である。滑石鍋の底部を鋭利なもので切断している。破損部が多いため何に転用されたかは不明瞭である。

方形堅穴10(図15)

調査区東南端、B-3・4グリッドにおいて検出された。本方形堅穴西側は方形堅穴11により壊されており、11より古い。南側には方形堅穴12・13が長軸方位を合わせる形で建て替えられている。また、隣接して方形堅穴11を壊した新しい時期の井戸が認められる。東側に南北に走る道路状遺構との間の空間地には土壙群が形成されている。本方形堅穴東辺から道路西肩までの距離は3m程離れた位置に掘られている。

掘り方における本方形堅穴の規模は、東西4.25m以上、南北3.35m、確認面からの深さ1.0mを測り、平面形は東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈している。西側は壊されているが、床面積は7m²以上である。

床面はほぼ平坦で、標高3.9mを測る。床面に検出された遺構は、2ヶ所の溝状遺構と、楕円形、円形のピットが11口認められた。溝状遺構では、北側にある遺構の長さ193cm、幅15cm、深さ2~4cm、東側にある遺構の長さ123cm、幅20cm、深さ7~8cmを測る。この溝状遺構は根太木の据え跡と思われる。また楕円形のピットのうち4穴は北壁の下にあり、西側よりP1は長さ90cm、幅20cm、深さ2~5cm、P2は長55cm、幅20~25cm、深さ15cm、P3は長さ40cm、幅15cm、深さ12cm、P4は長さ30cm、幅10cm、深さ1cmを測る。またこれらのピットは壁板をささえるための柱穴と思われる。他2個の楕円形のピットでは大きいほうからP5は長さ70cm、幅40cm、深さ10~6cm、P6は長さ25cm、幅18cm、深さ5cmを測る。円形のピットでは東北の角よりP7は直径30cm、深さ7cm、P8は直径12cm、深さ6cm、P9は直径14cm、深さ7cm、P10は直径22cm、深さ6cm、P11は

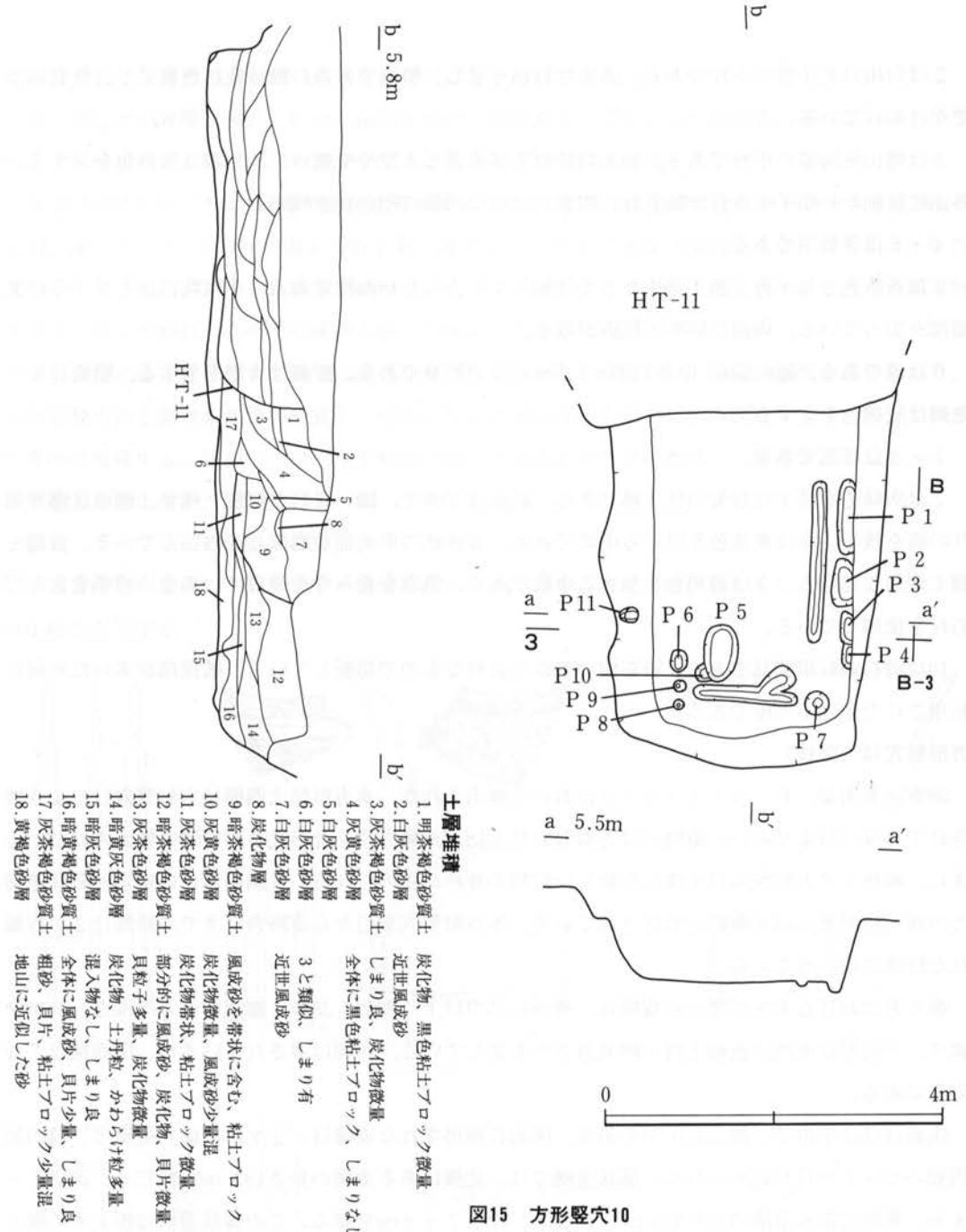


図15 方形豎穴10

直径14cm、深さ29cmを測る。11は、壁中程に位置し、かなり深いが、何の為の穴かわからない。これらは根太の痕跡やそれを固定する杭穴等であろう。南側と西側には根太木を据えた溝状遺構や板壁を支えた杭と見られるピット等の遺構は確認することが出来なかった。

本遺構と方形豎穴11の北側に鎌倉石が廃棄集積されている(写真図版7-2参照)。この鎌倉石は本遺構と方形豎穴11から抜き取られ、廃棄された可能性も考えられる。

方形竪穴10出土遺物（図16）

図16-1は白磁の口兀皿。断片が小さく復元は出来なかった。胎土は暗灰色を呈し堅緻である。釉はやや緑がかった灰白色を呈する。

2は瀬戸折縁鉢。復元口径16cm。口縁部は折り返しが強く、器壁が厚い。釉は灰釉をハケ塗りしており、むらがある。釉の色は緑灰白色を呈する。

3は土錘である。径1cmの丸棒に粘土を巻き付け、指頭で整形したもので両端部はヘラ状工具で切り整えられる。

4は女瓦の小片。凸面はやや粗い離れ砂が斜格子の叩きによって打ち込まれている。凹面はやや粗い砂を離れ砂として使用、縦方向にナテ調整が施されている。端縁にヘラ削り、側縁にナテ調整が施されている。胎土は白色物質、小石等を含むが、精良土で、焼成も良好。色調は灰褐色を呈する。厚さ1.8~2.0cm。

方形竪穴12（図17）

方形竪穴12は調査区北東端B・C-4グリッドにおいて検出された。北東側で方形竪穴13と重複し、方形竪穴13より新しい。北側で井戸と重複し、井戸より新しい。東側で方形竪穴20と重複し、方形竪穴20より新しい。

掘り方における本方形竪穴の規模は、東西5.75m、南北4.45m、確認面からの深さ0.9mを測り、平面形は東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈している。床面積は約20m²である。

床面はほぼ平坦で、標高3.9mを測る。東西中央部に大型のピットが2穴、やや小ぶりのピット1穴が確認された。このピットは東側より、1は長さ140cm、幅112cm、深さ27~29cm。2は長さ138cm、幅118cm、深さ25~33cm。3は長さ74cm、幅55cm、深さ26cmを測る。ピット1~3の間隔は芯々で2mづつを測る。これらのピットは棟木を支える為の柱穴ではないかと思われる。西側以外の壁際に、ピットの並びが確認された。このピットのうち一回り大きいピットは長さ58cm~27cm、幅30~20cm、深さ8~29cmを測る。これらのピットは、上屋を支えるために使われたものと思われる。壁際のピットは直径10~22cm、深さ6~19cm、ピット間25~50cmを測る。これらのピット

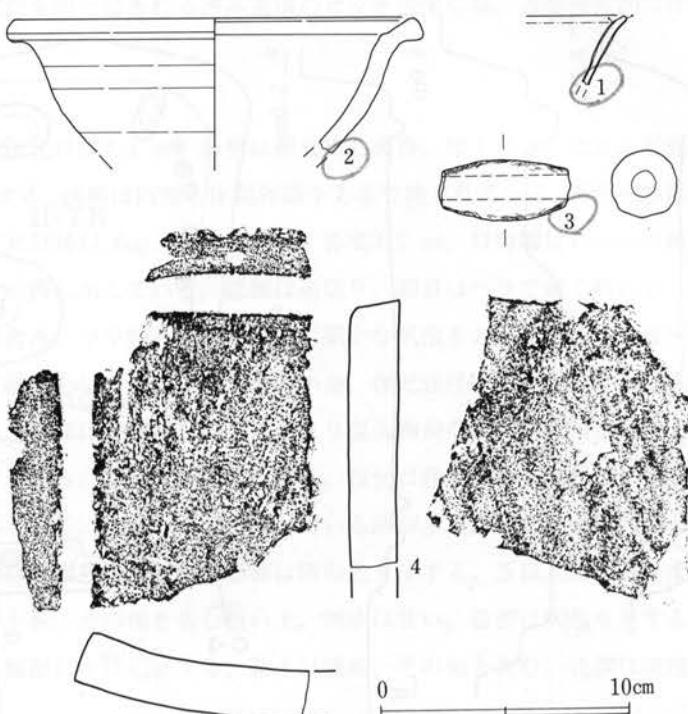


図16 方形竪穴10出土遺物

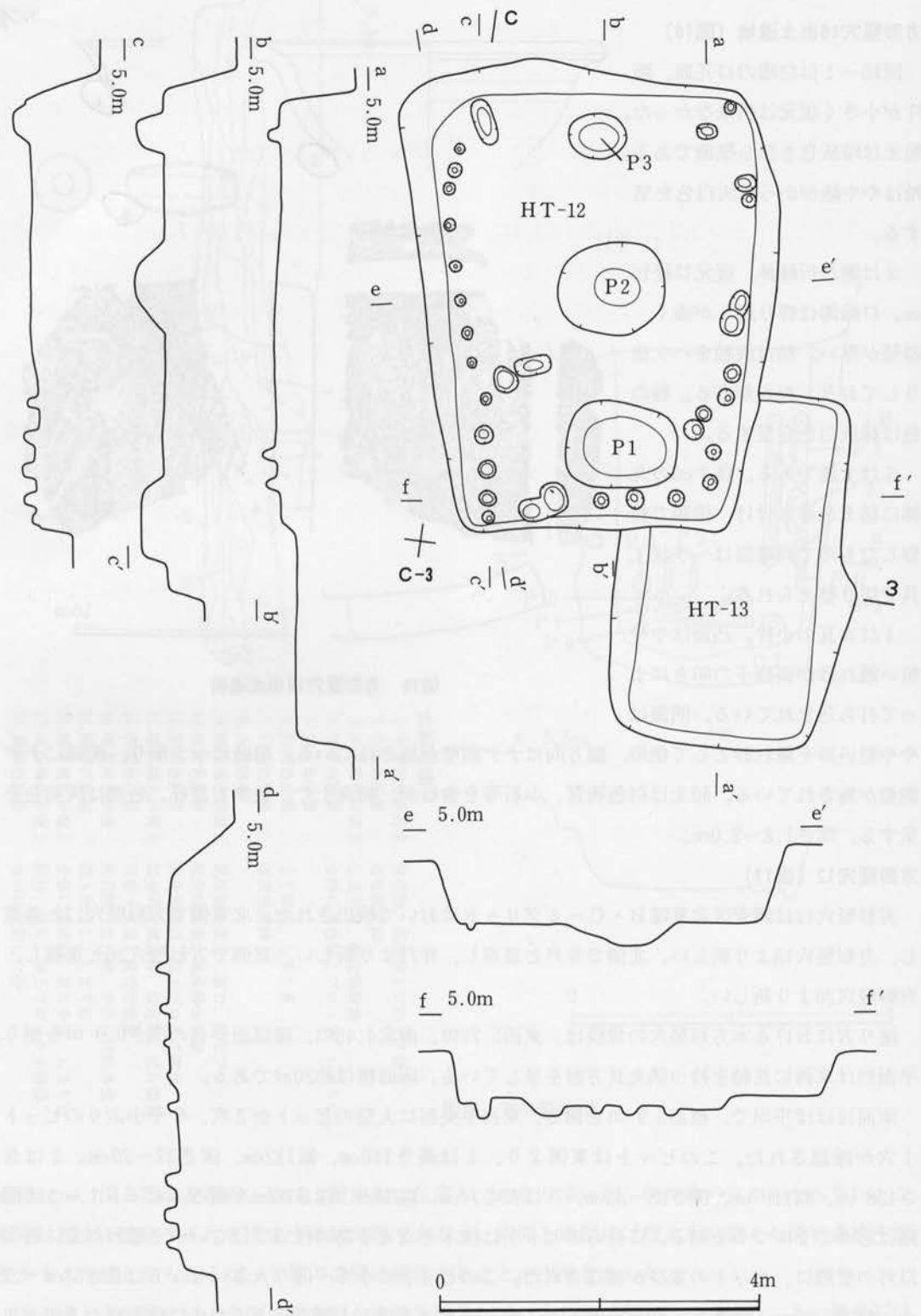


図17 方形竪穴12・13

は壁板などを支えるために使われたものと思われる。本遺構のピットの中には、方形竪穴20に伴うものもあると思われる。

方形竪穴12出土遺物（図18）

図18-1は瀬戸鉄釉天目茶碗。復元口径4.4 cm。底部は削り出し高台。胎土には、ほとんど混入物を含まない。灰色～茶灰色を呈する。鉄釉は内面と体部外面下方まで施されている。褐色～黒褐色を呈する。2は瀬戸の卸し皿。復元口径14.8cm、底径8.3 cm、器高3.7 cm。口唇端は外向きの縁帶をなし、片口は口縁の一部を外方へ押し出している。底部は糸切り。卸目はヘラで鋭く斜に切り込んでいる。胎土は若干の微砂粒を含み、やや粉っぽい胎土で、細かな気泡も入っている。釉は灰釉をハケ塗りしており、黄緑色～灰緑色を呈する。3は常滑の小壺。復元底径6.0 cm。内外面共横ナデしている。内底部はナデが強い。底部は糸切り。胎土はあまり混入物がなく、色は淡茶褐色。自然釉はむらがあり厚い所には光沢がある。4は瓦質輪花手焙り。復元口径36.7cm。口縁部に磨きの痕跡があり、内面はヘラ削りされている。体部外面は剥落している所が多い。胎土は砂や石粒が混じる粗い胎土。焼成は甘い。色調は赤橙褐色～黒色、芯部は灰白色を呈する。5は瓦質手焙り小片。口縁部になると肥厚する。胎土は小石、その他を含む粗い土。焼成は甘い。器表は灰色を呈する。6は土器質手焙り小片。口縁より底部にかけ肥厚する。胎土は微砂、その他を含む。色調は淡橙茶

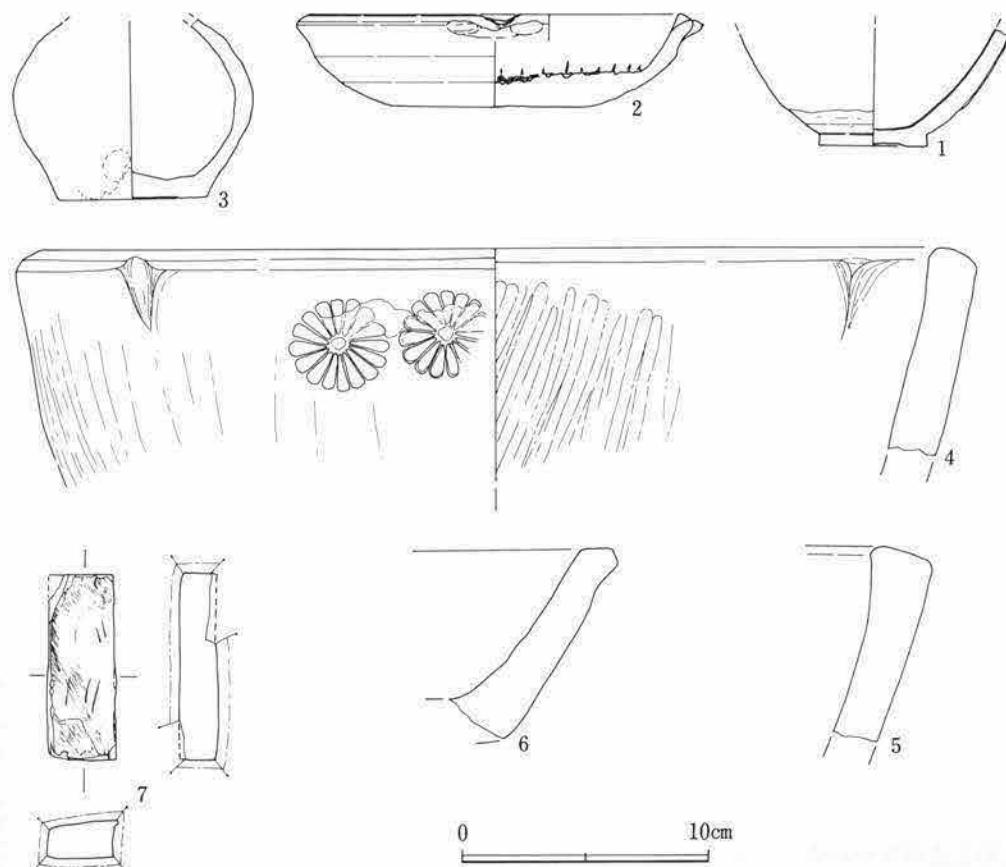


図18 方形竪穴12出土遺物

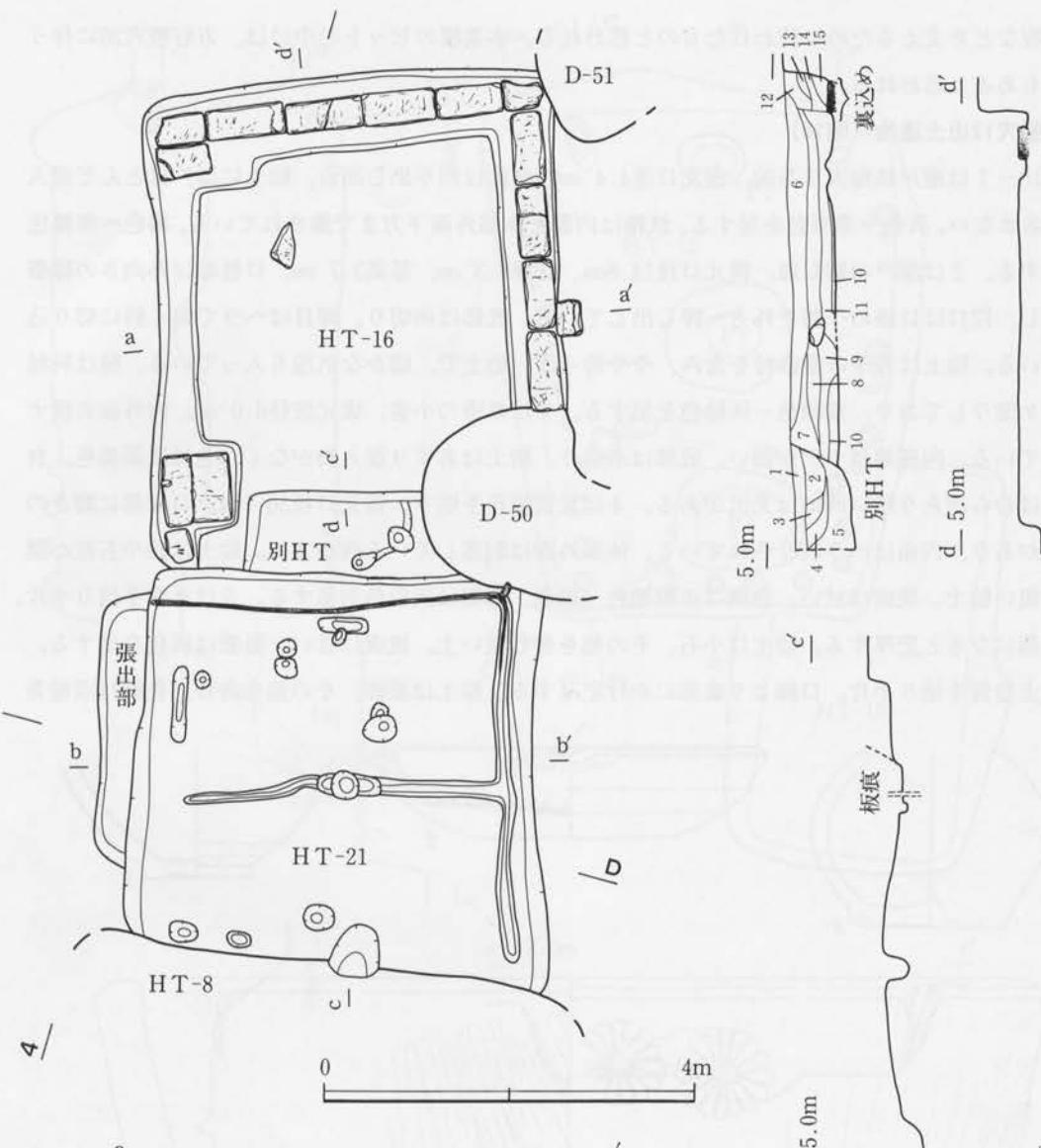


図19 方形豎穴16・21

土層堆積	土丹粒、炭化物
1. 明茶褐色砂質土	炭化物、土丹
2. 茶褐色砂質土	土丹(5cm入)、部分的に塊土
3. 明茶褐色砂粘質土	少量の炭化物
4. 茶茶褐色砂粘質土	炭化物
5. 黄茶褐色砂質土	帯状に灰質色砂混入、炭化物
6. 黄茶褐色砂質土	焼土層確認、土丹(3cm入)、土丹粒、貝粒、炭化物
7. 黄茶褐色砂質土	かわらけ片、玉石、貝片
8. 黄茶褐色砂質土	炭化物、土丹粒、貝片
9. 明茶褐色砂質土	炭化物、土丹粒、土丹、濃度のかわらけ粒、固くしまる
10. 明茶褐色砂質土	土丹、炭化物、濃度のかわらけ粒、貝粒
11. 明茶褐色砂質土	土丹粒、炭化物、貝粒
12. 明茶褐色砂質土	炭化物、貝粒、貝片、茶色粘質土ブロック状に少量混入
13. 明茶褐色砂質土	土丹、炭化物、貝粒
14. 黄茶褐色砂質土	土丹、炭化物、貝粒
15. 茶茶褐色砂質土	貝粒、炭化物、土丹

灰色、芯部は黒色を呈する。7は滑石鍋転用製品。柱状に加工されたものであるが、何に使用したか不明である。

方形竪穴13（図17）

方形竪穴13は調査区東南端、B-3・4グリッドにおいて検出された。南西側で方形竪穴12と重複。東側に南北に走る道路状遺構西肩から本方形竪穴東辺までの距離は2mを測る。掘り方における本方形竪穴の規模は、東西4.5m、南北2.9m、確認面からの深さ0.7mを測る。平面形は東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、床面積は8m²以上で小型である。床面の標高は4mを測る。床面には遺構は検出されなかった。遺物も実測不可能な小片だけであった。（田代）

方形竪穴15（図13）

調査区の東端中央部、D-3杭に位置する。方形竪穴9および6と重複関係にあり、方形竪穴9よりも古く、6よりも新しい。東側で南北に走る道路状遺構の西肩から、本方形竪穴東辺までの距離は1m程である。本方形竪穴は、主屋部と張り出し部から成り、張り出し部は主屋部の東壁側の長辺に取り付く。主屋部の規模は南北3.7m、東西2.6m、確認面より深さ0.7mを測り、壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。主軸方位は南北を示し、床面積は6m²程と小型のものである。床面の標高は4.0m程である。張り出し部の規模は南北2.5m、東西0.8m、確認面よりの深さ0.6mを測る。張り出し部と主屋部との床面レベル差は0.1mを測り張り出し部の方が一段高く作り出されている。張り出し部の形態として、張り出し部を持つ方形竪穴の多くは短辺側に取り付いているが、本方形竪穴や方形竪穴9の様に長辺側に取りついているものは、そう多くは確認されていない。床面及び張り出し部はほぼ平坦であり、柱穴、溝等の遺構は確認できなかった。

土層観察によると、本方形竪穴の上部は黄色砂を多量に混入した茶色砂質土、中程に炭化物を含んだ茶褐色系の砂質土が堆積する。床面上には黒褐色土が水平堆積し、床板の存在を思わせる。張り出し部の床面上には、粘性の強い灰白色土が堆積する。土間状の貼り床であろうか。（須佐）

方形竪穴16（図19）

調査区北東C-4・5グリッドで検出された。南辺で方形竪穴21・土壙50及び別の方形竪穴に、北東隅で土壙51に切られるが、大きくは壊されていない。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は東西4.5m、南北5.0m、確認面からの深さ0.45mを、床面標高は4.4mを測る。ほぼ平坦な床面には、幅約33cm、長さ約80cm、厚さ約10cmほどの鎌倉石切石が東辺で4石、西辺では小さなものを含めて7石それぞれ縦列し、南西隅でも3石検出された。南辺は不明であるが、西辺にも切石の抜き取り痕がみられることから、原形は四周に切石が巡らされるタイプであろう。土層断面の観察により、壁は切石の内側ぎりぎりの辺りに存在したと思われるから、使用当時の床は一辺約3.4m、面積約11m²程と推定できる。

方形竪穴16出土遺物（図20）

図20-1は青磁碗底部。復元高台径5.6cm。素地はやや赤みがかった灰白色土。釉は暗灰緑色。

2は青磁折縁鉢。復元口径20.8cm。素地はやや粘性をもち緻密な灰色土。釉は暗黄緑色で厚い。

3は青白磁梅瓶胴部。復元最大径16.5cm。渦文。素地は明灰色粗土。釉は透明感のある水青色。4は白磁口兀皿。復元口径11.5cm。素地は白色でごく少量の微砂粒を含むが堅緻。釉は灰白色。5は青磁小壺。復元口径1.6 cm、最大径4.6 cm。小片からの復元であるため数値にやや不安が残る。素地はやや粘性をもつ明灰色土。釉は暗灰緑色。水滴かとも思われる。6は黒褐釉小壺。復元最大径6.9 cm。素地は淡い茶褐色を呈し白色粉粒を若干混じえるが非常に堅緻。釉は黒褐色で濃淡のムラが細かく斑状を呈し、内面にも垂れかかる。肩に上部を欠損した突起が貼り付けられているが、把手になると思われる。これも水滴であろうか。7～9は常滑甕口縁部。端部は7・8がN字状に折り返されるが、9はS字状を呈する。10～13はこね鉢口縁部。10・11は常滑窯、12・13は山茶碗窯の製品。

14は鉢形土器質手培り。胎土は灰黒色で砂粒を含み粗い。内側から斜めに穿孔されるが貫通してはいない。口縁端部は強いナデによって内側にやや張り出し、外面には指頭による整形痕が残る。

15・16は骨製笄。15は頂部を欠損するが、粗い磨きで再加工している。

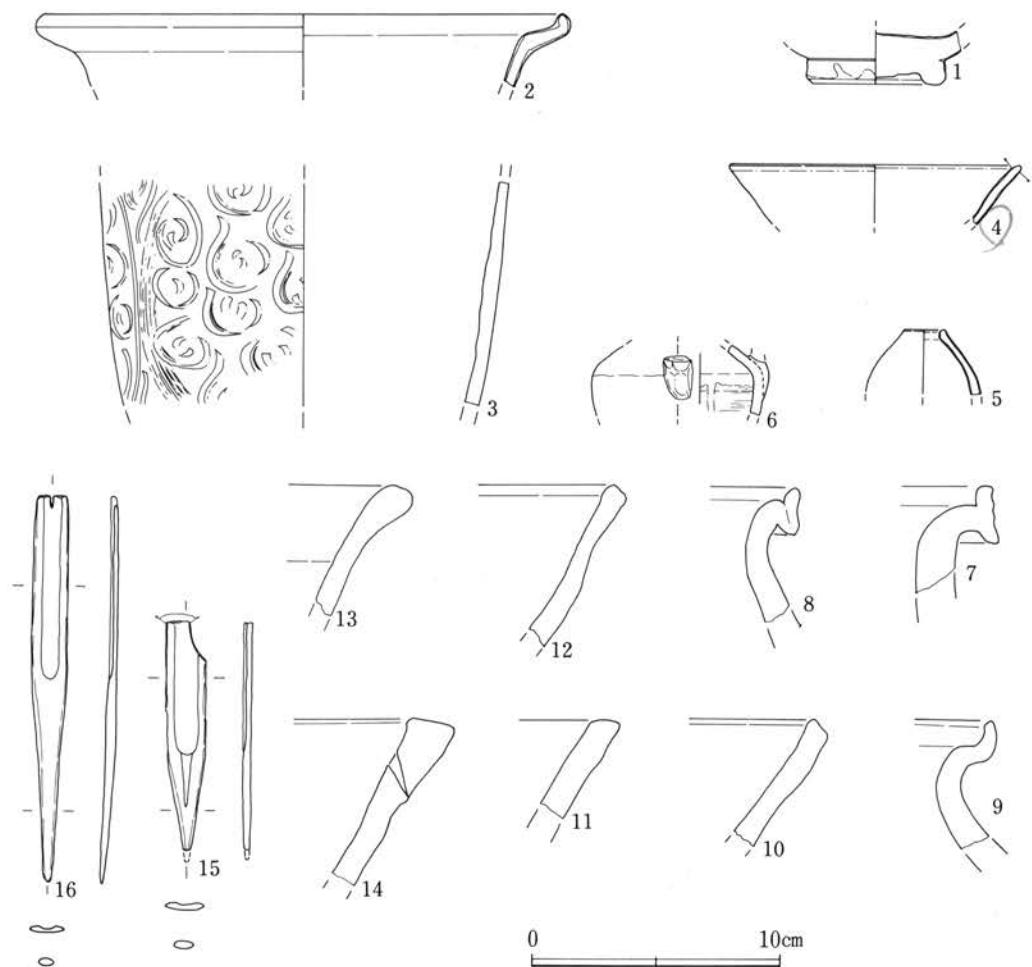


図20 方形竪穴16出土遺物

方形豊穴20 (図21)

調査区北東C・D-4グリッドで検出された。北東隅を井戸に壊され、東半部の殆どが方形豊穴12と重複し、それより古い。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈し、規模は東西9.4m、南北4.8m、確認面からの深さ1.05mを測る。

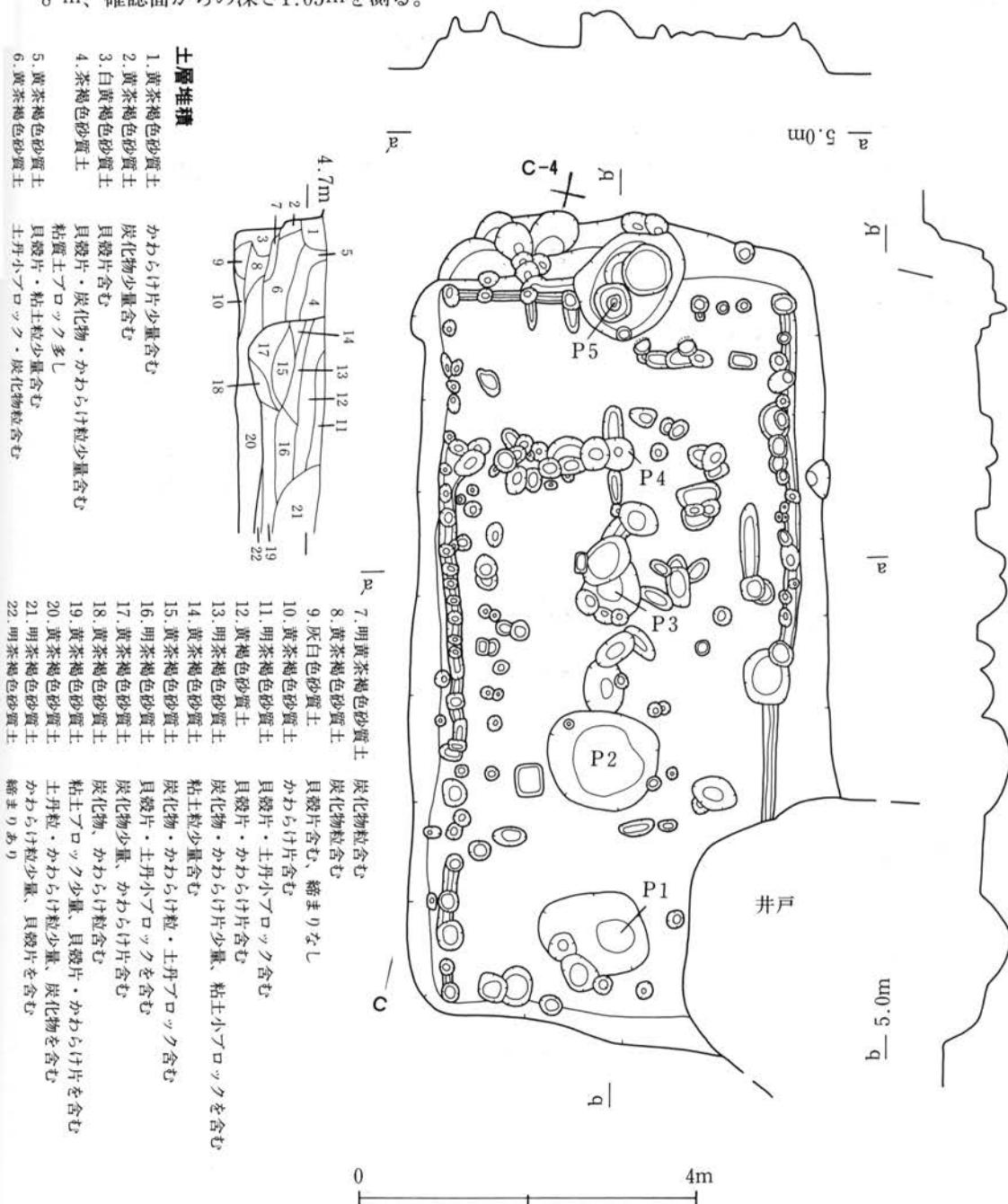


図21 方形豊穴20

床面は標高3.9 m程で、東西の中軸線上にやや大きめのピットが数口（P 1～P 5他）並び、北・南・西三方の壁直下では弱い溝を持つ小ピット列が巡る。南辺では更にその内側に平行して小ピットが列をなし、それ以外にも明確な規則性を見出せない小ピットが多数検出された。P 1～P 5は確認した大きさは区々であるが、各芯々間は概ね180 cm前後を測る。棟持柱の痕跡であろう。壁直下の小ピットの殆どは径10～20cmで、柱穴と言うよりは杭穴のようなものと思われる。恐らくは各ピット列とも、溝に落とし込まれた壁体を支えるために各辺に沿って打ち込まれたのである。それ以外のピットの中には床束になるものも含まれると思われる。また、P 4を通る南北軸線上にピットが集中する点が注意を惹く。ピットの配置から使用当時の床面を推測するなら、東西8.0 m、南北3.8 m、面積は凡そ30m²程である。

尚、既述の方形竪穴12は、本遺構東半部ではほぼ完全に重複しており、且つ床面構造が極めて類似していることから、本来同一の建物を別個のものとして掘り上げてしまった可能性もあるが、方形竪穴20が縮小改変されたものとも考えられよう。

方形竪穴20出土遺物（図22）

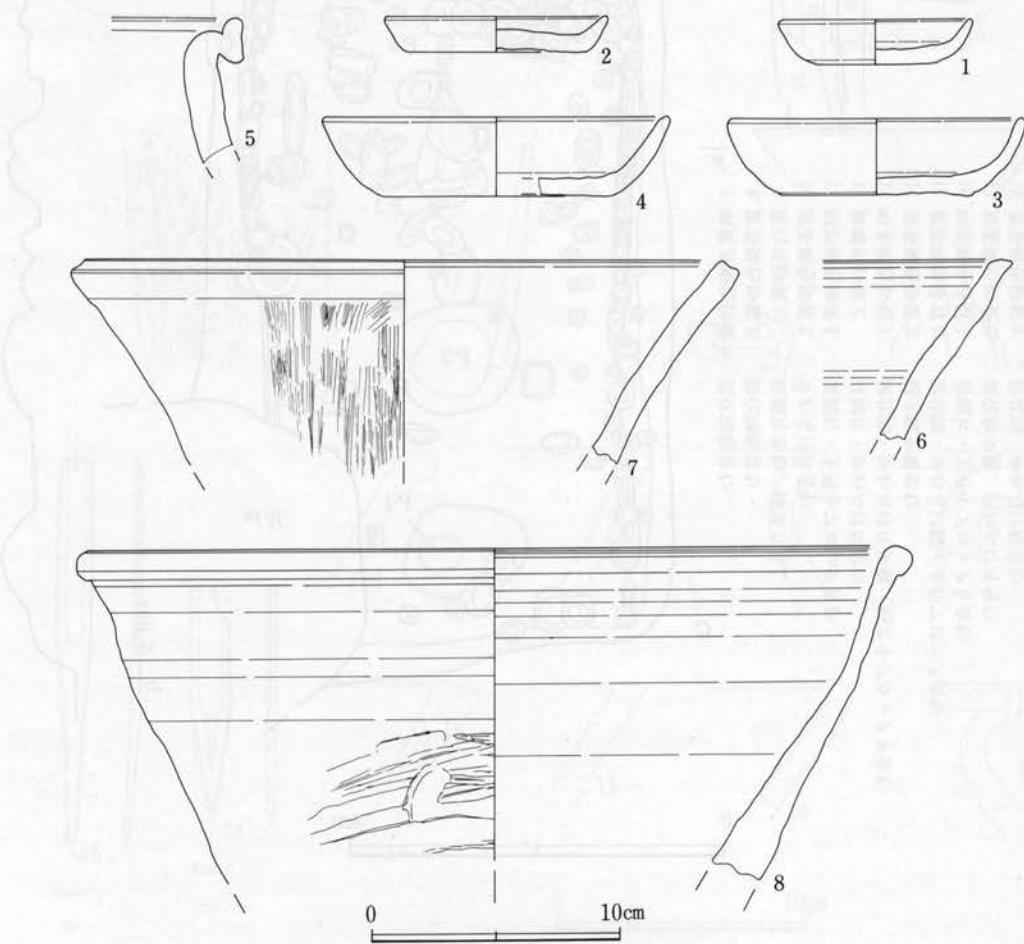


図22 方形竪穴20出土遺物

図22-1～4はロクロ成形のかわらけ。1・2は小型、5・6は大型に属する。1は側壁が内湾しながら立ち上がり、体部下半で弱い稜を持って直線的に外反する。2は底経口径比が小さく器高も低い。側壁はやや厚手の底部から短くつまみあげられるように直線的に外反する。3・4とも側壁が内湾しながら立ち上がる。3は器高がやや高く薄手である。4は復元口径に不安が残る。

胎土はいずれも白色針状物質・雲母・微砂粒を少量含み、橙褐～淡茶褐色を呈する。スノコ状板压痕は確認できない。

5は常滑甕口縁部。端部は小さくN字状に折り返されるが、丸みを帯びて厚ぼったい。胎土は白色粒・砂粒をやや多く含むが堅く、色調は茶褐色を呈する。口縁内側から外面全体に灰緑色の降灰が見られる。

6・7は常滑こね鉢。共に胎土は砂粒・白色粒を多く含んで粗いが堅い。色調は灰褐～茶褐色。6は口径復元不能。口縁端部は強い横ナデによってやや薄くなり、小さく外方に引き出されている。7は復元口径25.6cm。外面の口縁直下は横ナデ、以下はハケ状工具によってなで上げられる。内面に使用された痕跡はあまり見られない。

8は山茶碗窯系こね鉢。復元口径32.0cm。体部下半は器壁が非常に厚く(最大2.0cm)、外面はやや粗くヘラ削り整形される。上方に行くに従って強い回転ナデによって薄くなるが、口縁は玉縁状に丸く造り出されている。胎土は白色粒・砂粒を多く含んで粗く、色調は灰白色を呈する。また器表の一部に部分的に降灰が見られ、淡い緑色を帯びる。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-20	22-3	11.6	7.6	3.1
HT-20	22-1	7.5	4.7	1.8		4	13.7	9.0	3.2
	2	8.8	7.2	1.4					単位(cm)

表4 方形豎穴20かわらけ法量

方形豎穴21(図19)

調査区北東、C・D-4グリッドで検出された。北辺で方形豎穴16及び別の方形豎穴を切り、北東隅を土壌50、南辺を方形豎穴8にそれぞれ切られるものの、南辺の東西両隅の壁が若干回り込みかけているので、大きく原形を損なうものではないと考えられる。

本豎穴は主屋部と、北西に付く張り出し部とからなる。主屋部は東西4.2m、南北4.2m以上、確認面からの深さ0.7mを測り、床面積約17m²。平面はほぼ正方形を呈する。張り出し部は東西0.5m、南北2.8m、深さ0.3mを測り、面積約1m²。主屋部床面との比高差は約0.4mである。

主屋部床面は、中央付近が最も高く、周囲に向かって緩やかに低くなる造り出しのマウンド状を呈し、その比高差約0.2m、中央付近の標高は約4.2mである。マウンドは特に硬化している様子も見られなかったが、土間状であった可能性も考えられる。東壁直下では南北方向に、また中央部では東西方向に、幅15cm、深さ8cm、長さそれぞれ3.8m、3.5m程の溝状遺構が1条ずつ検出された。その他の辺は明らかでないが、地覆材を据えた痕跡であろう。また、中央の溝のほぼ中心には、直径30cm、深さ25cm程の円形ピットが開き、その東西にそれぞれ長さ15～20cm、深さ15cm程の

中間場をもつ。主屋の棟木を中央で支える主柱穴に当たると思われる。これら以外にも、円形・楕円形のピットが数口検出されたが、明確な対応関係は見出せない。壁直下に開いたピットの中の幾つかは、地覆材を水平に安定させるための補助材の痕跡とも考えられる。更に、主屋北壁から約30cm内側で、壁に平行する形で3.7mに亘って半ば炭化した腐食木材の痕跡を検出した。残存状況は非常に悪いが、幅は凡そ3~5cm程あり、壁板だと思われる。地覆材のすぐ外側で地中から立ち上げられ、内側の束柱と裏込めの土圧とによって支えられていたものであろう。

方形竪穴21出土遺物（図23）

図23-1~8はロクロ成形のかわらけ。1~5は小型、6~8は大型に属する。1・2は側壁が内湾しながら立ち上がり、中程で弱い稜をもつ。器高は低い。3・4は側壁が逆ハの字型に直線的に開き、外面にやや弱いロクロ目が細かく残る。4の口唇部の一部にはカーボンが付着している。5は小さめの底部から側壁が緩く内湾しながら開く、6は小さめの底部から側壁が直線的に開き、中程で屈曲してやや内湾しながら立ち上がる。横ナデが強いため、体部外面にロクロ目が明瞭に残り、器壁が薄く、器高は高い。7・8は側壁が緩く内湾しながら立ち上がる。いずれも胎土は微砂粒・白針を含み色調は橙~淡茶褐色、焼成普通。外底面には強弱の差はあるがスノコ状板圧痕が残る。

9は青磁櫛描文皿。口径復元不能。素地は粘性のある灰色土で堅緻。釉は透度の高い灰緑色を呈する。

10・11は青磁蓮弁文碗。10は復元口径13.6cm。素地は若干微砂を混じえる灰白色土。釉は灰緑色。11は復元口径14.4cm。文様の彫りが弱く、施釉によって不明瞭になっている。素地は少量の微砂を含むが精良堅緻な灰白色土。釉は暗灰緑色を呈する。

12は常滑甕口縁部。端部はN字状に折り返され、やや強いナデによって縁帶中程がくぼむ。粘土紐の継目内側には指頭痕が明瞭に残っている。

13・14は常滑こね鉢。13は片口の部分。口径復元不能。14は復元底径18.8cm。側壁外面に強い板ナデの痕跡を有し、外底面は砂目。内面に使用による摩滅は見られない。

15は山茶碗窯系こね鉢小片。口径復元不能。口縁はやや肥厚し、丸みを帯びる。

16は女瓦。凸面は斜格子の叩き目、凹面は縦位のナデを施す。両面ともに粗い砂粒が多く付着している。凸面端縁はヘラ削り。端面はヘラ削り後、ナデ調整される。胎土に小石・砂粒を多く含むが焼成は硬質で、色調は暗灰色を呈する。厚さ1.9~2.1cm。

17は北宋錢の「治平元宝」。楷書。初鑄は1064年。

18・19は砥石。18は泥岩製の仕上げ砥。遺存長6.0×3.6cm、遺存厚1.7cm。両側面に切り出し痕を残す。19は中砥。石質は硬質でやや気泡を含み、灰白色と黄褐色の混じた色調を呈する。総面使用で両側面には格子状の鋭い刻みが残る。

(佐藤)

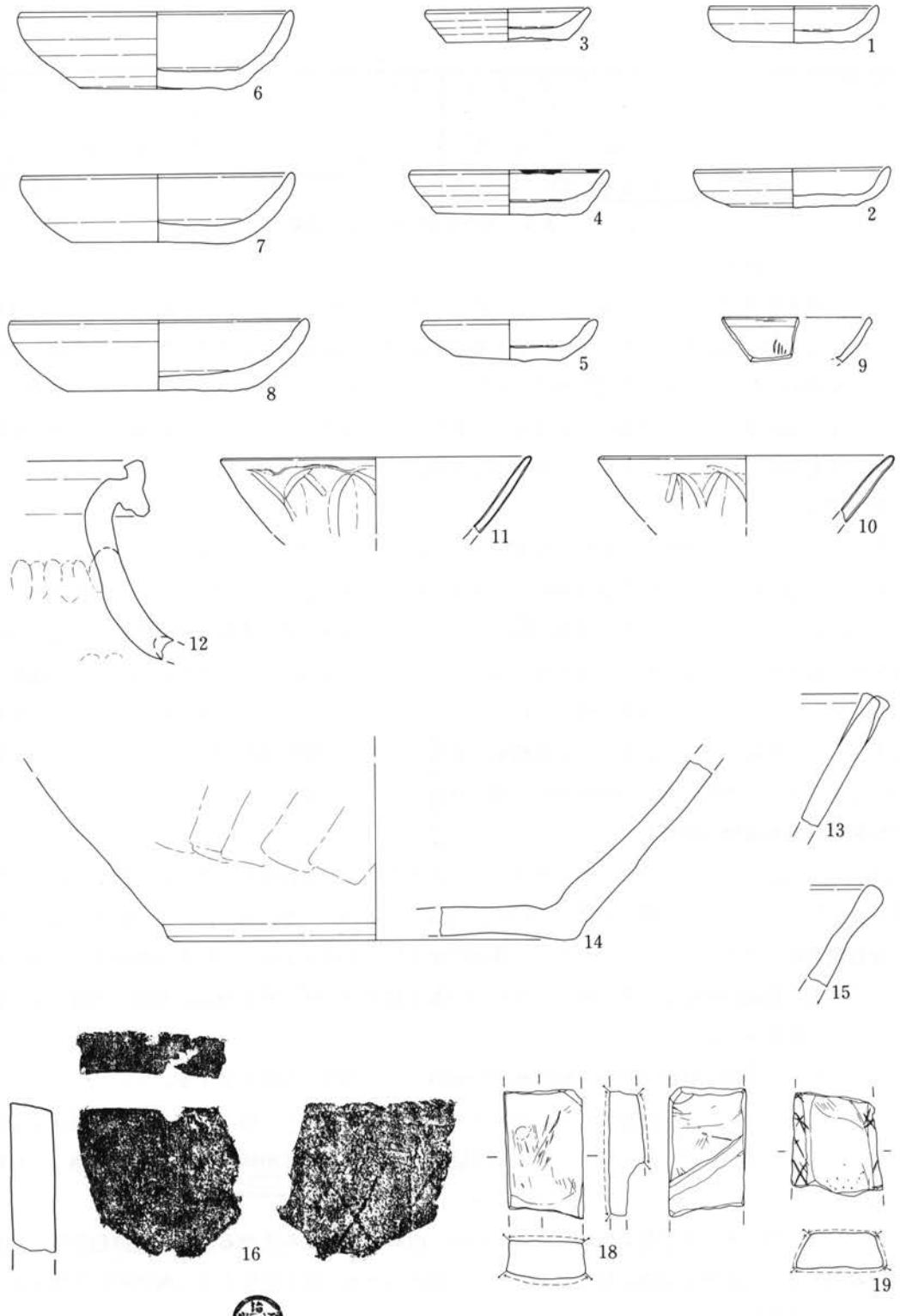


図23 方形竪穴21出土遺物

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-21	23-5	8.0	5.0	1.9
HT-21	23-1	7.8	5.6	1.7		6	12.6	7.0	3.6
	2	9.1	5.9	1.8		7	12.5	7.5	3.2
	3	7.5	5.5	1.5		8	13.7	8.0	33
	4	9.1	6.8	2.1					単位(cm)

表5 方形竪穴21かわらけ法量

方形竪穴33（図24）

調査区南東寄りの中央、B-4グリッドに隣接した位置で検出された。方形竪穴37と井戸と重複する。37より新しく、井戸よりも古い。本方形竪穴北壁側には東西に延びる方形竪穴の重複しない空間地が認められる。この空間地は西方に位置する人骨を埋葬した墓域に繋がっており、通路的な様相を見せてている。東側には激しく重複する方形竪穴群が検出されているが、長軸方位は本方形竪穴と同一方向を示している。しかし、墓域付近で検出された方形竪穴とは密度や軸方位の点で明らかに異なる。

掘り方における本方形竪穴の規模は南北5.75m、東西5.4m、堀り込みの深さは確認面から1.0mを測る。平面形はややくずれた隅丸方形を呈する。床面積は約22.5m²で、標高は約4.24mを測る。

床面はほぼ平坦で、各壁にそって幅約30~50cm、深さ約10cmの溝状遺構が検出された。これは地覆材据え跡であろうと思われる。南東隅には65×55cm、深さ約20cmのやや大きめのピットが検出された。床面中央には3条の溝状遺構、5口の円形、橢円形のピットが検出された。これらはいずれも東西方向に長軸を持つか、あるいは東西軸に平行して並んだ形で検出された。このことからこれらのピットは根太木据え痕が不明瞭な形で残ったとも考えられる。

方形竪穴33出土遺物（図25）

図25-1~23は小型の、24~28は中型の、29~36は大型の、37は特大のロクロ成形のかわらけである。小型のうち1~13は器高が低く、14~23は器高が高い。中型、大型、および特大ではゆるやかな曲線を描いて立ち上がるものが多く、体部に稜を持つものは少ない。胎土は微砂を含む粗土がほとんどで、色調は淡橙色、茶灰色を呈する。内底面にはナテ痕、外底面には明瞭不明瞭の差はあるがスノコ痕がみられる。

38は青磁蓮弁文碗。口径15.0cm。釉は透明な緑褐色で、素地は灰色を呈する。

39は青白磁梅瓶底部片。底径8.4cm。釉はやや不透明な水青色で、釉層は薄く、高台脇までかけられている。高台のケズリは丁寧で、高台脇で稜をつくる。素地は明灰色を呈し、やや粗く、砂粒、気泡を持つ。

40、41は白磁口兀小皿である。40は口径9.5cm。内湾ぎみに立ち上がる。釉は乳白色を呈し、釉層は非常に薄い。素地は白色で精良である。41は口径11.0cm。強く外反する。釉は灰白色を呈する。素地は白色で堅緻。

42、43は瀬戸行平鍋口縁部片である。42は灰釉が施され、灰緑色を呈し、気泡が多くみられる。

胎土は灰白色で、微砂を少量含む。43は鉄釉が施され黄黒褐色を呈する。釉層は厚く、光沢を持つ。胎土は微砂を含むが比較的良土である。

44~51は常滑甕口縁部小片である。44は口縁部はN字状に強く折り返されるが、頸部に接してはいない。縁帶は幅広く、4.8 cmを測る。胎土は白色微砂を多く含み粗い。45~47、50、51は口縁部を「く」の字に外反させ、口縁端部を上下に拡げている。胎土は砂粒を含む。46、50は比較的良土である。48は口縁部を強く水平方向に外反させ、丁寧な横ナデで口端を上方へつまみ上げている。胎土は微砂を含むが精良である。49は折り返しは弱い。微砂を含む粗土である。

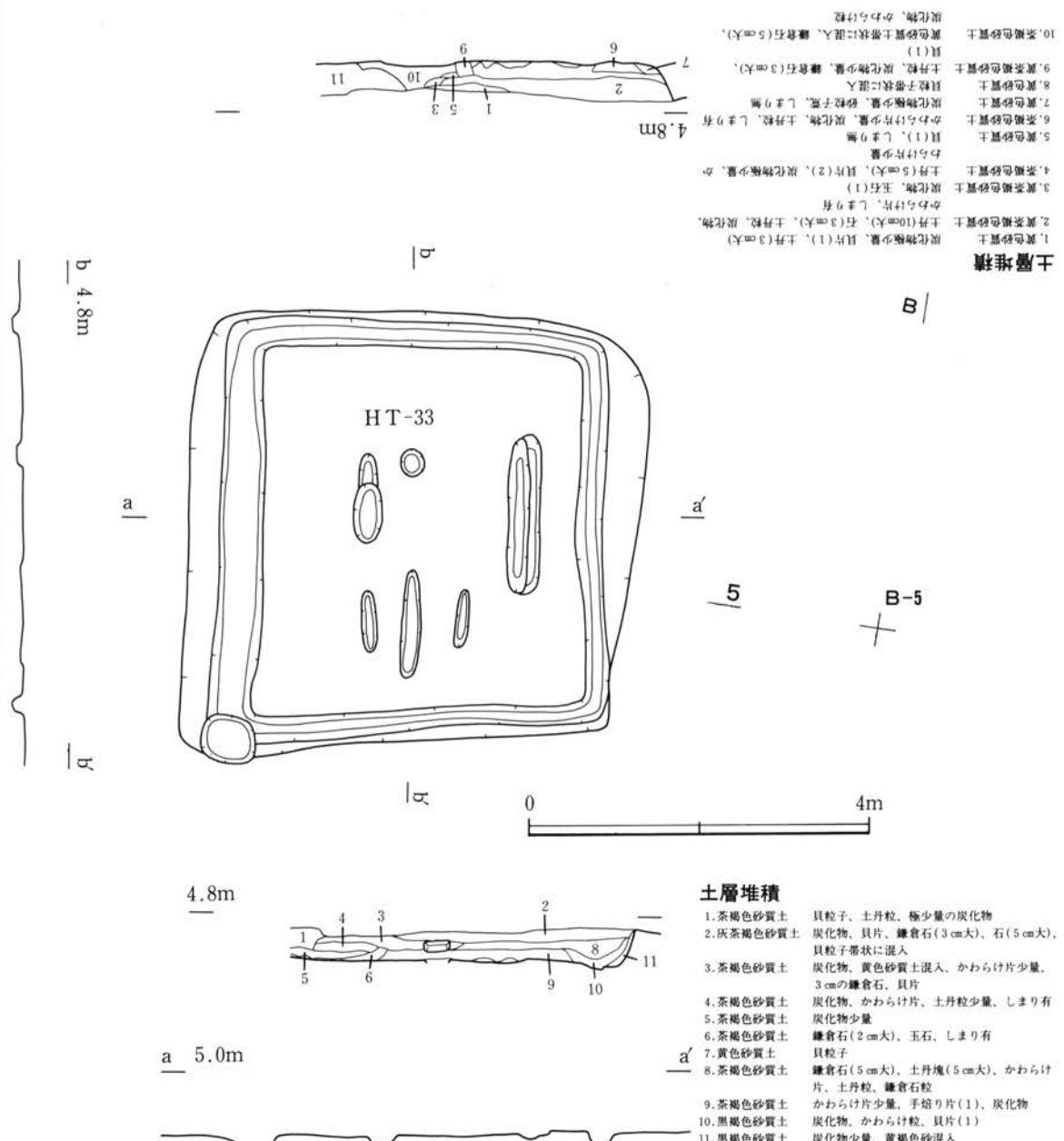


図24 方形竪穴33

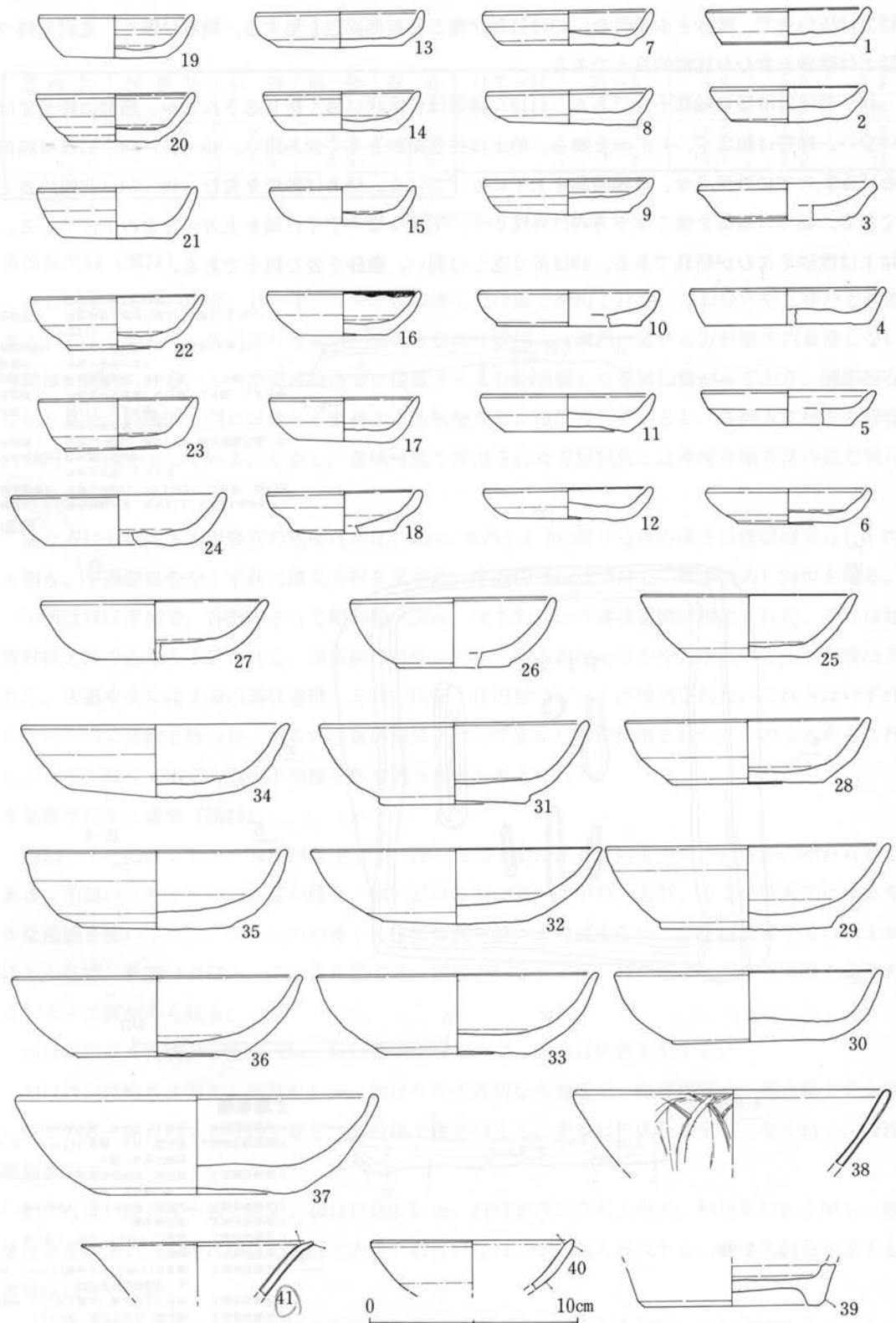


図25 方形竪穴33出土遺物(1)

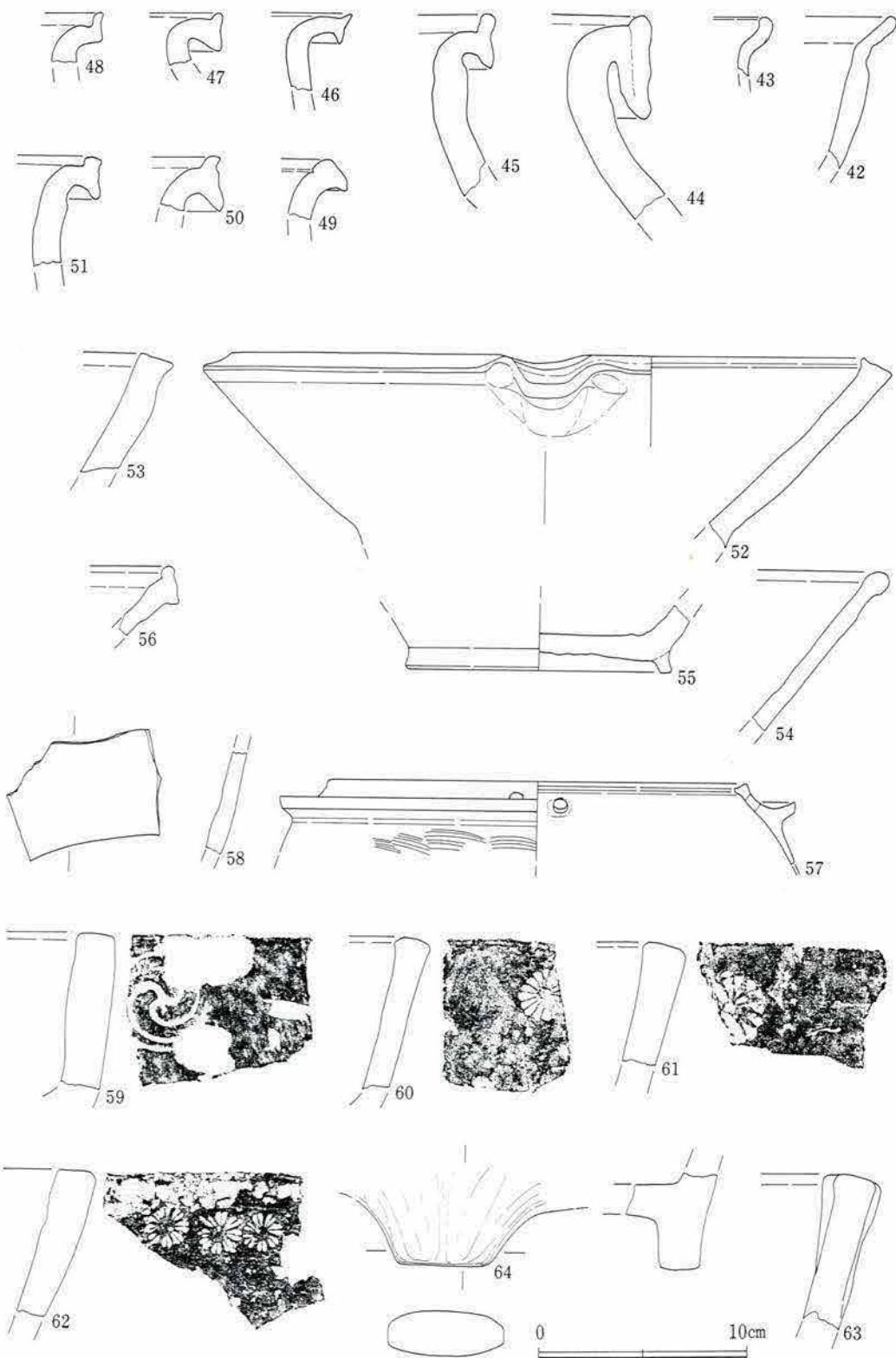


図26 方形竪穴33出土遺物(2)

52、53は常滑窯こね鉢である。52は口径30.2cm。片口を一か所に持つ。胎土は白色微砂を含むやや粗い土。内面は使用頻度の高さから良く摩滅している。53は白微砂を含むやや粗い土。

54、55は山茶碗窯系こね鉢である。54は口縁端部を丸くおさめている。胎土は微砂を含むが、緻密で焼成も良好。55は底径12.6cm、内面は剥落がめだつ。胎土は白色微砂を含み、やや粗い。

56は東播系こね口縁部小片。胎土は灰色を呈し、微砂を多く含む粗土である。

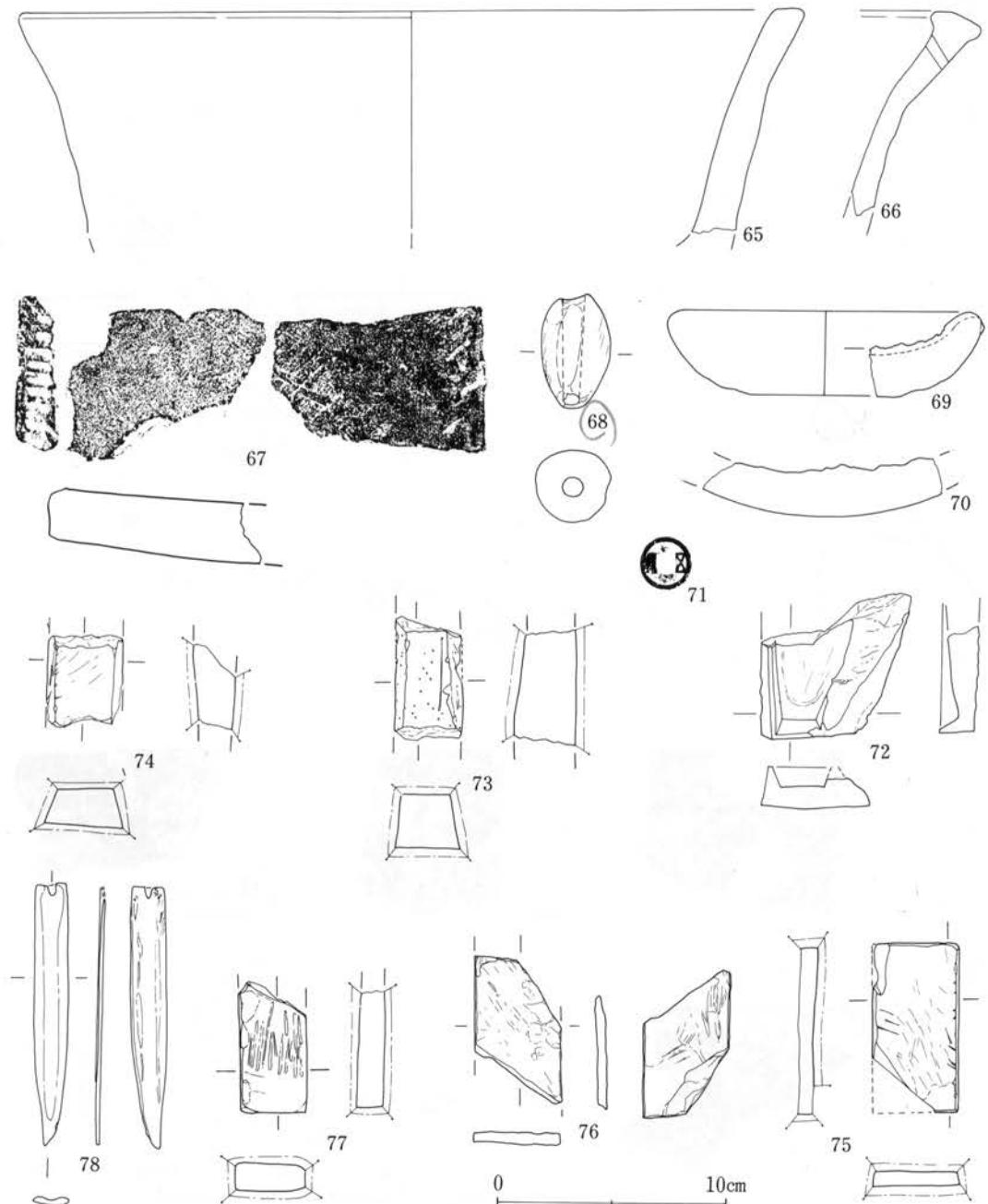


図27 方形竪穴33出土遺物(3)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-33	25-19	7.3	4.9	2.0
HT-33	25-1	7.7	6.4	1.7		20	7.5	4.4	2.3
	2	7.3	5.5	1.7		21	7.5	5.3	2.4
	3	8.3	5.5	1.8		22	8.1	4.4	2.5
	4	9.1	7.9	1.8		23	7.5	4.8	2.5
	5	8.1	6.0	1.7		24	10.0	6.8	2.4
	6	7.7	4.7	1.7		25	10.1	5.7	3.0
	7	7.9	6.1	1.7		26	9.7	5.2	3.3
	8	7.8	6.1	1.6		27	10.7	5.5	2.8
	9	7.9	6.2	1.7		28	11.5	7.2	3.1
	10	8.4	6.9	1.7		29	13.5	8.2	4.0
	11	8.2	5.9	1.8		30	12.5	7.4	3.4
	12	8.0	5.8	1.5		31	12.6	7.0	3.9
	13	7.9	5.9	1.7		32	13.6	7.0	3.6
	14	7.4	5.3	1.8		33	13.3	6.8	3.8
	15	6.9	4.2	1.7		34	12.6	8.4	3.5
	16	7.2	4.2	2.1		35	12.3	7.0	3.8
	17	7.1	4.5	2.1		36	13.5	7.5	3.8
	18	7.3	4.9	2.0		37	17.0	8.5	4.8

表6 方形竪穴33かわらけ法量

単位(cm)

57は鍔釜。口径20.0cm。鍔径24.7cm。器壁が薄く、口縁は内傾し口縁端部は内側へ引き出される。内側に傾斜する1孔を確認。胎土は粗く、黄茶灰色を呈する。

58は褐釉壺体部片。釉は灰緑茶褐色を呈する。胎土は淡灰茶色で精良。

59~63は瓦質手焙り口縁部片である。表面は黒色、灰黒色を呈し、胎土は桃灰色から灰白色で、微砂を含む粗土である。いずれも輪花形を呈すると思われる。59は径4.8cmのやや大型の三つ巴文スタンプを有する。60は16弁の菊花文スタンプでやや小ぶりである。61は菊花文スタンプでやや大ぶりである。62は菊花文スタンプ。16弁の小ぶり菊花文スタンプが連続している。

64は瓦質手焙り脚部片。桃橙灰色を呈し、胎土はやや粗い。外面には縦方向の磨きがみられる。

65は瓦質手焙り。口径は33.8cm。淡赤褐色を呈し、微砂を含む粗土である。

66は土器質手焙り片。淡橙褐色、芯部では灰色を呈し、胎土は粗い。口縁部付近に穴が穿たれている。

67は女瓦片。凸面に斜格子の叩き目、糸きり痕、凹面に粗砂の離れ砂が残る。胎土は砂粒を含むが精良。色調は灰黒色を呈する。

68は土錘。棒の周りに粘土を巻き付けて作ったものである。

69は坩堝。口径12.6cmを測る厚手の土器の内面に鉱物が溶着している。緑青色が認められることから溶融物は銅を含むと思われる。

70は鋳型。土製。緩やかな弧を描く。内面は成形等はみられず、剥落が激しい。一部にスサの痕

跡と思われる圧痕がみられる。外面は平滑で少量の白色物質の付着が認められる。

71は銅銭。「五銖」。

72は硯。赤間石製。底面と側面の一部は研磨せず原形のまま使用している。

73～77は砥石である。73、74は中砥。75～77は仕上げ砥である。

78は笄。頂部に切り込みを持つ。先端部は一度欠けた後、再度研磨されたものである。(早野)

方形竪穴38 (図28)

C-6グリッドで検出された。北辺で方形竪穴39を切り、南東隅を井戸に切られるが、ほぼ原形を保つ。

平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈し、東西7.1 m、南北4.0 m、確認面からの深さ1.0 mを測り、掘り方床面積は22m²程である。床面はほぼ平坦で、標高約4.5 m。床面上に上部構造を推定させるような遺構は見出だせなかつたが、長軸線上東寄りの所で、鎌倉石切石を立てて壁にする構造の石組遺構を検出した。石組遺構は東西65cm、南北75cm、深さ45cmを測り、南・北壁には長さ60×35cm、厚さ10cm程の、東・西壁には長さ45×35cm、厚さ10cm程の切石がそれぞれ一石ずつ立てて用いられている。或は後述する方形竪穴39の石材を再利用したものであろう。さながら囲炉裏を思わせる形状であるが、内部には竪穴本体の覆土と変わらぬ土砂が充填し、焼土や炭化物なども顯著には見られなかつた。また、東・南の切石の外側には若干被熱し黒変した部分があるものの、内側にそうした痕跡はなく、この石組遺構が燃焼施設であったとは考えにくい。何らかの貯蔵施設の可能性もあるが、遺物も殆ど出土しなかつたため不明である。

方形竪穴38出土遺物 (図29～31)

図29-1～9はロクロ成形のかわらけ。1～5は小型、6～9は大型の皿である。1は底径・口径比が小さく、器高は低い。側壁はやや内湾氣味に小さく立ち上がる。2～4は直線的に開きながら立ち上がり、体部中位下で屈曲して稜をもつ。4はやや器壁が薄い。5は小さな底部から内湾氣味に立ち上がる。器壁は薄く、器高は高い。所謂「薄手丸深タイプ」に属するものである。6・7は底径・口径比が大きく、体部中程で屈曲する。器壁が薄く、底部断面は三角形を呈する。8・9は薄い側壁が内湾しながら立ち上がる。胎土はいすれも微砂粒・白針を少量混じえるが5・9がやや精良で橙色、他は茶灰～淡橙色を呈する。

10・11は青磁蓮弁文碗。10は復元口径14.9cm。素地は精良堅緻な灰色土。釉は灰緑色を呈する。11の素地は精良な灰白色土。釉は灰緑色で薄くかけられている。内表面は荒れてザラつく。

12は青磁碗底部。復元高台径3.0 cm。素地は堅緻な暗灰色土。釉はやや濁った青灰色で、高台脇までかけられる。

13は青磁碗底部。復元高台径5.2 cm。内底面に型押しの花文が施される。素地は堅い感じの灰白色土。釉はやや青味がかった灰緑色を呈し、高台脇までかけられている。

14は青磁劃花文皿底部。素地は堅緻な灰色土。釉は暗緑色を呈する。

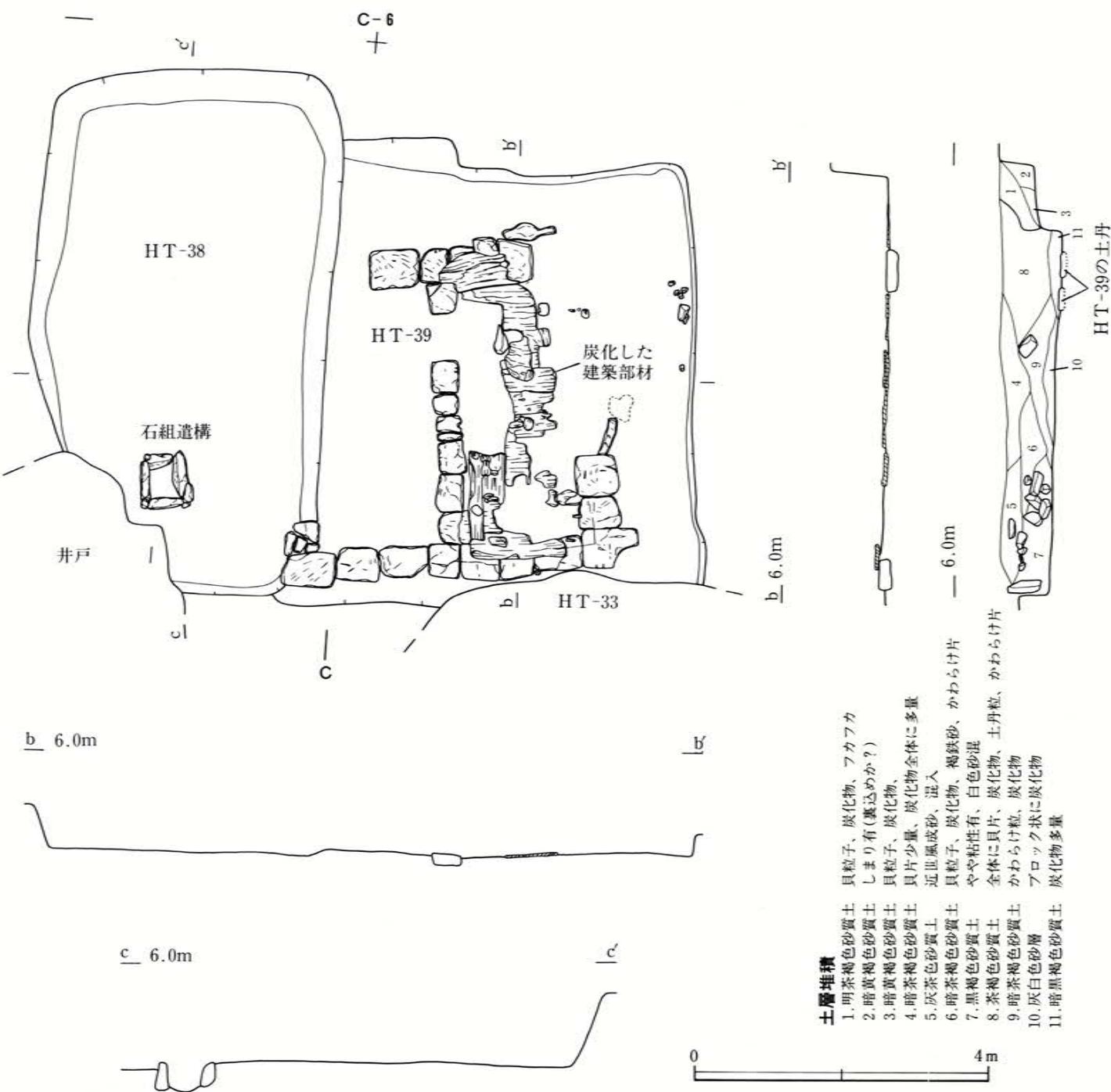


図28 方形竪穴38・39

15は青磁割花文碗。復元口径11.6cm。素地は精良堅緻な灰色土。釉は灰緑色を呈する。

16は青磁折縁鉢口縁部。復元口径22.4cm。素地は堅緻な灰色土。釉は緑褐色で厚くかけられる。

17・18は白磁口兀皿。17は復元口径9.4cm、底径6.3cm、器高1.9cm。18は復元口径11.0cm、底径5.9cm、器高3.0cm。いずれも素地はやや茶色味がかかった白色土で精良、釉は乳白色を呈する。

19は白磁四耳壺頸部。口径6.2cm。素地は明灰色で砂粒・気泡を含み粗い。釉は淡灰緑色を呈し、ごく薄くかけられている。

20は瀬戸折縁皿。素地は比較的精良な灰白色土。釉は灰緑色で、斑に付着している。

21は吉備系土師質土器碗底部。所謂「早島式土器」である。貼り付け高台は断面三角形の雑な造り。内面は丁寧にナデ調整されている。胎土は微砂粒・黒雲母を含み、淡い橙白色を呈する。

22は南部系山茶碗底部。復元底径5.8cm。底部糸切りの後、低い高台を貼り付ける。端部には多数の粗穀圧痕が残っている。胎土は微砂粒・白色粒を多く含み粗い。色調は灰白色を呈する。

23は常滑鉢。復元口径15.0cm、底径10.8cm、器高7.9cm。口縁端部は小さく起こされ丸みを帯びている。胎土は砂粒・白色粒を非常に多く含んで硬く、灰白色を呈する。

24~29は常滑甕口縁部。24~26は口縁端部をN字状に折り返す。26は復元口径は22.0cm。27は端部を上下につまんで拡げる。28・29は口縁を水平に外反させて端部をつまみ上げている。

図30~30は常滑こね鉢。口縁端部は横ナデによって弱い突帯が造り出されている。

31・32は常滑甕底部。31は底径14.8cm。外底面は砂目で側壁外面は板ナデ、内面はナデ調整され、内底面には大きめの砂粒が自然降灰で多数融着している。32は或は壺になるか。復元底径12.0cm。側壁は内外ともナデ調整され、内面には全体に降灰が見られる。

33~36は山茶碗窯系こね鉢。33は復元口径29.0cm。内面は摩滅。34は復元底径11.4cm。断面三角形で鈍重な感じの高台が付けられる。外面はケズリ調整、内面はよく摩滅している。35は復元口径23.0cm。全体に横ナデの後、外面下部をヘラケズリ調整。内面は中位以下が摩滅している。36はハの字状に直線的に開く高台がつけられる。内面は殆ど摩滅しておらず、ナデの痕跡が残っている。

37は備前播り鉢。復元口径29.8cm。内面の条線は不明瞭だが9本である。

38・39は瓦質手焙り。38は復元口径32.8cm。菊花文のスタンプが捺され、外面は縦位、内面は横位のミガキが施される。胎土は微砂粒・赤色粒を含んでやや粗く、色調は黒色を呈する。39は復元口径44.9cm、底径40.6cm、器高11.0cm。表面は粗く研磨されるが、内底面は磨かれていない。胎土は微砂粒・白色粒を含むが精良で、黒灰色を呈する。

図31~40は土錘。長さ5.2cm、最大径2.5cm。胎土は雲母を若干混じえるが精良。

41は鹿角製円盤。直径2.7~2.9cm、厚さ0.3~0.7cm。表裏とも丁寧に磨かれている。

42・43は瓦。42は唐草文宇瓦。女瓦凸面の広端部に「X」状のモヤを切り、別の粘土を貼って瓦当部を作っている。瓦当面の珠文は大粒でそれぞれの間隔は約1cm。凹面には細かな布目痕。胎土は砂粒を多く含むが密。やや軟質な焼きで、色調は灰白色を呈する。43は女瓦。凸面には斜格子の叩き目。叩き板原体の幅は約5.5cm。表面にやや粗い砂が付着し、叩きによって打ち込まれている。

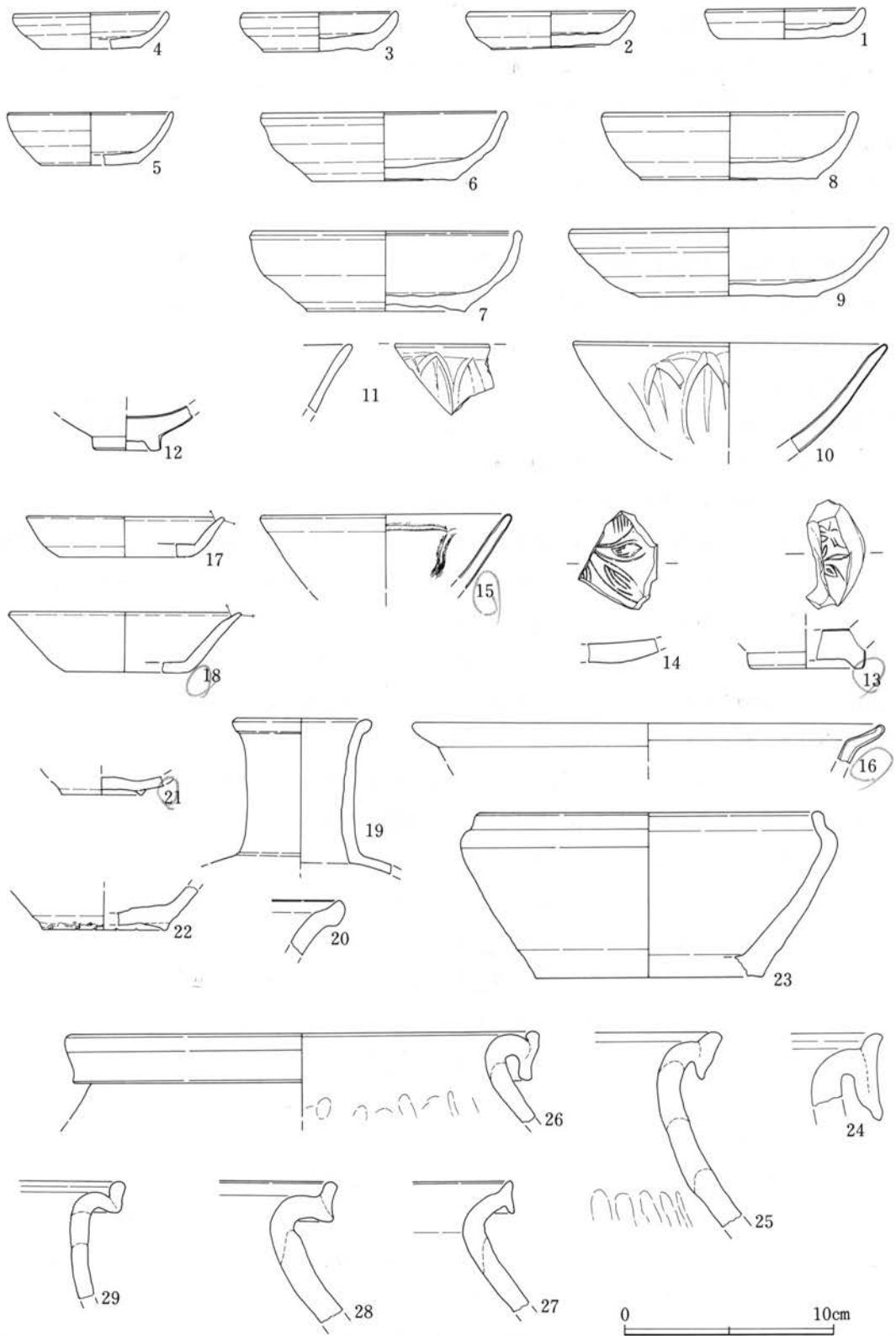


図29 方形竪穴38出土遺物(1)

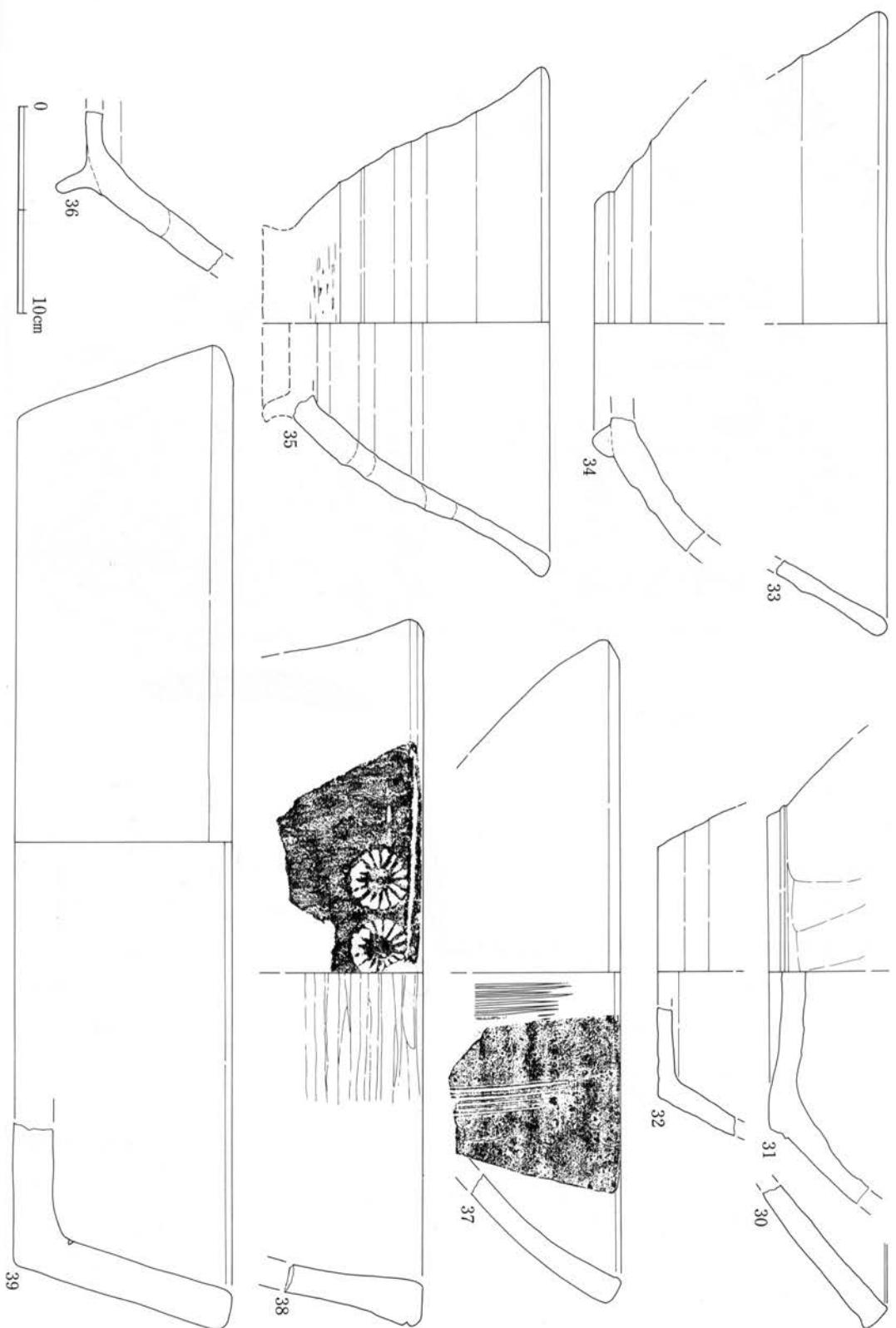


図30 方形竪穴38出土遺物(2)

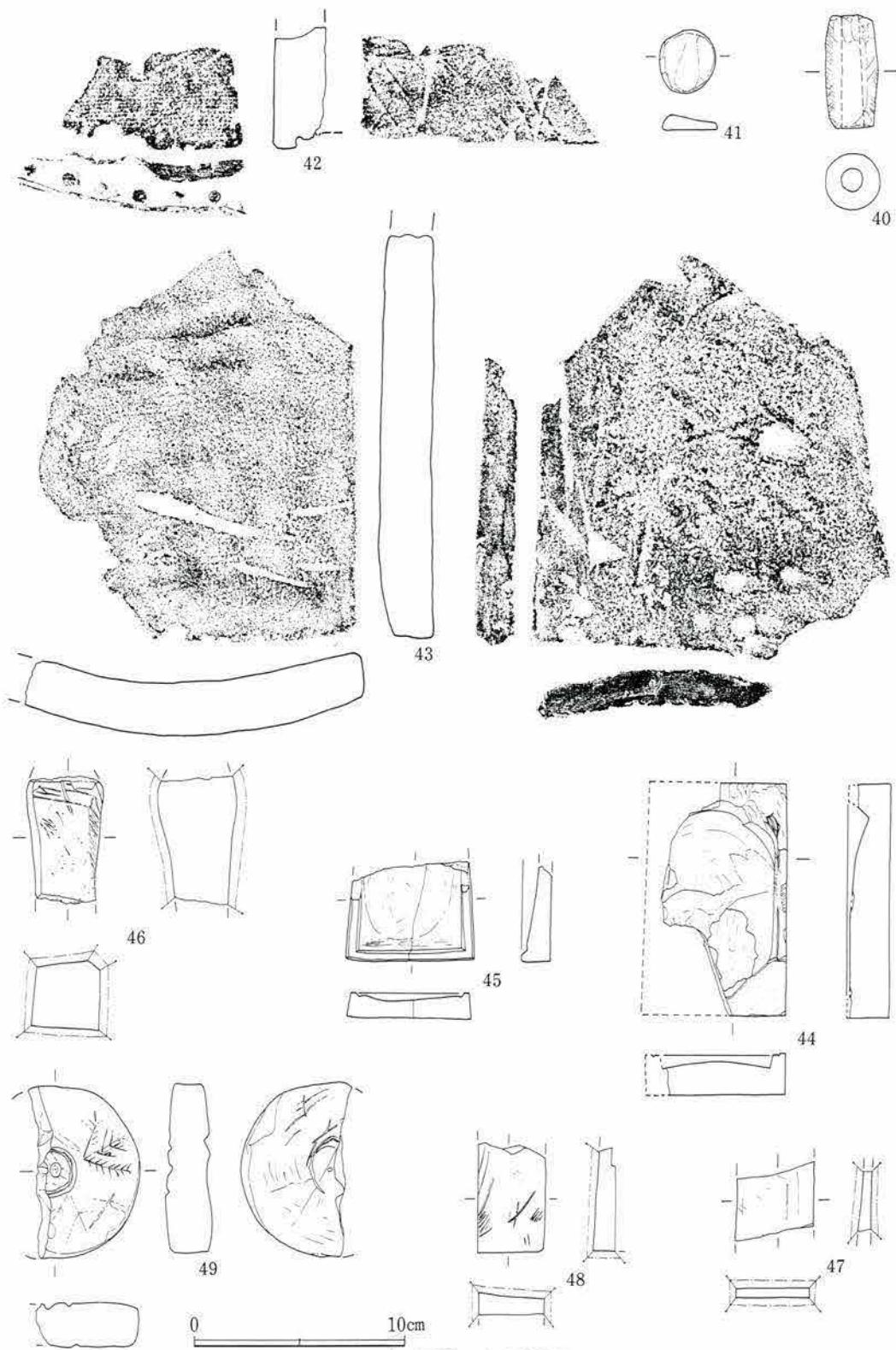


図31 方形竪穴38出土遺物(3)

凹面は横位のナデ。胎土は灰黒色の良土で、焼成はやや甘い、厚さ1.8～2.5 cmとやや厚手である。

44・45は硯。44は長さ11.0 cm、厚さ2.0 cm。内側が四葉状になるもの。45は幅6.1 cm、厚さ1.2 cm。

46～48は砥石。46は中砥。硬質で気泡が多く、赤茶褐色を呈す。47・48は泥岩製の仕上げ砥。

49は土丹製円盤。直径8.0 cm、厚さ1.5～2.1 cm。全体に良く研磨され滑らか。両面中央に径2 cmほどの円が刻まれ、片面には木葉痕のような文様が線刻されている。用途は不明。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-38	29-5	7.8	4.6	2.5
HT-38	29-1	7.4	5.8	1.4		6	11.5	6.8	3.3
	2	7.7	5.6	1.7		7	12.6	7.5	3.8
	3	7.3	5.2	1.9		8	12.0	8.4	3.2
	4	7.2	4.8	1.7		9	15.0	8.5	3.2

表7 方形竪穴38かわらけ法量

単位(cm)

方形竪穴39(図28)

B-6グリッドで検出された。北東隅を方形竪穴33に、南辺を方形竪穴38に切られる。東西6.0 m、南北5.0 m以上、確認面からの深さ0.9 mを測り、残存する限りでは平面ほぼ正方形。掘り方床面積は凡そ26m²である。

床面は平坦で標高4.6 m。鎌倉石切石が「H」に近似した形で縦列して敷かれていた。南辺は方形竪穴38によって壊されているが、本来は「日」の字状に敷設されていたものと思われ、本竪穴が二つ以上の部屋に仕切られていた事を想像させる。切石の大きさは幅45～50cm、厚さ10cm程だが、長さは々々で規格性に乏しい。北半部ではその上面に炭化した建築部材を検出した。切石上には土台角材と思しき部材が置かれ、それより内側に々々板材が遺っている。板材は一部で角材と重複しそれを覆う形になっている。火災によって倒覆したものだろうから、これが壁・床のいずれを構成していたのかは判然としない。また、北東隅の切石上面には土台角材を据える為の規準と考えられる直角の線が刻まれていた(写真図版11-2)。この線に角材の内法を合わせて、即ち切石のほぼ中軸線上に角材を据えた様子が看取できる。ここから使用当時の床面を推測するならば、東西・南北とも4.0 m、面積16.0m²。中央の切石列で間仕切りされていたとすれば、北側の部屋は4.0×1.9 mで7.6 m²、南側の部屋は4.0×2.1 mで8.4 m²となろう。

方形竪穴39出土遺物(図32～34)

図32-1～27はロクロ成形のかわらけ。1～19は小型、20～27は大型。1は所謂内折れ皿である。2・3は強いナデによって口唇内側が突出する。4～6は器高が低く、やや内湾気味に開く。7～11は底径・口径比が大きくて器高は高く、側壁が内湾するタイプ。うち11は薄手。また9は埴堀として使用されたもの。12・13は器高の差はあるがいずれも厚手で、高台状の底部から逆ハの字形に

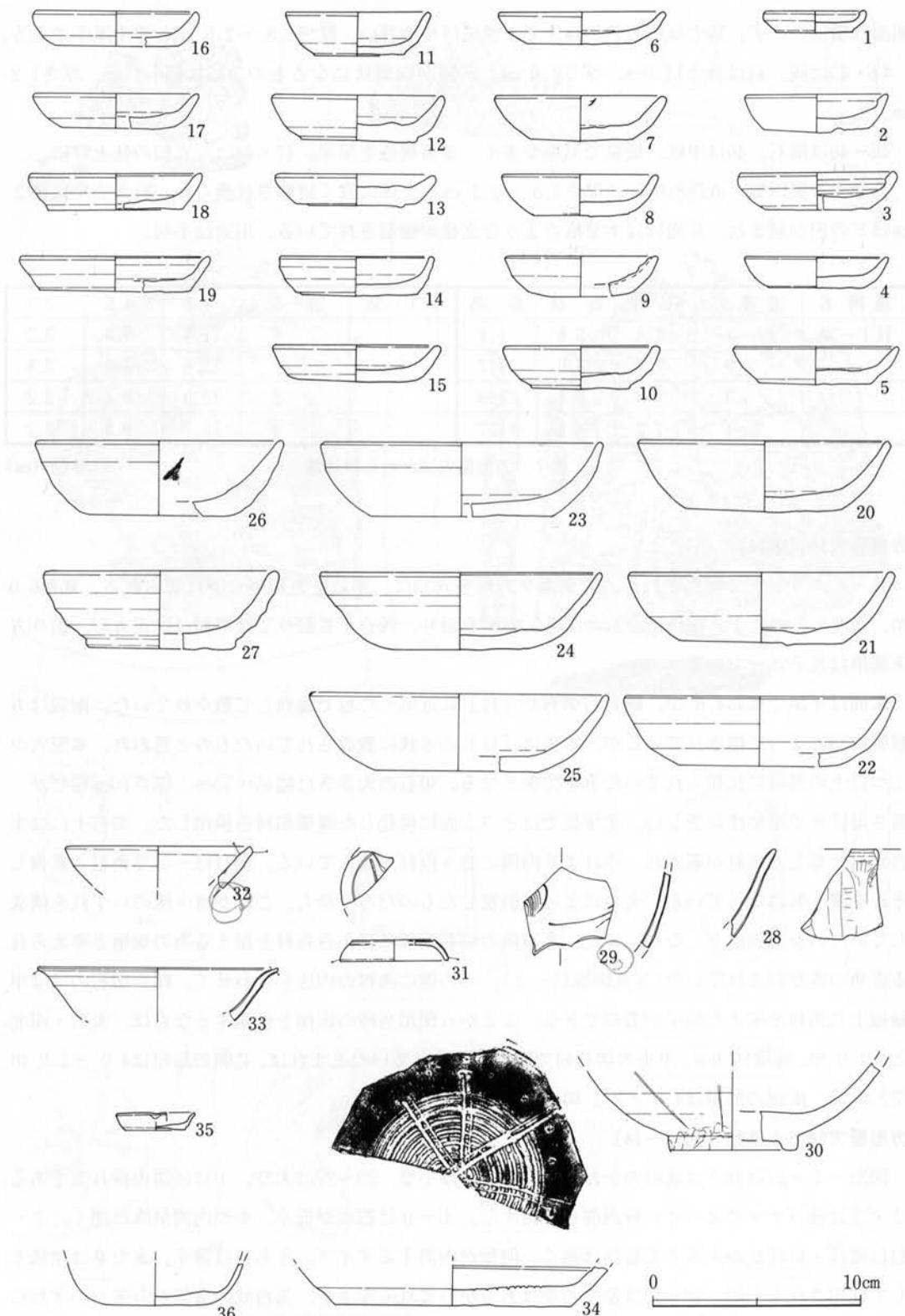


図32 方形竪穴39出土遺物(1)

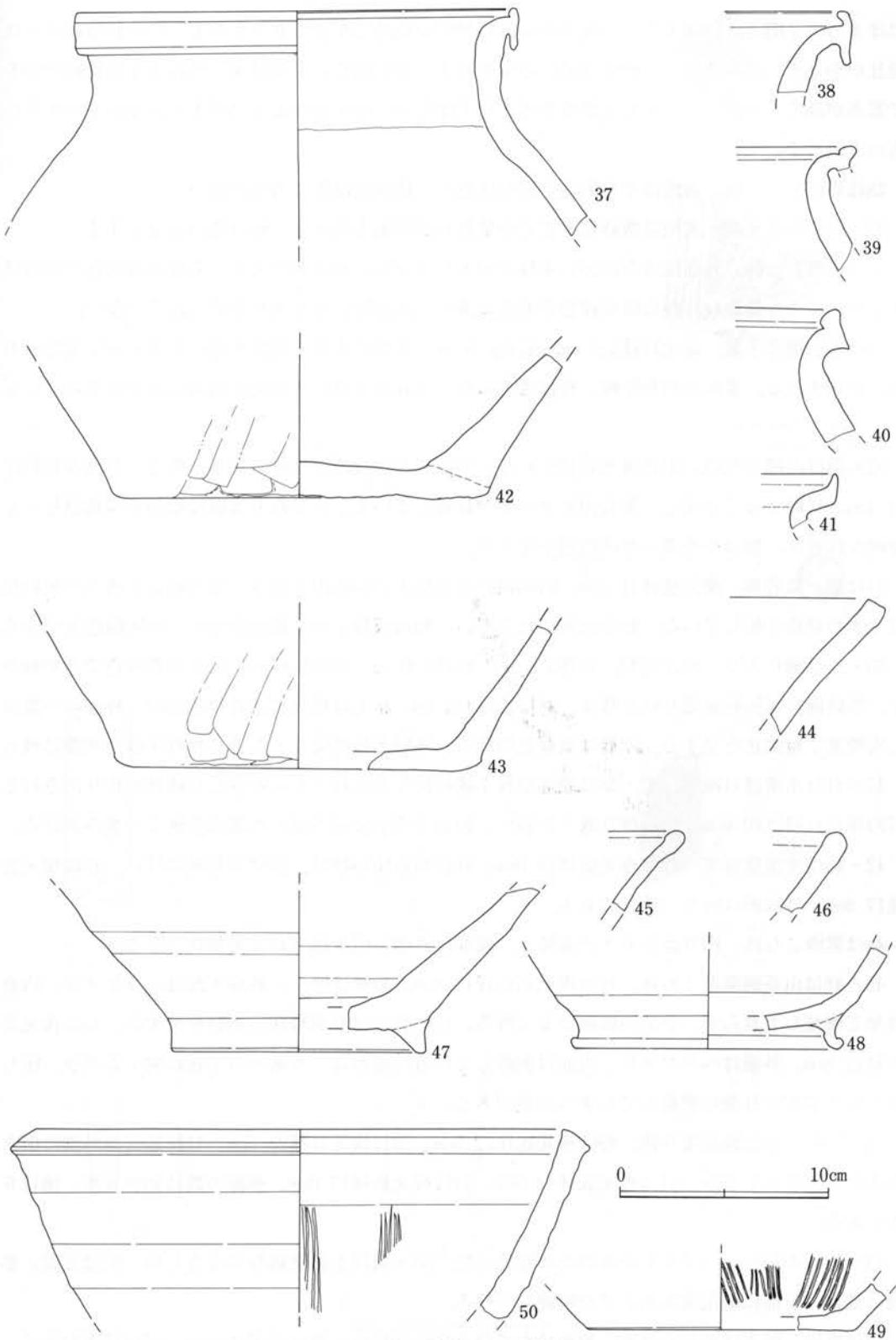


図33 方形竪穴39出土遺物(2)

ほぼまっすぐ開く。14は大きめの底部から薄い側壁が内湾しながら立ち上がる。15~19は底径・口径比が小さく、器高は低い。側壁は逆ハの字形にまっすぐ開く。大型は20~25のように比較的薄手で器高が高く、内湾気味に立ち上がるタイプが主体だが、26・27のように厚手で口径がやや小さいものも混じる。

28は青磁蓮弁文碗。素地はやや気泡を含む灰色土。釉は灰緑色で透度が低い。

29は白磁劃花文碗。素地は微砂粒をごく少量含むが堅緻な白色土。釉は灰白色を呈する。

30は高麗青磁碗。外面縦方向に弱い条線が刻まれている。或は蓮弁文か。素地は暗灰色で微砂粒・気泡をごく少量含む。釉は暗灰緑色で非常に薄く、高台脇にはあまりかけられていない。

31は青白磁合子蓋。復元口径5.2 cm、器高1.0 cm。上面に突帶で円弧を巡らしその中に文様(不祥)が刻まれる。素地は白色堅緻。釉は透度の高い水青色で合わせ口部と内面にはかけられていない。

32・33は白磁口兀皿。32は復元口径8.8 cm。小振りながら器壁は厚く鈍重な感じ。33は復元口径11.4cm。口縁は強く外反し、部分的にタールが付着している。いずれも素地は微砂を少量混じえる堅緻な白色土。釉はやや濁った灰白色を呈する。

34は瀬戸皿底部。復元底径11.3cm。内側面に9個以上の同心円を刻み、その中心を通って放射状に4本の刻線を配している。胎土は灰白色で堅い。釉は灰釉でやや褐色がかかった灰緑色を呈する。

35・36は瀬戸入子。35は完形。口径3.6 cm、底径2.8 cm、器高1.8 cm。胎土は茶灰色できめ細かく、外底面には回転糸切り痕を残す。36は底形4.4 cm。胎土は精良で淡黄褐色だが、外面の一部は二次焼成で橙褐色を呈する。内面に灰緑色の降灰、外底部に糸切り・スノコ状板压痕が明瞭に残る。

37~41は常滑甕口縁部。37・38は端部がN字状に折り返され、しっかりした縁帶が作り出される。37の復元口径は20.8cm。40は折り返しが弱い。41はくの字に引き出した端部を鋭くつまみあげる。

42・43は常滑甕底部。42は復元底径18.0cm。外底面は粗い砂目、器壁は非常に厚い。43は復元底径17.6cm。外底面は細かい砂目である。

44は常滑こね鉢。内外面ともナデ調整で、端部は外側に引き出されて突帶状となる。

45~48は山茶碗窯系こね鉢。47は復元高台径11.9cm。器壁は厚く、外面下部はヘラケズリ。内面は殆ど摩滅しておらず、ナデの痕跡がよく残る。付け高台は断面形状三角形を呈する。48は復元高台径12.5cm。外面はヘラケズリ、内面は剥離している。高台は、本来ハの字状に開くものが、圧し潰されて端部が外側に突出してしまった感がある。

49~図34-52は備前擂り鉢。49は復元底径12.6cm。50は復元口径27.5cm。口縁端部が外側に引き出されて突帶状となる。51は復元底径12.5cm。52は復元底径15.0cm。条線の数は50が5本、他は6本である。

53~55は手焙り。いずれも小片のため復元不能。53・54は土器質鉢形になるもの。55は瓦質。器表は荒れ、一部に菊花文スタンプが痕跡的に残る。

57は坩堝。胎土はかわらけ質。被熱のため白色化して脆い。残滓は黒色だが一部に緑青が吹く。

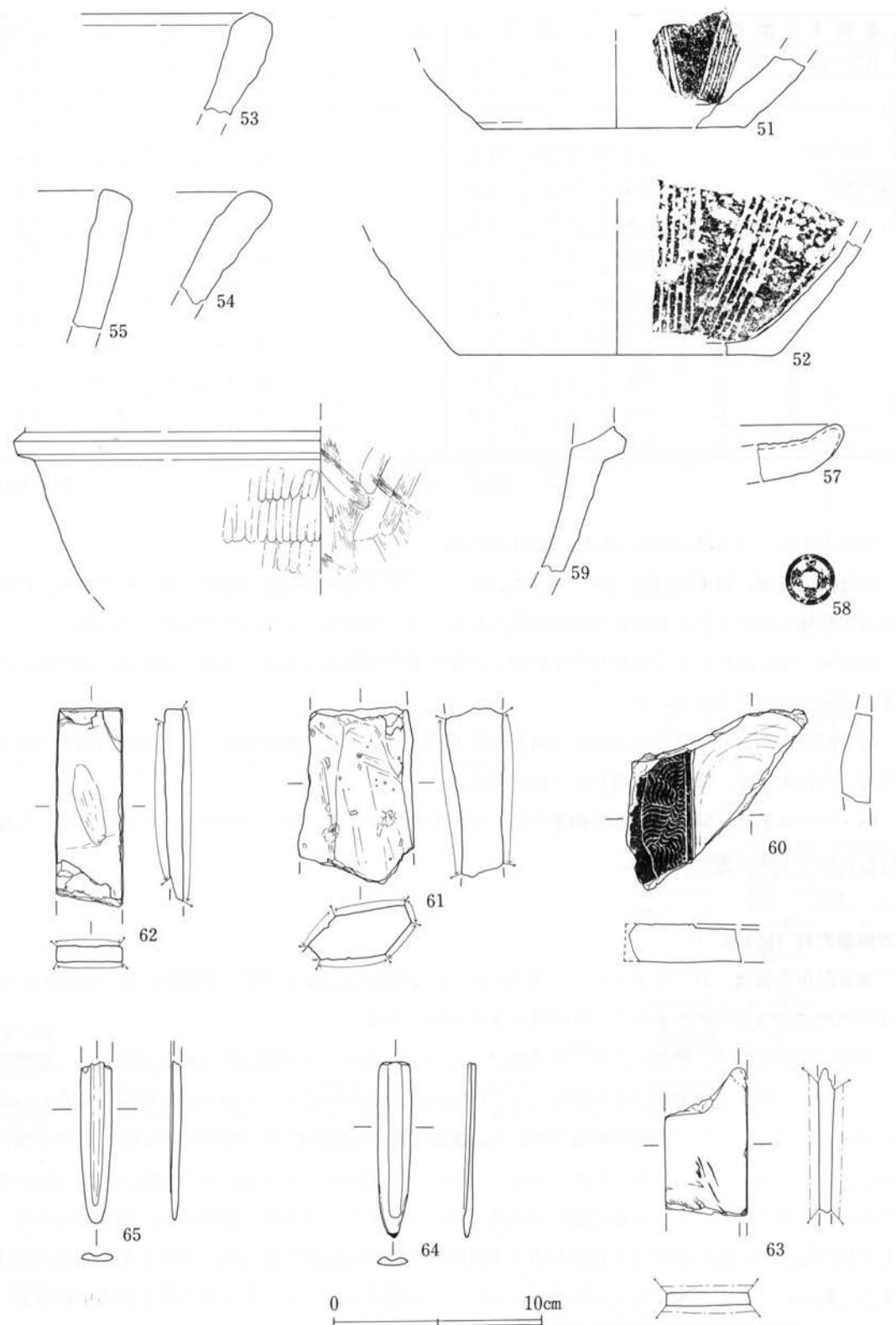


図34 方形竪穴39出土遺物(3)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-39	32-14	7.2	5.5	1.9
HT-39	32-1	4.7	3.6	1.0		15	7.8	5.5	1.8
	2	6.6	5.0	1.8		16	7.7	5.8	1.6
	3	7.3	4.9	1.8		17	7.5	5.2	1.6
	4	6.7	4.5	1.5		18	8.1	6.9	1.8
	5	7.7	5.3	1.8		19	9.0	7.2	6.6
	6	7.8	4.9	1.5		20	11.9	7.3	3.4
	7	8.0	4.9	2.1		21	12.5	7.8	3.3
	8	7.3	4.5	2.0		22	12.8	7.5	3.3
	9	7.2	4.6	1.9		23	13.2	8.6	3.6
	10	7.2	4.6	2.1		24	13.3	6.6	3.7
	11	6.8	4.3	2.1		25	14.1	7.8	3.7
	12	8.0	5.4	2.1		26	11.7	6.7	3.6
	13	7.4	4.5	1.5		27	10.9	6.8	3.7

表8 方形竪穴39出土かわらけ法量

単位(cm)

58は北宋銭の「至和元宝」。篆書。初鑄は1054年。

59は滑石製鍋。鍔部径は28.2cm。外面には丸ノミによる縦位の削痕と細かな横位の擦痕が、内面にはやや幅広のノミによる斜位の削痕が見られる。また外面には全体に煤が付着している。

60は硯。小片のため全容は知り得ないが、かなり大型の製品である。表面は沈線で区割され、内側に波頭文が線刻されている。

61~63は砥石。61は気泡を含む淡茶褐色の石を材とする中砥。総面使用。62・63は泥岩製の仕上げ砥。両面使用で、側面には切り出し痕が残る。

64・65は骨製笄。64は欠損した両端を磨いて再調整している。65も頂部は欠いたままだが、先端は折れ口を丁寧に磨いている。

方形竪穴41(図35)

調査区中央付近、D-6グリッドで検出された。平面形はほぼ正方形。東西5.1m、南北5.0m、確認面からの深さ0.9mを測り、床面積は凡そ22m²である。

床面はほぼ平坦で、標高4.3m。中央部で、長さ30×40cm、厚さ10cm程の鎌倉石切石を1個検出した。中心で棟木を支える主柱の礎石として据えられたものだろう。石の上面に柱当たりなどの痕跡は確認できなかった。床面北東隅では2条の溝状遺構が検出された。東壁直下に長さ210cm、幅12cm、深さ10cm程のものが一本、これと平行して110cm西側の所で長さ190cm、幅20cm、深さ12cm程のものが一本である。これは捨て根太の痕跡であろう。また、北西隅で直径50cm、深さ24cmのピットを検出したが、他の隅ではこれに対応する遺構を明らかにし得なかった。上屋を支えるものとは見なし難い。これらの他にも大小30個余りのピットが検出されたが、その多くは東西の中軸線上にほぼ並んでいる。或は中央に置かれた地覆材の補助材痕であろうか。

方形竪穴41出土遺物 (図36~38)

図36-1~41はロクロ成形のかわらけ。1~24は小型、25~41は大型に属する。

1～4は底径・口径比が小さく、器高は低い。側壁が逆ハの字形に開いてやや外反する。5～9は器高が低く、側壁はやや内湾する。10～15は体部中程に稜をもち斜め上に開く。16～18は底径・口径比が大きくて器高が高く、緩やかに内湾しながら立ち上がる。19～24は器高が高く、側壁が逆ハの字形にまっすぐ開くタイプである。大型は比較的均質で、25～39はいずれも内湾する側壁をも

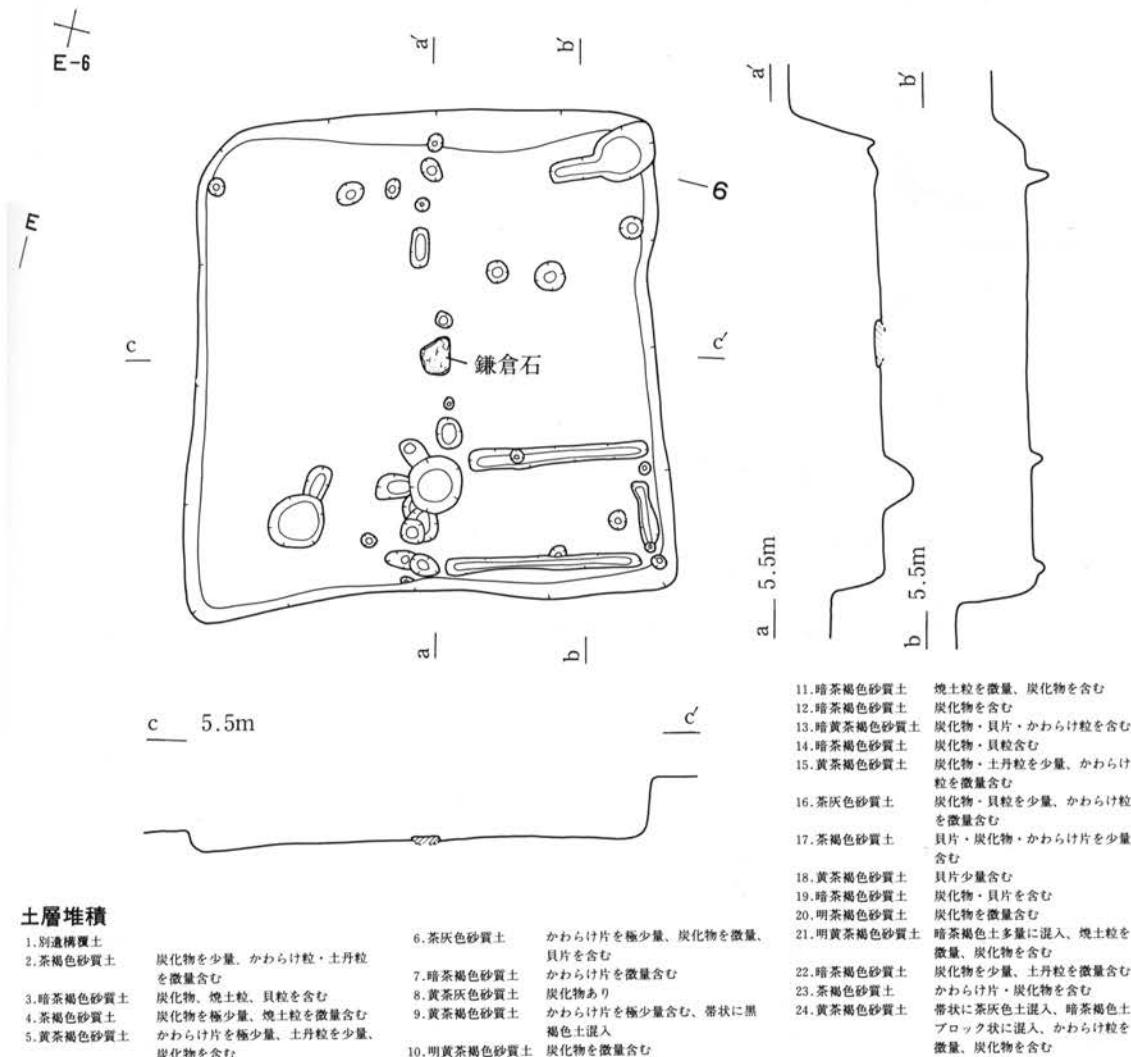


図35 方形豎穴41

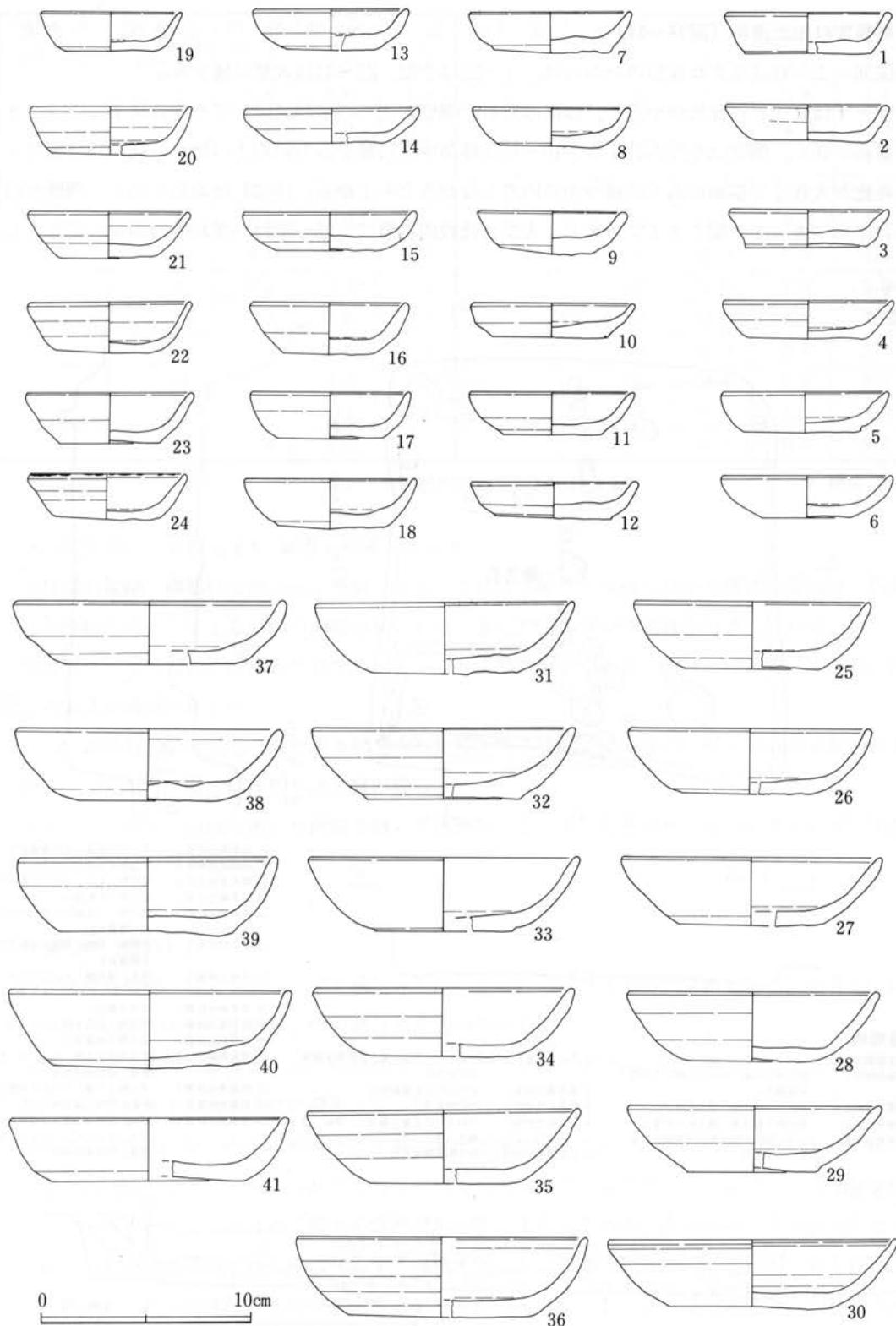


図36 方形竪穴41出土遺物(1)

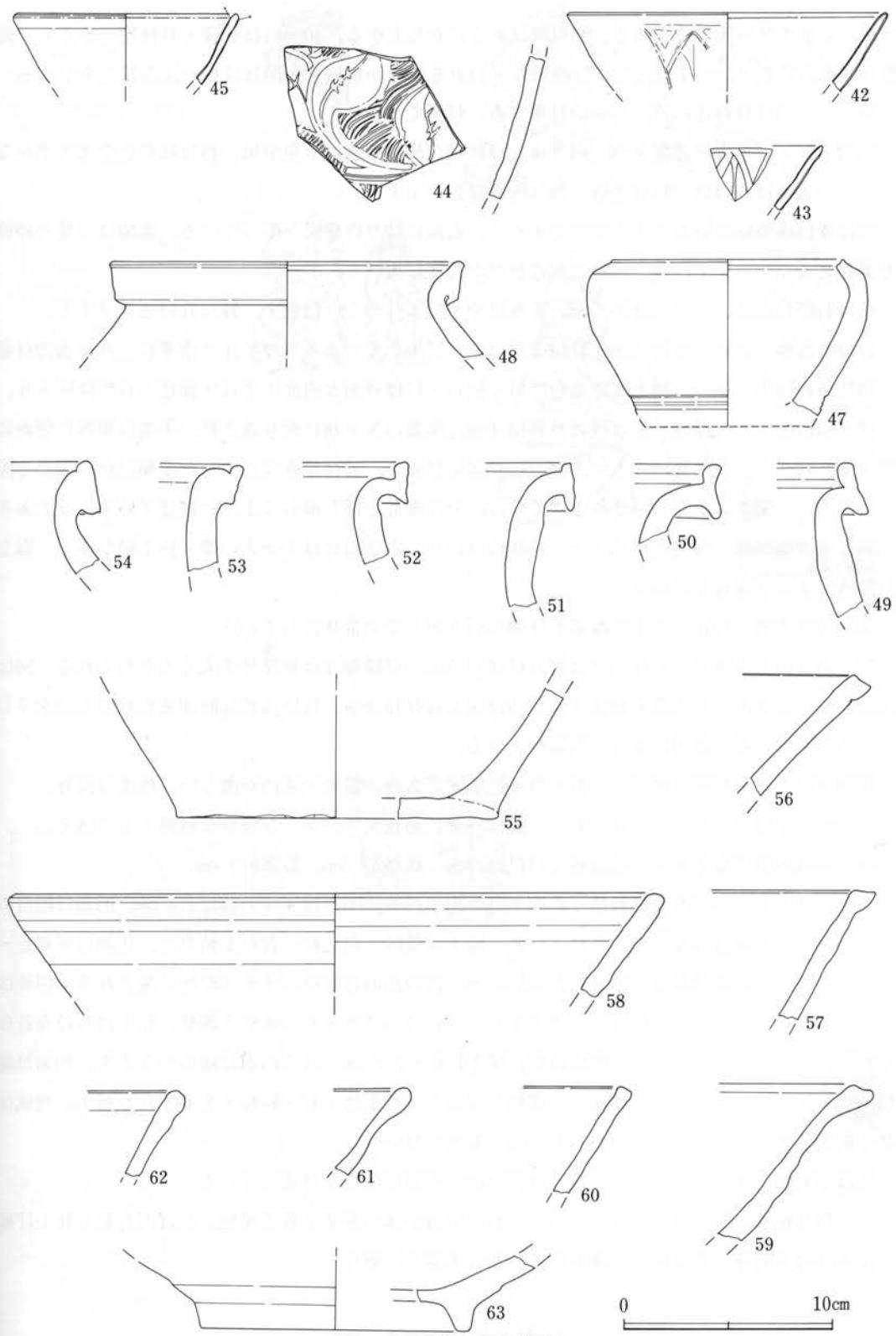


図37 方形竪穴41出土遺物(2)

つが、35までは外側にやや開き、36以降は上方に立ち上がる。40・41は底径・口径比が小さく、側壁が直線的に開く。いずれも胎土は微砂粒・白針を含むが粉質、色調は淡橙～淡茶褐色を呈する。尚、12・24は口唇部にカーボンが付着する。灯明であろう。

図37-42・43は青磁蓮弁文碗。42は復元口径15.2cm。素地は灰色堅緻、釉は緑褐色で透明感がない。43の素地は灰白色で精良堅緻。釉は暗灰緑色を呈する。

44は青白磁梅瓶。胴部下半の破片であろう。表面に牡丹唐草文を彫っている。素地は少量の砂粒を混じえるやや粗な灰白色土。釉は水青色だが透度に欠ける。

45は白磁口兀皿。復元口径10.5cm。素地はややしまりのない白色土。釉は乳白色を呈する。

47は常滑鉢。復元口径11.0cm。口縁端部は非常に小さくつまみ上げて作り出され、外面底部付近には2条の沈線が巡る。胎土は茶褐色で粗く堅い。口縁外面と内面下半に灰緑色の自然降灰あり。

48～54は常滑甕口縁部。48は復元口径16.6cm。端部はN字状に折り返され、下端は頸部に僅かに接する。49～52もN字状になるが、52の折り返しは弱い。53は垂直に立ち上がる頸部から端部を短く折り曲げ、僅かに上方につまみ上げている。54は端部を押し潰して上下に拡げているようである。

55は常滑甕底部。復元底径15.6cm。外底面は砂目、内底面には1cm大の礫・粘土粒が多く、激しい降灰によって融着している。

56・57は常滑こね鉢。ともに端部を外側へ引き出して突帶状にしている。

58～63は山茶碗窯系こね鉢。58は復元口径30.1cm。口縁端部は肥厚せず丸くおさめられる。59は端部を強く引き出して突帶を形成する。63は復元底径13.0cm。付け高台は断面逆台形のしっかりしたもので、内底面は使用によって剝離している。

図38-64は伊勢型鍋口縁部。小石・微砂粒を多く含み、器表の凹凸が激しい。焼成は良好。

65～68は手焙り。すべて瓦質である。65は外面に菊花文スタンプが僅かな痕跡として残る。

66～68は鉢形になるもの。68は復元口径34.3cm、底径23.3cm、器高8.2cm。

69～71は女瓦。69の凸面は斜格子の叩き目が施される。叩き板原体の幅は4.8cm。凹面は縦位の丁寧なナデ。側面はヘラケズリされている。胎土は微砂・白色粒を含むが精良で、色調は灰褐色～灰黒色。焼成は良好である。厚さ1.7～1.9cm。70の凸面は縦位ヘラナデが粗く施される。凹面は布目痕が明瞭で、その上を粗くヘラナデする。端面はヘラケズリの後ナデ調整。胎土は砂粒を含むが精良、色調は暗灰色を呈し、焼成良好。厚さ1.8～2.2cm。71の凸面は縦位ヘラナデ、凹面は縦位のナデ、端面はヘラケズリの後ナデ調整している。胎土は小石・砂粒等を多く含む粗土。焼成は甘く橙灰色を呈する。厚さは3.4～3.5cmと非常に厚い。

72は滑石鍋。復元口径18.4cm、鍔部径22.8cm。外面には煤が付着している。

73・74は砥石。73は中砥。総面使用。石材は気泡が多いが堅く黄茶褐色。74は泥岩製の仕上げ砥。

75・76は骨製笄。75は両面に溝を彫る。76は先端部の破片。

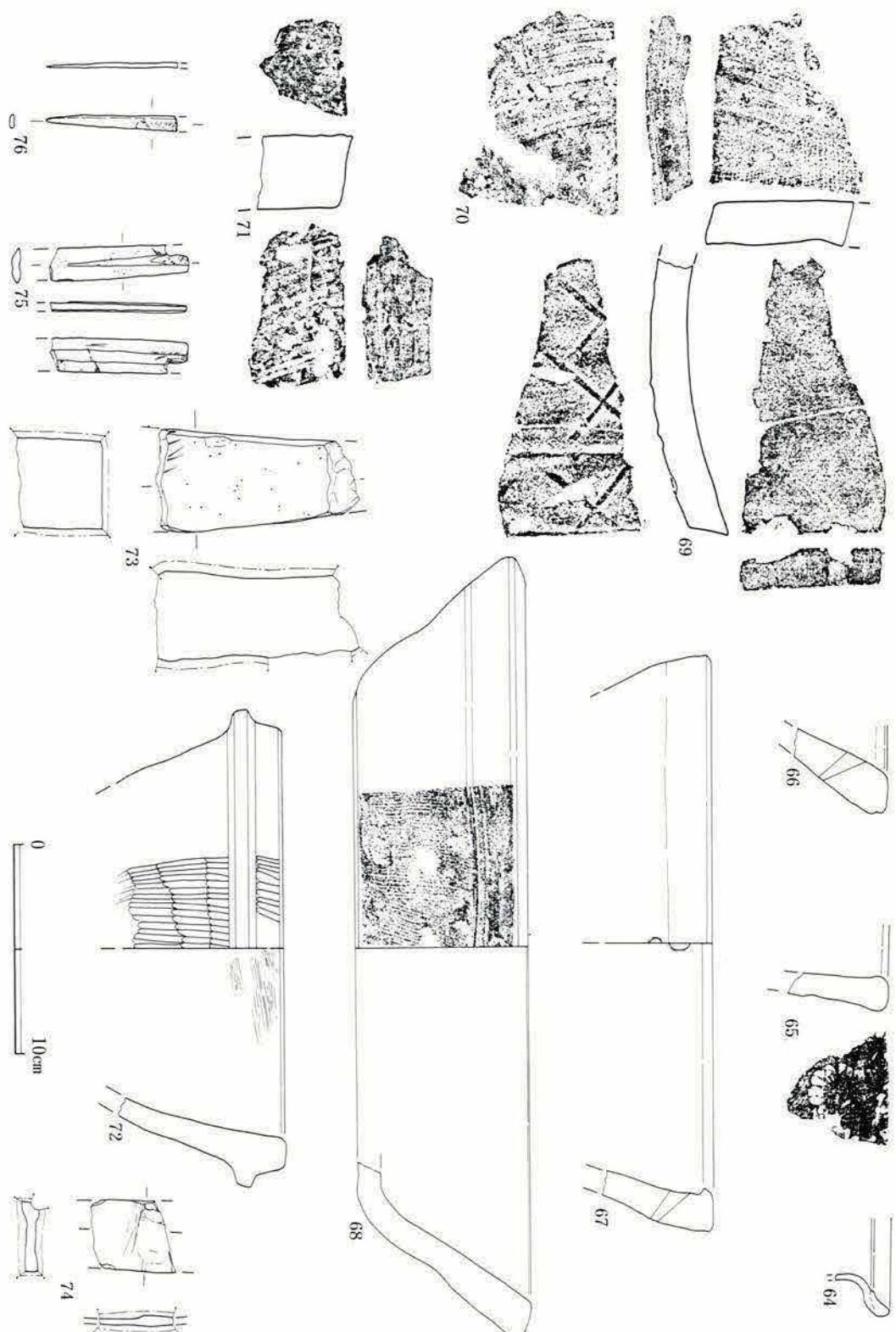


図38 方形竪穴41出土遺物(3)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-41	36-21	7.5	4.5	2.2
HT-41	36-1	7.6	5.9	1.9		22	7.6	5.0	2.4
	2	7.5	5.2	1.6		23	7.8	4.5	2.4
	3	7.3	5.3	1.8		24	7.3	4.8	2.1
	4	8.0	5.4	1.9		25	11.0	6.4	3.1
	5	7.7	5.4	1.9		26	11.3	6.0	3.1
	6	7.9	4.2	2.0		27	12.2	6.3	3.2
	7	7.6	5.4	1.9		28	11.6	5.8	3.7
	8	7.3	4.6	1.8		29	11.8	6.1	3.1
	9	6.7	4.2	2.0		30	13.5	7.5	3.1
	10	7.6	5.4	1.6		31	12.1	6.9	3.3
	11	7.7	4.6	2.0		32	12.3	7.1	3.2
	12	7.7	5.4	1.7		33	12.6	6.4	3.5
	13	7.2	4.2	1.9		34	12.1	6.7	3.2
	14	8.2	5.1	1.6		35	12.8	6.9	3.6
	15	8.1	4.9	1.8		36	13.1	8.6	2.9
	16	7.3	4.2	2.4		37	12.7	8.1	3.0
	17	7.4	5.0	2.2		38	12.5	6.7	3.4
	18	8.0	5.1	2.4		39	12.1	8.0	3.4
	19	6.6	4.3	1.8		40	13.2	8.2	3.6
	20	7.5	5.4	2.3		41	12.9	9.0	3.0

表9 方形竪穴41かわらけ法量

単位(cm)

方形竪穴43(図39)

調査区北東、B・C-5グリッドで検出された。北辺西側を土壌によって切られる。平面形は東西方向にやや長い長方形を呈する。東西4.7m、南北4.0m、確認面からの深さ0.7mを測る。

床は面積凡そ14m²、ほぼ平坦だが南東隅に向かってなだらかに高くなっている。標高は3.9~4.0m、南東隅で4.2mを測る。床面上には何らの遺構も検出されなかった。

方形竪穴43出土遺物(図40・41)

図40-1~9はロクロ成形のかわらけ。1~7は小型、8・9は大型の製品である。小型はいずれも器高が低く、側壁がまっすぐ斜め上に開くものが殆どだが、1~3は幾分内湾気味になり、5は器壁が極端に薄い。また7は底径・口径比が小さく、側壁はやや垂直的に立ち上がる。8は底径・口径比が大きく、底部から内湾気味に立ち上がった側壁は、中程で弱く屈曲して外反する。器壁は薄手である。9は器高がやや低い。薄手の底部からやや内湾しながら立ち上がる側壁は厚く、口縁は強いナデによって若干外反している。いずれも胎土は微砂粒・白針を含む良土で、焼成は普通。色調は淡茶灰色である。

10・11は青磁蓮弁文碗。10は方形竪穴33出土の破片と接合した。復元口径13.6cm。素地は明灰色で精良緻密、釉は半透明の灰緑色。釉層は薄い。11は復元口径14.9cm。素地は堅緻な灰色土。釉は暗緑色を呈する。

12は青磁碗底部。復元高台径5.6 cm。見込みに印花文が見られるが、小片のため判然としない。素地は緻密な灰色土。釉は青緑色を呈し、高台脇までかけられている。

13は青磁無文碗。復元口径10.2cm。素地は精良緻密な明灰色土。釉は暗灰緑色を呈し、釉層はごく薄い。

14は青磁双魚文鉢。復元口径13.3cm、高台径6.3 cm、器高4.0 cm。素地は細かい気泡を少々もつが精良な明赤灰色。釉は茶灰色を呈し、半透明。釉層がやや厚く、高台端部は拭き取られて露胎になっている。

15は青磁碗底部。復元高台径6.8 cm。素地は若干の砂粒を含む灰白色土。釉は青緑色で、高台端部は露胎。

16は青白磁梅瓶蓋。口径5.2 cm、器高2.8 cm。素地は微砂粒を含む白色土。釉は完全には溶け切らず、青みがかった白濁色を呈する。そのため頂部の紋様は判然としない。

17は白磁口兀皿。素地は気泡を少々含んだ灰白色土。釉は青みがかった灰白色で、濃淡のムラがある。

18は瀬戸入子。碗と言うべきか。復元口径12.8cm、底径5.2 cm、器高4.4 cm。胎土は精良な暗灰白色土。外底面は糸切りの後ヘラケズリ調整。内底にはナデが施される。口縁部内側に斑状の自然

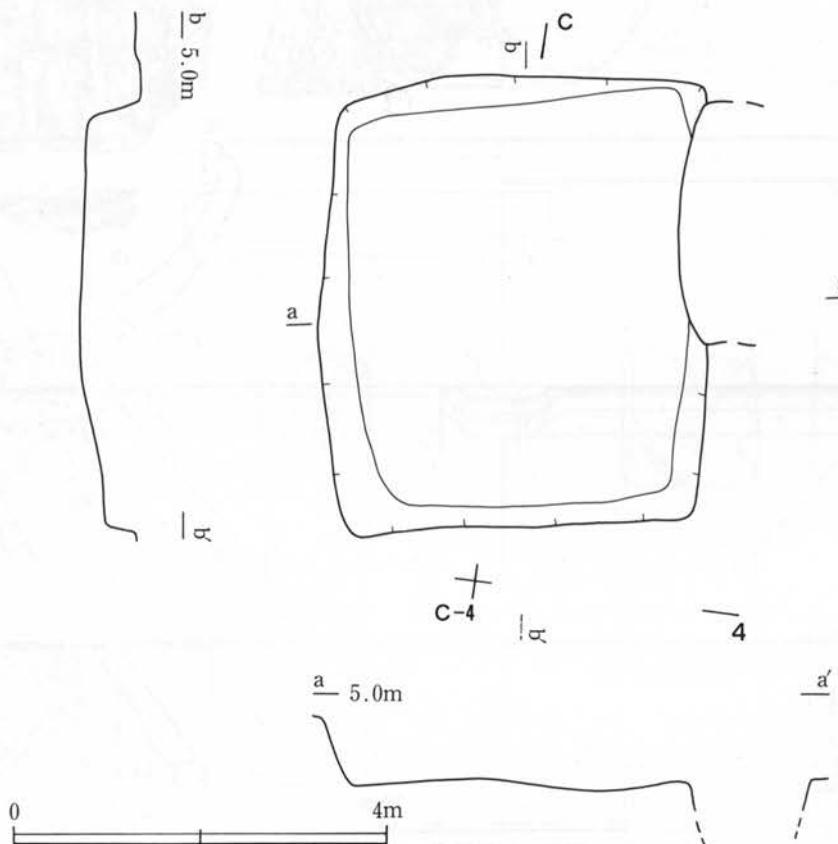


図39 方形窓穴43

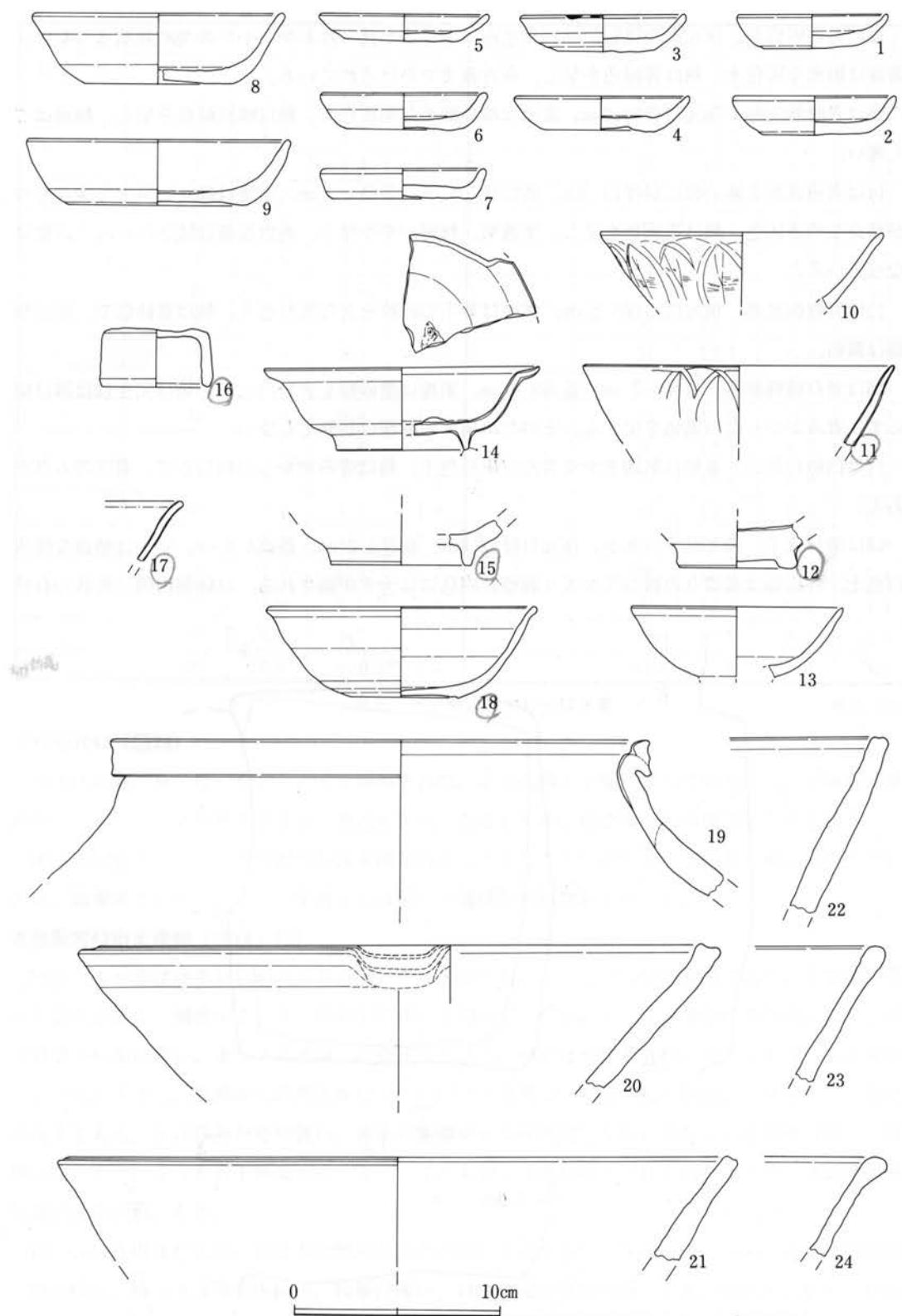


図40 方形竪穴43出土遺物(1)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-43	40-5	7.7	5.0	1.9
HT-43	40-1	7.1	4.6	1.7		6	7.9	5.7	1.8
	2	8.1	5.5	1.3		7	7.8	6.8	1.5
	3	7.8	4.7	1.8		8	12.0	7.2	3.4
	4	8.3	5.4	1.7		9	12.6	8.7	3.2

表10 方形堅穴43出土かわらけ法量

単位(cm)

降灰が見られる。

19は常滑甕口縁部。復元口径23.2cm。小さく折り返されてN字状になる。端部から口縁内側にかけては降灰が非常に厚く、透明感のある緑褐色を呈している。

20~22は常滑こね鉢。20の復元口径は29.2cm。口縁端部は強いナデによって受け口状になる。21は復元口径31.7cm。口縁はつまみ上げられて細くなり、端部がへこんでいる。

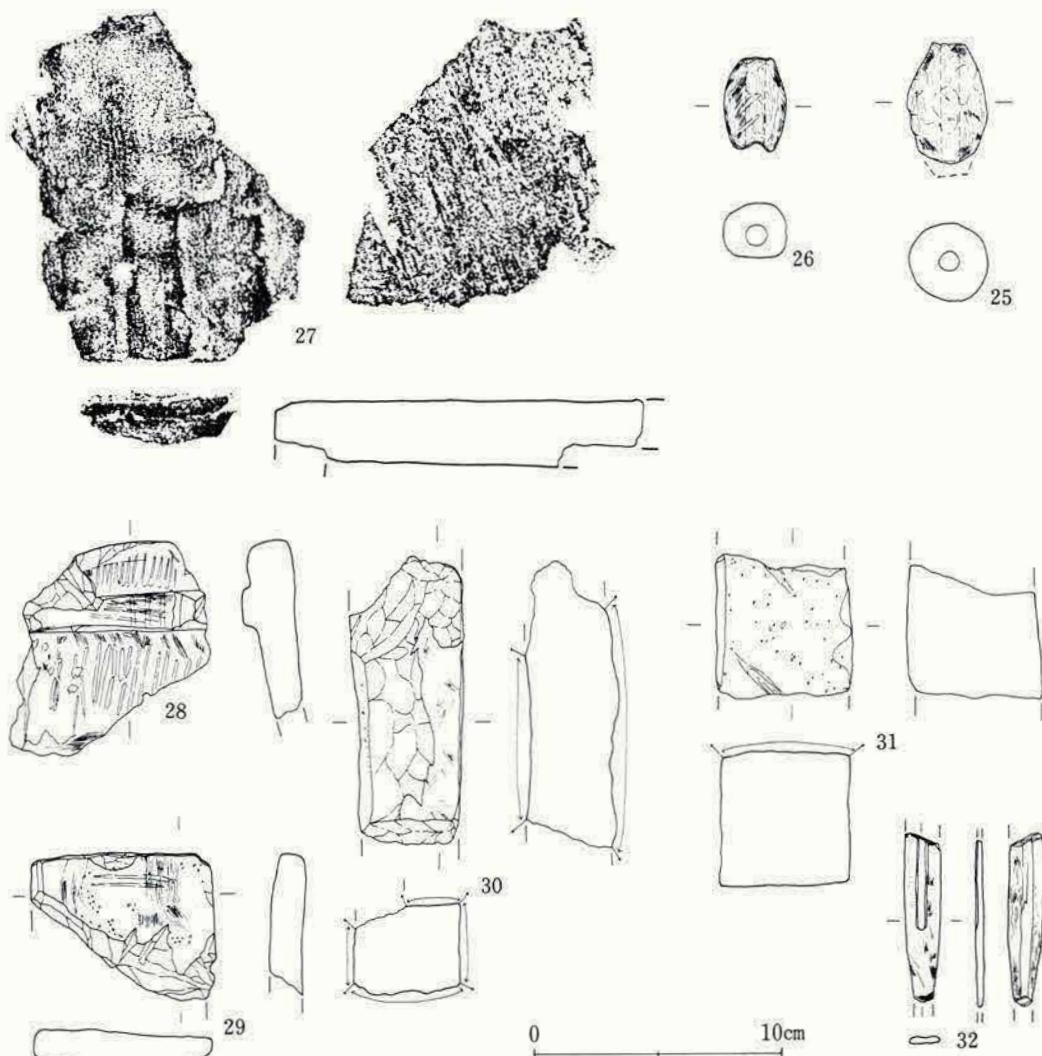


図41 方形堅穴43出土遺物(2)

23・24は山茶碗窯系こね鉢。どちらも端部が肥厚して玉縁状になる。

図41-25・26は土錘。25はかなりいびつである。棒に粘土を巻き付けて握ったそのままの形状で、殆ど調整されていない。

27は女瓦。凸面は表面に粗砂が多く付着しており、叩き目がナデ消されている。凹面は縦位のナデが施される。端面はヘラケズリの後ナデ、端縁はケズリ調整。胎土は小石・砂粒を多く含む粗土で焼成は甘く、色調灰黒色を呈する。厚さ2.1～2.5 cm。

28は滑石鍋転用未成品。割れた滑石鍋の口縁。外面に細かい削・擦痕が見られる。

29は温石。滑石鍋転用製品。黒くススけているのは底部を転用したからであろう。

30・31は砥石。ともに中砥。30は総面使用、31は使用痕が不明瞭である。

32は骨製笄。両端を欠き、茶褐色に変色している。溝は片面にのみ彫られる。

方形竪穴48（図42）

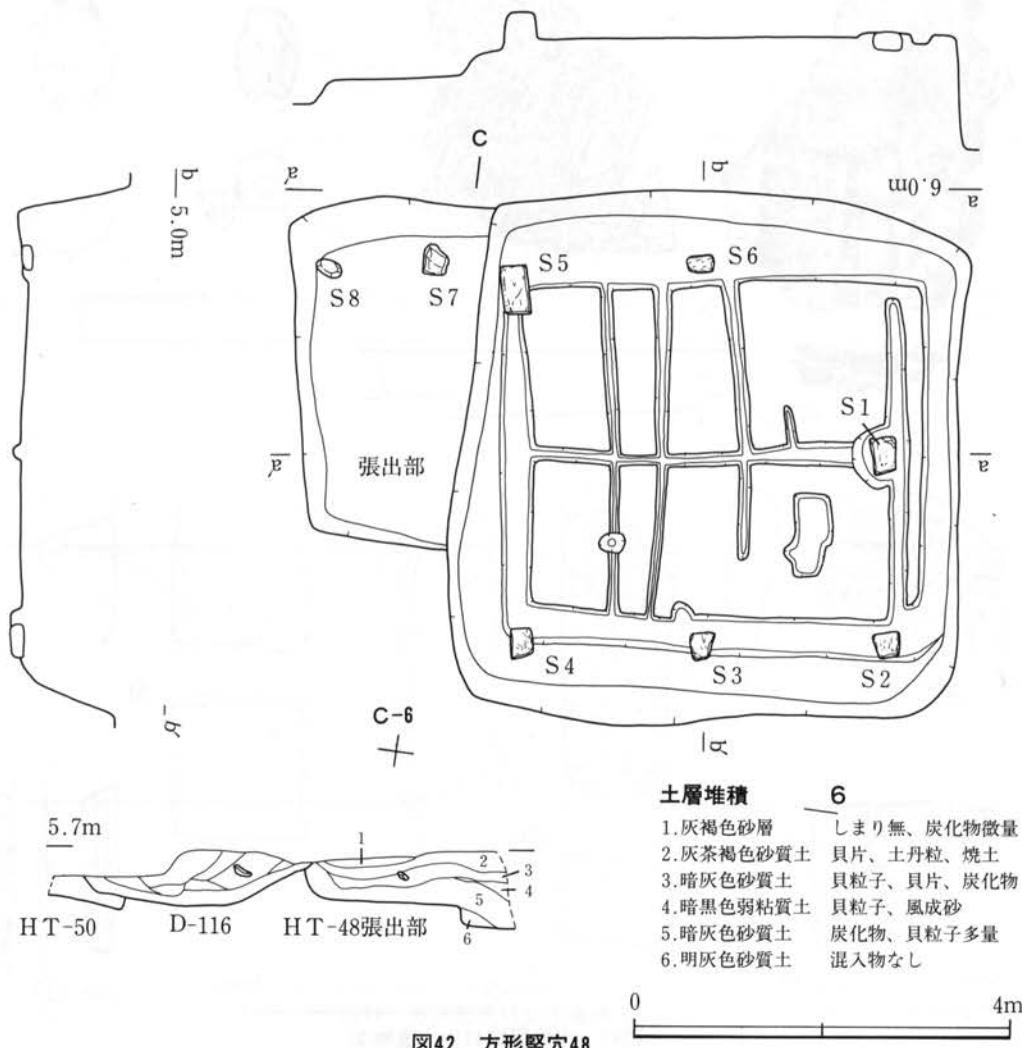


図42 方形竪穴48

調査区北側、B-7 グリッドで検出された。南側で土壌116 に切られる。

本竪穴は主屋部と南側に付く張り出し部とからなる。主屋部の平面形はほぼ正方形で、東西5.5 m、南北5.4 m、確認面からの深さ1.1 mを測り、床面積は凡そ24m²。張り出し部は東西3.7 m、南北2.0 m、深さ0.7 m、面積凡そ4.5 m²程である。

主屋部床面は平坦で標高4.4 m、面上には、四周壁下に6個の鎌倉石（S 1～6）が置かれ、それぞれの石を繋ぐ形でやや幅の広い溝状遺構が、また中央部では「卅」の形に幅の狭い溝状遺構が検出された。石の大きさは区々で転用されたものと思われるが、上面は平坦でいずれも標高ほぼ4.50mと一定している。北西隅及び南辺中央の石は抜き取られて遺存しないが、配置は極めて整然としており、各々の芯々距離は195～205 cmを測る。これらは主屋の上屋を支える柱の礎石であろう。四周を巡る溝状遺構は、幅40cm、深さ15cm程で、地覆材の痕跡と考えられる。またその内側の溝状遺構は、幅10～15cm、深さ3 cm程で、根太木痕になろう。主屋の使用当時の床面は、各礎石の内側になるから、東西・南北とも4.0 m、面積凡そ16m²ほどと推測できる。

張り出し部床面もほぼ平坦で標高4.8 m、主屋部との比高差は凡そ0.4 mである。ここでも西辺に石を2個検出した（S 7・8…S 8は伊豆石）。主屋に付属する礎石構造の入り口状施設になるとと思われる。

方形竪穴48出土遺物（図43・44）

図43-1～11はロクロ成形のかわらけ。1～7は小型、8～11は大型に属する。1～5は器高が低く、側壁は内湾気味に立ち上がる。6・7は直線的に開くが、7のみ器壁が厚く異様である。8～11はいずれも緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部で弱く外反する。7の口縁内側及び9の内外底を除く全面にカーボンが付着している。

12は青磁蓮弁文碗。復元口径15.7cm。素地は少量の砂を含むが精良緻密な明灰色土。釉は半透明な明緑色を呈する。

13は白磁壺頸部。復元口径7.0 cm。素地は黒色粉粒・気泡を含む灰白色土。釉はやや緑がかった乳白色を呈する。

14・15は白磁口兀皿。復元口径は14が10.3cm、15が11.0cm。いずれも素地は黒色粉粒を若干混じる堅緻な灰白色土。釉は緑がかった灰白色を呈する。

16・17は瀬戸。16は鉢し皿小片。

17は天目茶碗底部。復元高台径3.3 cm。外面はヘラケズリで高台を削り出している。胎土は少量の気泡を含むがやや粘性をもつ緻密な灰色土。釉は黒褐色で光沢を有している。

18は山茶碗。胎土は砂粒を多く含み硬質な灰色粗土。口縁内側に灰緑色の降灰がやや厚くかかる。

19～23は常滑。19・20は甕。端部を短く折り返す。21は壺で、胎土は夾雜物少なく粘性に富む。22は鉢になると思われる。胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色。23はこね鉢。ナデで端部を垂直につまみ上げている。

24は山茶碗窯系こね鉢。胎土は砂粒・白色粒を多く混じる灰白色粗土。

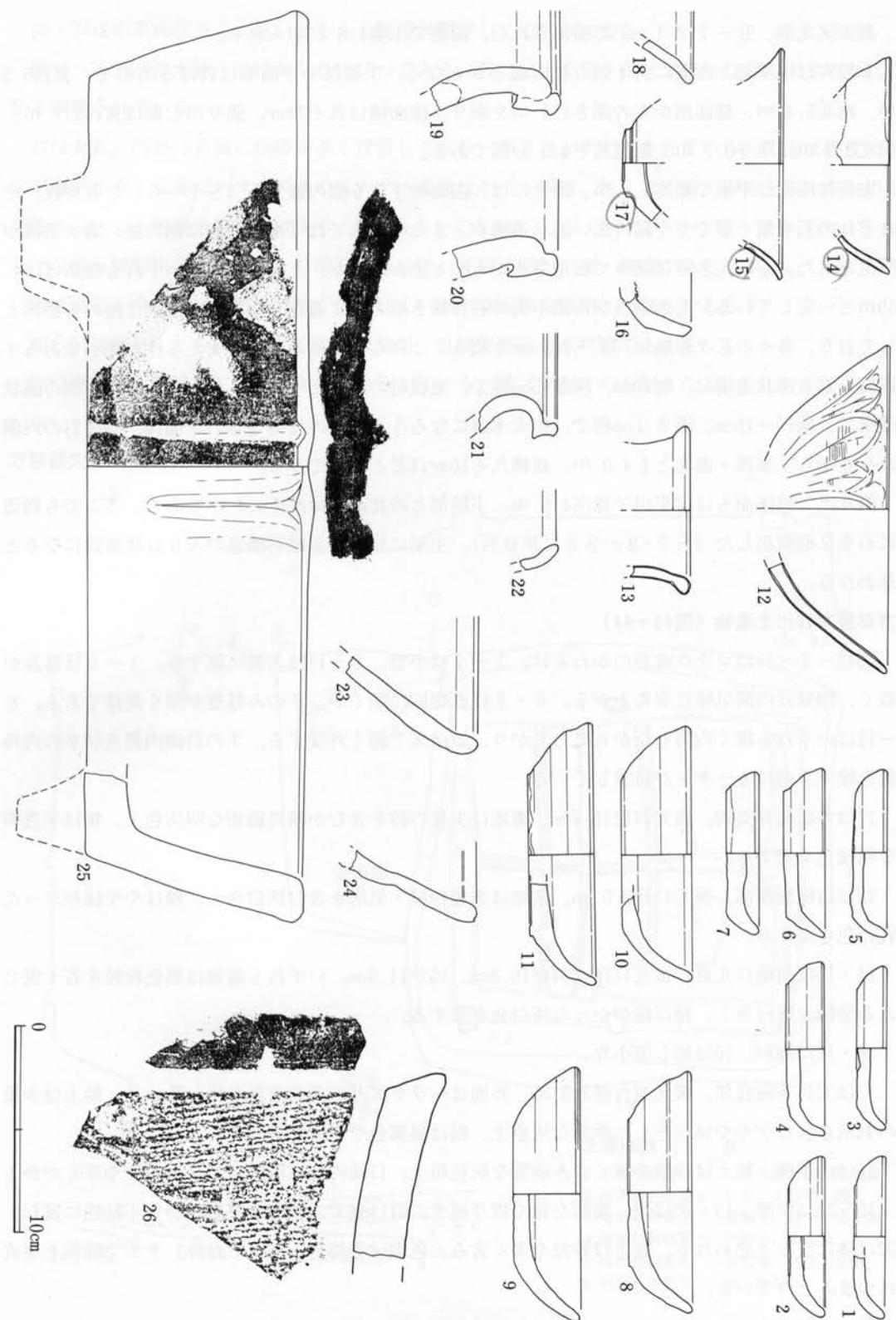


図43 方形竪穴48出土遺物(1)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-48	43-6	7.6	5.6	1.5
HT-48	43-1	7.7	5.0	1.6		7	7.9	5.9	1.7
	2	7.5	4.7	1.8		8	11.4	7.1	3.1
	3	8.0	6.1	2.0		9	12.0	6.5	3.3
	4	8.2	6.1	1.9		10	11.9	7.0	3.4
	5	7.5	5.8	1.6		11	12.4	8.8	3.2

表11 方形堅穴48出土かわらけ法量

単位(cm)

25は瓦質輪花形手焙り。復元口径43.0cm、底径37.8cm、器高(脚部除く)10.6cm。外底部は砂目で一部に脚の剥がれた痕跡がある。内底はナデ、それ以外には丁寧なミガキが施される。遺存する範囲で印花文は見られない。胎土は小石・砂粒を多く含む灰色粗土。

26は女瓦。凸面は側縁に平行に縄目叩き文が施される。表面にはやや粗い砂が付着し、叩きによって打ち込まれている。凹面はやや粗い砂が付着し、縦位のナデが施される。側面はヘラケズリの後、縦位ナデ調整。胎土は砂粒を多く含むが比較的良土。焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。厚さ2.2~2.5cmを測る。

図44-27は滑石鍋。復元口径30.6cm、鍔部径32.5cm。外面には丸ノミによる縦位の削痕が明瞭に残り、内面には細かな斜位の擦痕が見られる。

29・29は砥石。ともに気泡・赤褐色粒子を含む硬質の石材を用いた中砥。総面使用。

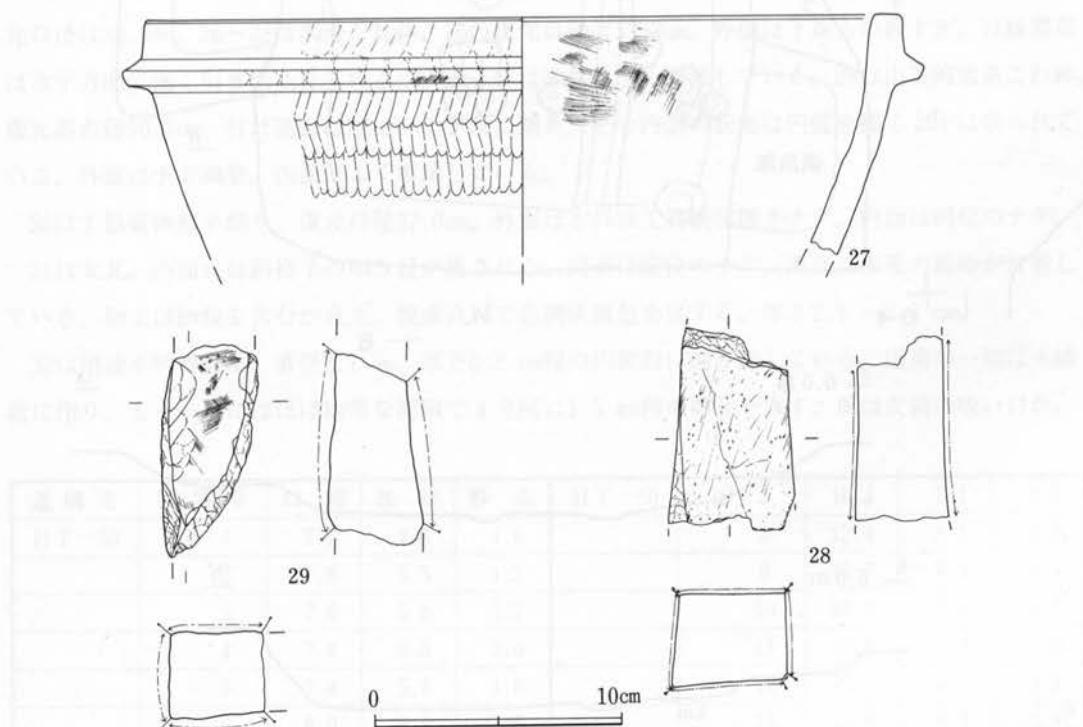


図44 方形堅穴48出土遺物(2)

方形竪穴50 (図45)

調査区中央やや北側、C-7グリッドで検出された。北西隅の覆土上層を土壌116に切られる(図42土層図参照)。本竪穴は、主屋部と南東隅に付く張り出し部とからなる。主屋部の規模は東西4.7m、南北5.0m、確認面からの深さ0.9mを測り、床面積凡そ13m²。平面形状は南北に若干長い長方形を呈する。張り出し部は東西2.3m、南北1.4m、深さ0.7m、面積約1.6m²。主屋床面との比高差は凡そ0.2mである。

主屋床面上には2条の溝状遺構と10口のピットが検出された。溝状遺構はいずれも幅50cm、深さ10cm程で、1条が西壁直下で南北に、もう1条が東西方向で中央よりやや南寄りの所にある。部分的な遺存状況であるが、前者は土台、後者は根太木の痕跡であろうと思われる。ピットは、主屋

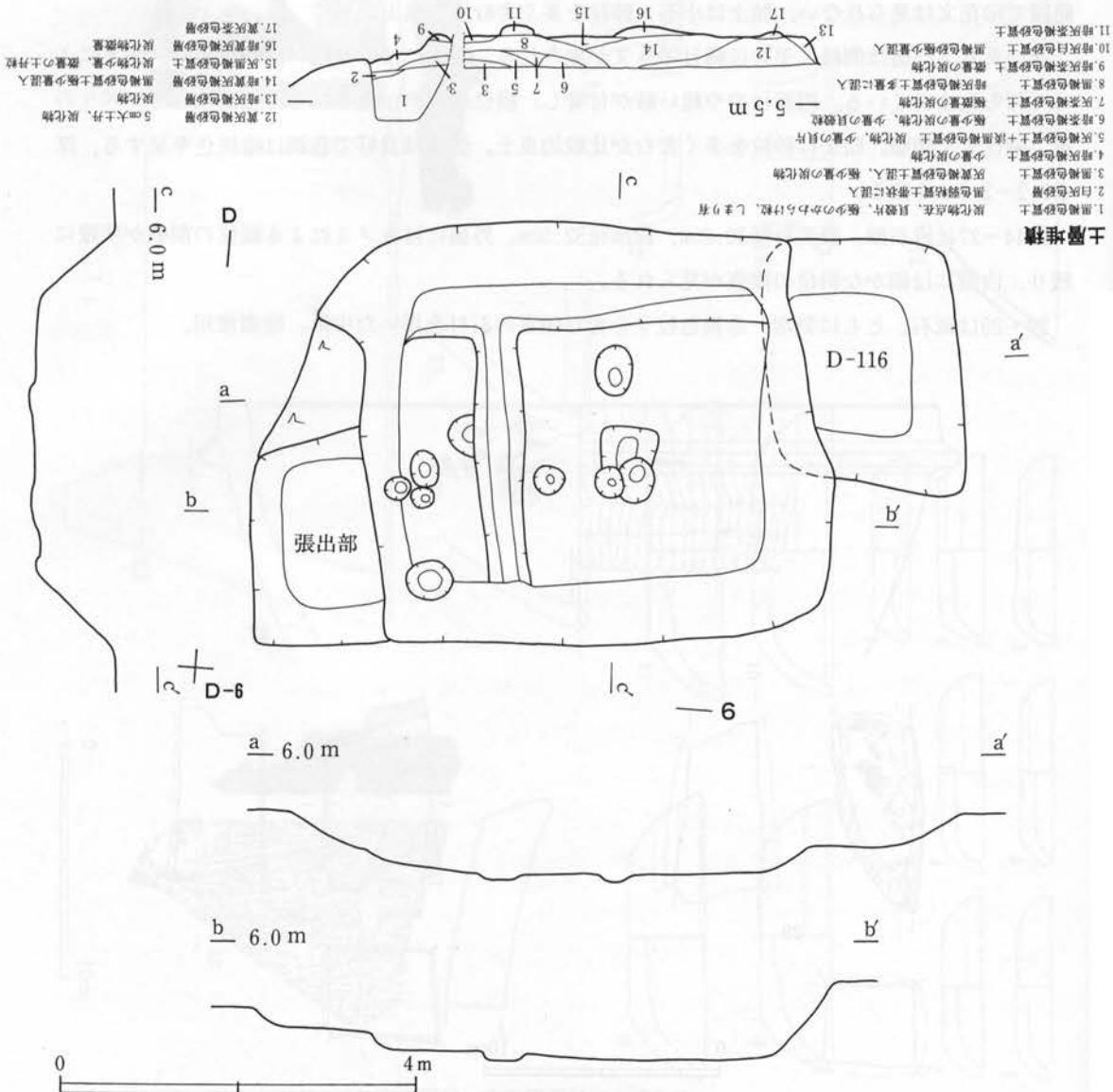


図45 方形竪穴50

部の南北中軸線付近に殆ど集まっているのが注意を惹くが、大きさ・深さとも区々で上屋を支える構造は想定しにくい。また、検出された壁はなだらかな斜面になっているが、これは廃棄の後、崩落したためかとも考えられる。張り出し部床面上にも遺構は何ら検出されなかった。

方形竪穴50出土遺物（図46・47）

図46-1～13はロクロ成形のかわらけ。1～6は小型、7は中型、8～13は大型。1・2は器壁が薄く、外に開く。3～5は側壁がまっすぐ外反し、6はやや内湾する。7は器高が高く、内湾気味の側壁は急角度をもって立ち上がる。8・9は器壁が厚く、口唇が丸い。10・11は底径・口径比が大きく、器高がやや高い。12・13は側壁が内湾しつつも外側に開く。

14は白磁口兀皿。復元口径10.3cm、底径6.4 cm、器高3.1 cm。素地は緻密な濁白色土。釉は明灰白色で不透明。外底面にも薄くかかるが搔き落とされている。

15は山茶碗。いわゆる北部系（均質手）。復元口径12.2cm。胎土は白色粉粒・黒色微粒を少量混じえるが精良緻密。二次焼成を受けて、色調は赤身がかった茶灰色を呈する。

16・17は瀬戸。16は卸し皿。復元口径12.6cm。17は小壺底部。底径2.9 cm。糸切り痕を明瞭に残す。いずれも灰釉ハケ塗り。

18～20は常滑壺。18は復元口径10.7cm。胎土は砂粒を含むが比較的しまりがある。色調は茶褐色。19・20は所謂鶴口壺。同一個体かどうかは不明。20の底径は10.0cm。砂底である。胎土は暗茶灰色で白色粒を多く含むが、器表全体に褐鉄分が付着して赤褐色を呈する。

21～25は常滑甕口縁部。22の復元口径は19.2cm。端部は下に折り返されて玉縁状になる。25の復元口径は28.2cm。26～28は常滑こね鉢。26の復元口径は33.2cm。外面は下からの板ナデ。口縁端部は水平方向に強く引き出されている。内面下半は非常によく摩滅している。29は山茶碗窯系こね鉢。復元高台径10.7cm。付け高台は短くハの字状に開き、その内側の底部は円弧を描くように削られている。外面はナデ調整。内面はよく摩滅している。

30は土器質鉢形手焙り。復元口径37.0cm。外面は木口状工具縦位搔きナデ。内面は斜位のナデ。

31は女瓦。凸面には斜格子の叩き目が施される。凹面は縦位のナデ。両面に多量の粗砂が付着している。胎土は砂粒を含むが良土。焼成良好で色調灰黒色を呈する。厚さ2.5～2.6 cm。

32は用途不明骨製品。直径2.7 cm、厚さ0.2 cm程の円筒形に削り出している。円筒の一端は玉縁状に作り、もう一端にはほぼ均等な間隔で4カ所に1.5 mm程の穿孔を施す。或は皮袋の吸い口か。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-50	46-7	10.4	7.1	3.1
HT-50	46-1	7.7	4.6	1.6		8	12.4	8.1	3.3
	2	7.8	5.3	1.5		9	12.7	8.0	3.5
	3	7.6	5.6	1.7		10	12.3	7.3	3.2
	4	7.9	5.5	2.0		11	12.8	7.3	3.9
	5	7.4	5.5	1.8		12	12.1	8.5	3.2
	6	8.0	5.8	1.8		13	13.8	8.8	3.4

表12 方形竪穴50出土かわらけ法量

単位(cm)

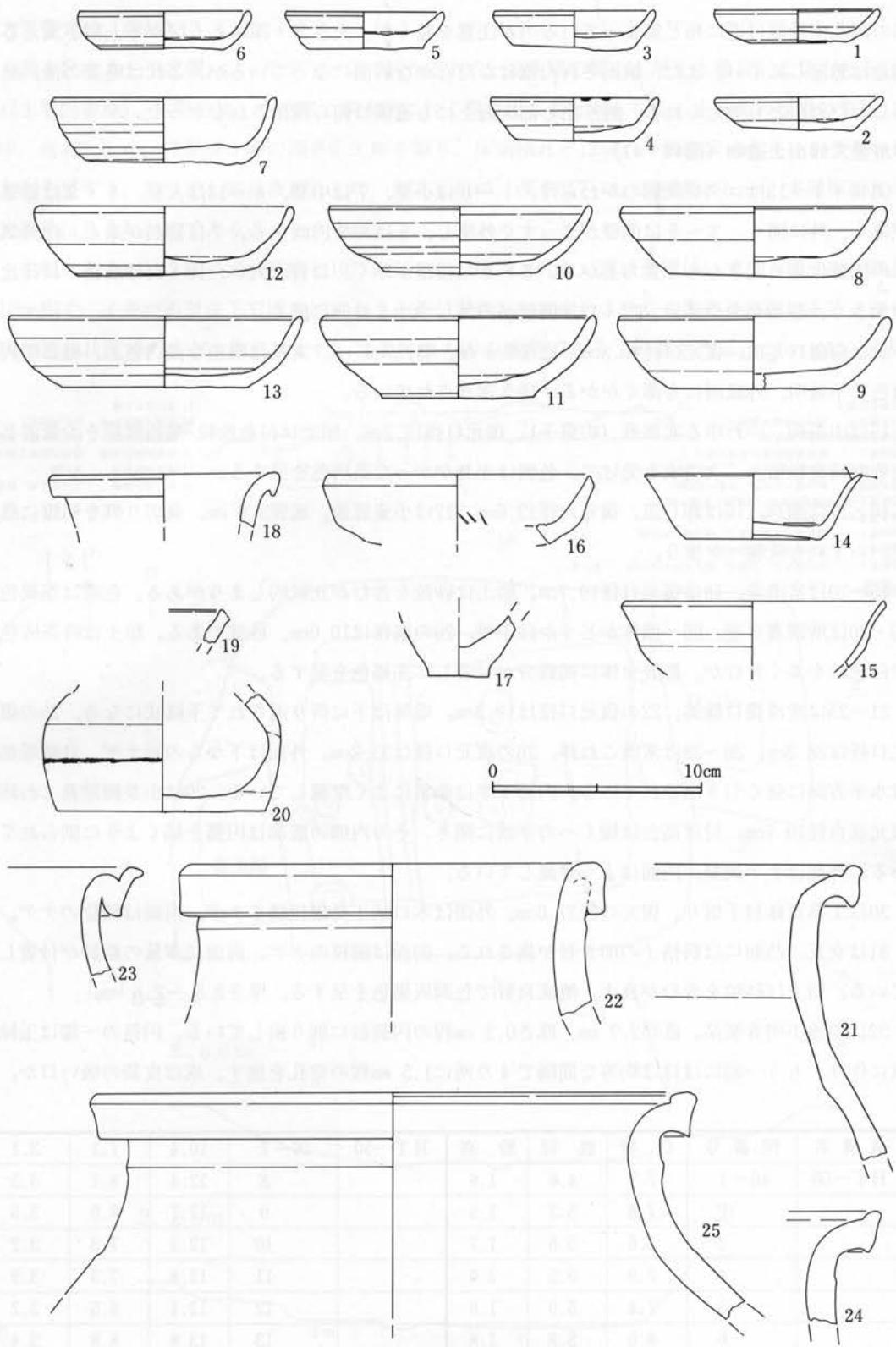


図 46 方形竪穴 50 出土遺物(1)

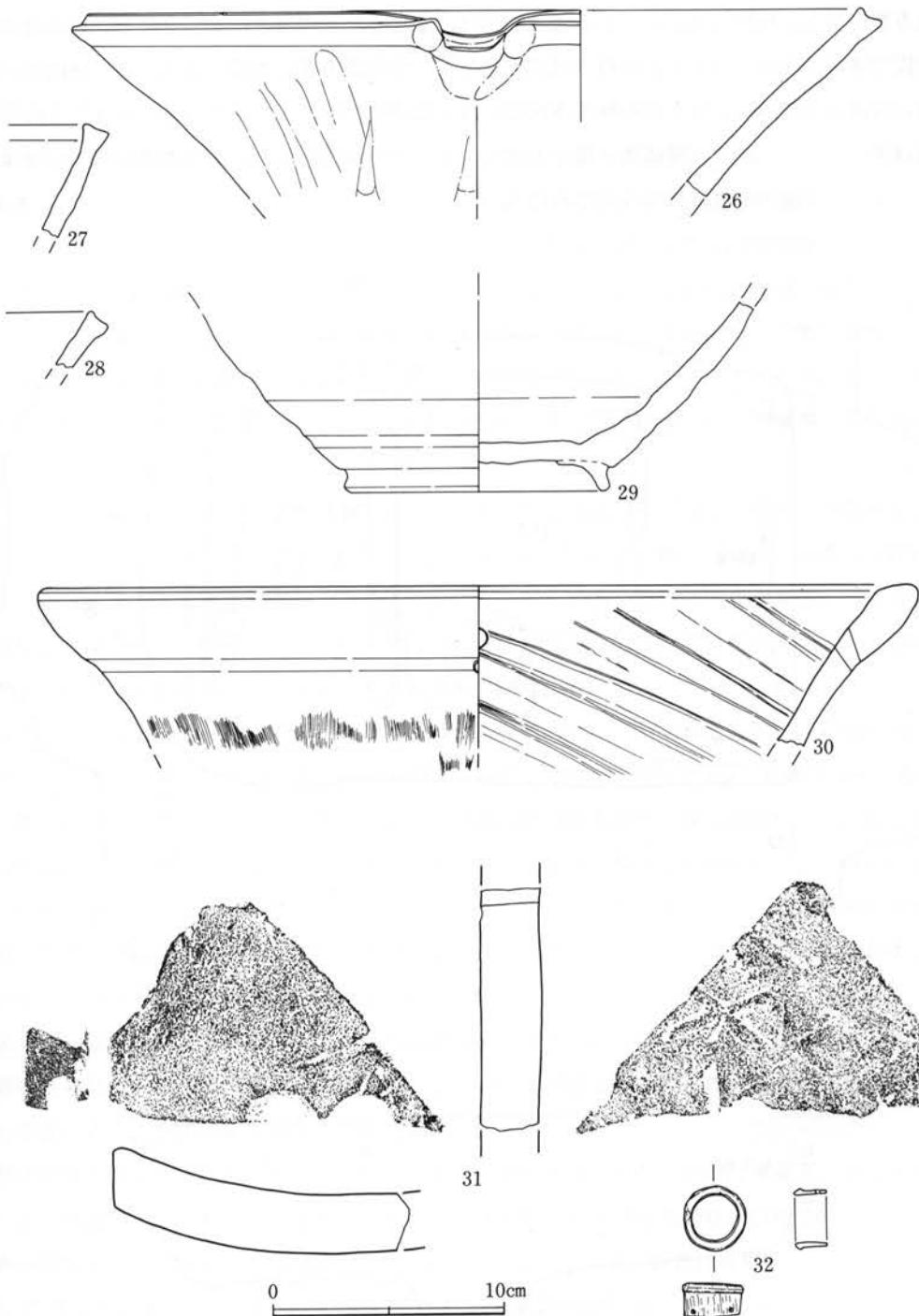


図47 方形竪穴50出土遺物(2)

方形竪穴58 (図48)

調査区北西、C-8・9グリッドで検出された。北東側で方形竪穴65を、また北側・南東側でそ

それぞれ別の方形竪穴を切っており、この付近では最も新しい遺構である。平面形は南北に長軸をもつ長方形を呈し、規模は東西5.0 m、南北7.4 m、確認面からの深さ1.0 mを測り、床面積は凡そ27m²程である。床面は標高5.1 m程ではほぼ平坦だが、中央に大きく土壙（D 1, 2）が開き、その北側には溝状遺構（M 1～3）が検出された。D 1は350 × 280 cm、深さ40cmと大きなものだが、機能は不明である。或は下層遺構を掘り上げてしまった可能性もある。溝状遺構はM 1が地覆材、M 2, 3が捨て根太の痕跡になると思われる。

（佐藤）

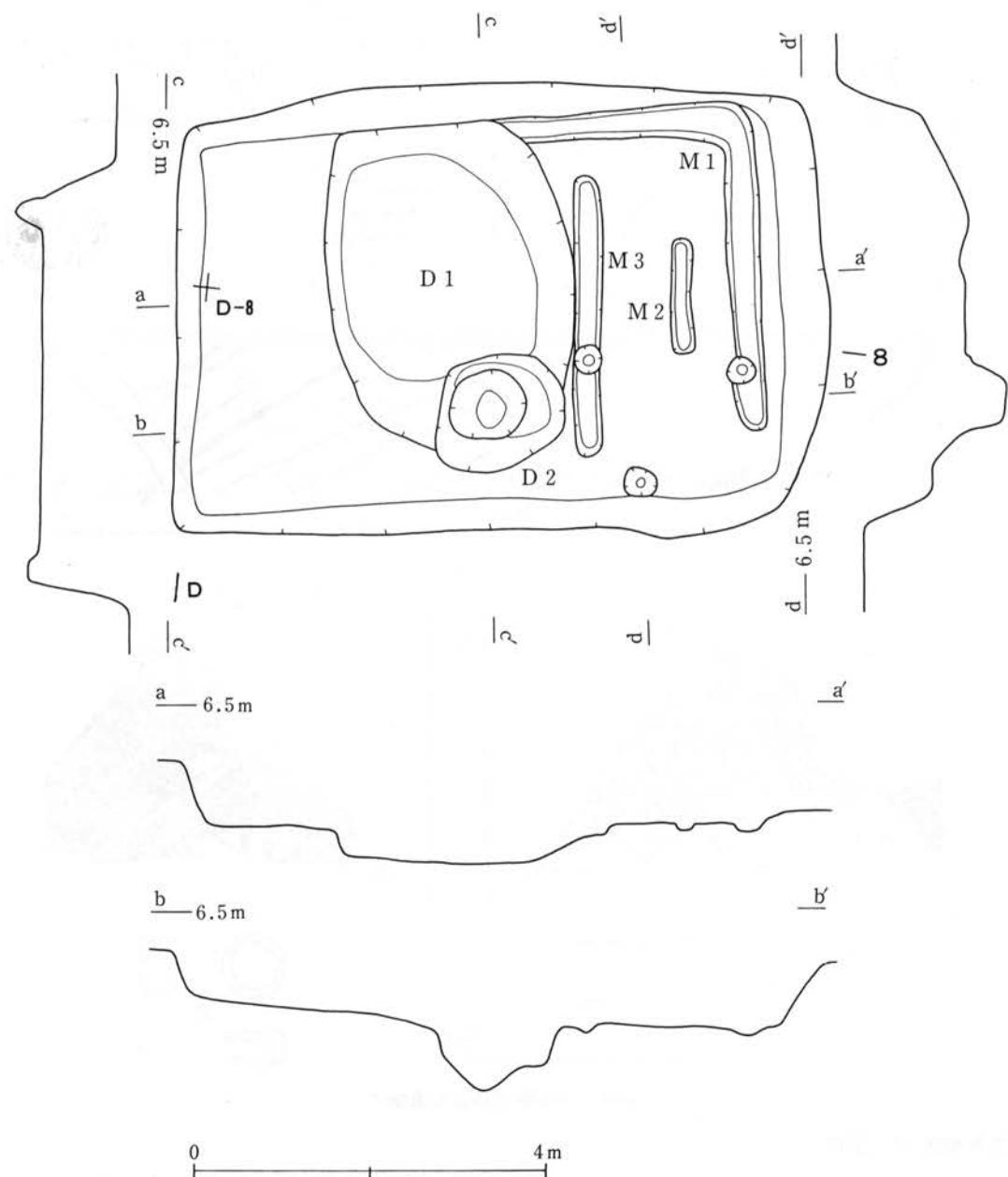


図48 方形竪穴 58

方形堅穴58出土遺物（図49・50・51）

図49-1～10は小型の、11は中型の、12～17は大型のロクロ成形のかわらけである。1・2は体部外面に強い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。3・4は体部外面に弱い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。5は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。6は体部外面に強い稜を持ち、口縁部は内湾する。7は体部外面に稜を持たず、器壁はやや外反しながら立ち上がる。8は体部外面に弱い稜を持ち、口縁部は内湾する。9は体部外面に強い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。10は体部外面に稜を持たず、器壁は直立気味に立ち上がる。11は体部外面に稜を持たず、器壁は外反しながら立ち上がる。12は体部外面に弱い稜を持ち、器壁が厚くやや外反しながら立ち上がる。13～16は体部外面下位に弱い稜を持ち、器壁は外反しながら立ち上がる。17は体部外面中程に強い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる胎土は砂粒を含むやや粗いものが殆どで、色調は淡橙色か橙茶色を呈する。内底面にはナデ痕が、外底面には糸切痕とスノコ痕が残る。

18～22は舶載磁器。18・19は青磁蓮弁文碗の小片。18は復元口径17.7cm。素地は灰色を呈し堅緻。釉は灰緑色。19は復元底径5.4 cm。素地は明灰色呈し極めて緻密。釉は灰緑色。20・21は青白磁の小片。20は合子で復元口径6.2 cm。素地は灰白いろを呈し堅緻。釉は透明な水青色。21は香炉で復元口径4.9 cm。素地は白色を呈し堅緻。釉は不透明な水青色。22は白磁口兀小皿の小片。復元で口径10cm、底径5cm、器高3cm。素地は灰色を呈し、釉は淡青灰色。

23～26は国産陶器で瀬戸窯の製品。23は仏華瓶の胴部の破片。胎土は微砂粒、長石粒を含むが精良土で灰色を呈する。釉は緑灰色。24は折縁皿の小片。復元で口径23.5cm、底径13.8cm、器高5.8 cm。釉は底部までかけられ緑灰色を呈する。25は卸し皿の底部破片。復元底径8.5 cm。底は糸きり。釉は灰緑色。卸し目は鋭く切り込んである。26は入子の小片。復元で口径6.8 cm、底径4.6 cm、器高1.8 cm。器壁内外面に薄い降灰が見られ灰色を呈する。27は山茶碗の小片。胎土は精良で焼成も良好である。28はかわらけの底部片。底径6.4 cm、で非常に薄い。内底面にナデが施されず、ロクロ目痕がそのまま残る。胎土は微砂粒を含むやや粗いもので、色調は赤橙色。底は糸きり。

図50-29は黄釉盤の小片である。復元口径29.1cm。素地は淡灰褐色を呈し、砂質に富み堅い。釉は黄灰色を呈し、口縁部は拭き取っている。30～36は常滑甕口縁部の小片。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえる。色調は暗茶褐色～黒褐色を呈す。

37は常滑小壺胴部の小片。胎土は砂粒、小石、白色粒を多く含む。色調は黒褐色。38は東播の、39・40は常滑の、41～45は山茶碗窯の捏ね鉢。38は小片で胎土は黒色微粒、白色微粒を混じえる。器表は黒灰色。39は復元口径21.1cm。内部中程から磨滅している。器表は赤褐色。40は復元口径33.2cm。内部は内底面に向かう程良く磨滅している。器表は赤褐色。41～45はいずれも小片で、胎土は黒色微粒、白色微石を多く混じえる。器表は灰～灰緑色を呈する。46は備前の擂り鉢。復元口径32cm。

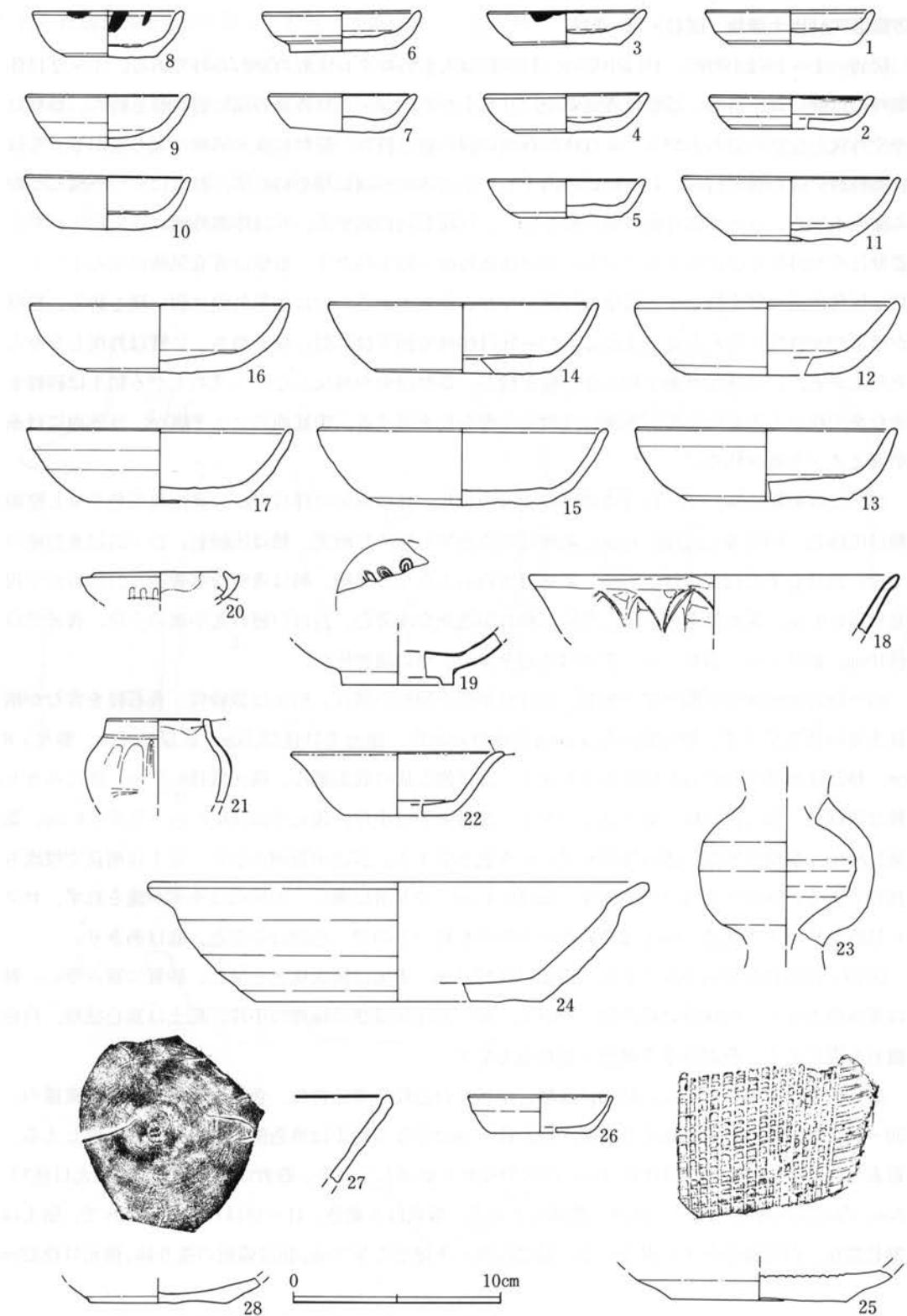


図 49 方形竪穴 58 出土遺物(1)

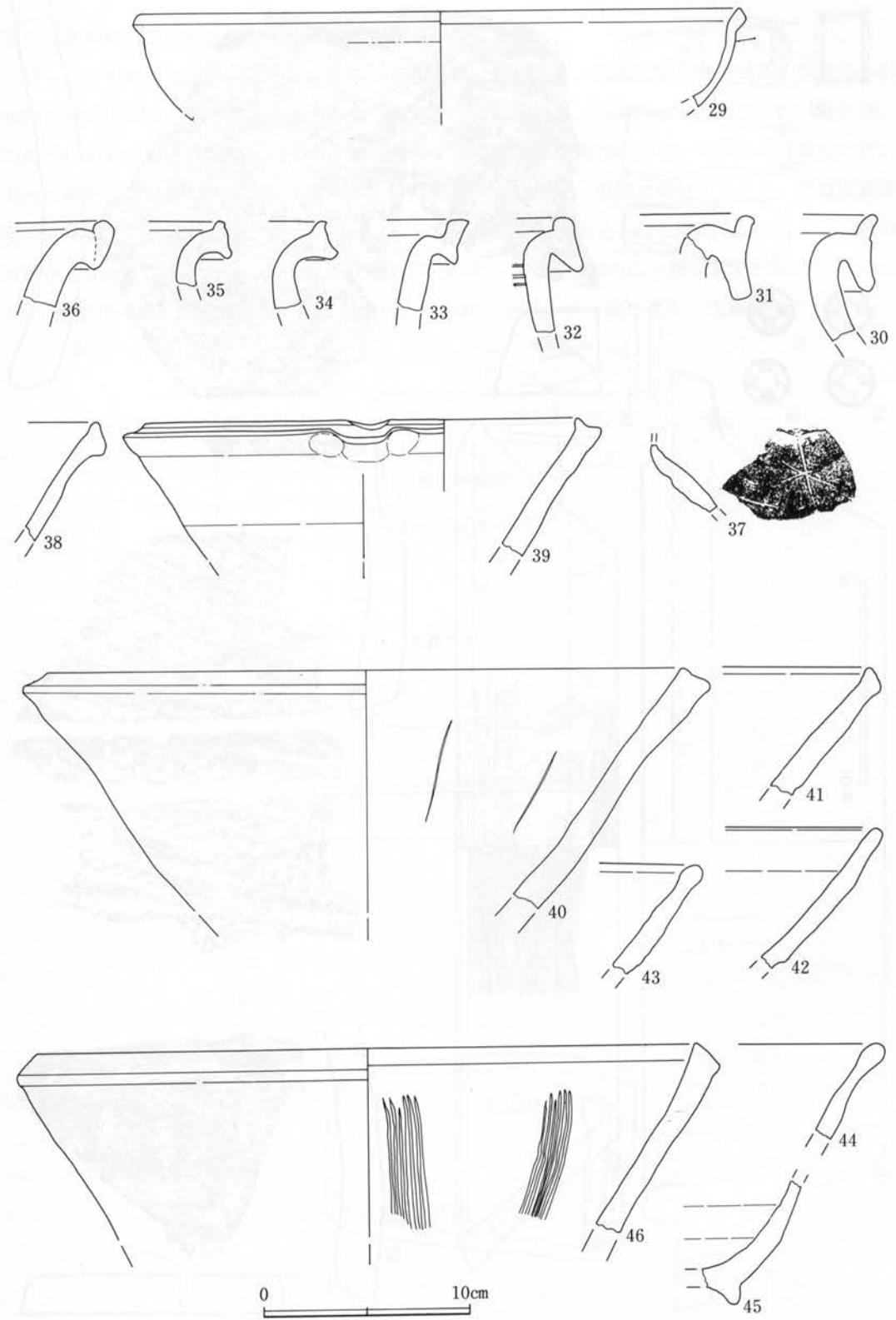


図 50 方形竪穴 58 出土遺物(2)

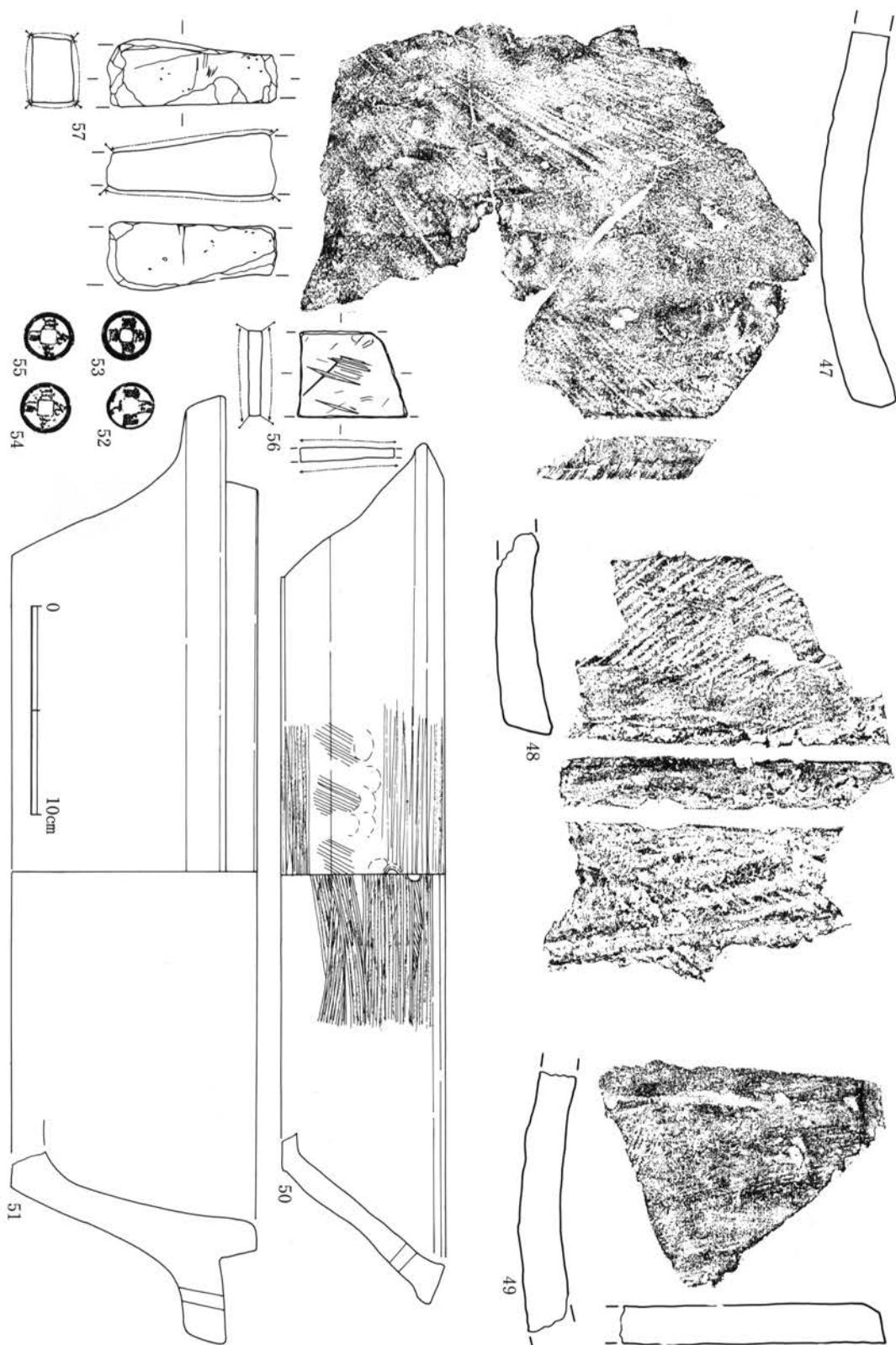


図 51 方形竪穴 58 出土遺物(3)

胎土は微砂粒、白色粒を混じえる。体部内面の条線は6条。

47~49は女瓦の破片。47は凸面に斜格子の叩き目、糸切痕が、凹面に布目痕が残る。胎土は小石、砂粒を少量含む精良土で白色の流斑が見られる。色調は薄墨色。48は凸面、凹面とも粗い離れ砂、凸面平行条線の叩き目。胎土は小石、砂粒を多く含む粗土。色調は灰黒色。49は凸面に縦位ナデ、凹面に細かな布目痕が残る。胎土は小石、砂粒を多く含む粗土。色調は灰色を呈する。51は瓦質手焙。50は復元で口径37.9cm、底径28.4cm、器高7.8cm。胎土は黒色、白色微粒を混じえる。色調は灰黒色。口縁下に内から外に向かって孔があけられている。51は幅の広い鍔が付く。復元で口径36.2cm、鍔径45.4cm、底径30.2cm。胎土は黒色、白色粒、小石を多く混じえる。色調は灰色を呈する。

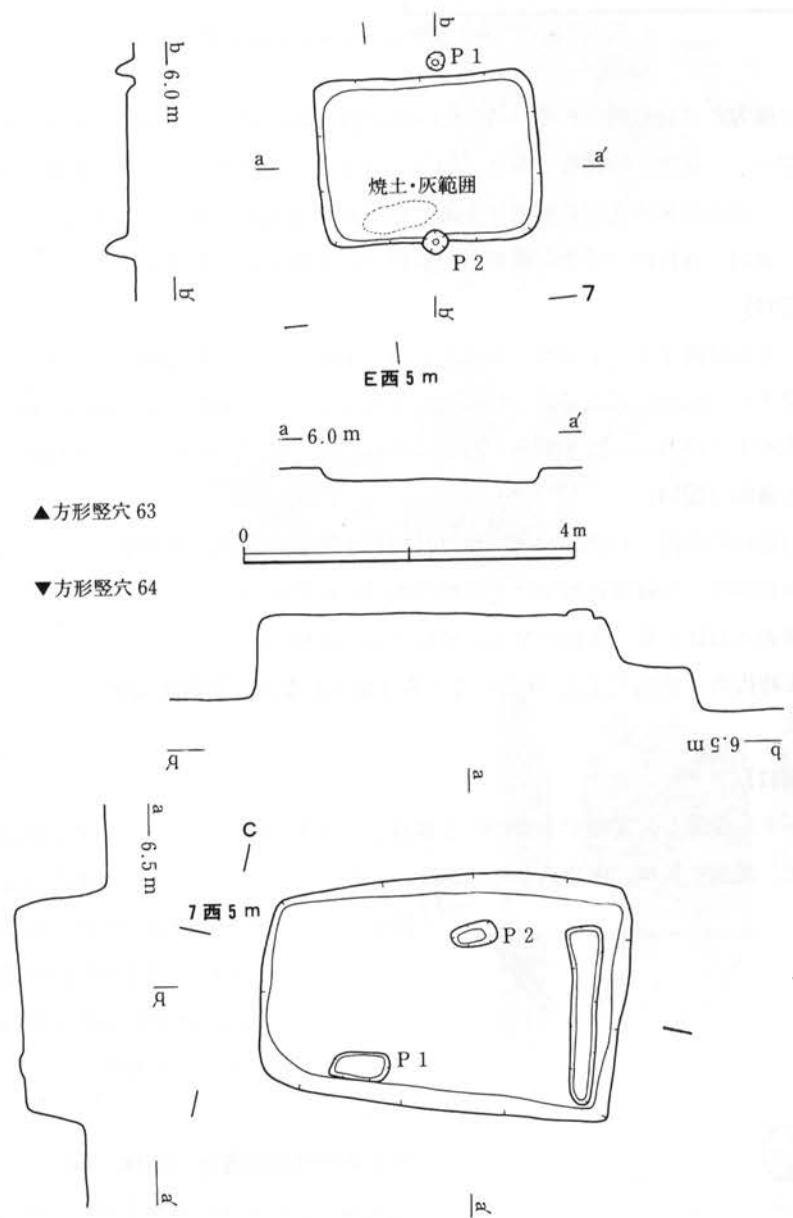


図 52 方竪 63・64

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-58	49-10	7.7	5.0	2.4
HT-58	49-1	7.9	6.0	1.6		11	7.8	4.7	2.6
	2	7.7	5.6	1.6		12	10.3	5.6	3.0
	3	7.5	5.7	1.6		13	12.4	7.3	3.5
	4	7.7	4.7	1.9		14	12.3	7.8	3.5
	5	7.3	4.9	1.9		15	12.8	8.4	3.4
	6	7.4	5.0	1.9		16	13.7	8.0	3.7
	7	7.0	5.1	1.8		17	12.3	7.2	3.3
	8	6.3	4.7	1.8		18	12.5	7.2	3.5
	9	7.0	4.3	2.2					

単位 (cm)

表13 方形竪穴58出土かわらけ法量

内面、鍔部分は横方向に良く磨かれている。52～55は銭。52は唐の開元通宝。楷書。初鋳は621年。53は北宋の天聖元宝。篆書。初鋳は1023年。54・55は北宋の元祐通宝。行書。初鋳は1086年。

56・57は砥石。56は明黄灰色泥岩製の仕上砥。細く鋭利な削痕を残す。側面は擦り切りの痕を残す。57は中砥。気泡・赤色粒子を含む黄褐色の石材で、各面を良く使用している。 (須佐)

方形竪穴63 (図52)

E-6グリッドに位置する。平面形は南北2.65m、東西2.0m、確認面からの深さ0.27mを測り、隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、標高5.38mを測る。北東隅に30×90cmの範囲で灰、焼土が検出され、東壁上に径25cm、深さ35cm、西壁外に径20cm、深さ25cmのピットが検出された。

方形竪穴63出土遺物 (図53)

図53-1は白磁口兀小皿。口径10.4cm。釉は乳白色を呈し、釉層はやや厚い。

2は常滑口縁部小片。口縁部はN字に近く折り曲げられている。

3は山茶碗窯系こね鉢小片。灰色を呈し、砂粒をふくみ粗い。

4は銭。北宋時代の「景祐元宝」。背面に文字等は見られない。初鋳1034年。

方形竪穴64 (図52)

B-8グリッドに位置し、北側で土壙196と重複し、土壙196より新しい。平面形は南北4.4m、東西北側2.9m、南側2.1m、確認面からの深さ1.19mを測り、ややくずれた隅丸長方形を呈する。

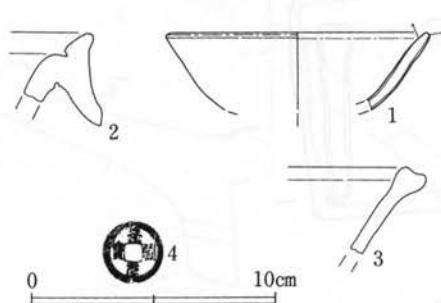


図53 方形竪穴63出土遺物

床面はほぼ平坦で、標高4.9m。北壁内側には幅約30cm、長さ220cm、深さ約12cmの溝状遺構を検出。東西壁内側にそれぞれ約15×30cm、深さ10cm前後の楕円形のピットを検出。

方形竪穴64出土遺物 (図54、55)

図54-1～8はロクロ成形のかわらけである。

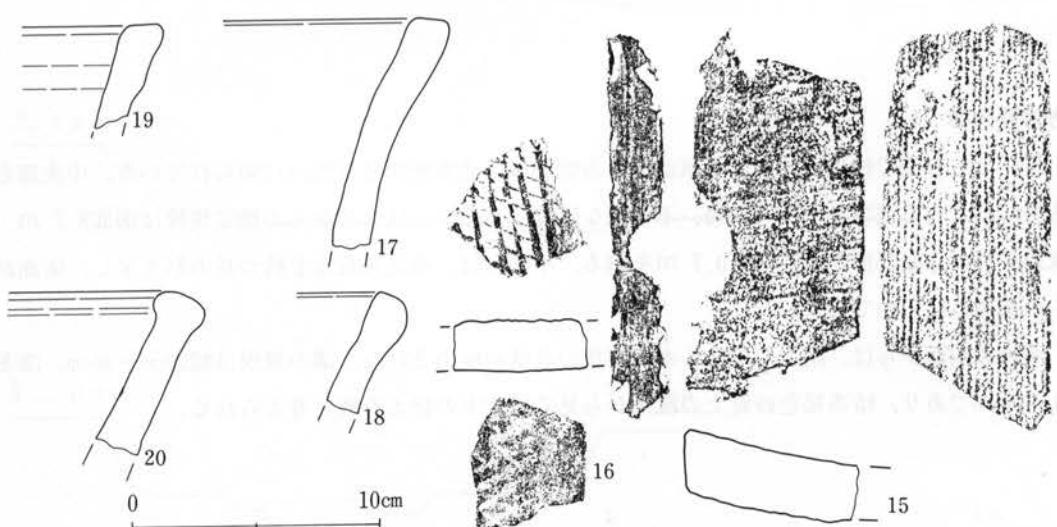
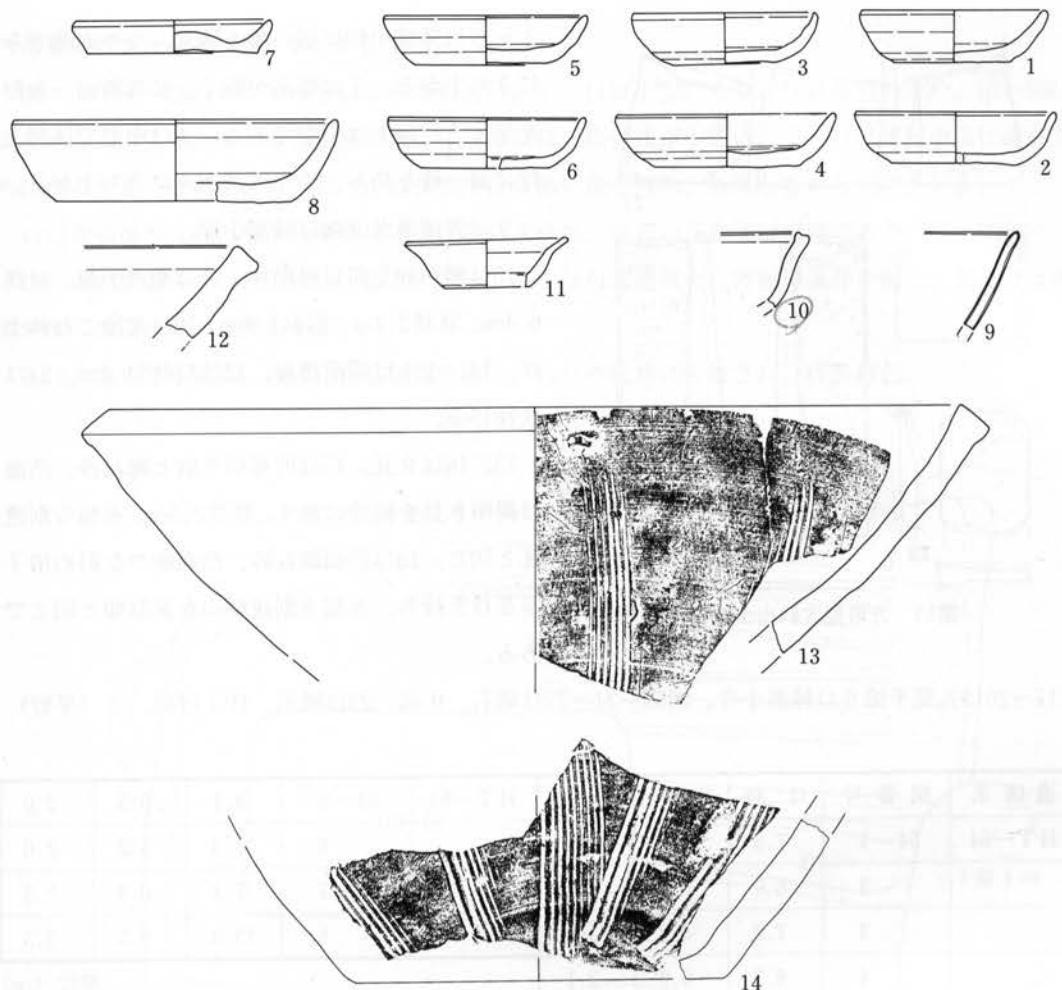


図 54 方形竪穴 64 出土遺物(1)

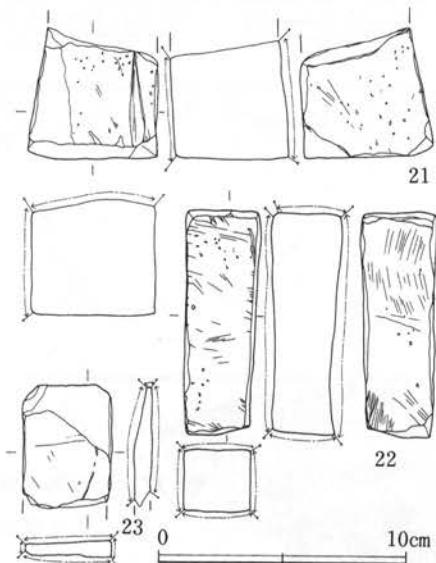


図55 方形竪穴64出土遺物(2)

1～6は体部中程に弱い稜を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。7は器高が低く、底部断面三角形を呈する。以上は小型である。8は中型で体部上位に弱い稜を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。

9は青磁蓮弁文碗口縁部小片。

10は瀬戸卸し皿口縁部片。11は瀬戸小皿。口径6.4cm、底径3.4cm、器高1.9cm。12は常滑こね鉢小片。13、14は備前擂鉢、13は口径34.4cm、14は底径15cm。

15、16は女瓦。15は凹面切り痕と離れ砂、凸面は縄叩き目を縦位に施す。厚さ2.5cm、永福寺創建瓦と同じ。16は凹面離れ砂、凸面細かな斜め格子叩き目を持ち、永福寺創建期の女瓦B類と同じである。

17～20は瓦質手焙り口縁部小片。図55-21～22は砥石、中砥。23は砥石、仕上げ砥。 (早野)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-64	54-5	8.1	5.3	2.0
HT-64	54-1	7.3	4.7	2.1		6	7.3	5.2	2.0
	2	8.0	5.0	2.1		7	7.8	6.9	1.3
	3	7.2	4.2	2.0		8	13.0	9.5	3.3
	4	8.7	5.8	2.1					単位(cm)

表14 方形竪穴64出土かわらけ法量

方形竪穴65

C-7～8間に検出された。南西部分を方竪58に、北東壁隅を方竪64に切られている。中央部を方竪67によって破壊されている為、不明瞭な確認であるが、残存部からの推定規模は南北8.7m、東西5.8m、確認面からの深さ0.7mを測る。平面形は、南北に長軸を持つ長方形を呈し、床面からの標高は4.9mである。

平坦な床面からは、南北に走る5本の溝状の遺構が検出された。溝の規模は幅20cm～30cm、深さ4～7cmであり、暗茶褐色砂質土の覆土から見て根太木の捉え方痕と考えられる。

方形竪穴65出土遺物 (図-57.58)

図-57・1～16はロクロ成形によるかわらけ。1～11は小型のもの。12は中型のもの、13～16は大型のものである。1～6は器高が低く、3は口径、底径比が小さい。1～11は体部中位に稜をもち、ゆるやかに立ち上がる。15.16は体部下位に弱い稜を持ち、外反しながら立ち上がる。

17は青磁蓮弁文碗。胎土は灰色堅緻土。釉は灰緑色。器表の蓮弁文は複弁である。

18は青白磁合子。口径7.8 cm、器高9.2 cm。胎土は白濁色粗土。外面に蓮弁を配し、蓋受けは内側が高く器壁は薄い造りである。

19は白磁口兀小皿片。胎土は白色硬質堅緻土。釉は外底部にも施され、緑灰白色。

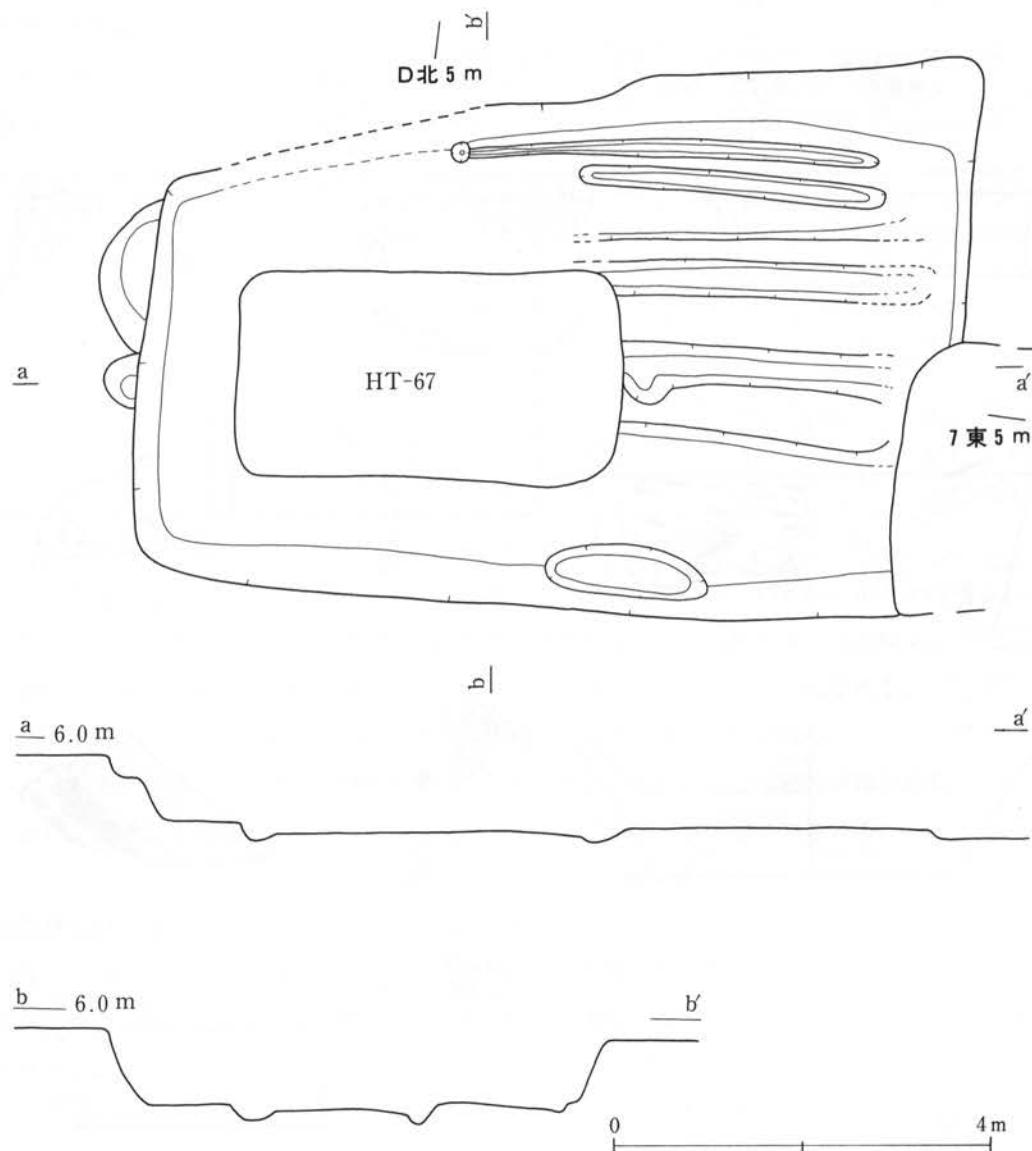


図 56 方形竪穴 65

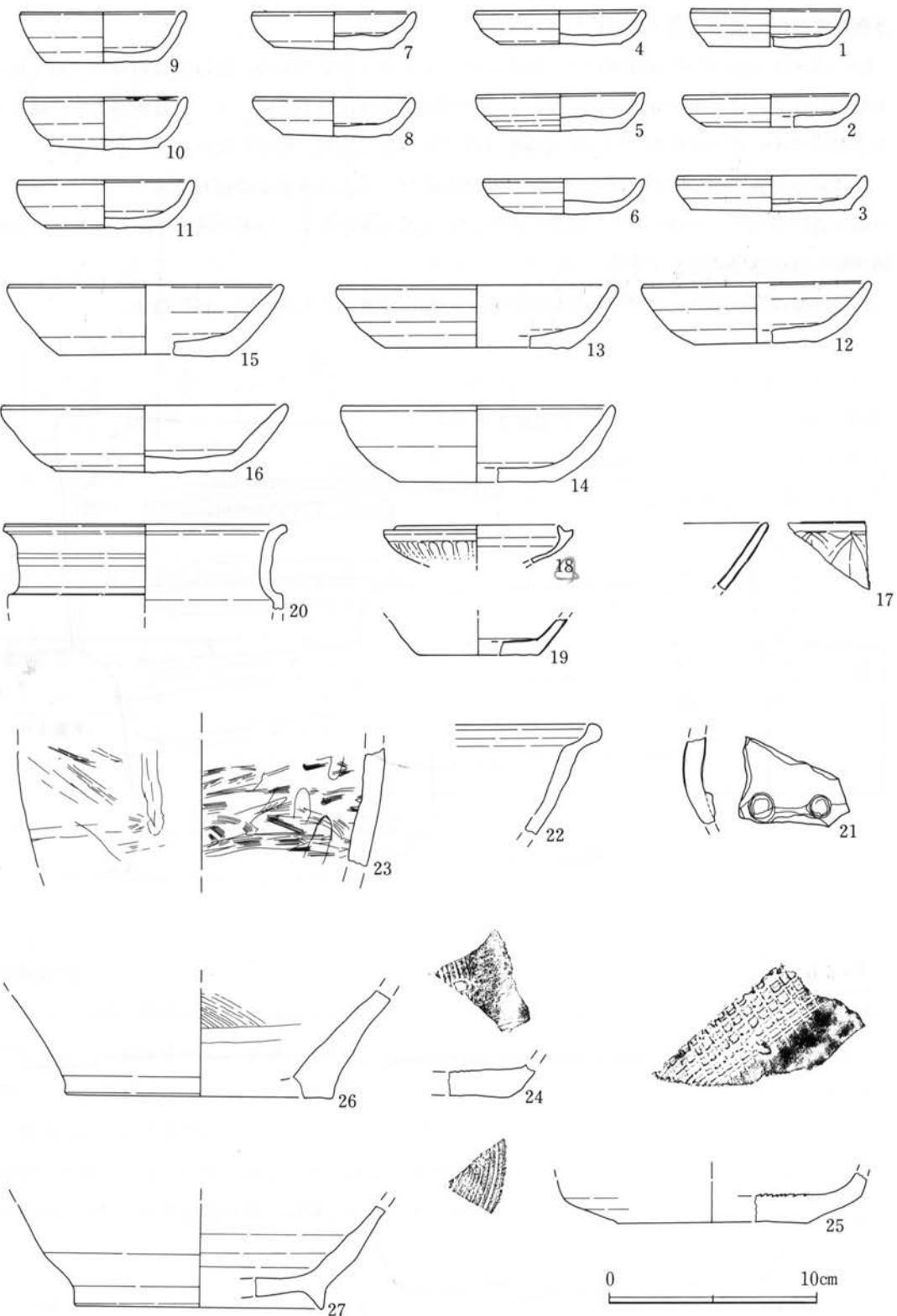


図 57 方形竪穴 65 出土遺物(1)

20は瀬戸香炉。復元口径13.6cm。胎土は灰白色緻密土。釉は灰白色。口縁部が折り返される。

21は瀬戸香炉胴部片。胎土は灰白色緻密土。釉は暗緑色。胴部に貼りつけ珠文の痕跡が見られる。

22は瀬戸折縁皿。胎土は灰白色精良土。釉は灰釉で淡緑灰色を呈し、内外面ハケ塗り。23は瀬戸四耳壺胴部片。胎土はやや精良土。釉は緑茶褐色。内面に指頭痕、ハケ痕が残る。

24は折縁碗底部片。胎土はやや粗土。釉は淡緑色で、内底中央付近に3重の沈線が巡る。

25は瀬戸卸し皿底部片。復元底径9cm。釉は灰色を呈し、卸し目は粗雑である。

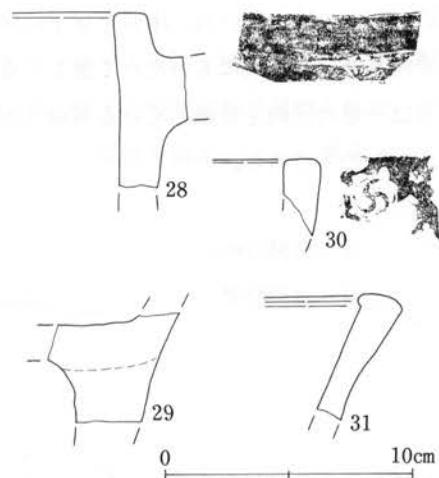


図55 方形豎穴65出土遺物(2)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-65	57-9	7.8	5.4	2.4
HT-65	57-1	7.5	5.2	1.8		10	7.7	5.2	2.5
	2	8.2	6.0	1.6		11	8.3	5.6	2.3
	3	8.9	7.7	1.7		12	10.8	5.8	2.9
	4	8.0	5.8	1.6		13	13.2	8.8	3.0
	5	7.9	6.0	1.8		14	13.0	7.6	3.7
	6	7.7	4.7	1.7		15	13.0	8.1	3.3
	7	7.8	5.7	1.8		16	13.5	8.4	3.2
	8	7.5	5.2	2.9					単位(cm)

表15 方形豎穴65出土かわらけ法量

26は常滑こね鉢片。復元底径13cm。胎土は粗くザックリしている。内外面に横ナデ痕残る。

27は山茶碗窯系こね鉢。復元底径12cm。胎土は灰色を呈し、小石粒を多く含み粗土。

28は瓦質鍔付き手焙り。橙灰色を呈し、鍔の上部に輪花文のスタンプが施される。

29は瓦質手焙り。胎土は砂や石粒を含み、灰色。内底面に横ナデ痕が残る。

30は手焙り口縁片。器表は淡橙色を呈し、胎土は軟質。表面には三ツ巴文が施される。

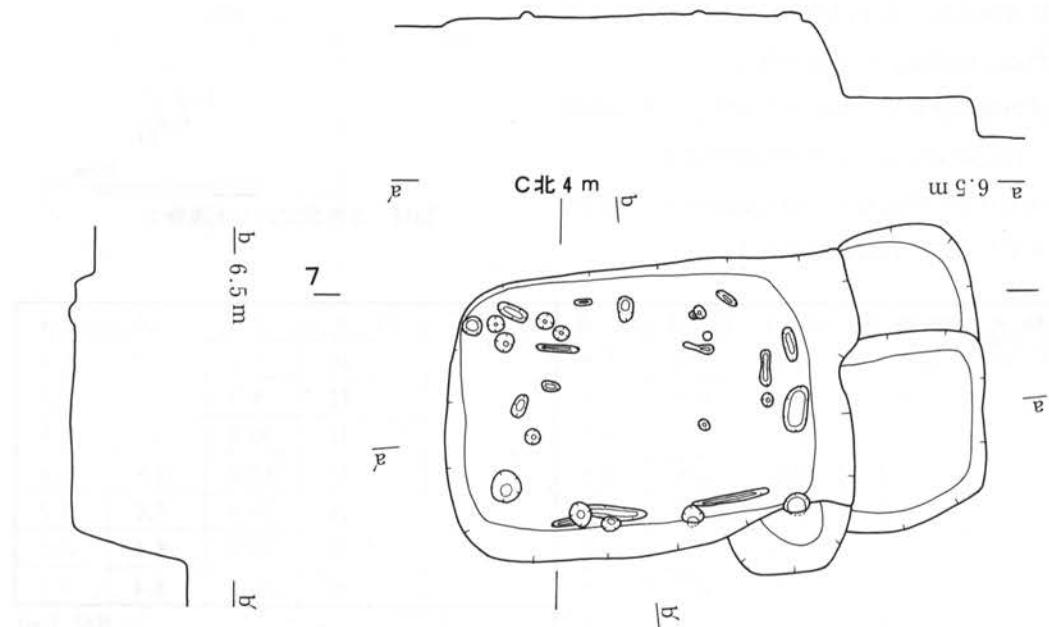
31は瓦質鉢形手焙り。口縁端部はやや丸みを持ち、内側に小さく引き出される。

方形豎穴66(図-59)

B・C-7グリッドで検出された。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。掘り方は南北4.35m、東西3.05m、確認面からの深さ1.26mの規模を測る。床面の標高は5.1mである。ほぼ平坦な床面からは、18口のピット、幅約10cm、深さ2cmの残存痕跡が希薄な2条の溝、楕円形を呈するピットとも溝ともつかないものが7口確認された。ピットは最大のもので径35cm、深さ10cm、最小のもので径7cm、深さ3cmを測る。これらのピット及び溝等は豎穴の東西軸、南北軸に対して何ら

規則的な配列を持たない為、床面を水平に保つ為の根太、もしくは補助材の痕跡と考えられる。

多くの方堅は何時期にもわたって激しく重複しているが、その間で細く尾根状に地山が残される。これらは一定の区画を意識している可能性が高く、尾根は建物間の通路的な役割として機能したと考えたいところである。



土層堆積

- | | | | |
|------------|------------------------|--------------|---------------|
| 1. 暗茶褐色砂質土 | 炭化物ブロック少々、貝片少々、かわらけ粒微量 | 11. 灰茶褐色砂質土 | 黄色砂、炭化物層 |
| 2. 茶褐色砂質土 | かわらけ粒、炭化物 | 12. 灰黄色砂層 | 炭化物ブロック、貝粒子大量 |
| 3. 茶褐色砂質土 | 貝片、炭化物ブロック | 13. 黄色砂+炭化物層 | |
| 4. 暗茶色弱粘質土 | 炭化物、黄色砂 | 14. 灰茶色砂質土 | 粘質土ブロック |
| 5. 暗黄色砂層 | 炭化物 | 15. 灰茶色砂質土 | 炭化物ブロック |
| 6. 暗茶褐色砂質土 | | 16. 灰茶色砂質土 | 炭化物、粘質土ブロック |
| 7. 暗黄色砂質土 | 炭化物、貝粒 | 17. 暗茶色砂質土 | 黒色砂質土ブロック状 |
| 8. 暗黄色砂質土 | 炭化物ブロック | 18. 黄茶色砂質土 | 炭化物ブロック状 |
| 9. 灰黄色砂層 | 貝粒、しまり無 | 19. 暗黄灰色砂質土 | 炭化物 |
| 10. 灰黄色砂層 | 炭化物 | 20. 壁崩れ | |

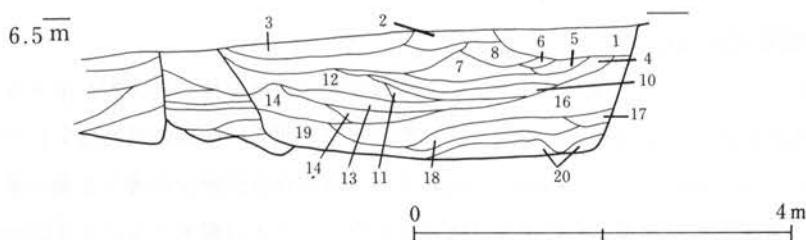


図 59 方形堅穴 66

方形竪穴67（図-60）

C-7～8グリッド間、方形竪穴65号のほぼ中央部にスッポリ入る形で検出された。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。方形竪穴65の削平を受け、掘り方の壁は殆ど認められないが、残存壁から、南北4.4m、東西2.6m、確認面からの深さ0.15mの規模を測る。床面の標高は5.0mを測る。

ほぼ平坦な床面には、東・西・南・北壁内側に幅25～30cm、深さ10～15cmの規模を有する地覆材の痕跡とみられる溝、径25cm、深さ7cmのピットが2口配されている。地覆材痕から推定される床面積はおよそ7m²である。

方形竪穴67出土遺物（図-61）

図-61・1～6はロクロ成形のかわらけ。1～5は小型のもので、体部中位に稜を持ち直立気味に立ち上がる。1は口唇部に2mm角の切り込みがあり、その周辺に煤が付着する。3は外面8割りに煤が付着、4・5は口縁部分に煤が付着する。6は中型のもので、体部下位に稜を持ち外反気味に立ち上がる。7～9は大型のもので、体部下位に稜を持ち、ゆるやかに開き気味に立ち上がる。10は大型品より口径、底径2cm程大きく、体部上位に稜を持ち直立気味に立ち上がる。

11・12は瀬戸鉢し皿。胎土は灰白色を呈し、精良土。釉は黄緑色を呈し、バケ塗りである。鉢目は共に粗雑である。11の復元底径は9.6cm、12の復元底径は9.8cmを測る。

13・14は常滑甕口縁片。胎土は長石粒、砂粒を多く含みガサつく。13の縁帶は頸部につく。14の口縁部はN字状に近く折り曲げる。

15は瀬戸壺。復元口径7.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、微砂を含むがやや粘りのある良土釉は淡灰緑色を呈する。口縁部は短く垂直に立ち上がり、強いヨコナデによりやや突帯状となる。内面肩部より下位に指頭痕がみられる。

16～18は常滑こね鉢片。胎土は灰褐色を呈し、長石粒、砂粒を多く含むガサついた硬質土。16は口縁端部を丸くおさめている。17.18は強いナデによりやや突帯となり、上方につまみ上げられる縁帶部である。

19.20は瓦質輪花手焙り。19は灰白色を呈し、内外面に丁寧なミガキがかかる。外面には菊花文のスタンプが施されている。20は黒色を呈し、内外面に幅約3mmの箇ミガキ痕がみられる。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-67	61-6	11.5	6.9	3.0
HT-67	61-1	7.3	4.9	2.0		7	12.4	6.2	4.1
	2	7.4	4.3	1.8		8	13.5	7.8	3.7
	3	7.8	4.2	2.2		9	13.6	7.6	3.9
	4	7.7	4.8	2.2		10	16.1	8.7	4.4
	5	7.3	4.4	2.2					単位(cm)

表16 方形竪穴67出土かわらけ法量

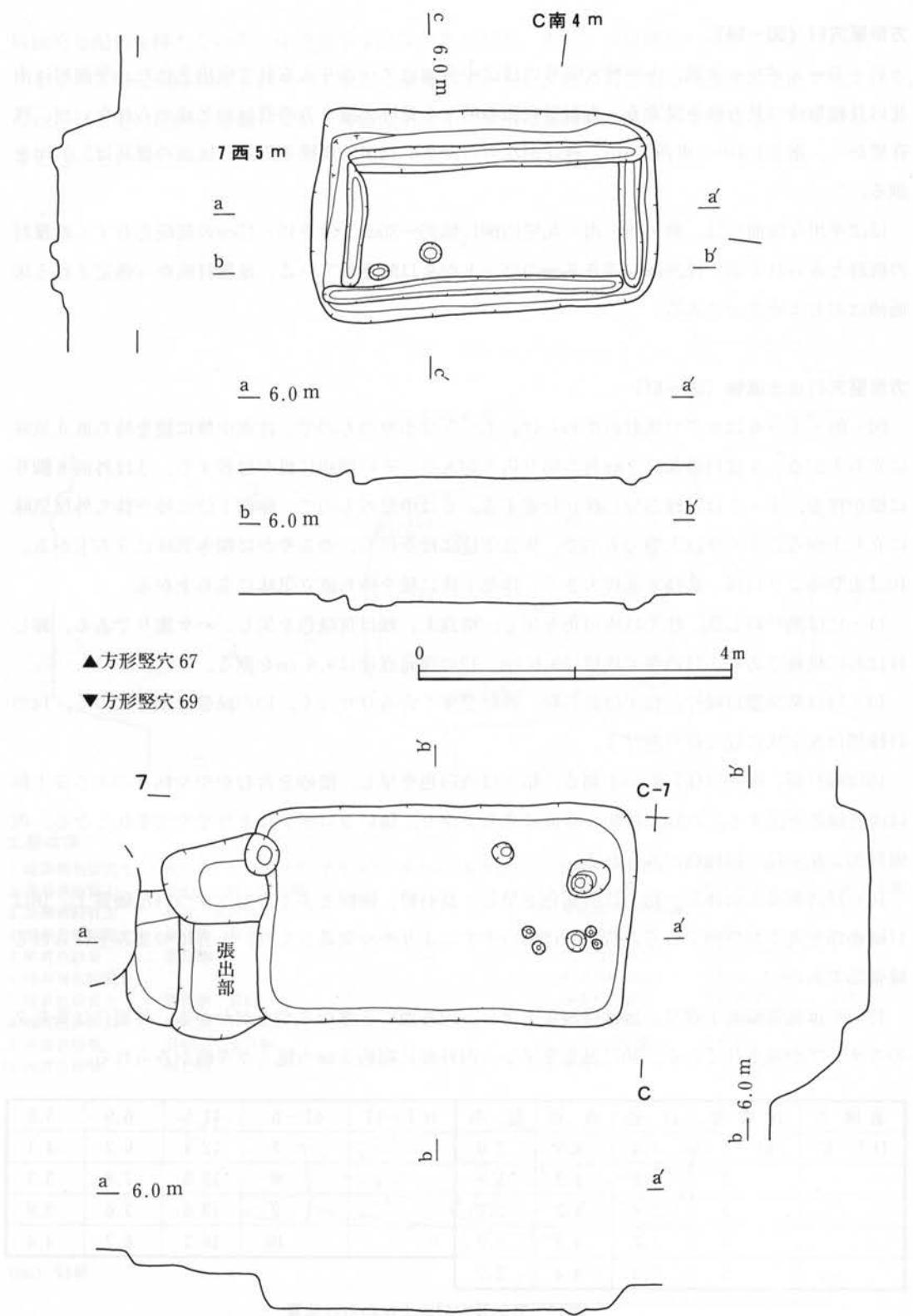


図 60 方形豎穴 67・69

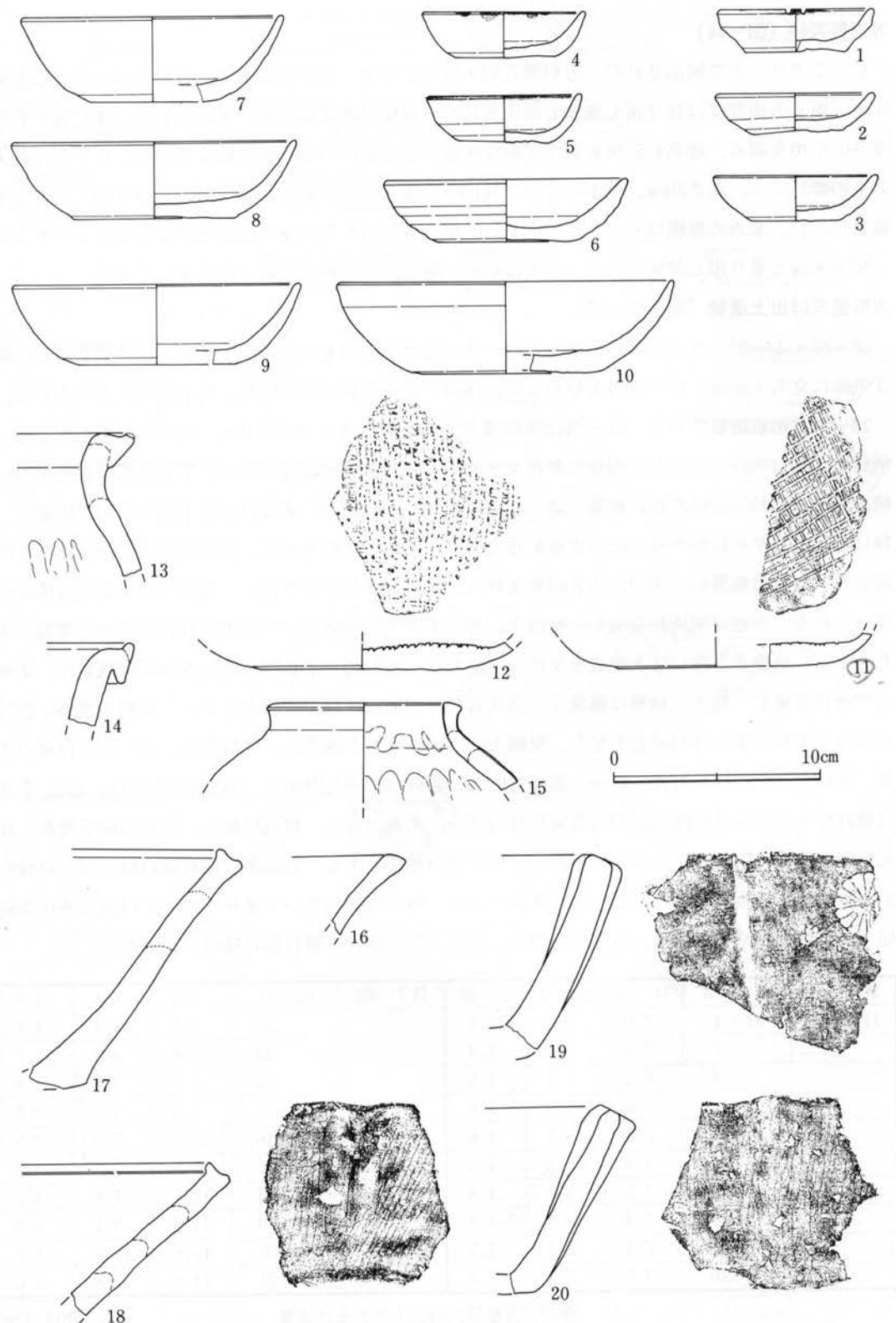


图 61 方形竖穴 67 出土遗物

方形竪穴69（図-60）

C-7グリッドで検出された。方形竪穴53・54号を切り、平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。掘り方南壁には張り出し施設も検出された。規模は南北4.75m、東西2.8m、確認面からの深さ0.5mを測る。標高4.5mを測る平坦な床面からは8口のピットが確認された。ピットは最大のもので径50cm、深さ20cm、最小のもので径13cm、深さ5cmである。張り出し部分は西・南壁を土壌に切られ、東西の規模は不明だが、南北1.0m、確認面からの深さ約30cmを測ることができる。主屋部床面と張り出し部床面のレベル差は45cm、張り出し部が一段高く形成されている。

方形竪穴69出土遺物（図-62・63）

図-62・1～21はロクロ成形のかわらけ。1～15は小型のもの。体部中位～下位に稜を持ち、開き気味に立ち上がる。16～21は大型のもの。体部中位～下位に稜を持ち、開き気味に立ち上がる。

22～34は舶載磁器である。22～24は青磁蓮弁文碗。22は復元口径9.9cm。素地は白濁色を呈し、精良土。釉は明緑色を呈し、内面に劃花文を配する。23は復元底径4.2cm。素地は明灰色を呈し、精良緻密土。釉は淡緑青色、釉層は薄い。24は復元口径14.6cm。素地は白色を呈し、精良緻密土。釉は緑灰色で厚めにかかる。25は青磁劃花文碗片。素地は灰色を呈し、精良緻密土。釉は透明な暗緑灰色、釉層は極薄い。26.27は青磁無文鉢片。26は口縁部を折り返し、端部の折り曲げは僅かに認められる。素地は明灰色を呈し、堅緻土。釉は不透明な青緑色。27は復元口径12.5cm。素地は灰色を呈し、堅緻土。釉は二次焼成を受けたと思われ、乳白色で不透明。28は青白磁梅瓶蓋片。素地は明灰色を呈し、粗土。釉層は極薄く、淡水青色。内面は無釉で赤灰色を呈し、調整も荒い。29は白磁合子蓋片。素地は白濁色を呈し、堅緻土。内面にも釉が施され、淡緑白色。30～32は白磁口兀皿。30は口径8.9cm、底径5.4cm、器高2.9cm。素地は白濁色堅緻土。31は復元口径11.4cm。素地は微砂粒を含む精良堅緻土。32は復元口径14.6cm。素地は白色、精良堅緻土。34は白磁壺頸部。復元口径8.9cm。素地は明灰白色で精良土。釉は青白色を呈する。33は瀬戸四耳壺口縁。復元口径9.2cm。口縁部は折り返され、部分的に隙間がある。釉は淡緑色でハケ塗り。35.36は南部系山茶碗。胎土は砂粒を多く含み粗雑。底部は糸切り。高台は貼り付け、疊付部に糊痕が見られる。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-69	62-11	7.5	4.1	1.6
HT-69	62-1	7.9	6.0	1.8		12	7.4	4.3	1.8
	2	7.5	5.4	1.4		13	7.0	5.3	1.7
	3	7.2	5.1	1.5		14	7.2	4.5	1.9
	4	7.6	6.0	1.6		15	7.7	5.5	2.0
	5	7.8	5.1	1.6		16	12.9	7.9	3.5
	6	7.9	6.2	1.5		17	12.7	7.2	3.2
	7	7.5	5.2	1.8		18	12.7	7.8	3.6
	8	7.9	5.4	1.8		19	13.6	9.1	3.3
	9	7.5	5.1	1.5		20	12.9	8.3	3.7
	10	7.7	5.2	1.6		21	14.0	7.8	3.6

表17 方形竪穴69出土かわらけ法量

単位(cm)

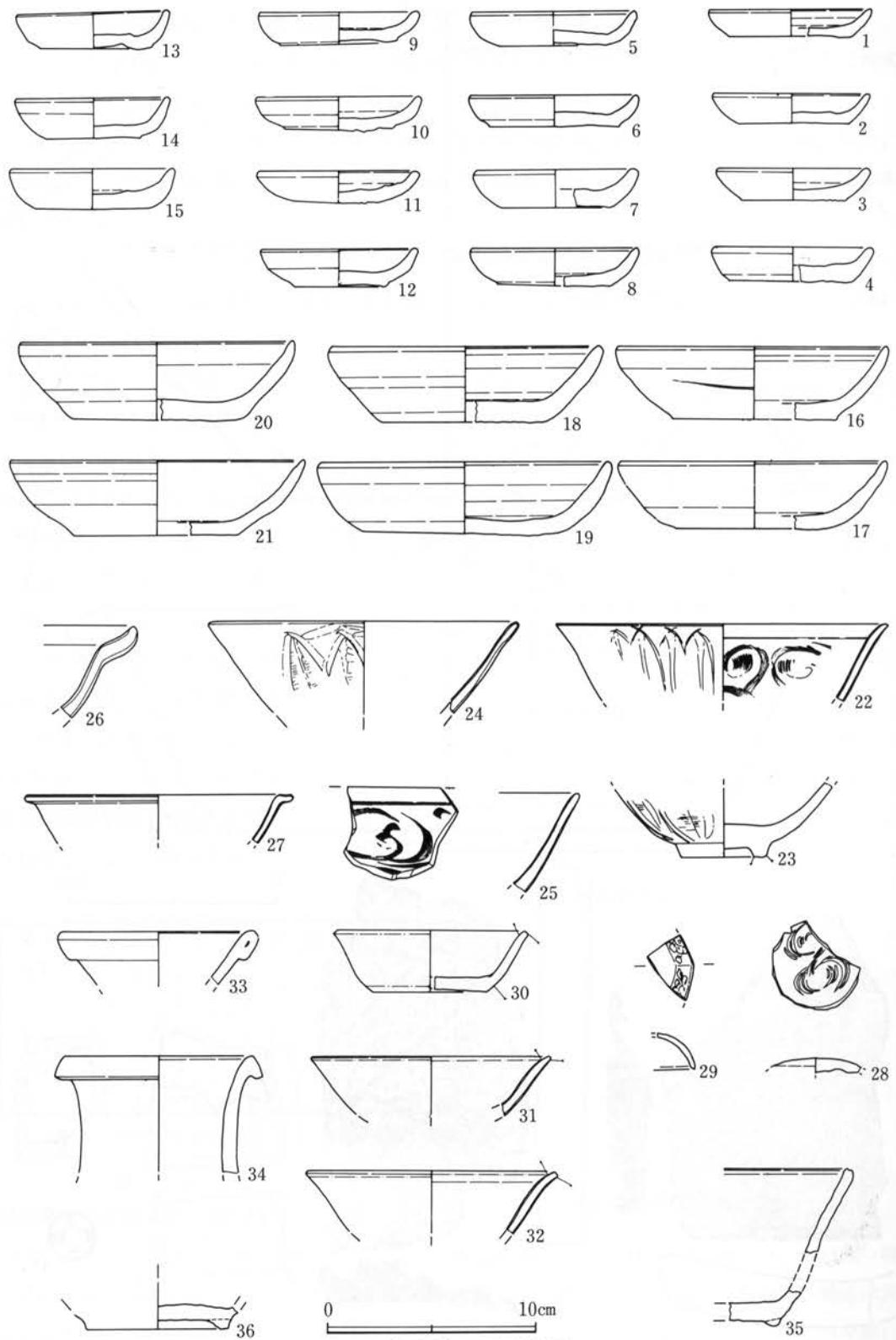


図 62 方形竪穴 67 出土遺物(1)

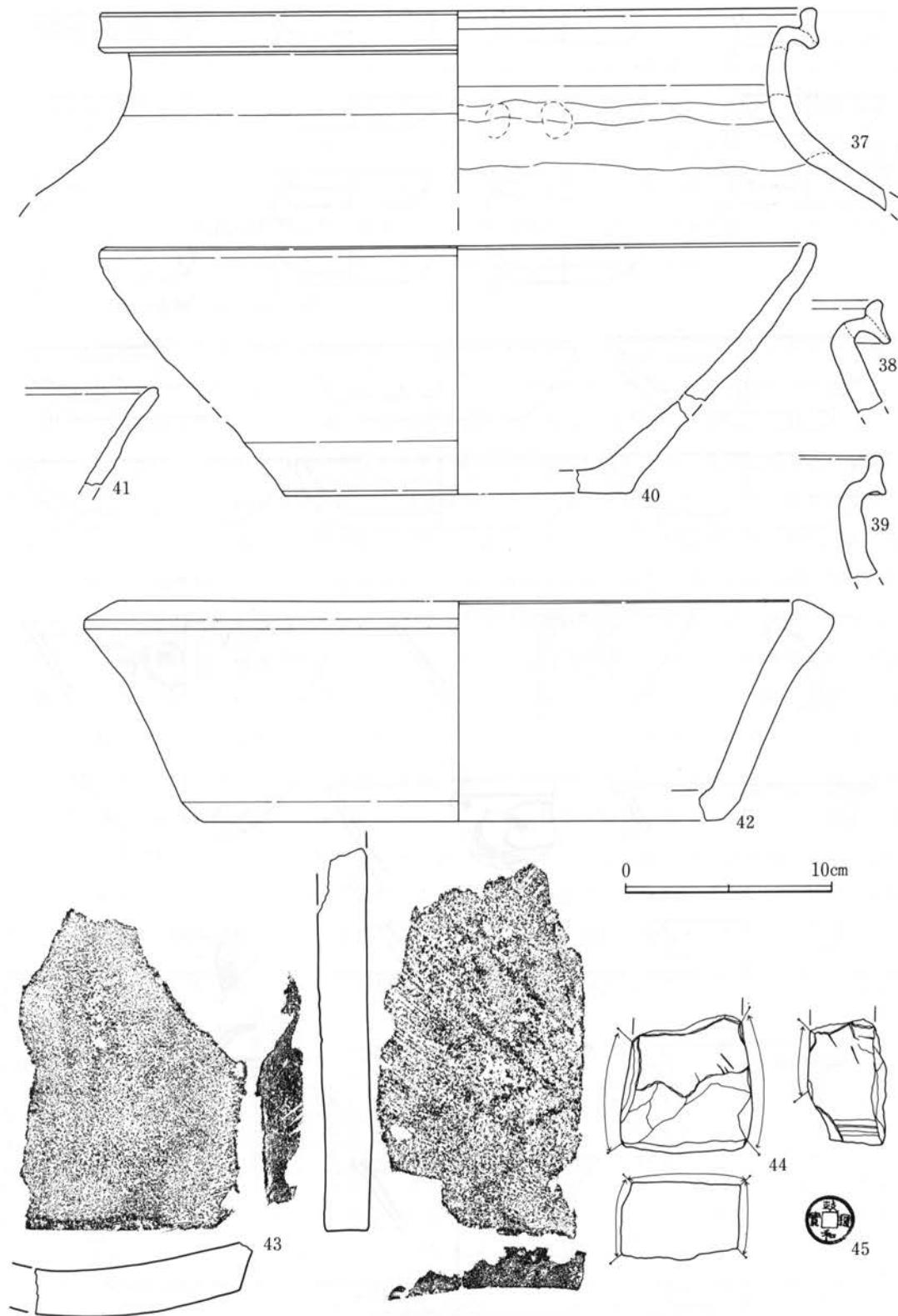


図 63 方形竪穴 67 出土遺物(2)

37~39は常滑甕口縁。37は復元口径33.4cm。胎土は暗灰色良土。口縁部はN字状を呈する。

40,41は山茶碗窯系こね鉢。40は復元口径34cm、高台系16.8cm、器高12cm。胎土は暗灰色で焼成良好。41は小片の為復元不可能。胎土は砂粒を含む、暗灰の色粗土。

42は瓦質手焙り。復元口径33cm、底径24.6cm、器高10.6cm。胎土は黒灰色、微砂粒を含む粗土。

43は女瓦。凹面は縦方向にナデが見られ、凸面には側縁に平行して叩き板巾約5cmの斜格子の叩き目が見られる。

44は砥石。中砥である。右側面に幅0.3mm程の削痕が見られる。

45は銭。北宋銭「政和通宝」。背面に文字等は見られない。初鑄は1111年。 (小林)

方形豊穴72 (図-64)

B-8グリッドに位置。南側で方形豊穴65に切られる。規模は南北4.2m、東西2.28m、確認面からの深さ0.72mを測る。

床面はほぼ平坦で標高5.22mを測る。西壁内側に4穴、東壁内側に3穴、径10~15cm、深さ約3cmの小型の柱穴が並ぶ。柱穴間は35~40cm。南壁内側中央には径30×40cm、深さ約13cmの中型の柱穴を持つ。北壁中央最下部には完形の小型かわらけが5枚重なるように検出された。

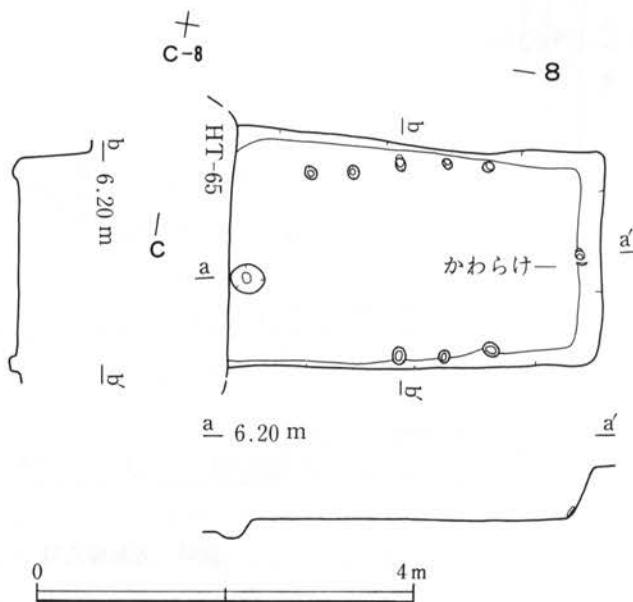


図64 方形豊穴72

遺構名	図番号	口径	底径	器高
HT-72	65-1	7.0	5.2	1.7
	2	6.8	5.5	1.8
	3	7.0	5.0	1.7
	4	7.3	5.2	1.8
	5	7.3	5.6	1.8

表18 方形豊穴72出土かわらけ法量 単位(cm)

方形豊穴72出土遺物 (図-65)

図65-1~5はロクロ成形のかわらけである。体部中程に1、4、5は弱い稜、2、3は強い稜を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。色調は肌色を呈する。胎土は砂粒を含みやや粗い。焼成は良好である。 (早野)

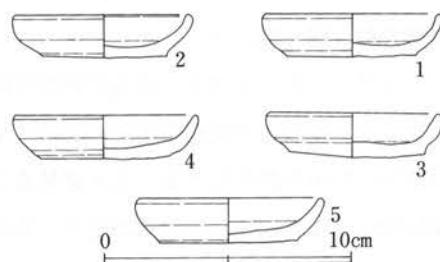


図65 方形豊穴72出土遺物

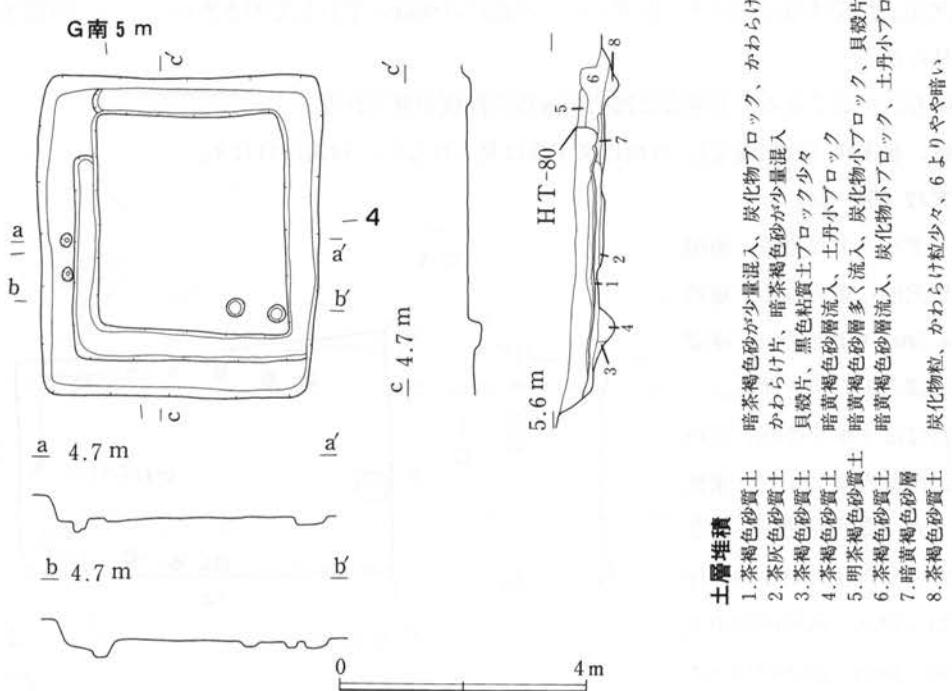


図66 方形豎穴82

方形豎穴82 (図-66)

G-4グリッド、4ライン中央で検出された。平面形は、正方形を呈する。南壁の残存状況はかなり悪いが、掘り方の規模は南北4.55m、東西4.55m、確認面からの深さ南・東壁で約0.2m、北・西壁で0.4mを測定できる。北・東壁直下及び南・西壁内側には、地覆材の抜き取り痕と思われる幅約40cm、深さ7~10cmの溝が巡る。この地覆材痕から推定される方豎の床面積はおおよそ10.2m²である。床面はほぼ平坦であり、南東隅より2口、西壁内側中央寄りに2口、計4口のピットが検出された。床面の標高は3.8mを測る。

遺構名	図番号	口径	底径	器高
HT-82	67-1	7.3	5.6	1.8

表19 方形豎穴82出土かわらけ法量 単位(cm)

方形豎穴82出土遺物 (図-67)

図-67・1はロクロ成形の小型かわらけ。体部下位に強い稜を持ち、開き気味に立ち上がる。

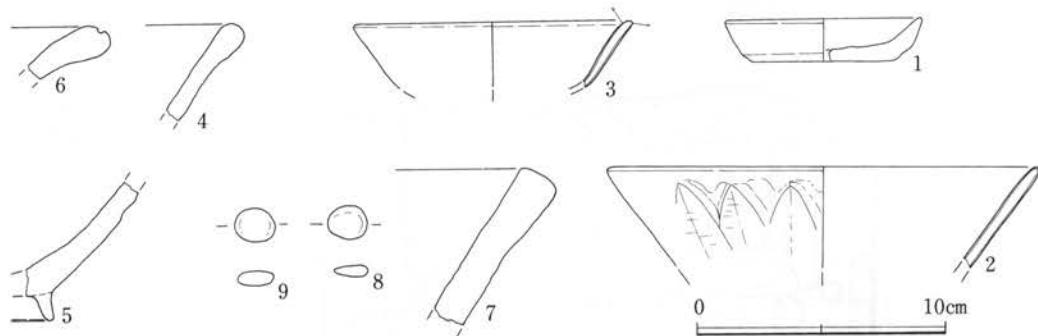


図67 方形堅穴82出土遺物

2は青磁蓮弁文碗。復元口径17.2cm。素地は灰白色を呈し、精良堅緻土。釉は透明感のある灰緑色で、蓮弁には鎬を持たない。

3は白磁口兀皿。復元口径11.1cm。素地は白色精良土。口唇部が四角く角ばっている。

4～6は山茶碗窯計こね鉢。4は口縁片。胎土は灰白色を呈し、小礫、砂粒を含むが比較的良土。器表は全体に降灰を受け、淡灰緑色である。5は胴部片。胎土は灰白色を呈し、やや粘性のある良土。6は口縁片。胎土は暗灰色を呈し、ガサついた硬土。口唇部に沈線が巡る。

7は瓦質手培り口縁片。胎土は灰褐色を呈する。口唇部に横方向のヘラ磨きが施される。

8・9は碁石。8は径1.5cm、厚さ0.5cm、9は径1.5cm、厚さ0.4cmである。

方形堅穴84（図-68）

G・H-3グリッド付近で検出された。西壁中央部を方形堅穴90により破壊されている。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。南北5.8m、残存する西壁から東壁まで4.4mの掘り方を有し確認面からの深さ0.5mを測る。南壁東・東壁直下に幅25cm～30cm、深さ5cm～10cmの溝が巡る。東壁直下の溝には、径20cm、深さ20cm～40cm程のピットが密集する。これらは、壁板を支える為の杭穴とも考えられる。南北中軸には、径30cm、深さ40cm～50cmの規模を持つピットが70cm～80cmの間隔で並んでいる。東西軸上には、南側に径20cm、深さ30cmのピットが35cm～40cmの間隔で、方堅84の東壁まで配される。その他に8口のピットを検出した。南・北壁西側残存部にはピット、溝等は検出されなかった。

方形堅穴84出土遺物（図-69・70）

図-69・1～18はロクロ成形のかわらけ。1～8は小型のもの、9～18は大型のものである。1～5は体部中位に弱い稜を持ち、1～3は開き気味に、4・5は直立気味に立ち上がる。6は口唇部内側に強い稜を持ち内湾する。7は体部下位に弱い稜を持ち、直立気味に立ち上がる。8は口縁部が強い横ナデにより、やや外反する。9・10は稜を持たず、直立気味に立ち上がり、15～17は開き気味に立ち上がる。11～14は体部中位に弱い稜を持ち、11は直立気味に、12～14はやや外反気味に立ち上がる。18は口縁部内側に横ナデによる強い稜を持ちが外反する。

19は青磁香炉器台片。素地は明灰色を呈し、精良緻密土。釉は淡緑灰色で不透明、釉層は厚め。

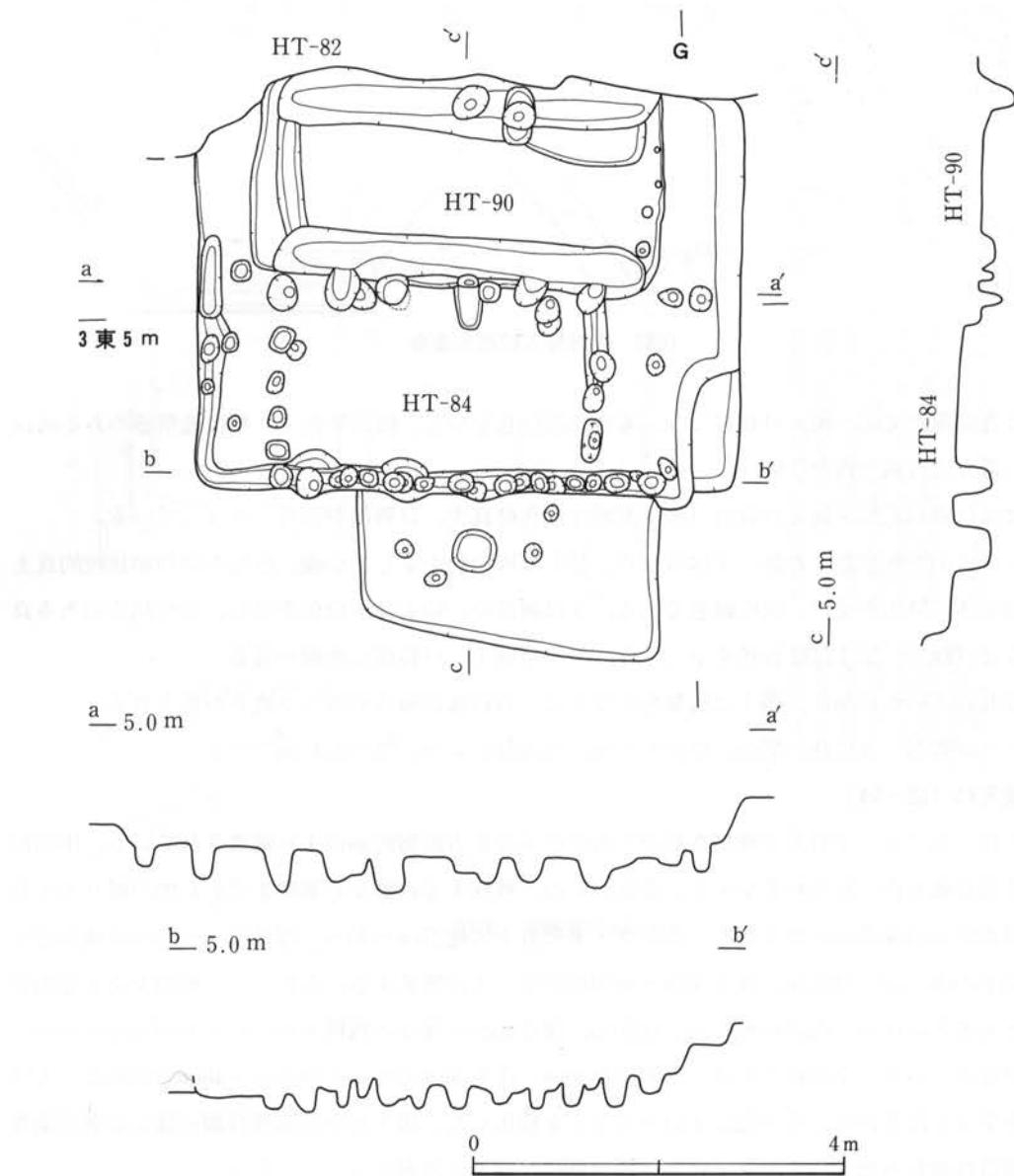


図68 方形竪穴84・90出土遺物

20は青白磁。合子の蓋。復元高台径4.3 cm、器径6.5 cm、器高1.3 cm。素地は明灰白色を呈し、精良緻密土。釉層は極めて薄く、淡水青色で透明。頂部には牡丹文が配される。

21は瀬戸卸し皿口縁片。復元口径14.8cm。釉は灰緑色を呈し、薄いハケ塗りである。

22は常滑小壺口縁片。復元口径 5 cm。頸部から口縁にかけて外反し、端部を折り曲げている。

23は山茶碗片。胎土は暗灰色を呈し、微砂を含むが比較的良土。

24は常滑甕口縁片。頸部に縁帯が接し、内面頸部下位から胴部にかけて指頭痕が多く残る。

25は常滑壺口縁片。内面頸部付近に縦4 cm、横5 cmの範囲で非常に細かい傷が見られる。

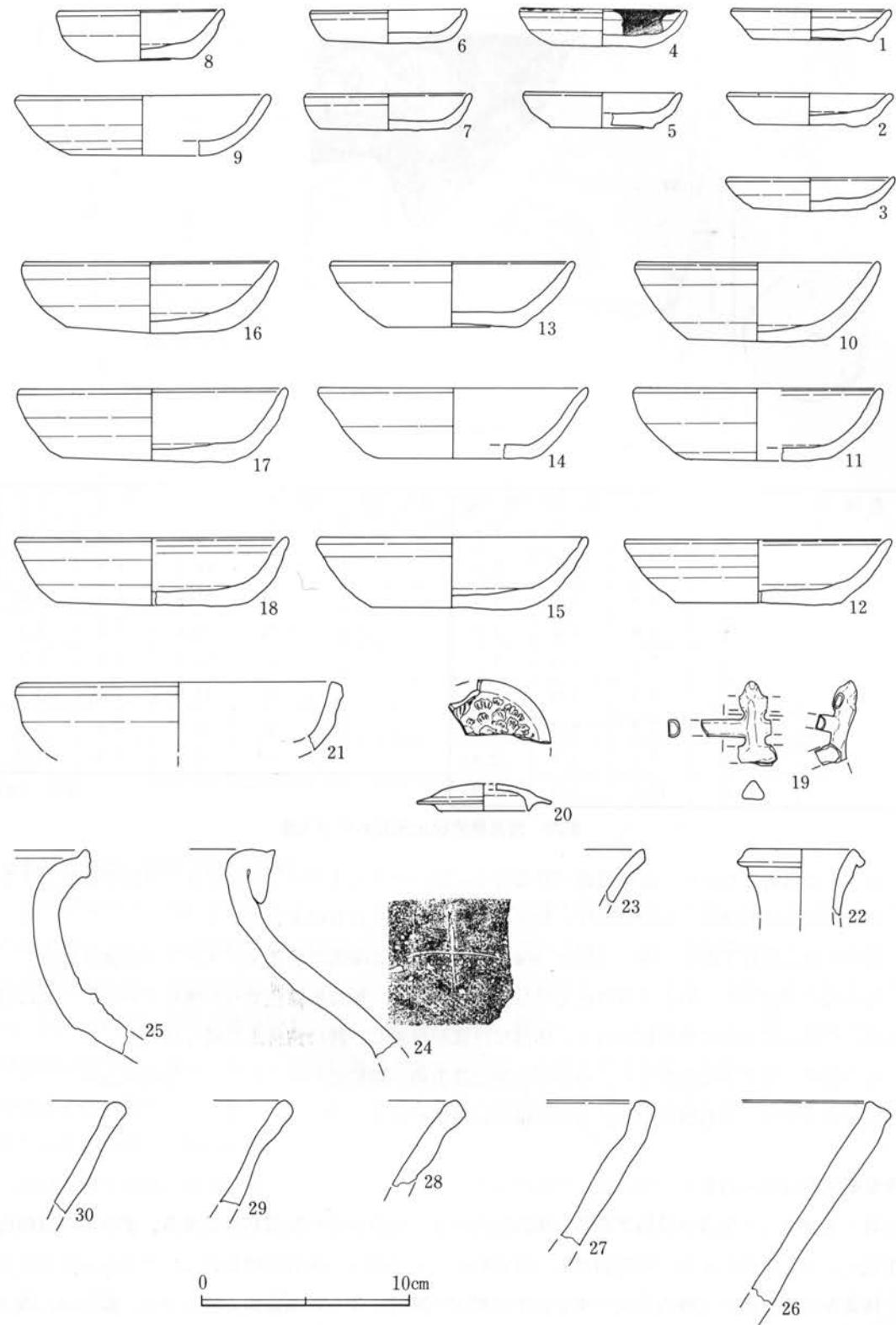


図 69 方形竪穴 84 出土遺物(1)

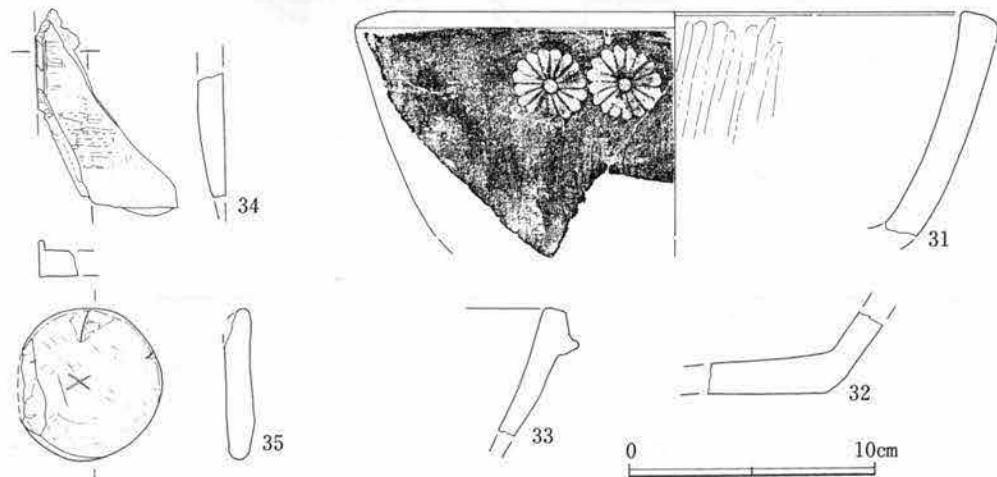


図70 方形豎穴84出土遺物(2)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-84	69-10	11.4	6.7	3.8
HT-84	69-1	7.5	5.7	1.4		11	11.7	7.0	3.5
	2	7.7	5.4	1.5		12	12.7	8.0	3.0
	3	7.9	5.5	1.6		13	11.6	6.5	3.6
	4	7.9	4.4	1.3		14	12.8	7.5	3.4
	5	7.4	5.0	1.7		15	12.7	7.3	3.4
	6	7.3	5.9	1.6		16	11.9	7.1	3.4
	7	7.9	6.2	1.8		17	12.7	7.8	3.4
	8	7.8	4.7	2.4		18	12.8	8.3	3.2
	9	11.7	6.8	2.9					単位(cm)

表20 方形豎穴84出土かわらけ法量

26.27は常滑こね鉢片。27は内面口唇部付近に強いナデによるへこみができ、口唇部は直立する。28~30は山茶碗窯系こね鉢口縁片。胎土は灰色を呈し、長石粒を含み粗土。

図70-31は瓦質手焙り。復元口径23.4cm。器表には径3cm程の菊花文のスタンプが施される。

32は瀬戸皿底部片。胎土は黄白色を呈し、精良緻密土。釉は灰緑色でハケ塗りである。33は滑石鍋。全体に横方向に整形痕が残る。体部には煤が付着し、特に鍔付近に強く付着。

34は硯片。灰黒茶褐色を呈し、残存推定形は長方硯。調整痕が多く見られ未使用に近い。

35は加工土丹。円盤状を呈し、表面に細かい擦痕が残る。使用目的は不明。

方形豎穴85(図-71)

H-5グリッド付近で検出された。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。掘り方の規模は南北5.4m、東西4.6m、確認面からの深さ約0.5mを測り、床面の標高は4mである。

床面からは、南・北壁内側及び東壁直下に幅30~50cm、深さ10cmを測る地覆材痕、幅15cm、深さ2cmの根太木痕、幅25cm、深さ5cm、内に7口のピットを持つ溝が検出された。

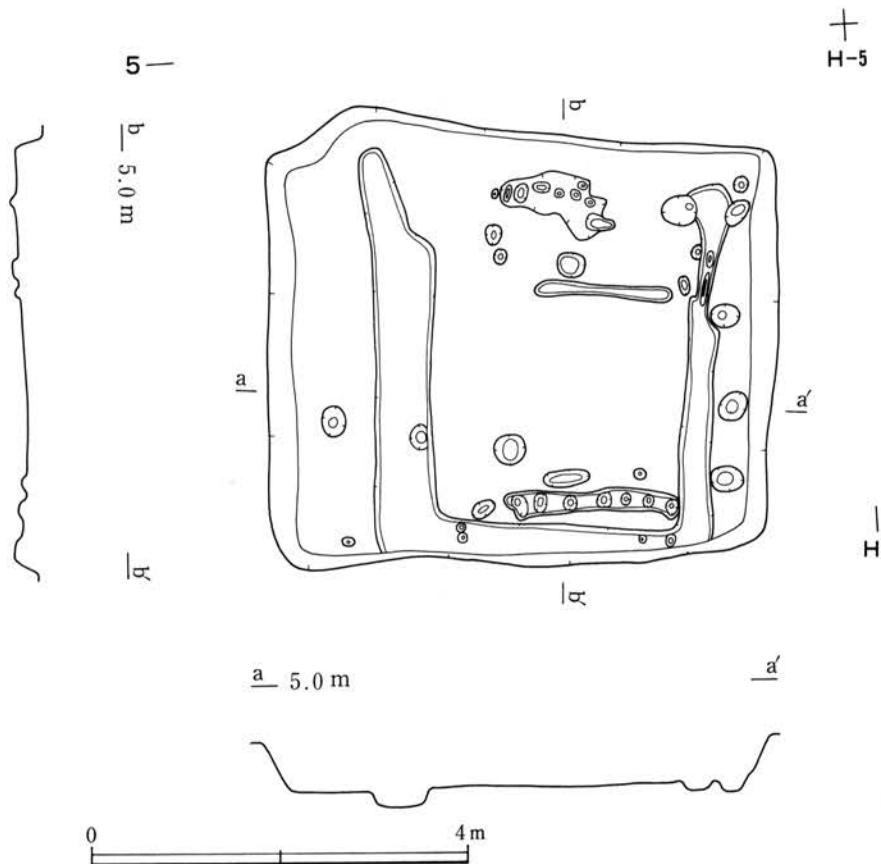


図71 方形竪穴85

方形竪穴85出土遺物（図-72.73）

1～17はロクロ成形のかわらけ。1～5は小型、6～17は大型のものである。1～3はゆっくりたちあがり、4・5は体部中位に稜をもち、直立気味に立ち上がる。6は開き気味に立ち上がる。7は直立気味に、8は外反しながら立ち上がる。9は稜を持たず、ゆるやかに立ち上がり器壁は薄い。10・11は体部下位に稜を持つ。12・13は体部底部に稜を持つ。14は体部下位に弱い稜を持ち、口唇部はやや開き気味である。15は口縁部がやや肉厚で、体部中位より直立気味に立ち上がる。16は体部下位に稜を持ち、やや直立気味に立ち上がる。17は体部中位に弱い稜を持ち、開き気味に立ち上がる。口唇が三角形を呈する。

18は青磁縁鉢。復元口径11.8cm。素地は灰白色精良堅緻土。釉は厚く青緑色。口縁部をゆるやかに折り返すが、端部の折り曲げは不明瞭。19は白磁口兀皿片。素地は白色を呈し、精良土。釉は乳灰色である。

20は瀬戸卸し皿片。胎土は黄灰色を呈し、細かい気泡を含むが、良土。卸し目は粗雑である。

21は吉備系土師質土器。胎土はかわらけに似ているが、硬くしまっている。高台は粗雑な貼り付け

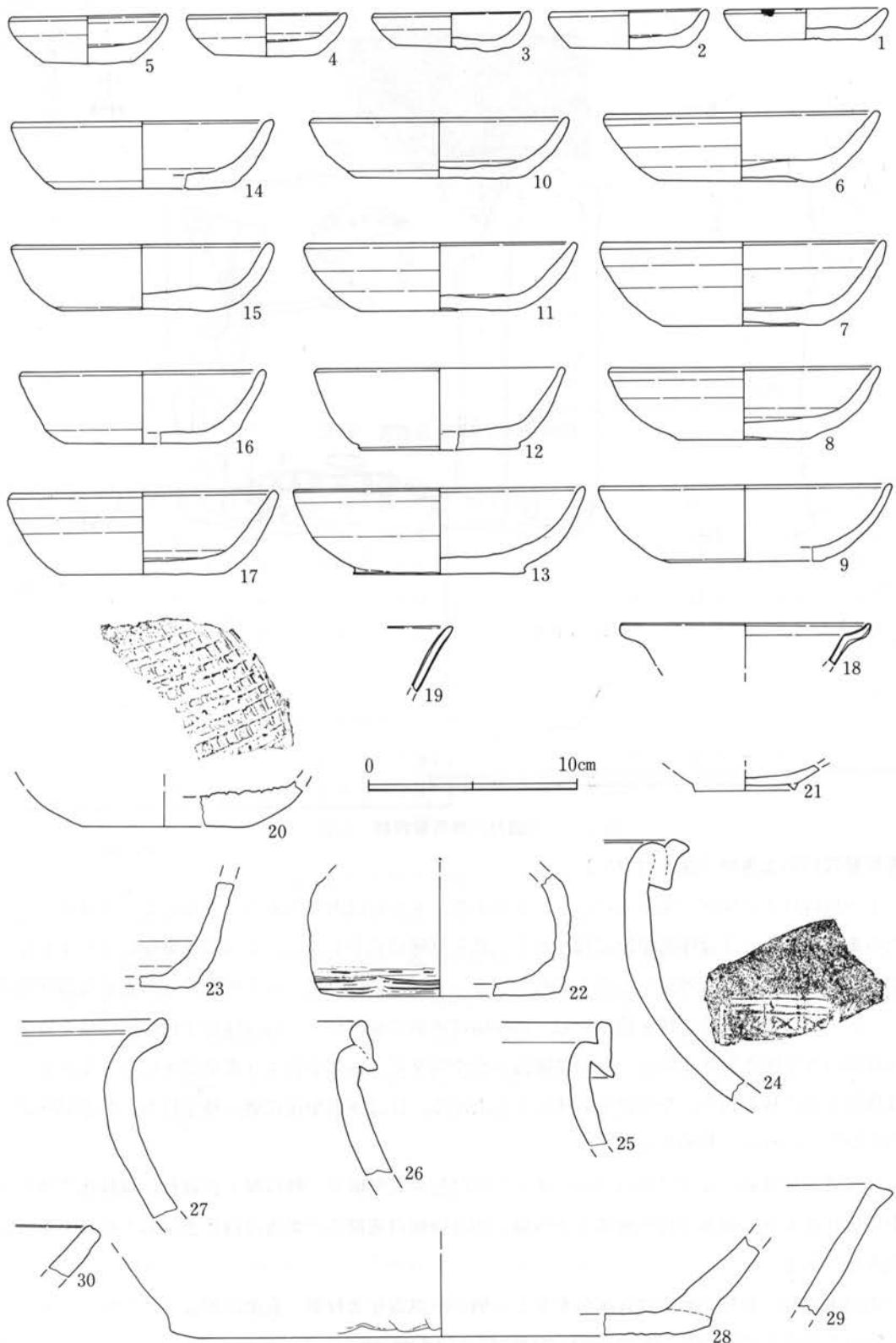


図 72 方形竪穴 85 出土遺物(1)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-85	72-9	13.8	7.3	3.6
HT-85	72-1	7.5	5.7	1.4		10	12.1	7.9	2.9
	2	7.4	5.4	1.8		11	12.2	7.0	3.2
	3	7.3	5.4	1.6		12	11.7	7.5	3.4
	4	7.5	4.9	2.0		13	13.7	8.2	4.1
	5	7.4	4.3	2.3		14	12.4	8.5	3.7
	6	12.3	7.5	3.2		15	12.3	7.1	3.1
	7	13.3	7.6	4.0		16	11.5	7.4	3.5
	8	12.7	6.3	3.5		17	12.5	7.9	3.9

表21 方形堅穴85出土かわらけ法量

単位(cm)

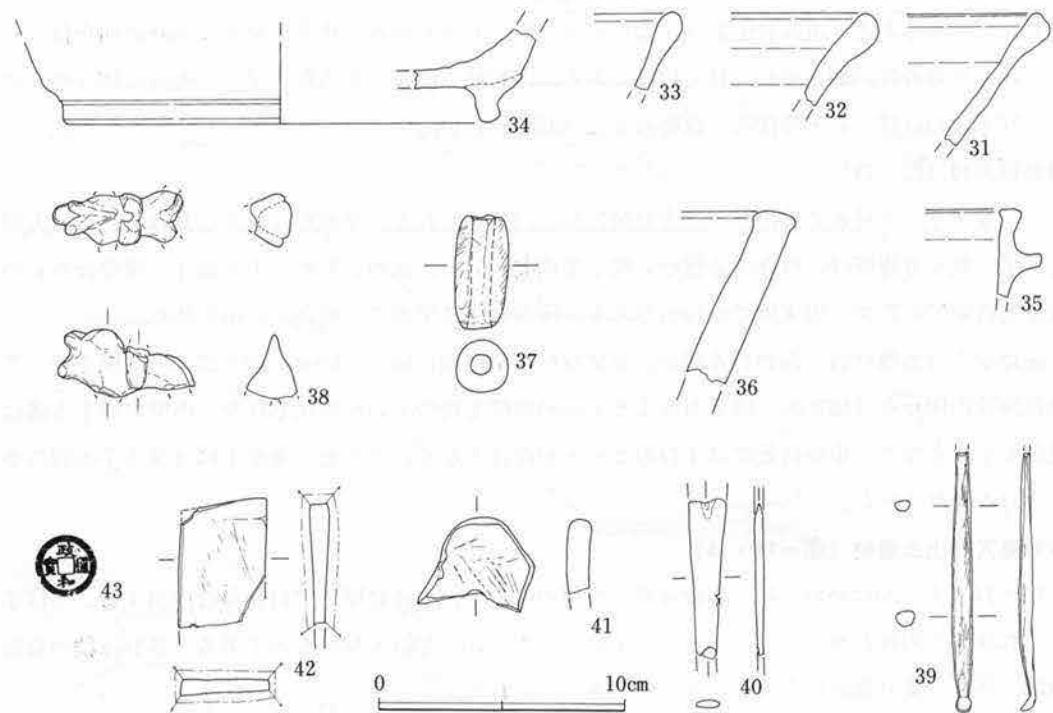


図73 方形堅穴85出土遺物(2)

で、断面は逆三角形を呈する。

22は常滑小壺。復元底径11.3cm。胎土は黒灰色、小石、微砂を含むがきめ細かく良土。内底面附近にタール状物質付着。23は山茶碗窯系こね鉢片。胎土は暗灰色を呈した粗土。24~27は常滑甕口縁片。24は頸部に縁帯が接し、縁帯から内面頸部にかけて自然釉がかかる。25・26は口縁部がややN字状に近く、25は口縁端部が直立し、26は口縁端部がやや内側にむく。27は口縁端部が外側に張り出され、口唇部を上方につまみ上げている。28は常滑甕底部片。復元底径25.8cm。胎土は茶褐色を呈し、混入物を多く含む粗土。

29・30は常滑こね鉢口縁片。胎土は茶褐色を呈し、焼成良好。29は口縁部が強い横ナデにより内側

にへこむ。31～33は山茶碗窯系こね鉢口縁片。31は口縁部が器壁に比べ肉厚になり、外反する。32は口縁部が外反し、口唇部は丸味を帯びる。33は口唇部を丸くおさめ、直立気味に立ち上がる。34は山茶碗窯系こね鉢底部片。復元高台径17cm。胎土は灰色を呈し、混入物を多く含む粗土。

35は鍔釜片。器表は肌色、胎土は黒色微粒等を含みガサつく。口縁端部が内側に引き出される。

36は瓦質手焙り片。器表は黒灰色、芯部は淡橙色を呈し、小石、砂粒を多く含む粗土。37は土錘。径8mmの丸棒を取り外した後、端部をヘラ調整している。

38は土製品。馬である。胎土はかわらけ質。荷を背負った形（あるいは人の足か？）を呈し、脚部を故意に欠いた痕跡がある。

39は銅製耳搔き。残存する長さ10.5cm、最大径0.8cm、最小径0.4cmを測る。

40は骨製笄である。遺存長6.3cm、幅1.5cm、厚0.3cmを測る。片面中央部に溝状の凹を持つ。

41はすり常滑片。42は砥石。仕上げ砥である。泥岩製で扁平な長方形を呈し、側面に擦り切りの痕を残す。43は銭。北宋時代の「政和通宝」。初鑄は1111年。

方形竪穴90（図-68）

B-3グリッド付近で検出した。方形竪穴84・79に切られる。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈す。掘り方規模は、残存する壁から推して南北4.5m、東西2.3m以上を測り、確認面からの深さ北西隅で0.7m、南東隅で0.19mである。床面はほぼ平坦で、標高3.4mを測る。

床面からは地覆材痕と思われる溝が、東壁及び西壁内側に幅50～60cm、深さ20cmの規模を持ってまた南壁内側からは幅25cm、深さおおよそ9cmの規模を持つものが検出された。西壁に即する溝は北側で2段となり、中央付近には4口のピットが確認される。その他、北壁下には深さ7cm程の小穴3口が発見された。

方形竪穴90出土遺物（図-74・75）

図-74・1～20はかわらけ。1は非常に小型のもので、全体に厚めで口唇部は内湾する。2は手すくね成形の内折れかわらけ。3～9は小型のもの。10～20は大型のものである。器形は稜の有無内湾、外反、直立気味に立ち上がるものがみうけられた。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-90	74-11	10.8	6.2	3.4
HT-90	74-1	4.1	3.1	0.9		12	11.8	7.0	3.0
	2	5.7	5.2	1.2		13	11.8	6.0	3.1
	3	7.6	6.2	1.6		14	11.8	7.4	3.0
	4	8.0	4.7	1.7		15	12.1	6.6	3.2
	5	7.3	5.0	1.5		16	12.3	6.9	3.4
	6	7.2	4.5	1.5		17	13.3	7.4	3.5
	7	7.2	4.9	1.7		18	11.8	7.1	3.1
	8	7.7	5.1	1.6		19	10.9	6.4	3.0
	9	7.9	4.9	1.7		20	12.6	8.4	3.7
	10	11.1	5.4	3.3					単位(cm)

表22 方形竪穴90出土かわらけ法量

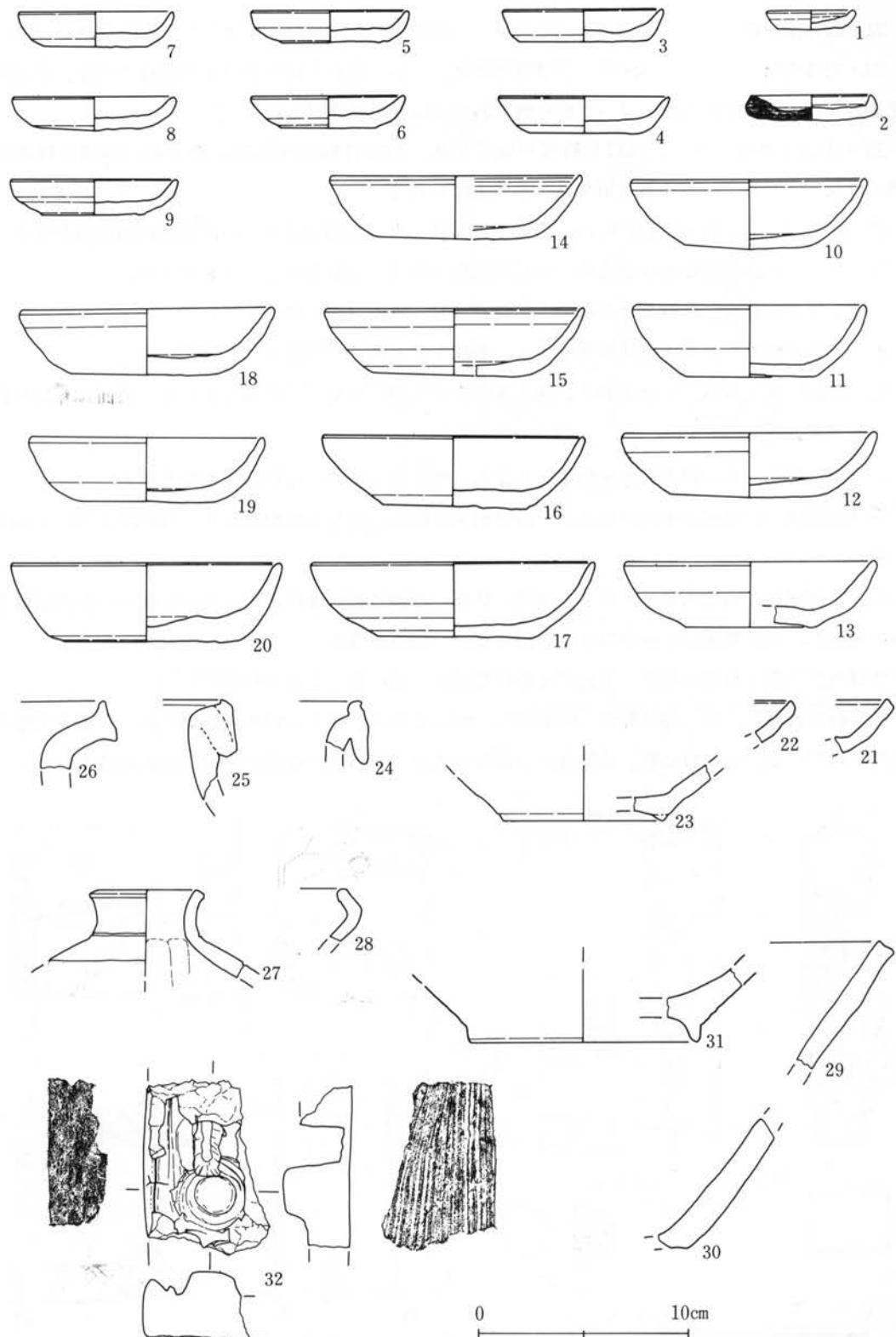


図 74 方形竪穴 90 出土遺物(1)

21・22は瀬戸卸し皿片。胎土は灰白色を呈し、緻密土。釉は薄いハケ塗りで、緑灰白色を呈す。

23・31は山茶碗窯系こね鉢底部。23は復元底径7.7 cm。高台を貼り付けない器種である。31は復元高台径10.8cm。体部外面にはヘラ削り痕、内面には摩滅痕が見られる。

24～26は常滑甕口縁片。24は口唇部が直立気味、25は口縁部が頸部に接する。26は口縁部が強く外反し、口唇部はやや直立気味につまみ上げられる。

27は常滑鳶口壺。復元口径4.6 cm。頸部、肩部に2本の沈線が巡る。内面肩部に指頭痕が残る。

28は常滑片口鉢片。胎土は微白粒、小石を含むが良土。口縁部がくの字を呈する。

29は常滑こね鉢片。口縁端部が横ナデの為へこむ。内面は良く摩滅している。

30は瓦質手焙り片。胎土は淡橙色を呈し、石粒を含み粗い土である。

32は鬼瓦。珠文径は2.4 cmを測り、珠文帯から外周側に向かって隆起している。裏面に糸切り痕を深く残す。

33は滑石製品。滑石鍋の破片を加工した温石。頂部近くに0.8 cm程の孔が穿たれる。

34は滑石鍋。口唇部が平坦に削られ、内外面共に細かい削りで整形される。口唇部より1.3 cm下に鍔がつく。

35・36は砥石。35は灰褐色を呈し、硬質。砥面、側面に幅8 mm程の切り込みと細かい削痕が残る

36は短辺3.5 cm、厚さ1.5 cmを測り、各面に細かい削痕が残る。

37は火打ち石。材質は石英、使用による打撃痕が一部に偏って見られる。

38～41は骨製品。38・39は野沓。鍔形部左の断片である。径6 mm程の孔が穿たれ、斜格子文様が線刻されている。40・41は笄。頂部及び尖端部が欠損している。片面中央部に凹状の溝をもつ。

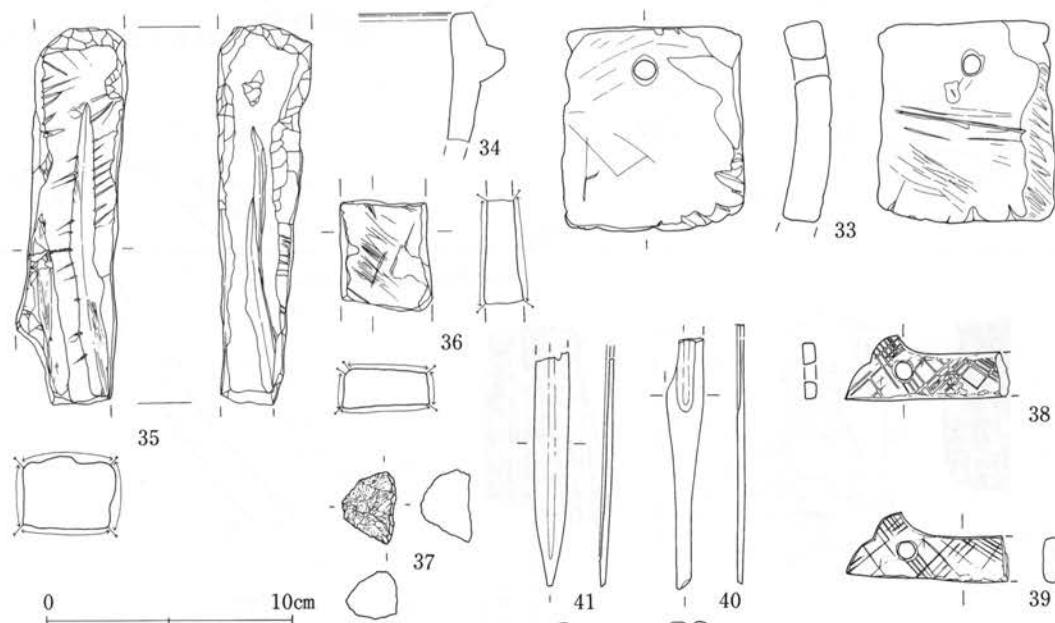


図 75 方堅 90 出土遺物(2)

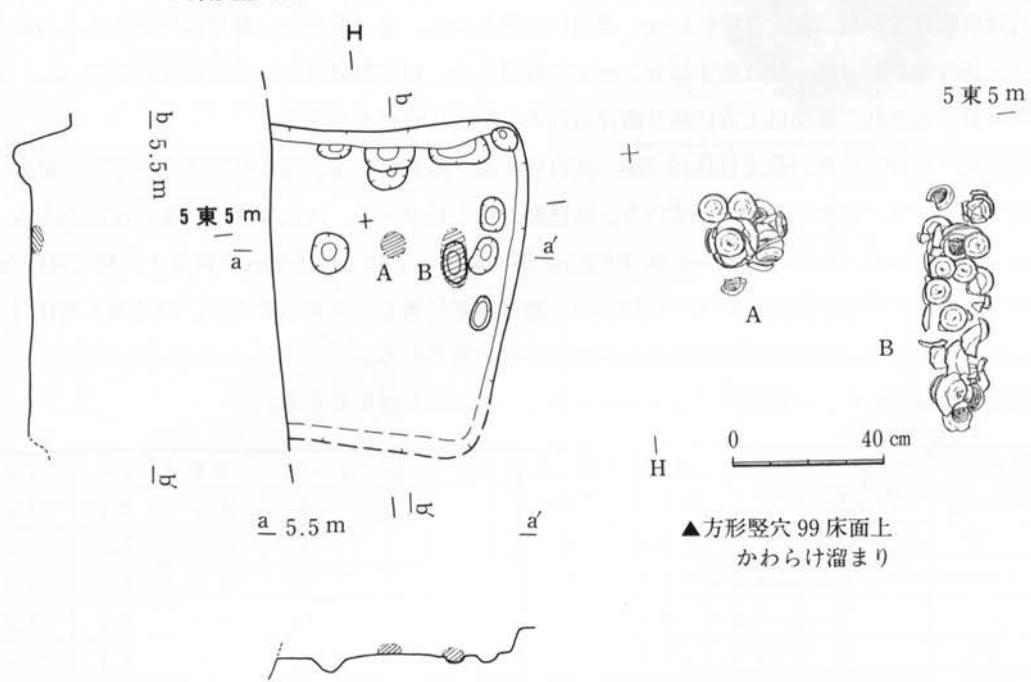
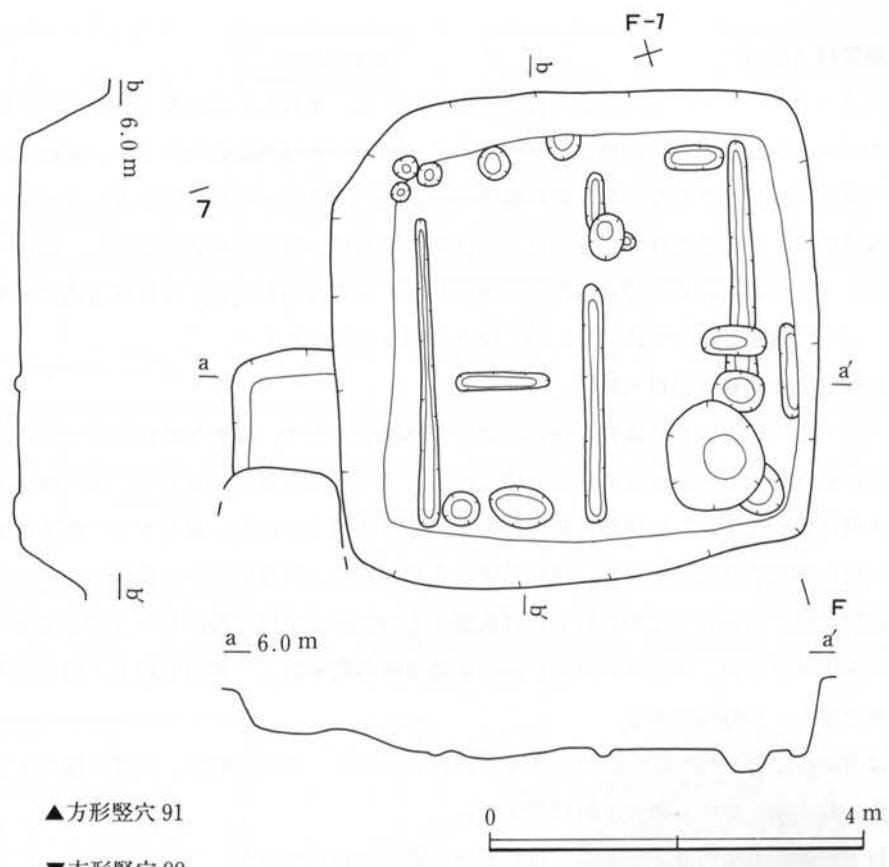


図 76 方形竪穴 91・92

方形堅穴91（図76）

F-6・7グリッド付近で検出された。南北5.2m、東西5.2mの掘り方をもち、確認面からの深さ0.87mを測り、床面の標高は5.0mである。床面からは南北方向に4本、東西方向に1本の根太木の据え痕が検出された。それぞれ幅10cm～25cm、深さ5cmの規模である。その他にピット13口、土壌状遺構1口が確認されている。ピットは円形のもの、楕円のものが混在し、最小のもので径20cm、深さ5cm、最大のもので東西70cm、南北45cm、深さ5cmを測る。土壌状遺構は南東隅に位置し、円形を呈し、南北1m、東西に1.2m、深さ0.25mの規模をもつ。

方形堅穴91出土遺物（図77・78）

図-77・1～13はロクロ成形のかわらけ。1は稜をもたず、開き気味に立ち上がる。2・3は体部中位に強い稜をもち、直立気味に立ち上がる。4～6は体部に稜をもち、強い横ナデにより口唇部が外側に張りだす。7は体部に稜を持たず、8は体部下位に弱い稜をもち、直立気味に立ち上がる。9～11は体部中位に稜をもち、外反気味に立ち上がる。体部中位から底部にかけて強いナデにより、器壁がやや内側にへこむ。12・13は大型のもので体部中位に稜をもち、開き気味に立ち上がる。

14は青磁蓮弁文碗。復元高台径4.4cm、素地は灰白色を呈し、精良堅緻土。外面の蓮弁は、青灰色の釉が厚く、不鮮明である。

15は青磁鉢。復元高台径9.6cm、素地は灰白色を呈し、精良堅緻土。内面に蓮弁文を配するが、灰緑色の釉が厚くかかる為、不鮮明である。

16は青白磁。合子の身。復元高台径4.4cm。素地は白色精良土。

17は白磁口兀小皿。復元口径8.4cm。素地は白色を呈し、精良堅緻土。釉は透明感のある白緑色。

18・19は瀬戸行平鍋。18は把手部分。把手の径は3cm。釉は黄緑灰色。19は復元口径12.6cm。口縁部は折り返され、端部は上方に折り曲げられる。釉は灰緑色を呈する。

20は瀬戸折縁片口皿。復元口径16.8cm、高台径8cm。器高4.6cm。胎土は黄灰色を呈し、精良土。底部は糸切り後、高台を貼りつけている。外底面に卸し目が入る。内底面には5重の沈線が巡る。

21は瀬戸折縁皿。復元口径18.9cm、底径9.6cm、器高4.9cm。胎土は灰褐色で精良土。釉は暗緑色。

22・23は瀬戸卸し皿。22は復元口径13.9cm。釉は非常に薄く、灰褐色である。23は復元底径11.8cm。底部糸切りで、22同様非常に薄く、灰褐色の釉が施される。

24は常滑甕口縁片。口縁部はほぼN字状を呈し、口縁端部は直立する。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-91	77-7	9.6	6.0	2.9
HT-91	77-1	7.6	5.3	1.9		8	10.1	6.1	3.1
	2	8.1	5.2	2.0		9	10.7	5.9	2.7
	3	6.7	3.9	2.1		10	11.0	6.5	3.0
	4	7.8	5.2	2.3		11	11.2	5.2	3.2
	5	7.5	4.4	2.1		12	13.0	6.7	3.5
	6	7.8	4.3	2.5		13	13.9	7.9	3.7

表23 方形堅穴91出土かわらけ法量

単位(cm)

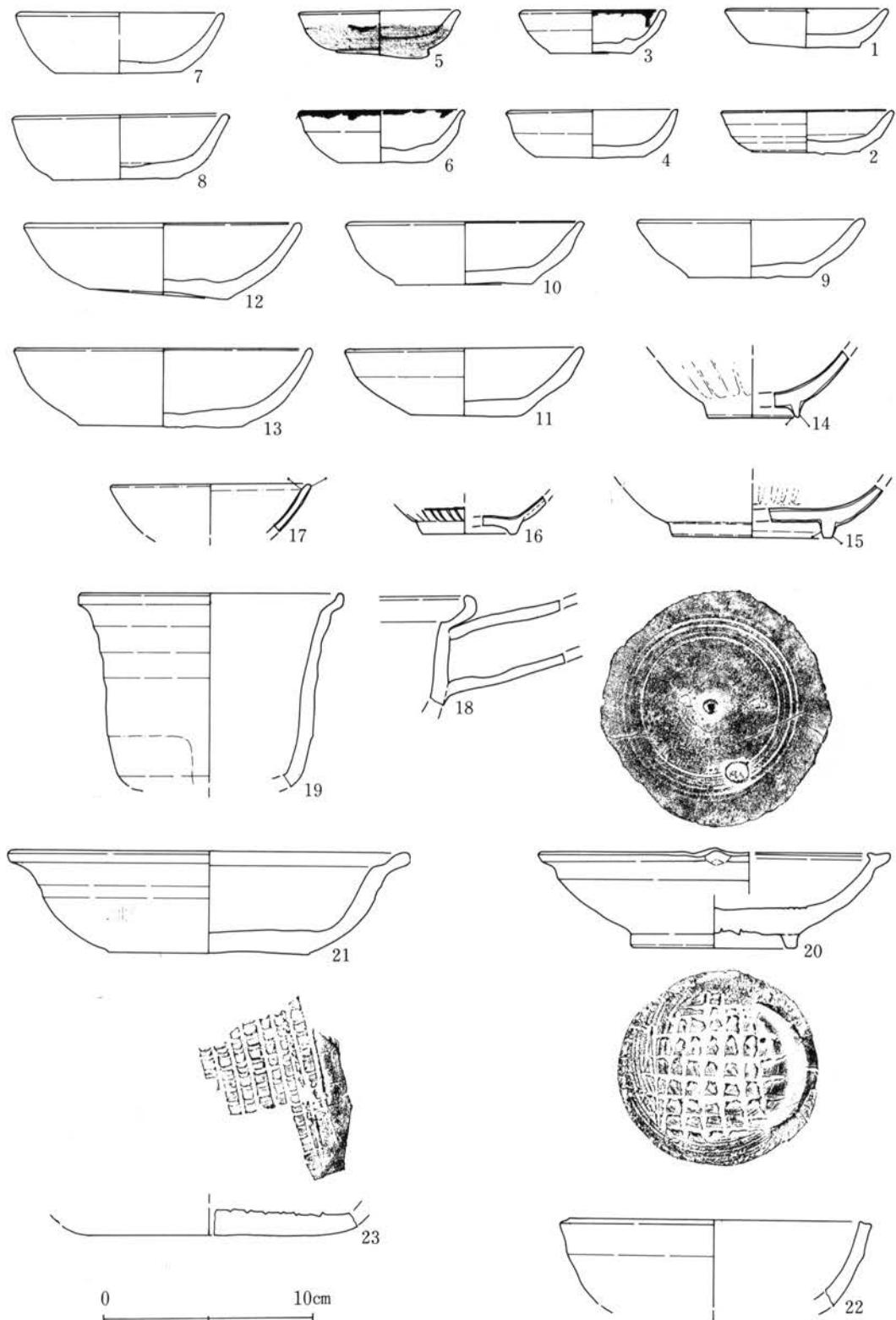


図 77 方形竪穴 91 出土遺物(1)

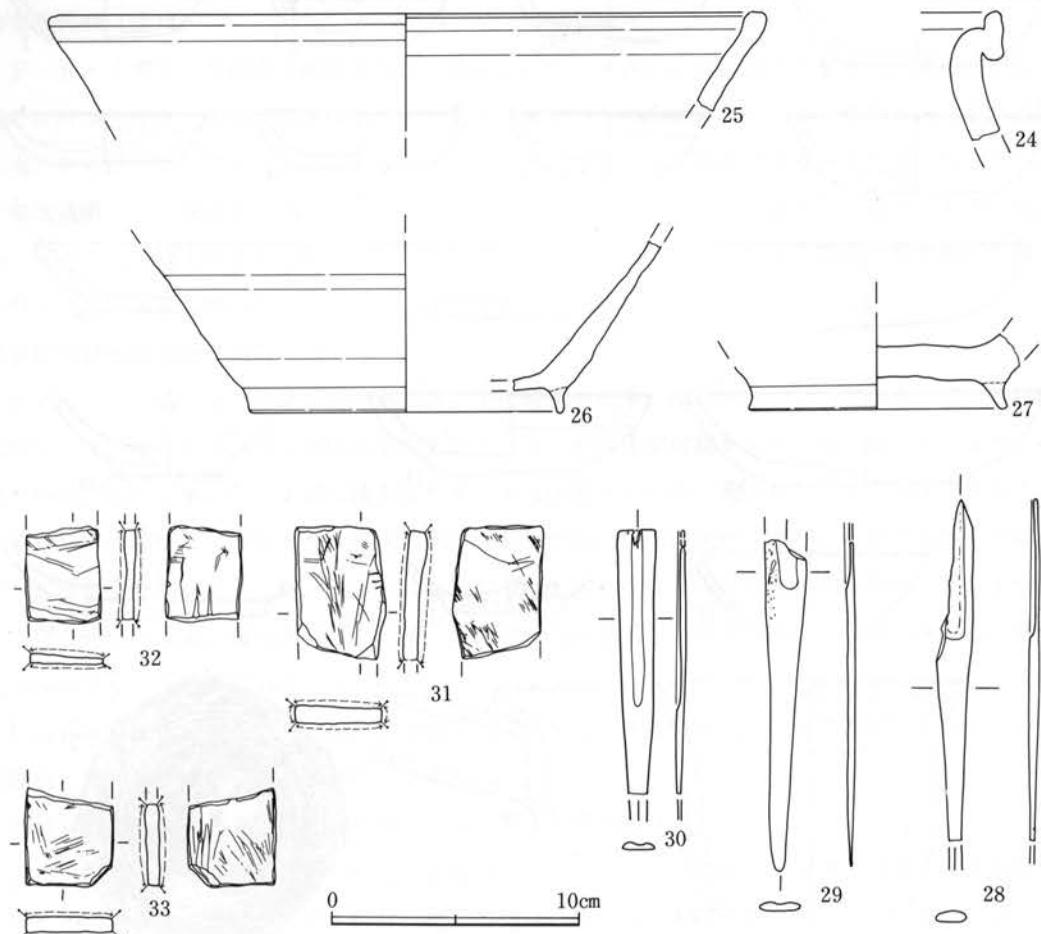


図 78 方形竪穴 91 出土遺物(2)

25～27は山茶碗窯系こね鉢。25は復元口径28cm。口縁部はやや内湾気味である。胎土良好。26は復元高台径12.6cm。27は復元高台径10.2cm。胎土は暗灰色で粗土。内外底面に自然釉が見られる。28～30骨製笄。いずれもよく研磨され、光沢をもち、片面中央に凹状の溝をもつ。

31～33は砥石。いずれも泥岩製の仕上砥である。砥面には細かい削痕を残し、側面には擦り切り痕が残る。

(小林)

方形竪穴99(図76)

調査区南東隅、G・H-5グリッドで検出された。南側は方形竪穴85・126に切られ、また東半分は降雨により流出してしまったため、原形を留めない。残存規模は、東西3.4m、南北2.7m以上、確認面からの深さ0.5mを測り、床面積は凡そ7cm²程である。

床面はほぼ平坦で、標高が4.2m。北西隅付近で2群のかわらけ溜まり(A・B)を検出した(出土遺物の項を参照)。また、北・西壁直下では長円形のピット列を検出した。北側のピットは、長軸35～40cm、短軸20～25cm、深さ7～10cmと、ほぼ同様の大きさをもつ。西側では大きさ・形状とも均等でないが、これらは本来、壁体を支える杭穴として周囲に巡らされていたものであろう。

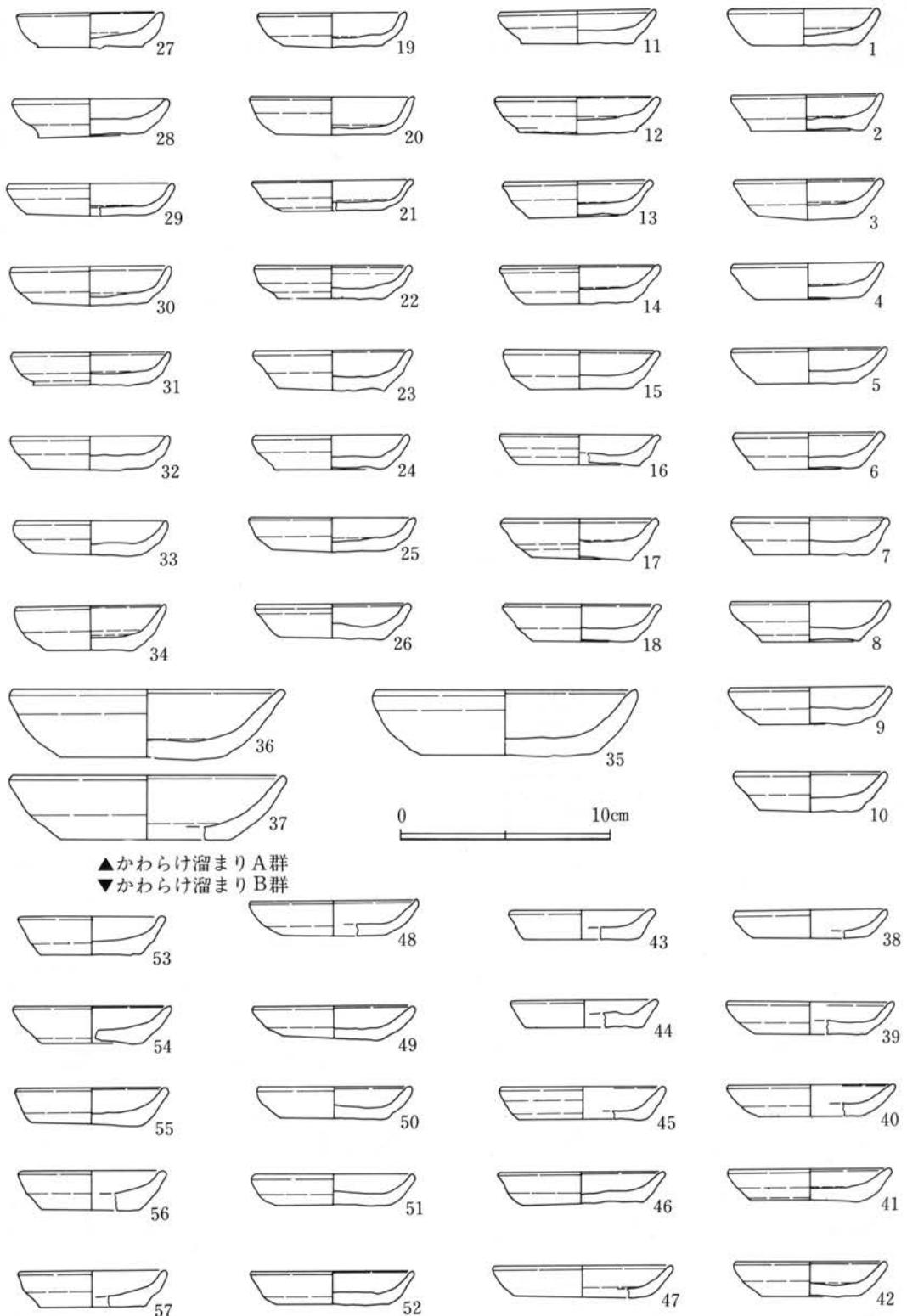


図 79 方形竪穴 99 出土遺物(1)

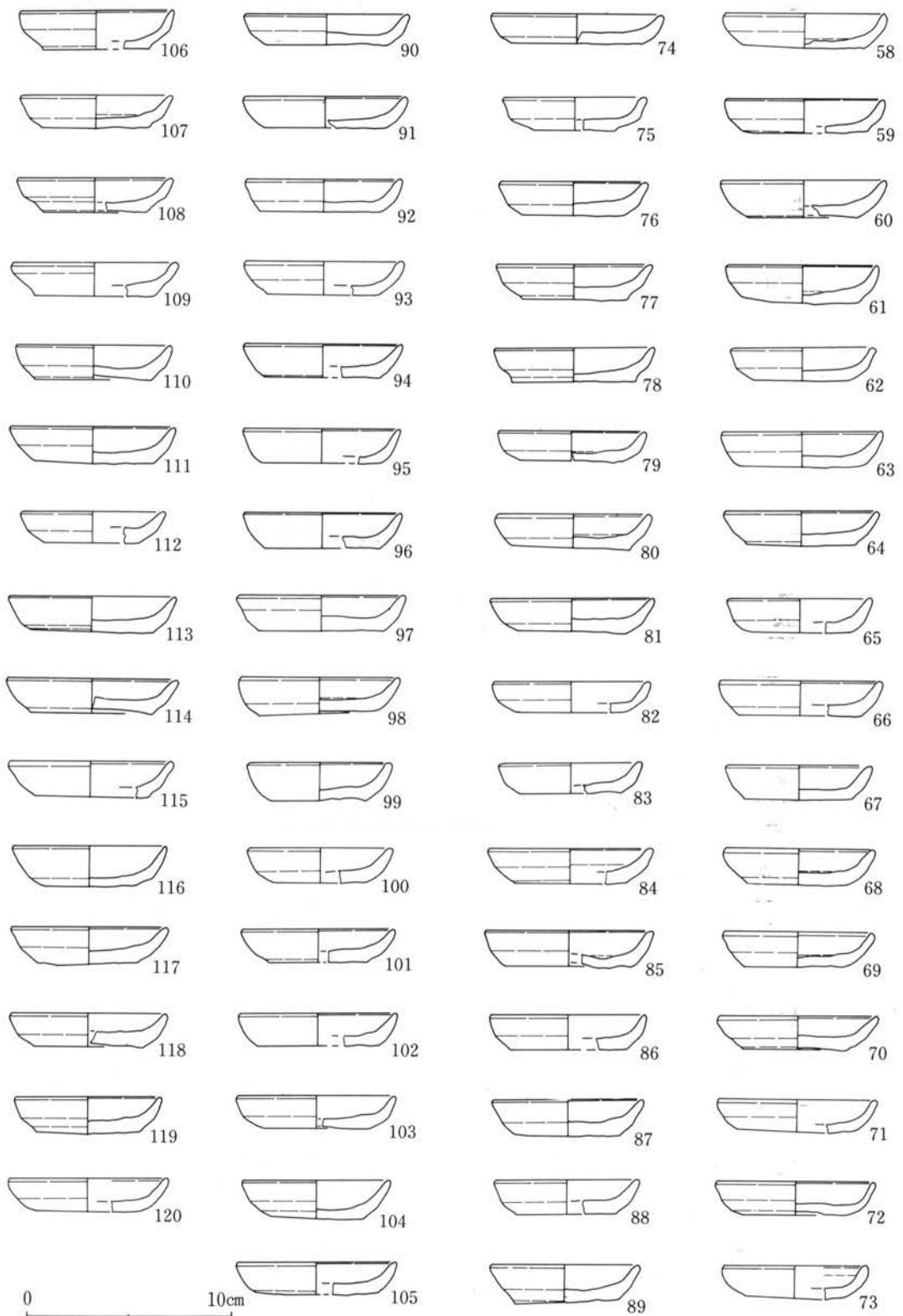


図 80 方形竪穴 99 出土遺物(2)

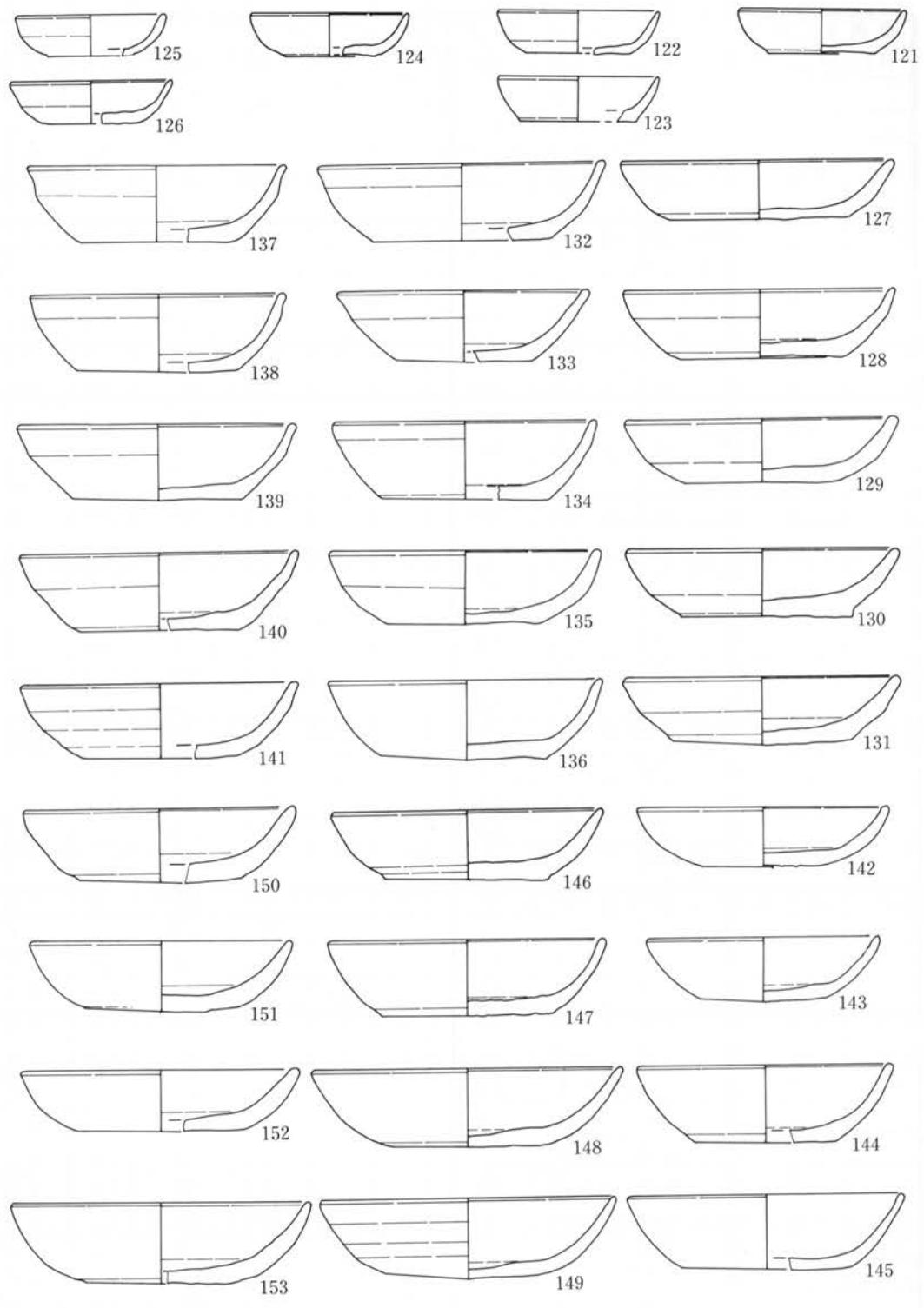


図 81 方形竪穴 99 出土遺物(3)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-99	79-42	7.2	4.6	1.7
HT-99	79-1	7.0	5.1	1.7		43	6.8	5.3	1.4
	2	7.2	5.4	1.7		44	6.9	5.6	1.3
	3	7.0	4.8	1.9		45	7.7	6.0	1.5
	4	7.1	5.0	1.7		46	7.7	5.7	1.5
	5	7.3	4.8	1.7		47	8.4	6.3	1.5
	6	6.9	5.0	1.8		48	7.9	4.9	1.7
	7	7.2	5.5	1.8		49	7.5	4.5	1.5
	8	7.4	4.7	1.9		50	7.2	4.9	1.5
	9	7.6	4.2	1.8		51	7.4	5.4	1.5
	10	7.1	4.7	1.9		52	7.6	5.3	1.5
	11	7.8	5.4	1.6		53	6.8	4.3	1.8
	12	7.6	5.6	1.8		54	7.4	4.5	1.7
	13	6.8	4.5	1.7		55	7.0	5.2	1.7
	14	7.4	5.2	1.8		56	6.8	4.6	1.9
	15	7.2	5.0	1.8		57	6.8	5.0	1.8
	16	7.4	5.8	1.5	80-58	7.6	5.8	1.7	
	17	7.2	4.8	1.9		59	7.5	6.0	1.7
	18	7.2	4.8	1.8		60	7.8	5.3	1.8
	19	6.9	4.7	1.6		61	7.1	5.5	1.8
	20	7.7	5.3	1.8		62	6.8	4.4	1.6
	21	7.5	4.8	1.9		63	7.6	6.0	1.7
	22	7.3	5.1	1.5		64	7.2	5.2	1.7
	23	7.3	5.1	1.9		65	6.8	4.7	1.6
	24	7.2	5.1	1.6		66	7.6	5.9	1.8
	25	7.8	5.4	1.6		67	6.9	5.1	1.7
	26	7.2	4.9	1.6		68	7.1	4.7	1.8
	27	6.7	5.0	1.6		69	7.1	4.8	1.7
	28	7.3	5.0	1.7		70	7.5	5.0	1.6
	29	7.8	5.8	1.5		71	7.4	5.5	1.5
	30	7.5	5.5	1.8		72	7.5	4.9	1.7
	31	7.3	5.5	1.5		73	6.8	4.3	1.5
	32	7.4	5.5	1.6		74	8.1	6.3	1.4
	33	7.1	5.1	1.6		75	6.8	3.9	1.6
	34	7.0	4.1	2.1		76	6.8	4.9	1.7
	35	12.3	8.3	3.0		77	7.3	5.1	1.7
	36	12.3	7.2	3.2		78	7.5	6.0	1.6
	37	12.3	8.0	3.0		79	7.0	4.5	1.4
	38	7.2	5.5	1.3		80	7.3	5.7	1.6
	39	7.8	5.3	1.5		81	7.8	5.2	1.6
	40	7.9	4.9	1.5		82	7.4	5.2	1.5
	41	7.6	5.0	1.4		83	6.7	4.8	1.5

表24 方形竪穴99出土かわらけ法量

単位(cm)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-99	81-122	7.4	4.9	2.0
HT-99	80-84	7.7	5.3	1.7		123	7.4	5.4	2.1
	85	7.9	6.0	1.7		124	7.2	4.2	2.0
	86	7.4	5.5	1.7		125	6.8	4.0	1.9
	87	7.1	5.1	1.8		126	7.4	4.5	2.0
	88	6.8	4.7	1.7		127	12.7	8.3	2.8
	89	7.0	5.0	1.8		128	12.5	7.5	2.7
	90	7.9	5.8	1.5		129	12.5	7.1	3.0
	91	7.8	5.8	1.5		130	12.4	8.0	3.1
	92	7.4	5.8	1.6		131	12.5	8.3	3.2
	93	7.4	5.3	1.6		132	13.2	8.4	3.6
	94	7.5	5.6	1.6		133	11.6	6.2	3.3
	95	7.4	5.7	1.7		134	12.0	7.8	3.7
	96	7.5	5.5	1.7		135	12.4	7.0	3.4
	97	7.9	6.0	1.7		136	12.5	7.6	3.5
	98	7.5	5.6	1.8		137	11.9	7.0	3.6
	99	6.7	4.5	1.8		138	11.7	7.4	3.6
	100	6.7	4.3	1.7		139	12.7	7.8	3.6
	101	7.2	4.7	1.6		140	12.8	7.4	3.6
	102	7.4	5.8	1.6		141	12.7	7.0	3.5
	103	7.5	5.0	1.6		142	11.5	5.9	2.8
	104	7.0	4.4	1.8		143	10.7	5.8	3.0
	105	7.5	6.0	1.5		144	11.7	6.6	3.6
	106	7.3	5.1	1.8		145	12.7	7.8	3.5
	107	7.3	5.1	1.6		146	12.5	7.6	3.2
	108	7.3	4.9	1.7		147	12.7	8.0	3.6
	109	7.8	5.7	1.6		148	14.3	8.0	3.6
	110	7.3	5.6	1.7		149	13.7	7.1	3.8
	111	7.8	5.7	1.8		150	12.5	7.5	3.4
	112	6.7	4.5	1.5		151	12.0	5.6	3.3
	113	7.9	5.9	1.7		152	12.7	7.5	2.9
	114	8.0	5.8	1.6		153	13.7	6.7	3.7
	115	7.7	5.5	1.7		82-154	12.5	8.0	2.8
	116	7.3	4.4	1.9		155	12.0	7.7	3.7
	117	7.4	4.8	1.8		156	12.8	8.0	3.4
	118	7.4	5.2	1.6		157	13.2	9.4	3.4
	119	6.9	5.0	1.8		158	12.6	7.5	3.7
	120	7.6	5.0	1.6		159	12.7	7.8	3.9
	81-121	7.7	5.0	2.6					単位(cm)

表24 方形竪穴99出土かわらけ法量

方形竪穴99出土遺物(図79~81)

本竪穴から出土した遺物には、瀬戸・常滑等もあるが、小片で図示不能なので、ここではかわら

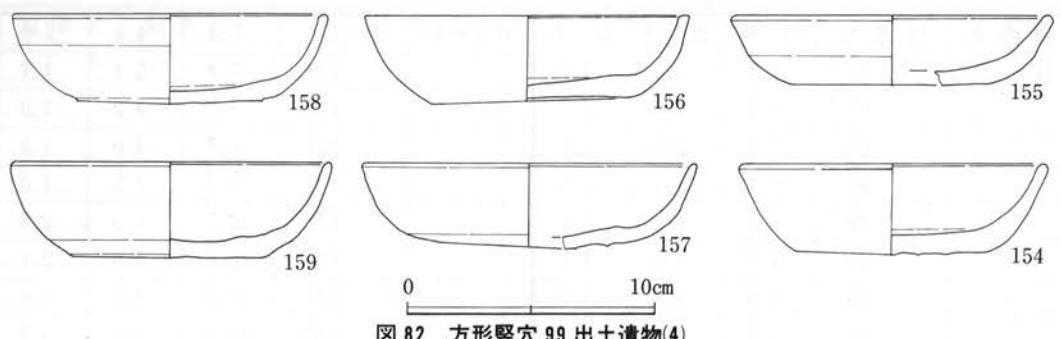


図 82 方形竪穴 99 出土遺物(4)

け溜まりについてのみ記す。A・B両群は上層からの堀り込みではなく、竪穴に伴って形成されたものである。A群は床面直上に直径25cm程の円形の範囲で、完形に近い小皿30個以上と大皿数個が比較的整然と積み重ねられていた。図示できたのは小皿が1~34、大皿が35~37。34は器高が高く内湾気味である。その他は器高が低めで側壁が概ね外方へ開く点、比較的均質な一群と言えよう。B群はA群の50cm程北で検出された。上層は65×20cm程の範囲で積み重なり、下層は45×20cm、深さ8cmの長円形ピットを充填する形になっている。個体数は小皿100個以上、大皿30個以上だが、上層で比較的完形品が多かったのに対し、下層は破片主体で接合率も高く、故意に割って廃棄した感が強い。図示できたのは小皿が38~126の89個、大皿が127~153の27個。121~126は若干器高が高く、内湾しながら立ち上がる。B群も特徴的にはA群と類似したまとまりである。胎土はいずれも微砂・白針を含み、色調淡橙褐色系。スノコ痕は不明瞭なものが多い。

(佐藤)

方形竪穴108（図83）

調査区の東南、F-5グリッド付近で検出された。方形竪穴114に切られている。

本方形竪穴の規模は東西6.2m、南北5.5m、確認面よりの深さ0.7mを測る。平面形は東西に長軸をもつ長方形で、床面積は約22.5m²、標高は3.8m程である。

床面はほぼ平坦であり、床面上には鎌倉石石列が検出された。鎌倉石は東壁に6石と、小塊が数片、四周を巡るように配されている。東壁の石列の並びをみると規格性がなく、転用されたものと思われる。隅は意識的に調整されているように見えるが、その他の石に調整が施されていないことから、そのまま使われたと思われる。石列の高さはほぼ同じで、床面より10~15cmを測る。

床面からは鎌倉石石列の他に、根太木据え痕と思われる8条の溝と、柱穴と思われる9口のピットが検出された。

溝は鎌倉石石列に沿うように掘られている。東側は2条で長さ180cm、幅25cm、深さ8cmと長さ115cm、幅20cm、深さ7cm。南側は長さ280cm、幅30cm、深さ15cm。西側は長さ260cm、幅30cm、深さ15cm。北側は2条で長さ90cm、幅30cm、深さ15cmと長さ115cm、幅20cm、深さ5cm。その並びの2条は長さ90cm、幅20cm、深さ7cmと長さ110cm、幅15cm、深さ7cm程である。

柱穴は並び方に規則性がなく、大きさも様々である。柱穴規模は最小のもので径18cm、深さ6cm、最大のもので径65cm、深さ28cmを測る。

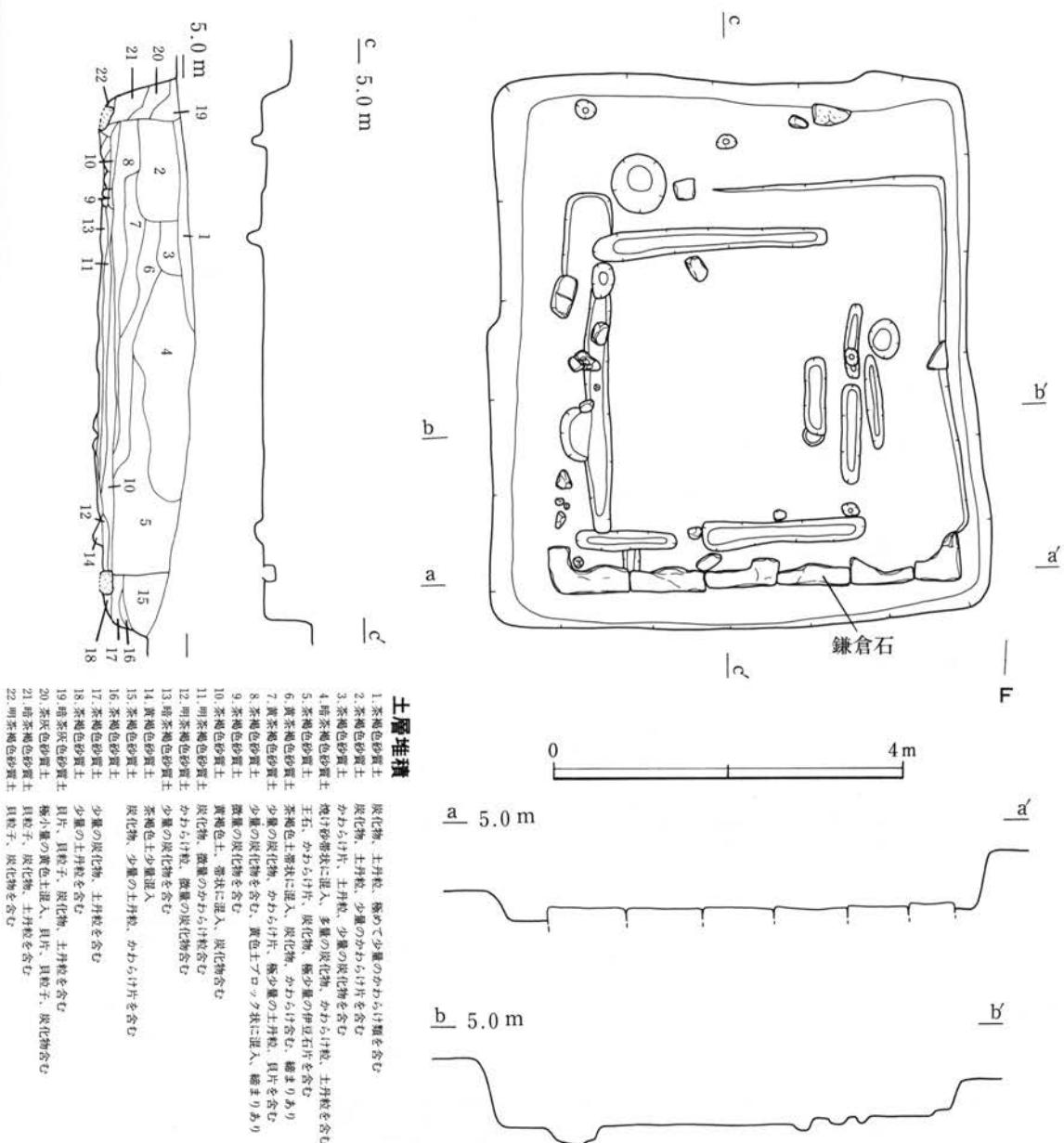


図83 方形竪穴108

方形竪穴108 出土遺物 (図84・85・86・87)

1~63は小型の、64、65は中型の、66~77は大型のロクロ成形のかわらけである。

1~4・20は器壁が直立気味に立ち上がる。5~8・22・30・33は器壁がやや外反しながら立ち

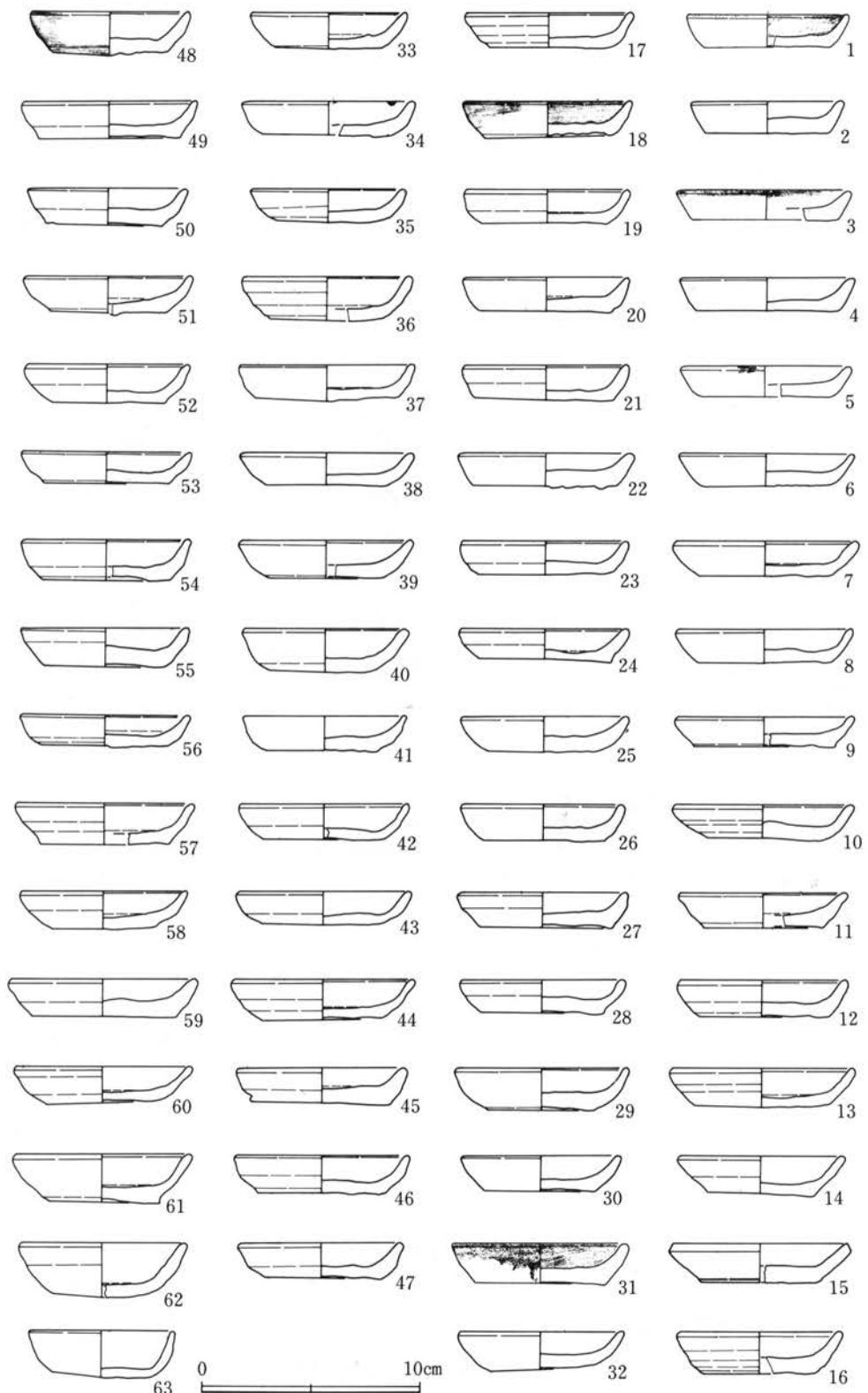


図 84 方形竪穴 108 出土遺物(1)

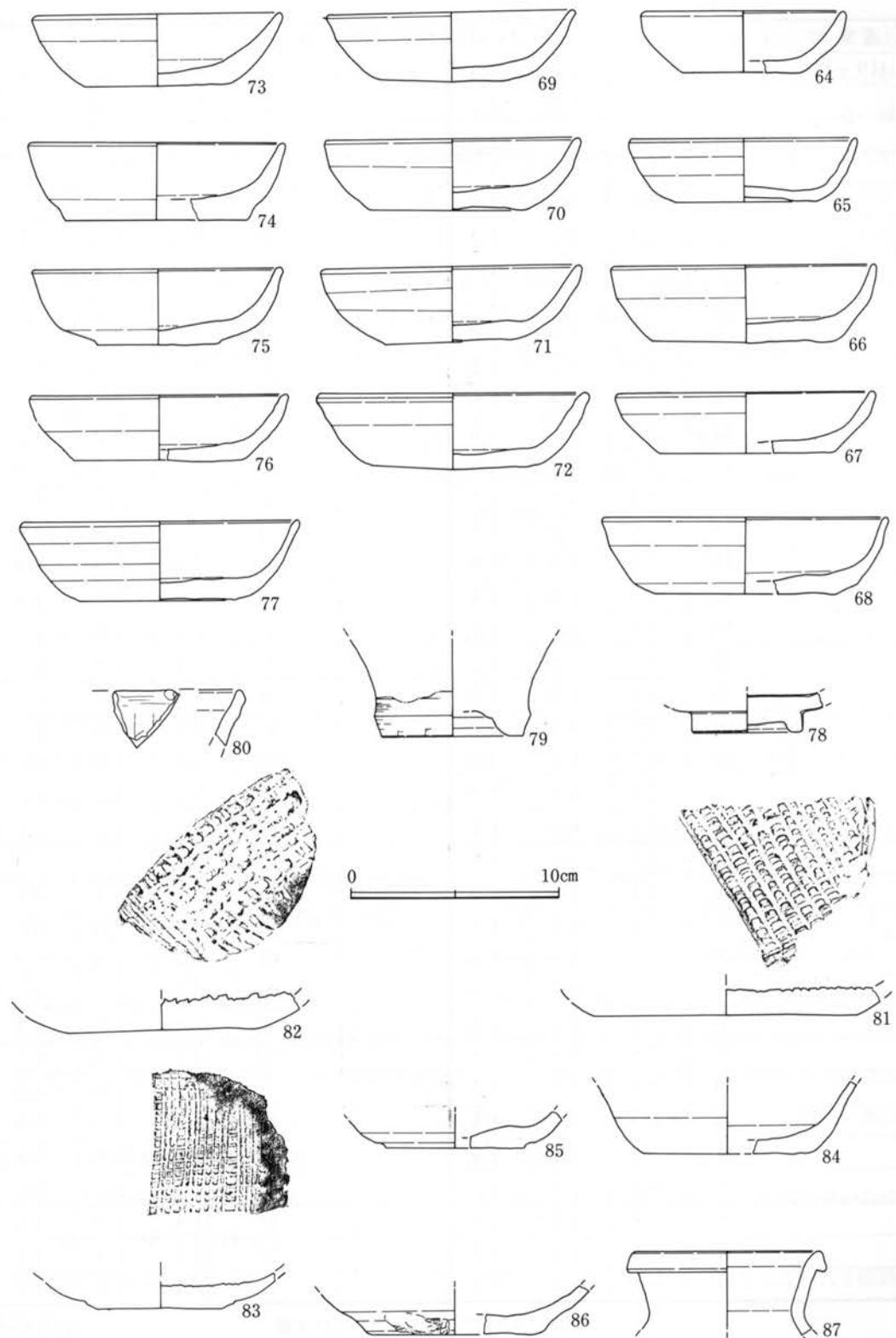


図 85 方形竪穴 108 出土遺物(2)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-108	84-39	7.8	5.1	1.7
HT-108	84-1	7.2	5.6	1.5		40	7.3	4.8	2.0
	2	6.7	5.6	1.5		41	7.3	5.0	1.6
	3	7.6	6.5	1.4		42	7.6	5.0	1.6
	4	7.7	6.4	1.5		43	7.7	5.4	1.5
	5	7.4	5.7	1.4		44	8.1	5.5	1.9
	6	7.7	5.7	1.5		45	7.6	6.4	1.6
	7	7.9	6.4	1.3		46	7.9	5.8	1.7
	8	7.8	6.0	1.5		47	7.3	5.3	1.6
	9	9.1	6.0	1.6		48	7.2	5.2	2.0
	10	8.0	5.2	1.5		49	7.9	6.4	1.7
	11	7.4	5.4	1.6		50	7.2	5.3	1.7
	12	7.5	5.2	1.6		51	7.6	5.3	1.7
	13	8.1	6.1	1.8		52	7.2	5.2	1.8
	14	7.3	4.8	1.7		53	7.6	5.7	1.5
	15	7.9	5.5	1.8		54	7.4	5.8	1.9
	16	7.2	5.0	1.9		55	7.6	5.5	1.8
	17	7.5	5.5	1.6		56	7.5	5.8	1.4
	18	7.4	5.9	1.7		57	8.0	5.8	1.9
	19	7.3	5.7	1.5		58	7.4	4.8	1.7
	20	7.4	6.0	1.5		59	8.4	6.5	1.7
	21	7.3	6.3	1.6		60	8.0	5.0	1.7
	22	7.7	6.5	1.5		61	7.9	5.0	2.2
	23	7.3	6.2	1.5		62	7.4	4.7	2.5
	24	7.5	6.0	1.4		63	6.5	4.7	2.1
	25	7.4	4.8	1.6	85-64	9.6	5.6	2.9	
	26	7.1	5.5	1.6		65	12.2	8.1	3.1
	27	7.4	6.0	1.6		66	12.5	8.6	3.6
	28	7.2	5.6	1.5		67	12.2	8.3	2.9
	29	7.7	4.8	1.9		68	13.5	8.6	3.7
	30	6.9	5.0	1.6		69	11.7	7.0	3.3
	31	7.8	5.9	1.8		70	12.1	7.5	3.4
	32	7.4	4.8	1.7		71	12.2	6.5	3.6
	33	6.9	4.8	1.6		72	12.8	8.0	3.6
	34	7.7	5.9	1.5		73	11.6	6.9	3.4
	35	6.9	5.0	1.5		74	12.3	8.7	3.7
	36	7.6	5.1	2.0		75	11.8	5.9	3.6
	37	7.9	6.5	1.7		76	10.9	6.8	3.1
	38	8.1	5.5	1.5		77	13.1	7.5	3.7

表25 方形竪穴108出土かわらけ法量

単位 (cm)

上がる。9~15・24・31・32・38~40は体部外面に弱い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。16・17・44・46・47・56~60は体部外面に強い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。18・19は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。21・28は体部外面に弱い稜を持ち、口縁部は内湾する。23は体部外面に強い稜を持ち、口縁部は内湾する。25は器壁が緩やかに立ち上がる。26の口縁部は内湾する。27・48・54は体部外面に強い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。29は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は緩やかに立ち上がる。34の器壁はやや開き気味に立ち上がる。35~37・41・42・50・55は体部外面に強い稜を持ち、器壁はやや開き気味に立ち上がる。43・51・52は体部外面に稜を持ち、器壁はやや開き気味に立ち上がる。45・49は体部外面に稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。53・61・62は体部外面に稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。63は器壁が薄く、直立気味に立ち上がる。64の器壁は緩やかに立ち上がる。65は体部外面に強い稜を持ち、器壁は薄く、直立気味に立ち上がる。66・67は体部外面に強い稜を持ち、器壁は緩やかに立ち上がる。68・69は体部外面に強い稜を持ち、器壁はやや外反しながら立ち上がる。70~73は体部外面に強い稜を持ち、器壁はやや開き気味に立ち上がる。74は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。75・76は体部外面に弱い稜を持ち、器壁は緩やかに立ち上がる。77は体部外面に強い稜を持ち、器壁は薄く、外反しながら立ち上がる。以上かわらけの胎土は、砂粒を含む粗いものが殆どで、内底面にはナデ痕が、外底面には回転糸きり痕と、明瞭、不明瞭の差はあるがスノコ状圧痕が残る。色調は淡橙茶色、淡橙褐色、淡茶褐色を呈する。

78は青磁碗底部。復元高台径5.0 cm。胎土は灰褐色を呈し、精良堅緻土。釉は暗灰緑色で不透明。79は白磁四耳壺底部片。復元高台径6.8 cm。胎土は微砂粒、気泡含むが粘性のある緻密土。釉は緑色味を帯びた白色で、胴部下までかけられている。

80は瀬戸鉄釉印花文化壺。胎土は淡茶白色を呈し、良土。胴部中位に菊花文印が押されるが、鉄釉が厚い為不鮮明である。口縁部周囲に窪みが巡り、釉溜りにより輪紋状をなす。81~83は瀬戸鉄し皿。81は底径12.5cm。胎土は灰黄色で精良土。釉は灰黄色を呈し、薄めにかけられる。鉄し目はやや粗雑。82は底径9.0 cm。胎土は灰色でやや粗土。釉は緑がかった灰色。鉄し目はかなり粗雑。83は底径6.0 cm。胎土は灰白色でやや粗土。灰緑色の釉がやや厚めにかけられ、鉄し目は細かい。84は瀬戸皿。復元底径8.0 cm。底部は糸きり。胎土は灰黒色を呈し、白色粒を含むが精良堅緻。

85は南部系山皿。復元底径6.6 cm。胎土は茶灰色を呈し、黒色粒、白色粒、微砂粒を含み、気泡を持ちガサついている。86は南部系山茶碗。復元底系8.0 cm。胎土は灰白色を呈し、黒色粒、微砂粒を含むがやや緻密である。底部外周に一ヵ所指頭痕が見られる。

87は常滑壺口縁部。復元口径8.8 cm。胎土は灰白色を呈し、粘性のある緻密土。頸部は肩からゆっくり開き、玉縁状の口縁を作っている。

88は瀬戸四耳壺肩部片。胎土は灰色を呈し、釉は灰緑色。肩部に耳が付いていたと思われる痕跡を残す。

89~94は常滑甕口縁部の小片。胎土は黒色微粒、白色微石を混じる。器表は茶褐色か赤茶褐色。

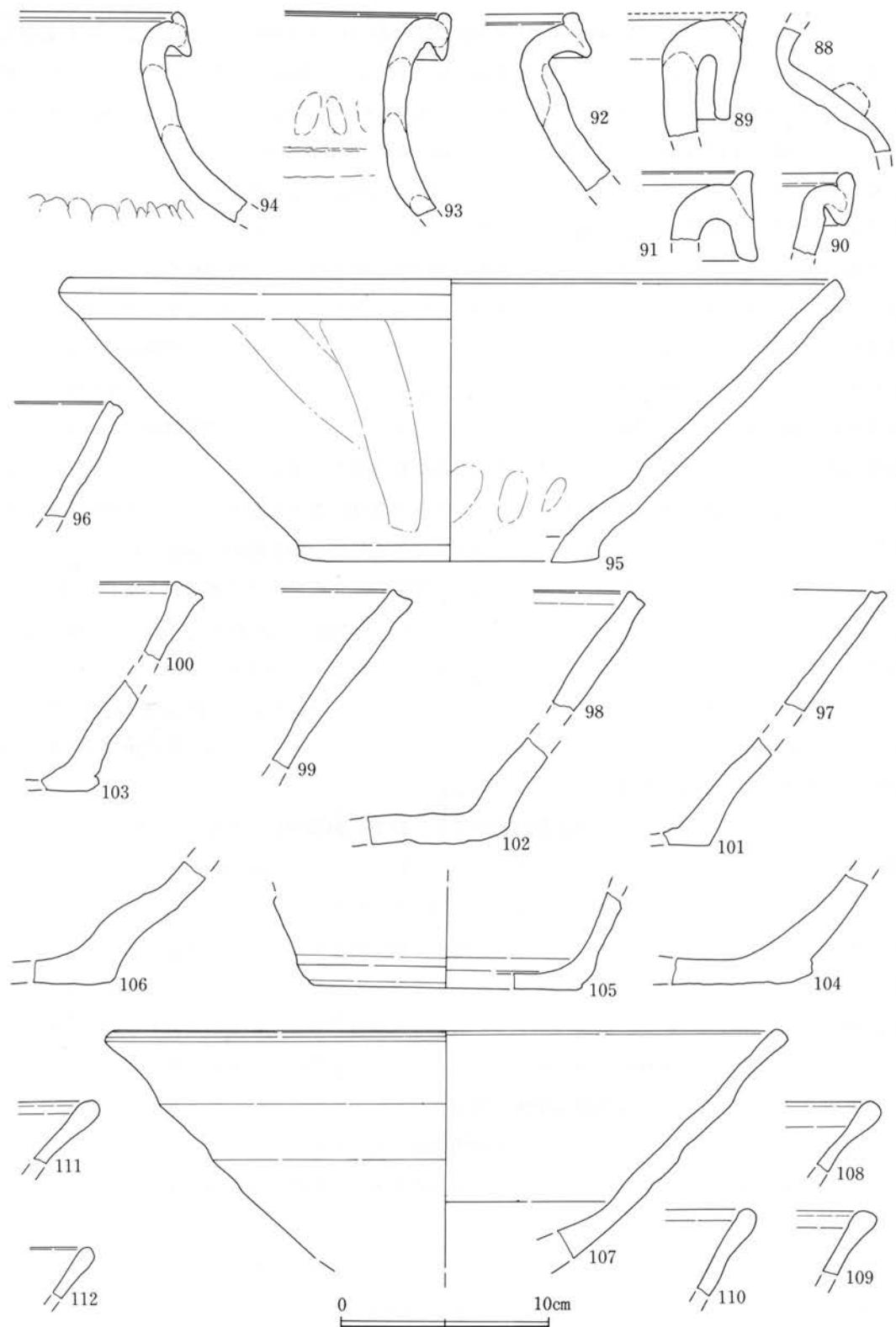


图 86 方形竖穴 108 出土遗物(3)

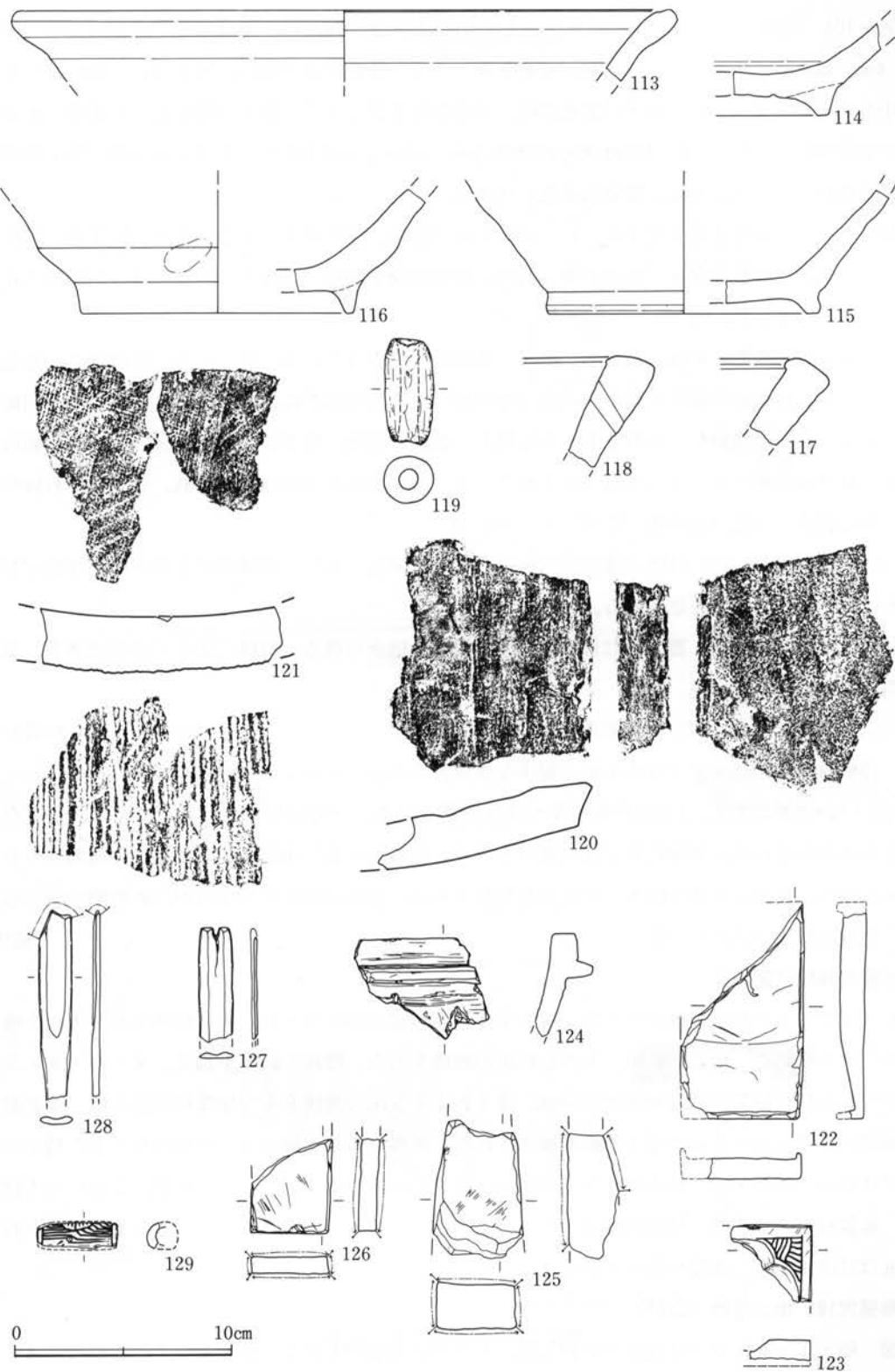


図 87 方形竪穴 108 出土遺物(4)

95~104・106は常滑の、105・107~116は山茶碗窯の捏ね鉢。95は復元で口径37.9cm、底径14.4cm、器高13.5cm。胎土は白色粒、小石を混じえる。器表は赤茶褐色。96~104・106はいずれも小片のため復元不可能。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえる。器表は茶褐色、赤褐色、赤茶褐色。105は復元底径12.6cm。107は復元口径31.5cm。108~116は小片のため復元不可能。胎土は黒色粒、白色粒を多く混じえる。器表は灰色~灰褐色。

117・118は瓦質手焙りの小片。117の胎土は白色粒、砂粒を多く含む。器表は灰黒色。118の胎土は白色粒、砂粒を含み、気泡を多く持つ。器表は淡茶灰色。口縁下に内から外に向かって孔が開けられている。

119は土鉢。長さ4.9cm、最大径2.3cm。微砂粒、黒雲母粒を多く混じえる。色調は淡赤橙色。

120・121は女瓦の破片。120の凸面はやや粗い離れ砂が叩きにより打ち込まれている。凹面は縦位ナテ。胎土は微砂粒、小石を多く含む粗土。色調は灰色。厚さ2.0~2.3cm。121の凸面はやや粗い離れ砂が縄叩きによって打ち込まれている。凹面は斜め方向に糸きり痕。胎土は小石砂粒を多く含む粗土。色調は灰黒色。厚さ2.4~2.6cm。

122・123は硯。122は陸の部分に削痕が残る。灰黒色。123は周縁部に毛描き様の沈線が見られる。おそらく四葉硯と思われる。

124は滑石鍋の破片。器表面には横位の削痕がやや細かく残る。口縁に比して体部は薄手。器表は茶色味かった灰白色。

125・126は砥石。125は黄褐色を呈する中砥。気泡を多く含み、少ないが各面に細い削痕が残る。126は黄灰白色を呈する仕上砥。偏平な長方形で側面にも少ないが削痕が残る。

127・128は笄である。127は片面にやや巾広の溝を持ち、一方は平らに仕上げている。丁寧な磨きがかけられている。頂部にV字状の鋭いきざみ。128は片面に巾広の溝を持ち、両側面ともやや丸味を持つ。全面に丁寧な磨き。129は骨製品である。意匠は判然としないが、直線的な流水紋の中に花紋が線彫りされている。

(須佐)

方形竪穴109 (図88)

F-4グリッド付近に検出された。覆土全体を方形竪穴108号・111号に破壊され、床面を確認できたのみである。南北4.4m、東西4.4mの規模をもち、標高3.8mを測る。東・西・南・北壁直下と思われる位置に、幅20cmから50cm、深さおよそ5cmの規模をもつ地覆材の据え痕、南北軸上に幅25cm深さ2cm~5cmの根太木痕が検出された。地覆材の据え痕には、8口のピット、最小のもので径10cm、深さ8cm、最大のもので径50cm、深さ15cmの規模のものが見られる。これらの小柱穴は、地覆材のズレを防ぐ目的の杭痕であろうと考えられる。その他には11口のピットが検出された。床面はほぼ平坦で、地覆材痕から推定される床面積は23.8m²である。

方形竪穴109 出土遺物 (図89)

図-89・1~6はロクロ成形のかわらけ。1~3は小型のもので、稜をもたず、器壁はゆっくり立ち上がる。4は体部中位及び下位に稜をもち、内湾気味に立ち上がる。5は稜をもたず、ゆっくり

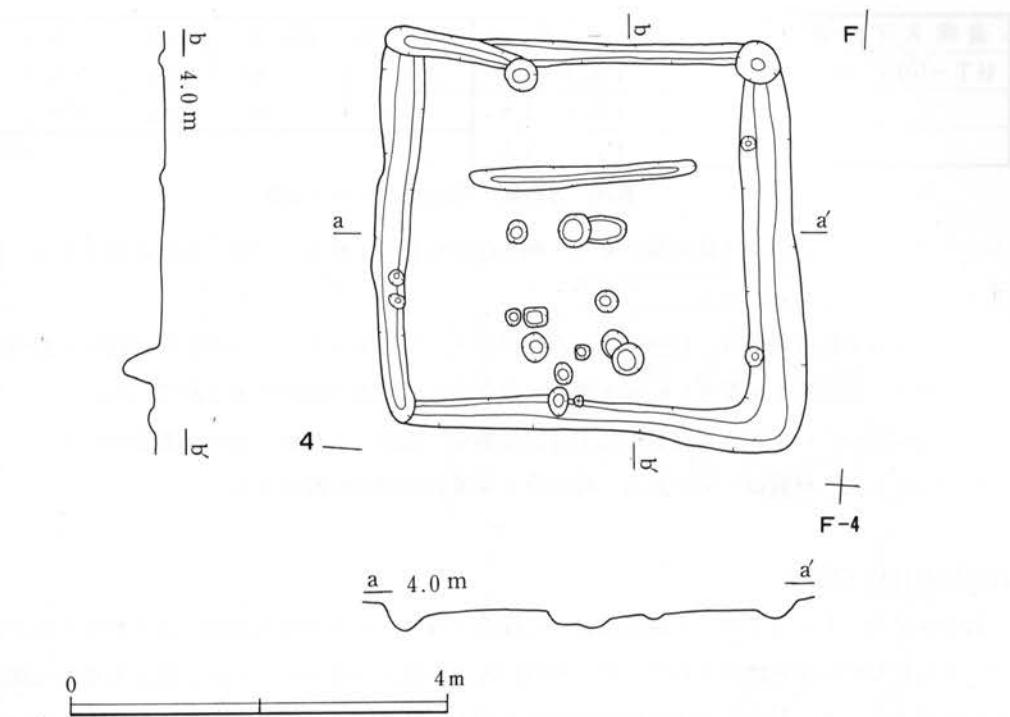


図88 方形竪穴109

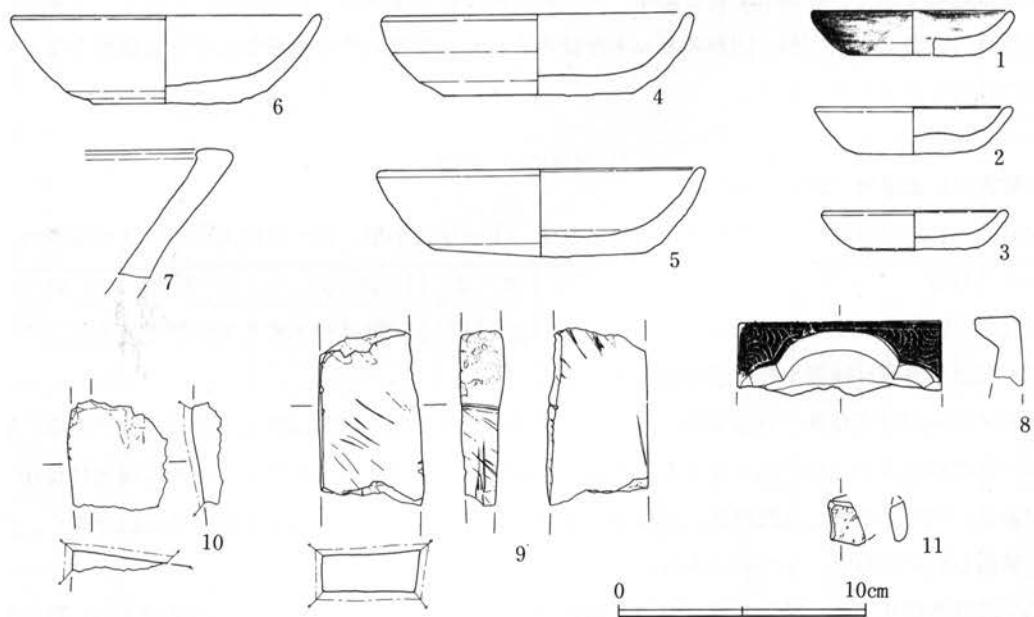


図89 方形竪穴 109 出土遺物

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-109	89-4	12.2	7.6	3.2
HT-109	89-1	8.0	4.9	1.8		5	13.0	8.5	3.5
	2	7.8	4.5	1.9		6	12.3	6.0	3.5
	3	7.3	4.7	1.6					単位(cm)

表26 方形竪穴106出土かわらけ法量

り立ち上がる。6は体部下位に稜をもち、開きながら立ち上がる。口径・底径比が大きく、器高も4・5に比べると高い。

7は土器質手焙り口縁片。口縁端部が内外に小さく引き出される。口縁下に指頭痕が観察される。

8は硯片。幅8.3cm、厚さ1.8cmを測る。残存部に波頭文の線刻が施されている。

9・10は硯石。いずれも泥岩製の仕上げ砥である。砥面には細かい削痕が観察される。

11は火打ち石。材質は石英である。残存部3ヶ所に打撃痕が観察される。

方形竪穴111（図90）

調査区東端、F-4グリッド付近において検出された。本方形竪穴北側には方形竪穴70があったが、本方形竪穴により削平されている。西側には方形竪穴が認められるが、掘り方壁面は確認できない状態であった。しかし本方形竪穴床面のピット、地覆材の据え跡などから掘り方を確認した。

掘り方における本方形竪穴の規模は、東西6.9m程、南北5.0m、確認面からの深さ0.3mを測り、平面形は東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈している。床面積は約27m²である。

床面はほぼ平坦で、標高3.5mを測る。床面に検出された遺構は、西北角より壁にそって東と南に地覆材の痕跡と、楕円形、円形のピットが認められた。壁際のやや小さなピットは壁板を支えるための柱穴であると思われる。

方形竪穴111 土遺物（図91・92）

図91のかわらけはほとんど時期差が認められず、1～9は小型、10～21は大型のロクロ成形のかわらけである。

22は瀬戸四耳壺の小片。素地はきめ細かく灰白色を呈する。釉はハケ塗りで灰釉である。

23～26は常滑甕口縁部小片。27は南部系山茶碗小片。

図92・28～32はこね鉢。28は常滑、29～32は山茶碗窯系である。28は復元口径37.0cmである。胎土は白色微砂が多く、灰白色を呈する。内面は灰緑色、外面は茶褐色を呈する。30は復元口径10.7cmである。内外面全体に自然降灰。32は復元底径12.2cmである。胎土は白色粒、黒色粒が多く、小礫、気泡も小々含むが、やや密である。

33～35は手焙り。33、35は瓦質、34は土器質である。35は復元口径34.4cm、底径22.6cm、器高8.8cm。胎土は微白色粒が多く、灰黄茶色を呈する。34、35は口縁下に外方に傾斜して孔をもつ。

36、37は女瓦小片。36は熨斗瓦で、凸面は縦長斜格子目の叩き板使用。凹凸面離れ砂は微細で叩きによって打ち込まれている。隅切り時の糸切痕がそのまま残る。胎土は良土で、焼成良好。色調

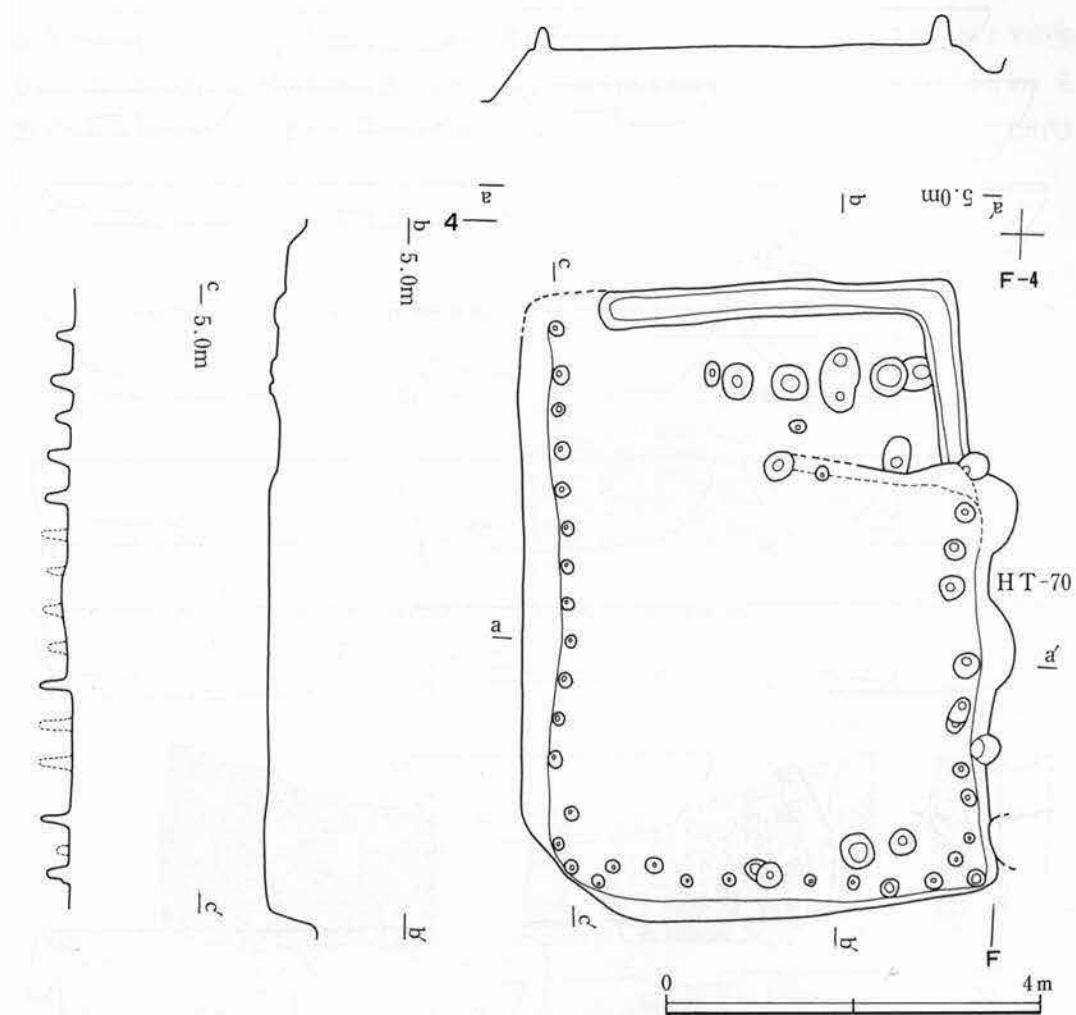


図90 方形豊穴111

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-111	91-12	12.9	8.9	3.7
HT-111	91-1	7.4	4.8	1.8		13	13.0	8.9	3.6
	2	8.0	5.3	1.8		14	13.3	8.9	3.4
	3	8.6	6.0	1.7		15	12.9	7.9	3.8
	4	7.3	5.7	1.5		16	12.3	8.3	3.5
	5	7.4	4.9	1.9		17	12.9	7.6	3.6
	6	7.7	5.3	1.9		18	11.4	7.8	3.2
	7	8.8	7.0	1.9		19	12.3	8.2	3.5
	8	7.6	4.9	1.7		20	12.8	7.7	3.7
	9	7.3	4.5	1.9		21	12.3	7.5	3.7
	10	12.0	7.8	3.6		22	13.2	7.5	3.7
	11	12.7	8.9	3.6					単位(cm)

表27 方形豊穴111出土かわらけ法量

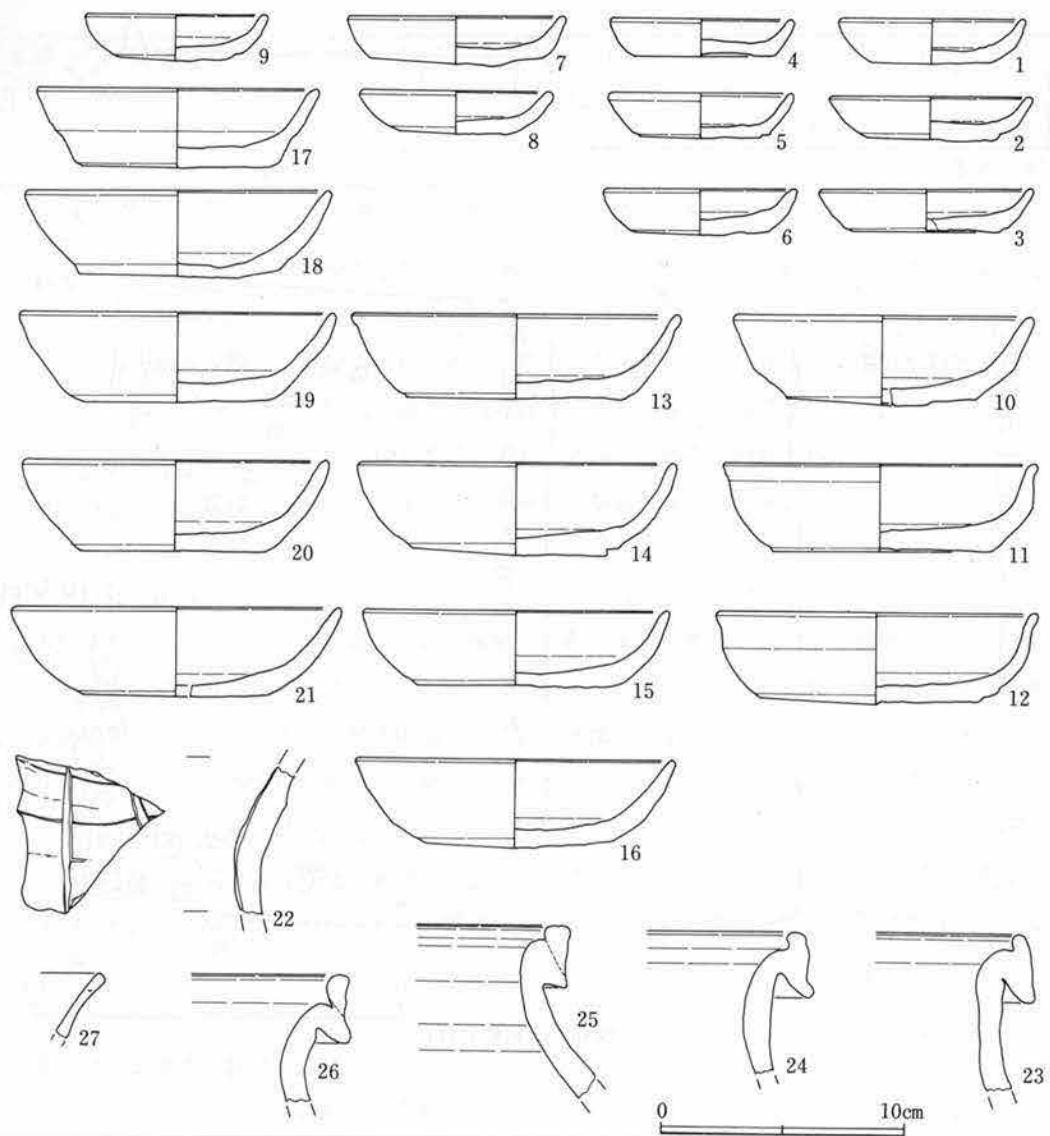


図 91 方形竪穴 111 出土遺物(1)

は暗灰色を呈する。厚さ1.9 cm。37の凸面は離れ砂が叩きこまれている。凹面は全体に横ナデが施され、離れ砂が弱い。側面の縁に弱いナデが入る。胎土はきめ細かい白色良土で、焼成は普通。色調は灰黒色を呈する。厚さ2.2~2.5cmを測る。 (田代)

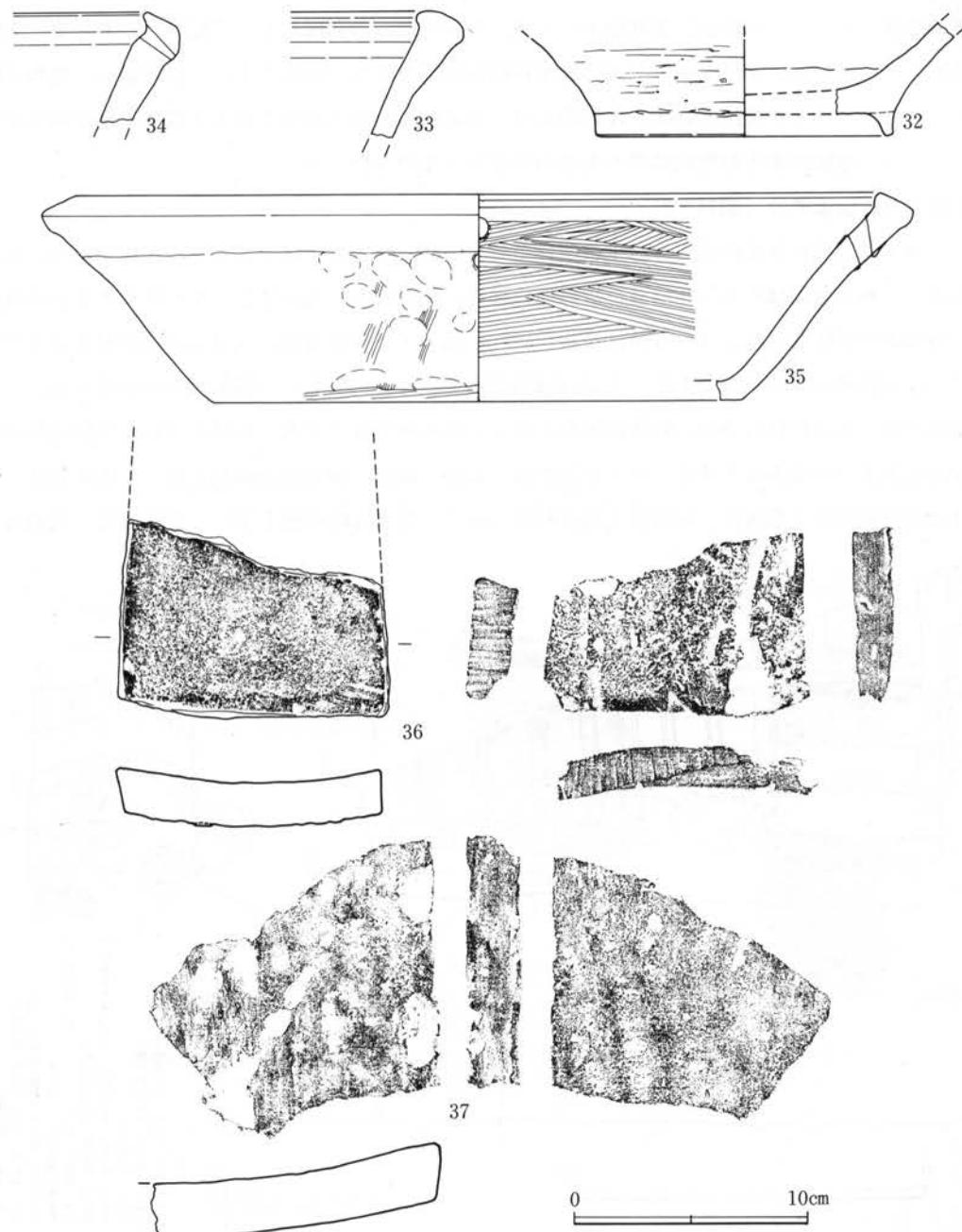


図92 方形竪穴出土遺物(2)

方形竪穴116 (図93)

D-9グリッドで検出された。規模は、南北に7.15m、東西規模は西壁が調査区外に位置する為測定不可能であるが、調査区壁から掘り方東壁まで3.5mを測ることができる。確認面からの深さは北壁側で0.6m、南壁側で0.76mを測り、床面の標高は6.4mである。床面には幅15cm~20cm、深さ5cmを測る根太木の痕跡が、南北軸上に8条、55cm~65cmの間隔をもって配され、北・東・南壁直下からは、幅35cm、深さ5cm~8cmの地覆材痕が検出された。根太木上に1個の礎石、地覆材痕上から7口のピットが検出される。南西隅には、南北80cm、深さ20cmを測る土壌状遺構が検出されている。この遺構が本方形竪穴に伴うものかは定かにならなかった。

方形竪穴116 出土遺物 (図94・95)

図-94・1は瀬戸水注胴部片。胎土は灰色を呈し、精良緻密土。肩部に4本の沈線が巡る。器表は剥離し、釉の色調は不明。2は瀬戸折縁皿口縁片。胎土は灰白色を呈し、やや粗であるが焼成良好。釉は灰釉で灰黄緑色。3~6は常滑甕口縁片。胎土・焼成は良好。3は口縁部がN字状を呈する。5は口唇部が内湾気味である。6は口縁部が水平に外方に引かれ、端部はやや直立する。7は常滑甕口縁。復元口径34.8cm。胎土は灰色を呈し、混入物少なく良土。口縁部は強く外側に外反し、口唇部は上方につまみ出される。8・9は常滑こね鉢口縁片。胎土は茶褐色を呈し、焼成良好。10・11は山茶碗窯系こね鉢片。10は復元高台形12.3cmで、胎土は暗灰色を呈し、焼成良好。内面は

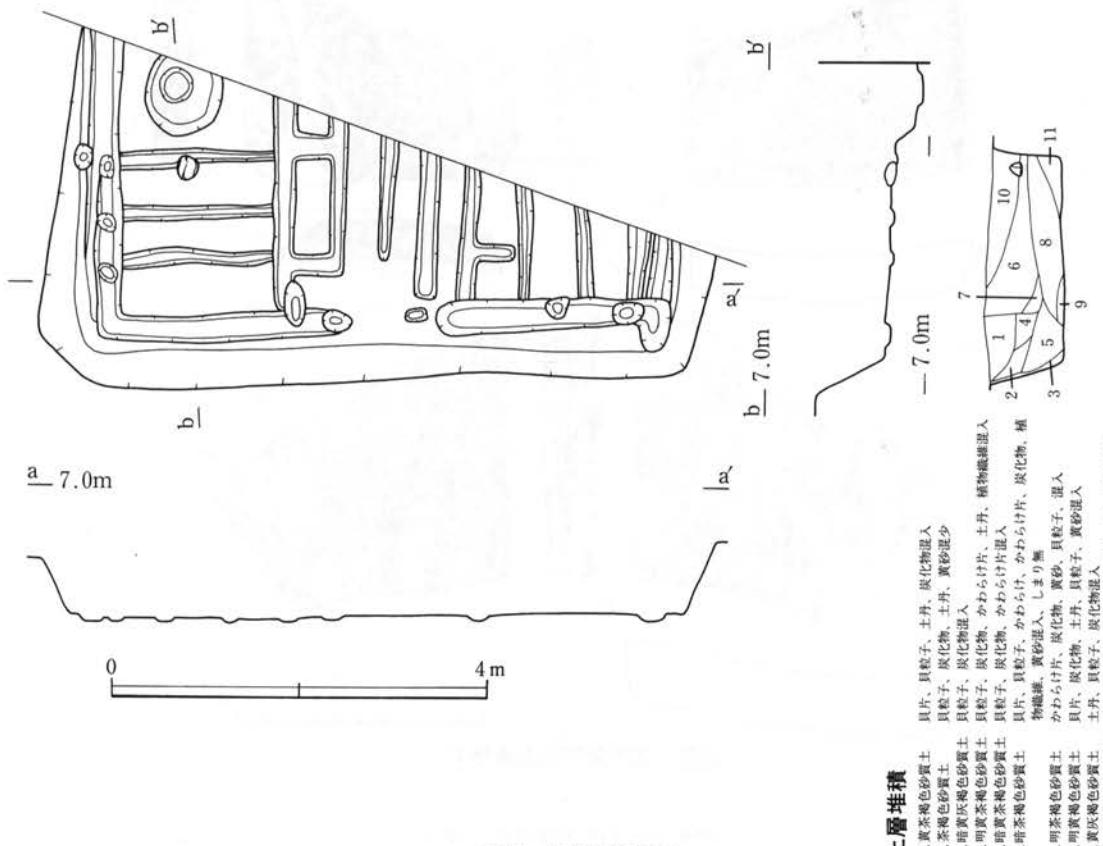


図93 方形竪穴 116

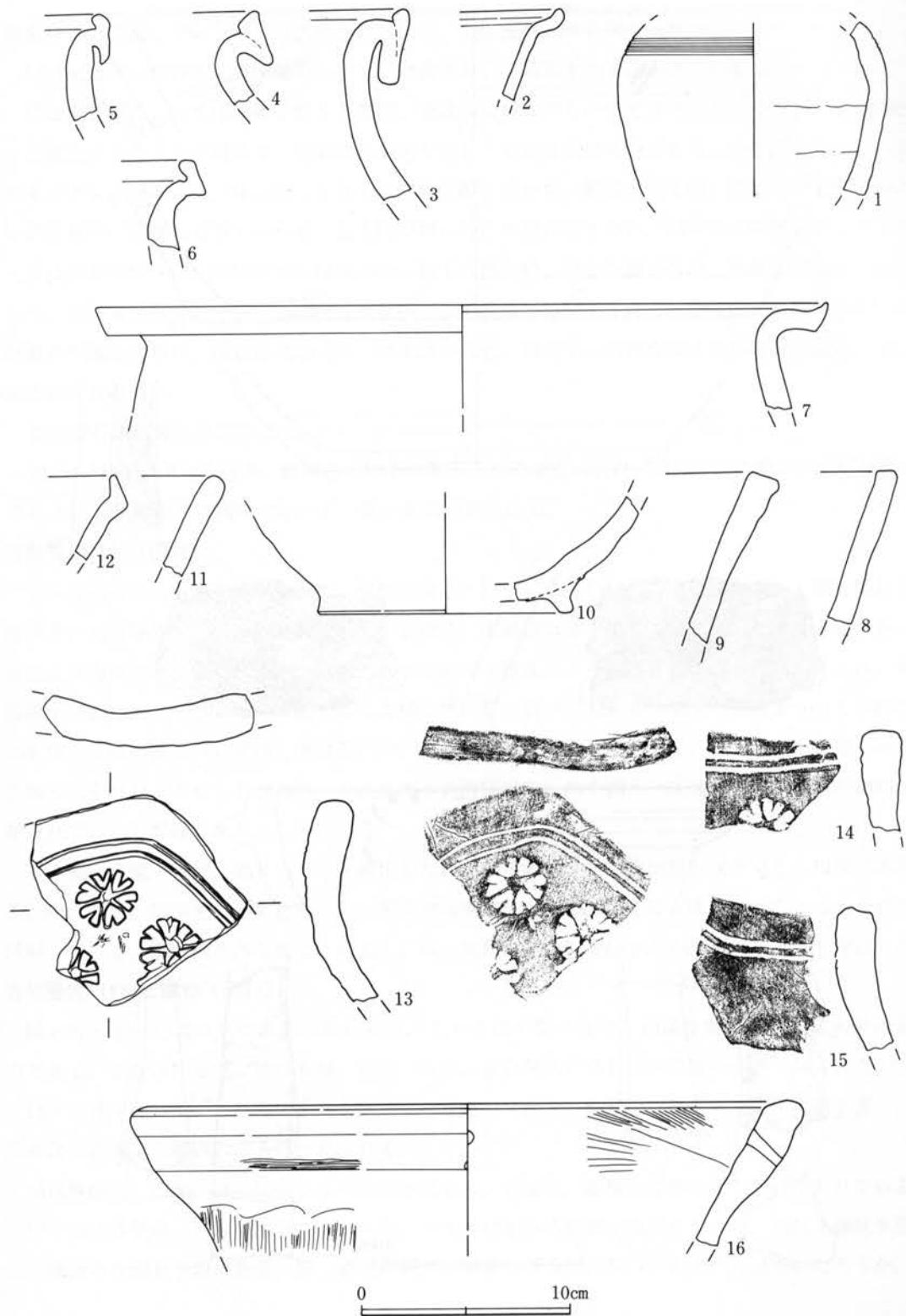


図 94 方形竪穴 116 出土遺物(1)

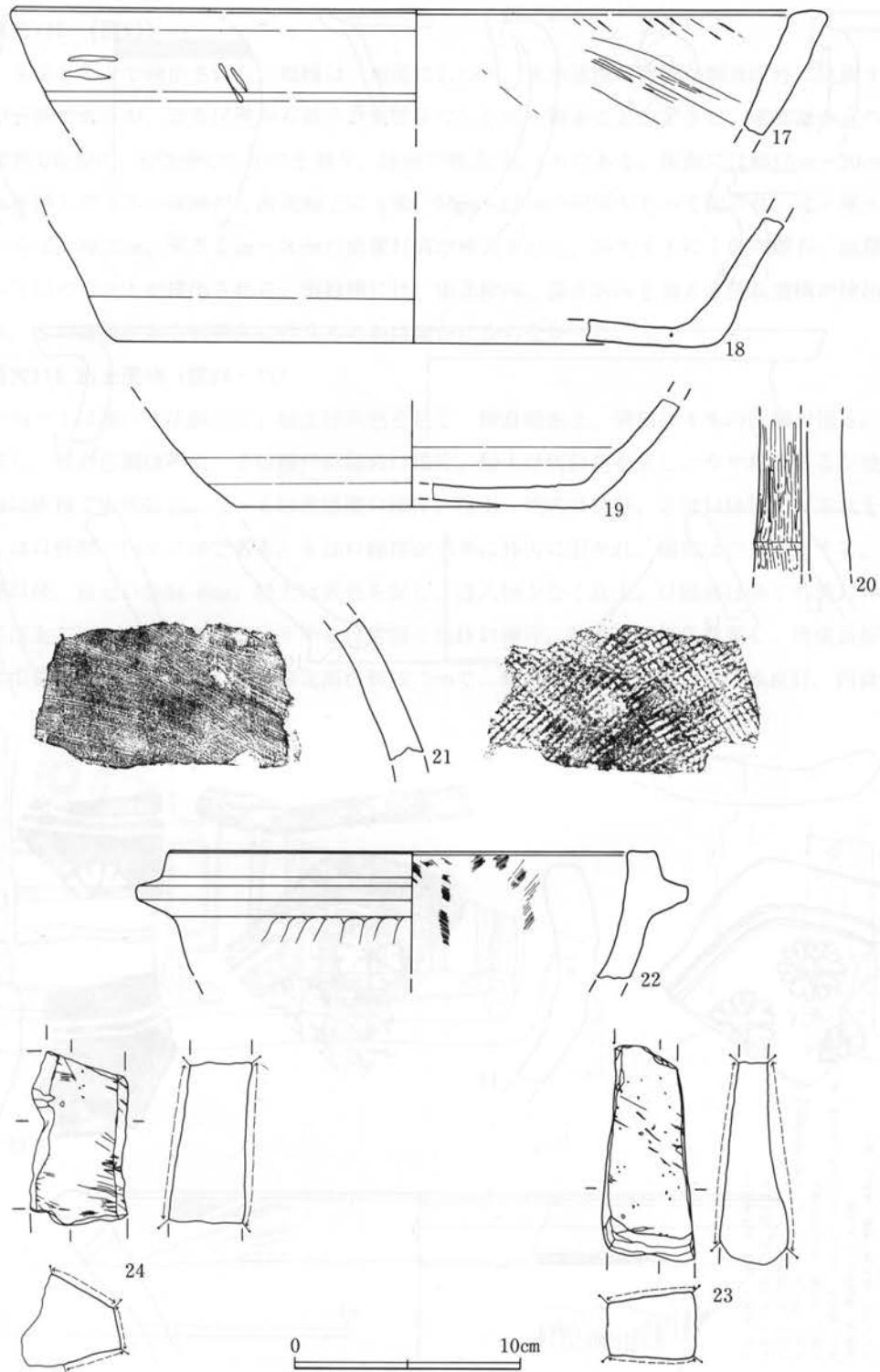


図 95 方形竪穴 116 出土遺物(2)

非常によく摩滅している。11は灰白色の胎土で、焼成良好。口唇部は丸味をもつ。

12は東播系こね鉢片。口縁端部に横ナテが施され、口唇部をつまみ上げている。

13は瓦質製品。胎土は瓦質手焙りと類似。焼成前に棒状のものでミガキをかけている。焼きは中・近世瓦にあるクスベ焼きで、器表は黒灰色を呈し、芯部は淡橙灰色である。器表には径3cmの印花文スタンプが施され、縁に沿って2条の凹線を配している。製品としては、手焙りの可能性が高いが土風呂、灯籠とも考えられる。出土例が無い為、判断はできない。14・15も同製品である。16～18は瓦質手焙り片。16は復元口径30.4cm。胎土は微砂粒、白色物質を含み、軟質。口縁下に孔をもつ。17は復元口径34.8cm。18は復元底径26.2cm。底部は器壁より薄く、砂目痕が観察される。19は瀬戸折縁皿底部片。復元底径15.6cm。胎土は灰白色、精良土。内底面に4重の沈線が巡る。20は瓦器質燭台脚部片。

22は滑石鍋。復元口径21.3cm。

23.24は砥石。気泡を含み、赤褐色の粒子が混ざるやや硬質の石材。23は砥面に細かい削痕が観察される。24は砥面から側面にかけて、鋭い削痕が見られる。

方形竪穴118（図96）

E-8杭のほぼ中央で検出された。規模は南北7.85m、東西7.1mの掘り方をもち、確認面からの深さ、北壁側で0.95m、南壁側で0.55mを測る。床面はほぼ平坦で、標高は4.9mである。E-8杭より南西部を、南北2.5m、東西2.1mの範囲で搅乱により破壊されている。床面からは、東西軸上に幅15cm、深さ3cmの規模を有する根太木の据え痕が、おおよそ60cmの間隔をもって規則的に並び、2個の礎石（いずれも伊豆石）が2.1mの間隔で見られる。また、根太木痕上に礎石の抜き取り痕を思わせるピットがあり、これと礎石の間隔は2.1mを測り、床面中央部に4個の礎石が配されていたと想像される。

その他に北壁・東壁に張り出し部を検出した。北壁部の張り出し部は階段状を呈し、規模は南北2.25m、東西2.75mを測る。それぞれの床面比高差は10cm～20cm、主屋部床面に向かいゆるやかに傾斜している。東壁張り出し部は、南北5.3m、東西1.2mの規模をもち、溝、ピットを確認した。

方形竪穴118出土遺物（図97）

図-97・1～13はロクロ成形のかわらけ。1～9は小型のもの、10は中型、11～13は大型のものである。器形は、器壁に稜の有無、内湾、外反、直立気味に立ち上がるものがみうけられた。

14・15は宇瓦。太めの凸線で上向き剣頭文を連続して配す。剣頭文は横長で上下に界線を置く。凸面には花菱文と横線の叩き目が見られる。

16は雁振瓦。凸面には細かな布目痕が見られ、凹面は、縦横に丁寧なナテが行なわれている。

17・18は骨製品。17は装飾具と思われる。V字状に刻みの沈線が施されている。18は土錘状を呈し、側面の片側を平坦に削る。眉、刷毛の軸か、あるいは馬具の鞍（しおで）ではないだろうか。

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-118	97-7	7.4	4.9	2.5
HT-118	97-1	7.9	5.9	1.7		8	7.7	5.0	2.4
	2	7.4	4.3	2.1		9	7.5	4.9	2.3
	3	7.5	4.7	2.1		10	10.4	4.7	3.5
	4	7.4	4.6	1.9		11	13.4	8.0	3.7
	5	7.7	4.4	2.4		12	13.6	7.4	3.6
	6	7.5	4.7	2.4		13	14.2	8.6	3.3

表28 方形竪穴118出土かわらけ法量

単位 (cm)

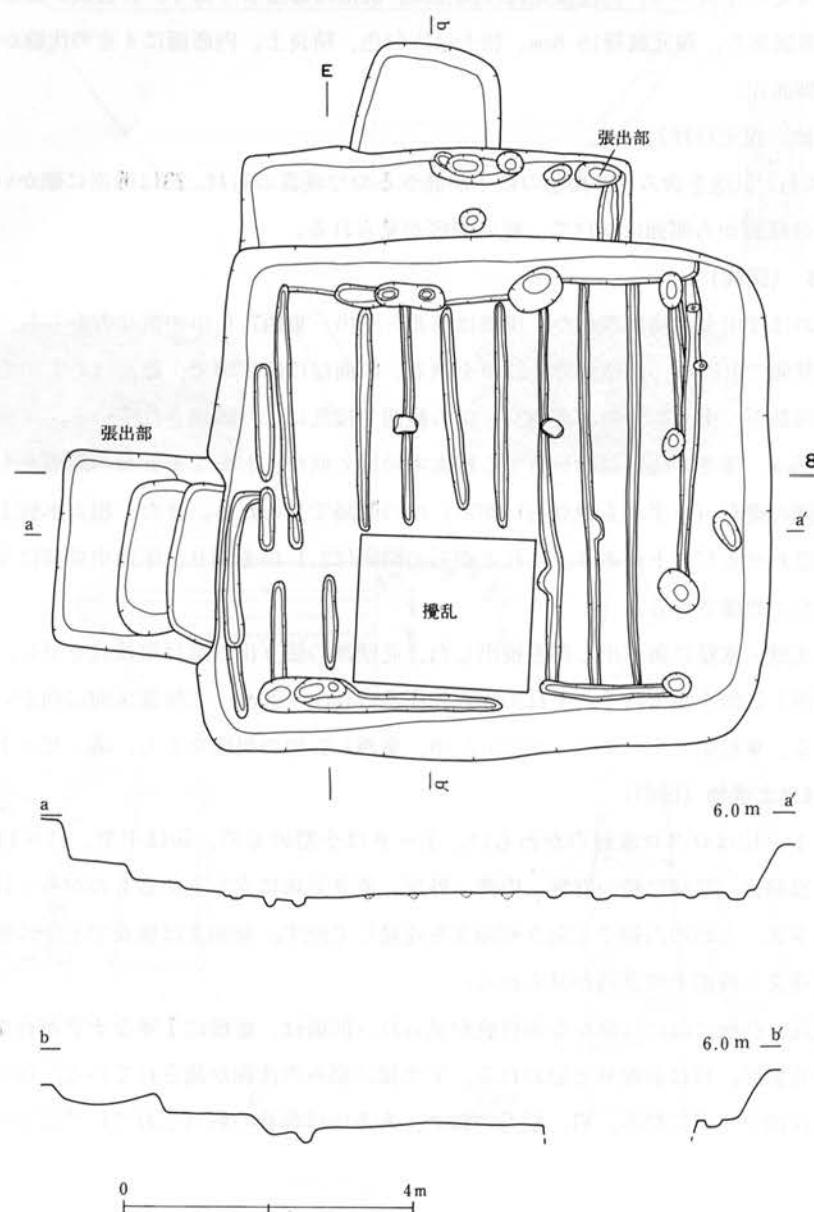


図96 方形竪穴 118



図 97 方形竪穴 118 出土遺物

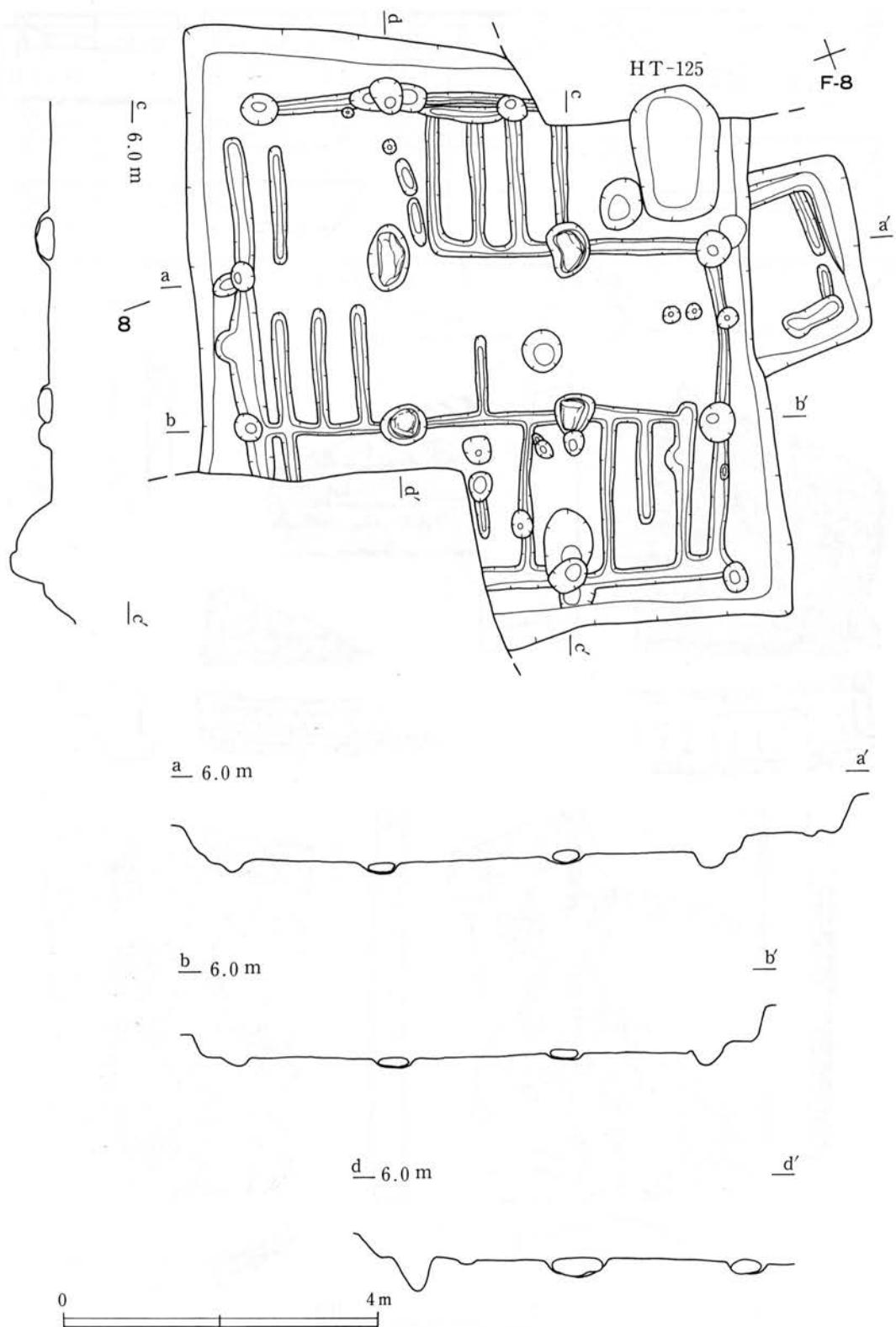


図 98 方形豎穴 123

方形竪穴123 (図98)

G-8 グリッド付近で検出された。北西隅を方形竪穴125 に、南東隅を方形竪穴119 に破壊されている。残存する東・西・南・北壁からの規模は、南北7.2 m、東西7.6 m でほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは、北西壁から0.5 m~0.6 m、南東壁から0.2 m~0.3 m、床面の標高は4.9 mを測る。床面には、根太木の痕跡が東西軸上に13条、南北軸上に2条、ほぼ均一の間隔(50 cm程度)でならんでいる。中央部には礎石をもつピットが4口、それぞれ2.2 mの間隔で確認された。この4口のピットを囲む形で7口のピットが、およそ2 mの間隔で検出された。これらのピットは上屋を支える柱の痕跡とも考えられる。北壁中央部には、張り出し施設とおぼしき遺構が見られる。床面の比高差は10cm程である。段差西側に人骨が発見されたが、この人骨は灰白色風成砂層中に埋葬されたもので、方竪123 はこれを破壊して建てられたものである。

方形竪穴125 (図99)

F-8 グリッド付近で検出された。平面形はほぼ正方形を呈する。掘り方は東西4.5 m、南北4.8 m 確認面からの深さ1.7 mの規模を測り、床面の標高は4.5 mである。床面からは、径40 cm、深さ8 cmのピット1口を検出したのみで、他に何ら遺構らしいものは発見できなかった。床面積はおよそ13.3 m²で、平坦である。

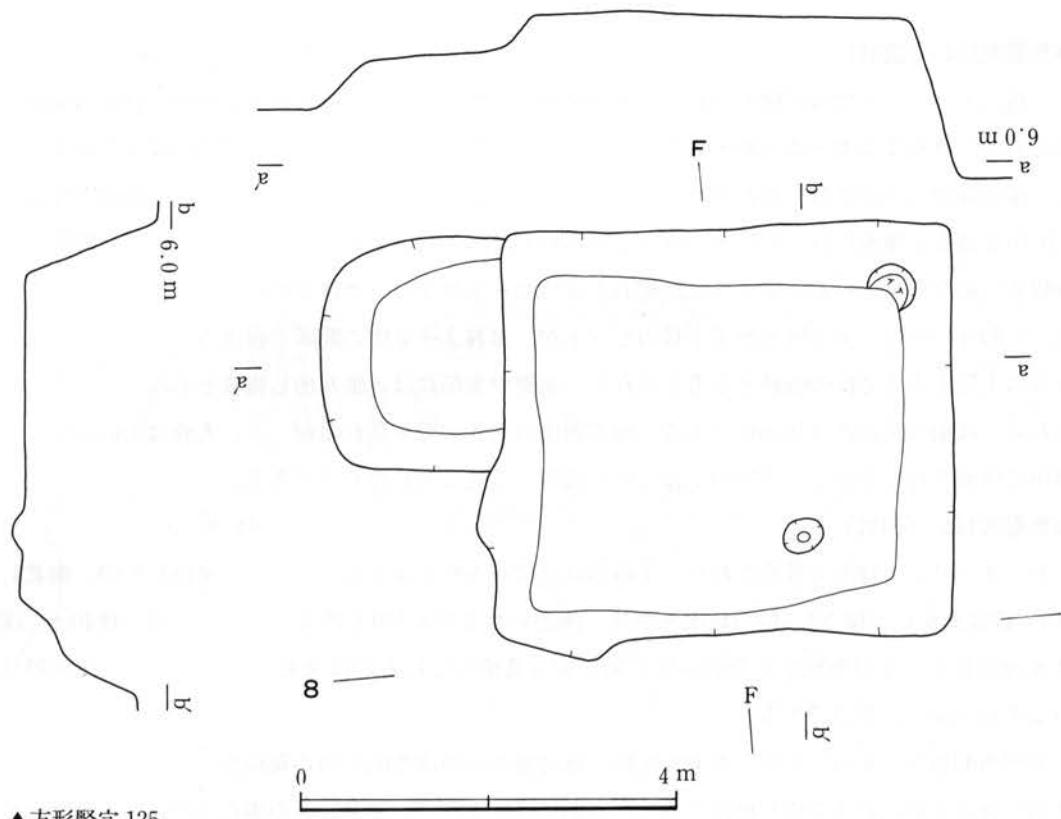
南壁西側部に、東西2.5 m、南北2.0 m、確認面からの深さ0.5 mの規模をもつ、方竪125 の張り出し施設と思われる遺構が検出された。底面はほぼ平坦で、方竪125 の床面との比高差は40 cmである。

方形竪穴125 出土遺物 (図100)

図-100・1は青白磁合子の蓋。高台径5.5 cm、器径8.6 cm、器高1.1 cm。素地は明灰白色を呈し壁緻。釉は明水青色でやや不透明。頂部に牡丹文が施される。

2~11は瀬戸製品。2は碗。復元底径4.5 cm。高台は削り出しである。胎土は黄白色を呈し、精良土。3は灰釉小壺。口径2.9 cm、底径3.2 cm、器高3.1 cm。胎土は明灰色を呈し、精良土。釉は明緑灰色で内外部全体に施される。茶入れと思われる。4は四耳壺口縁。復元口径10.3 cm。口縁部は丁寧に外側に折り曲げられる。胎土は灰白色で精力緻密土。釉は緑灰色を呈し、薄いハケ塗りである。5は折縁皿。胎土は白黄色精良土。体部中位から底部に向かいへラ削り痕が残る。釉は黄緑色でハケ塗り。6・7・9・10は卸し皿。白黄色及び灰白色を呈し、精良土。6は外底面糸きり後のへラ調整痕が見られる。7は卸し目が粗雑。10は口唇部にやや丸味をもつ。8は折縁鉢底部片。復元底径17.4 cm。胎土は灰白色精良土。内底中央部に3本の沈線が巡る。釉は緑黄色。11は入子。口径4 cm、底径3.8 cm、器高2.1 cm。器形は円形である。外底面は糸きり、内底面にはロクロ目痕が残る。胎土は灰色精良土。口唇部から内底面にかけて自然釉が付着。

12~15は常滑こね鉢片。12は片口をもち、胎土は灰黒色で粗土。口縁部は強いナデにより内側にへこむ。13は灰黒色を呈し、焼成良好。14は灰茶褐色を呈し、きめ細かいが焼成不良。15は灰褐色を呈し、白色粒、砂粒、泥粒を含むが緻密土。内面はよく摩滅している。



▼方形竪穴 129

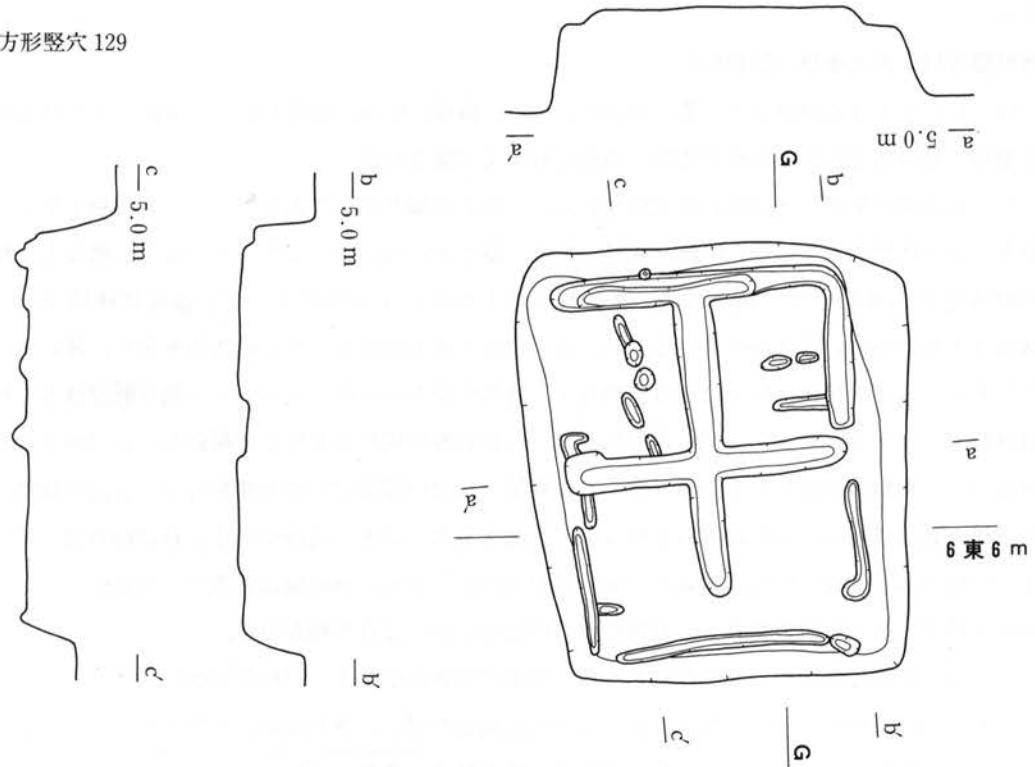


図 99 方形竪穴 125・129

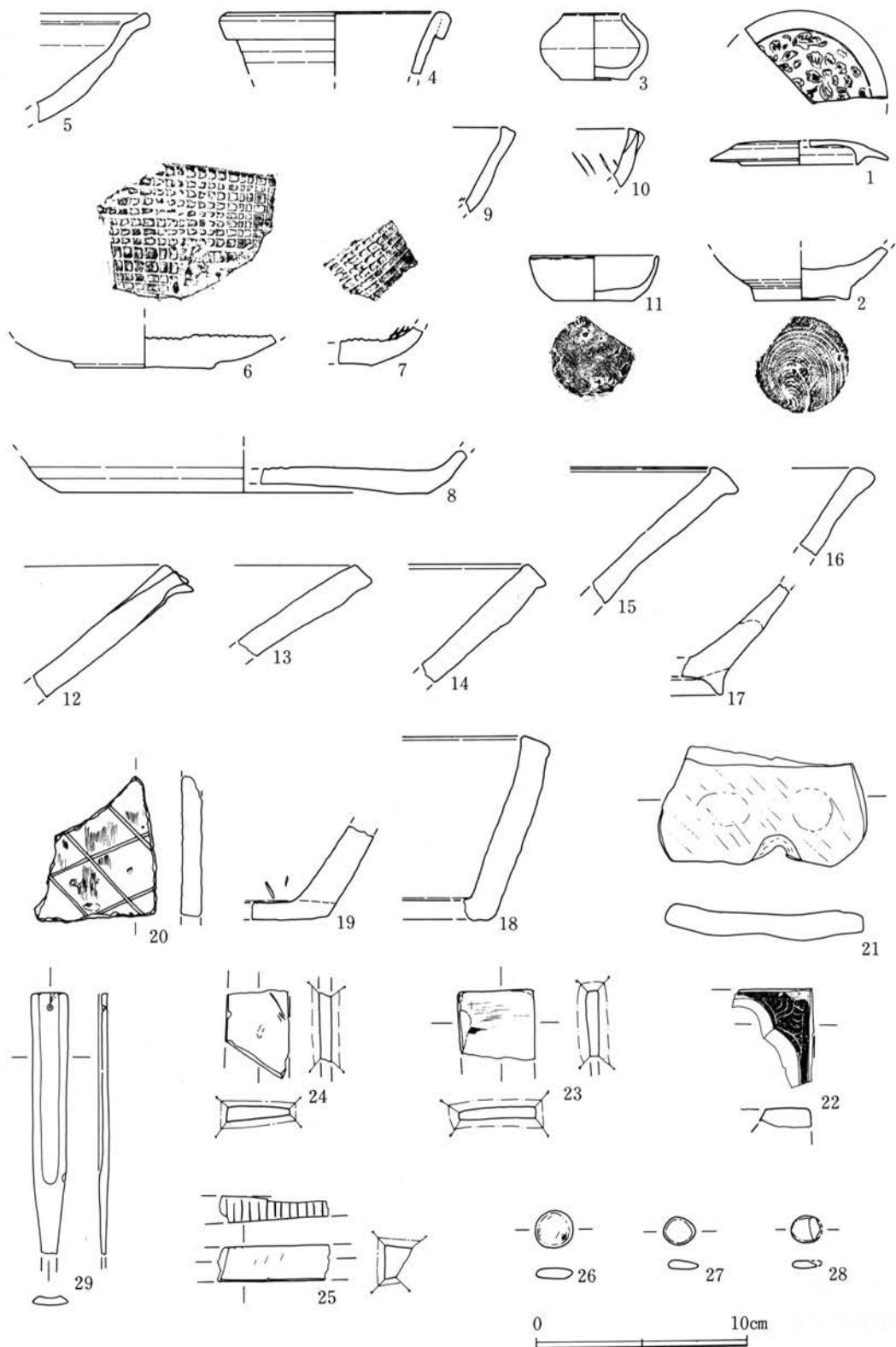


図 100 方形竪穴 125 出土遺物

16・17は山茶碗窯系こね鉢。16は口縁片。胎土は灰白色を呈し、混入物を含むがきめ細かい。縁端部に自然釉付着。17は底部片。胎土は灰白色を呈し、黒色砂粒、白色粒、礫を含む粗土。内底面はよく摩滅している。

18~20は瓦質手焙り。18は器表が非常に荒れており、表面観察は困難であるが上部におおよそ2cm大の菊花文スタンプが確認された。19は胎土は淡灰色で、礫を多く含む粗土。底部には離れ砂が多量に付着。20は内底面にヘラ状工具で格子目が施される。外底面には離れ砂が多量に付着。

21は擦り常滑片。断面を研磨しているもので、用途不明。

22は硯片。隅に波頭文が線刻されている。

23~25は砥石。それぞれ泥岩製の仕上げ砥。24・25は側面に擦り切り痕を残し、使用頻度は少ないと思われる。25は側面に、横方向ほぼ等間隔で切り込みがみられる。

26~28は碁石。26は径1.8 cm、厚さ0.5 cm。27は径1.3 cm、厚さ0.4 cm。18は径1.3 cm、厚さ0.4 cmである。

(小林)

方形竪穴129 (図99)

F・G-5・6グリッド付近で検出された。北西で方形竪穴104、南西で方形竪穴92と重複し、各方形竪穴よりも古い。

堀り方における本方形竪穴の規模は、東西4.6 m、南北4.1 m、確認面からの深さ1.0 mを測る。平面形はややくずれた隅丸長方形で、床面積は約14m²、標高は3.8 m程である。

床面はほぼ平坦で、東西に5条、南北に3条の溝状遺構、11口の円形、楕円形のピットが検出された。溝状遺構では、東、南壁下の遺構は幅約15cm、深さ約4 cmと小型で、他はいずれも幅約30cm前後、深さ約15cm前後を測る。これらは各壁下、および中央部に「田」型に配され、地覆材、および根太木据え痕であると思われる。円形のピットの規模は最大で径10cm、深さ13cm、最小で径20cm、深さ9 cm、楕円形のピットでは幅15cm前後、深さ5 cm前後で、長さ20cm~50cmを測る。これらの配置はさほど整然とはしていない。

方形竪穴129 出土遺物 (図101)

図101-1~7は小型、8は大型のロクロ成形のかわらけである。1、2は内折れと称される器種で、2は底部が高台状を呈する。3~5は体部外面中程に弱い稜を持ち、やや直線的に外反する。口縁部ぶやや内湾するものもある。6、7は体部外面下方に強い稜を持ち、外底部が高台状を呈する。8は体部外面に弱い稜を持ちやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でやや外反する。胎土は砂粒を含むやや粗いものが殆どで、色調は淡橙茶色、茶灰色を呈する。すべて内底面にはナデ痕が回転糸切り痕、明瞭不明瞭の差はあるが、スノコ痕が残る。

9は白磁口兀皿。口径11.2cmを測る。素地は明灰色でやや粗い。釉は灰白色を呈する。

10は白磁小皿底部片。底径6.6 cmを測る。素地は白色で堅緻。釉は灰白色を呈する。

11は常滑甕口縁部小片。胎土は微砂をやや多く含む。

12~15は山茶碗系こね鉢である。12は口径24.7cm、片口を持つ。15は底径9.1 cm。灰色、暗灰色

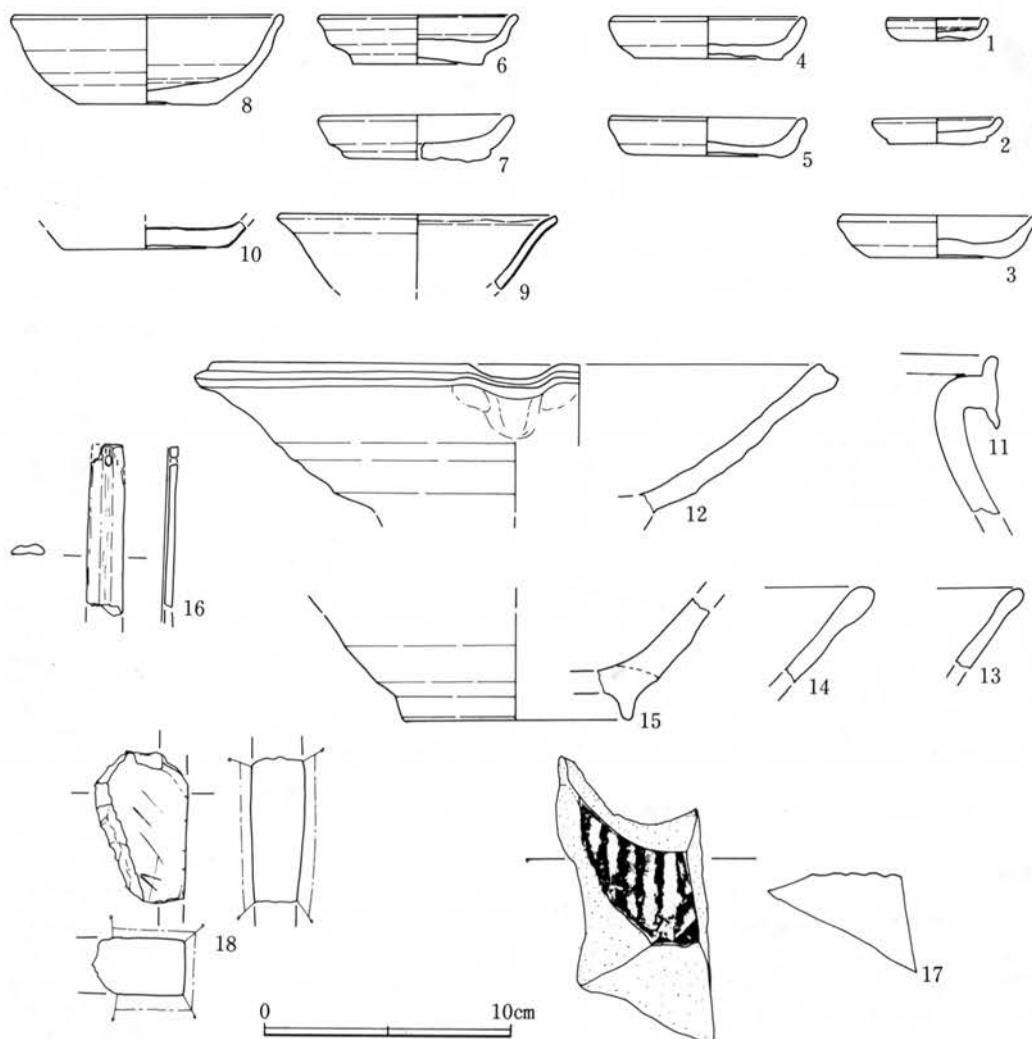


図101 方形竪穴129出土遺物

遺構名	図番号	口径	底径	器高	HT-129	101-5	7.8	6.1	1.6
HT-129	101-1	3.9	2.8	0.9		6	7.9	5.3	2.0
	2	5.2	4.0	1.0		7	7.6	5.7	1.8
	3	7.9	5.5	1.7		8	10.8	5.6	3.6
	4	7.7	6.0	1.7					単位(cm)

表29 方形竪穴129出土かわらけ法量

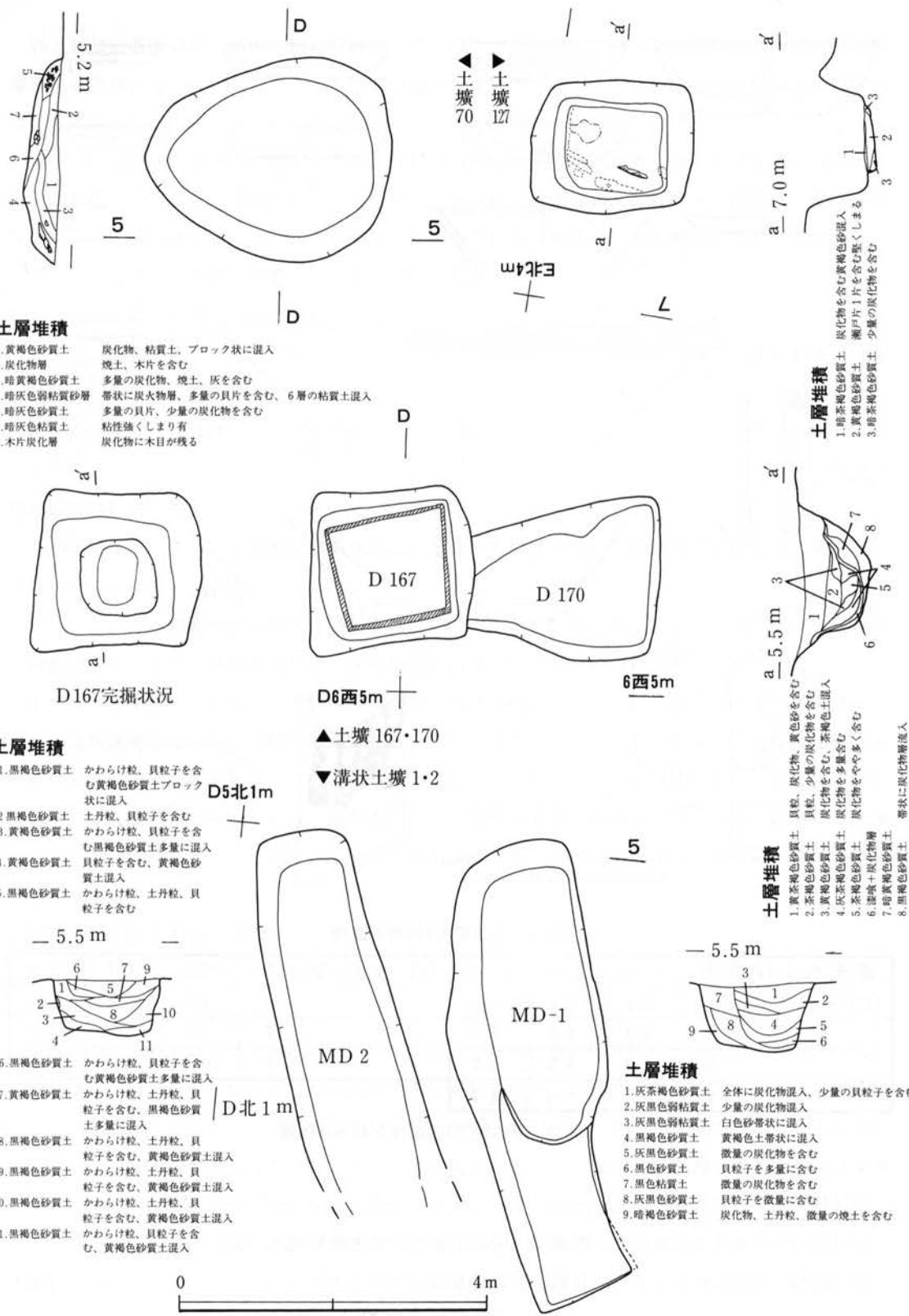
を呈し、内面はよく磨滅している。

16は骨製笄である。残存長6.8 cm。

17は石白片であると思われる。磨面には現存5本の平行沈線を確認。安山岩系の石材である。

18は砥石。暗茶褐色を呈する泥岩製の中砥である。

(早野)



B. 土壙

土壙70 (図102)

D-5杭に掛かり西側に検出された。本土壙は新しく、方形竪穴44・45の上に確認された。本土壙の周辺には方形竪穴、土壙が多く確認された。

平面形は橢円形を呈し長軸3.2m、短軸2.6m、深さ0.5m。覆土内より多量の完形かわらけ、貝類を出土した。図102の土層堆積の3、4、5と6、7の間に、かわらけが図示されている。

土壙70出土遺物 (図103)

図103のからわけは1~24が小型(7~8cm前後)25~35が大型(12~13cm前後で28のみ14cm近い特大品である)のロクロ成形である。

36は青磁の碗。復元口径14.8cm。素地は微砂が少量混入し、灰色を呈す。釉は緑灰色を呈す。

37は青磁の酒会壺の蓋。復元口径14.6cm。素地は微砂が混入し、灰色を呈す。釉は青灰色を呈す。施釉は透明は鍔の裏から口唇にかけては露胎で残される。口縁に若干ゆがみがみられる。

38は白磁口兀小皿。復元口径11.7cm、底系7.0m、器高3.7m、素地は微砂を少量含むが精良土である。釉は薄く乳白色を呈す。口縁が外反しており、口唇が角張って、釉が抜き取られている。

39は山茶碗系こね鉢。復元底径11.0cm。胎土は小石。砂が多く粗く、灰色を呈す。内面は磨滅しているが、横ナテ痕すが残存する。外面はヘラ削りと思われる。高台は雑な貼り付け高台である。

40は土器質手焙り小片。口縁部で肥厚し、口縁下で外方へ傾斜して孔があけられている。(田代)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	D-70	103-18	8.3	4.9	2.0
D-70	103-1	7.3	4.8	1.5		19	7.5	5.4	1.8
	2	7.7	5.5	1.6		20	7.8	5.1	1.6
	3	7.6	5.8	1.7		21	7.6	5.3	2.0
	4	7.8	5.6	1.6		22	7.4	5.1	1.8
	5	7.5	4.7	1.8		23	8.1	5.4	1.9
	6	7.5	5.0	1.6		24	7.8	4.2	2.2
	7	8.3	6.3	1.7		25	11.7	7.0	3.1
	8	7.2	5.3	1.8		26	12.6	8.4	3.0
	9	7.6	4.7	1.9		27	13.3	7.4	3.6
	10	7.8	4.8	2.0		28	13.9	8.5	3.6
	11	7.5	5.2	1.7		29	12.2	7.6	3.1
	12	7.4	5.1	1.7		30	11.9	7.8	3.4
	13	8.1	5.1	2.0		31	12.5	7.5	3.4
	14	8.0	5.0	1.9		32	12.5	8.0	3.0
	15	7.3	5.2	1.7		33	12.7	8.5	3.1
	16	7.5	5.4	1.7		34	12.8	8.3	3.3
	17	7.8	5.2	1.8		35	12.3	8.3	3.1

表30 土壙70出土かわらけ法量

単位(cm)

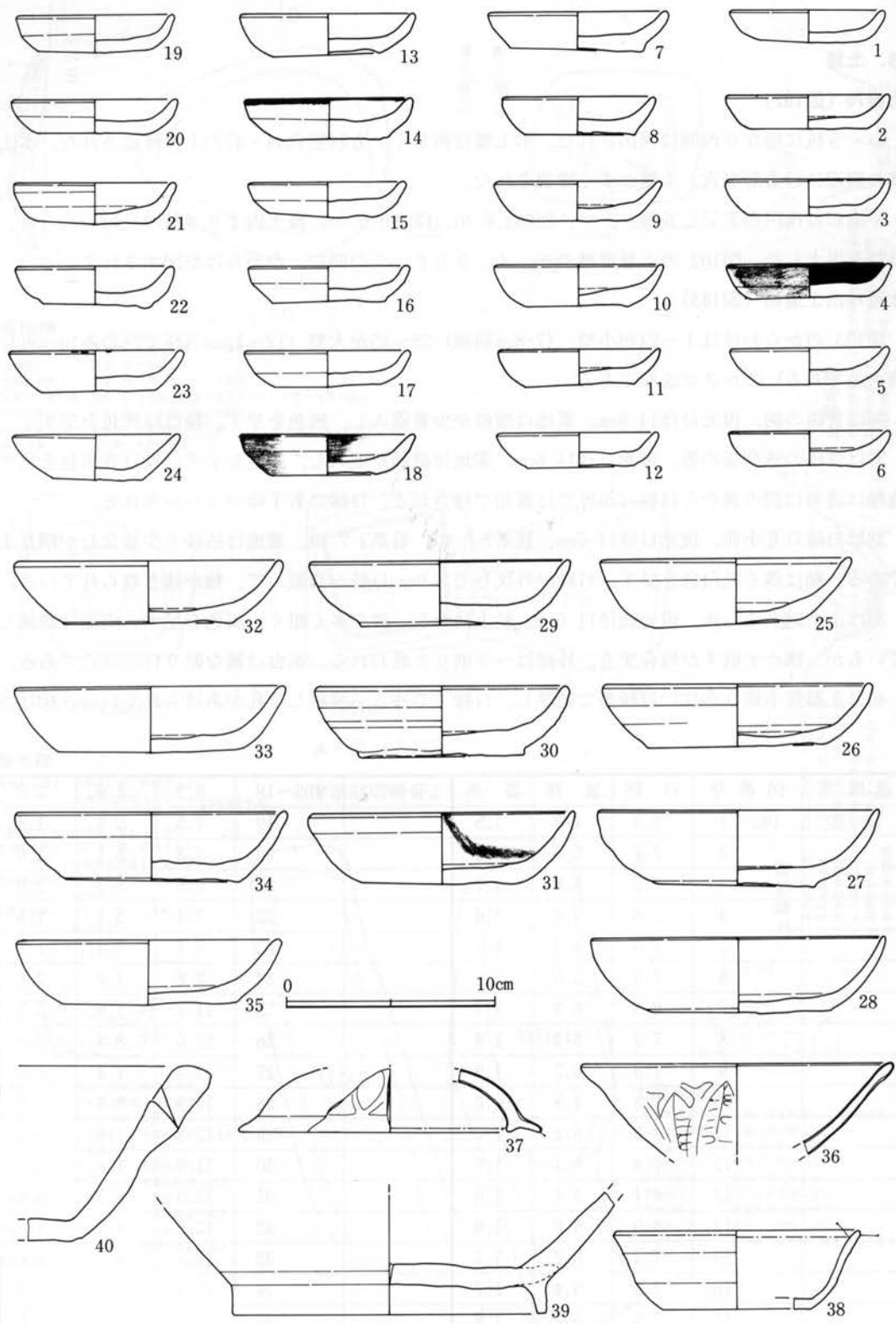


図 103 土壌 70 出土遺物

土壤127 (図102)

E-7グリッドに位置する。平面形は井戸状の堀り方を持つ。南北2.1 m、東西1.75m、確認面からの深さ2.1 mを測る。床面は平坦で、標高4.9 mを測る。壁の内側で5~8 cmの平場を有し、さらに5 cm強を掘り込む。床面では北東部に2ヶ所木片が残るが、遺存状態が悪い。中央部、西辺を除く床面で、漆喰、および炭化物が検出された。

土壤127 出土遺物 (図104)

図104-1、2はロクロ成型のかわらけである。1は体部中程に強い稜を持ち、2は稜を持たない。ともにやや内湾ぎみに立ち上がる。1は淡橙色、2は橙褐色を呈し、胎土は砂粒を含みやや粗

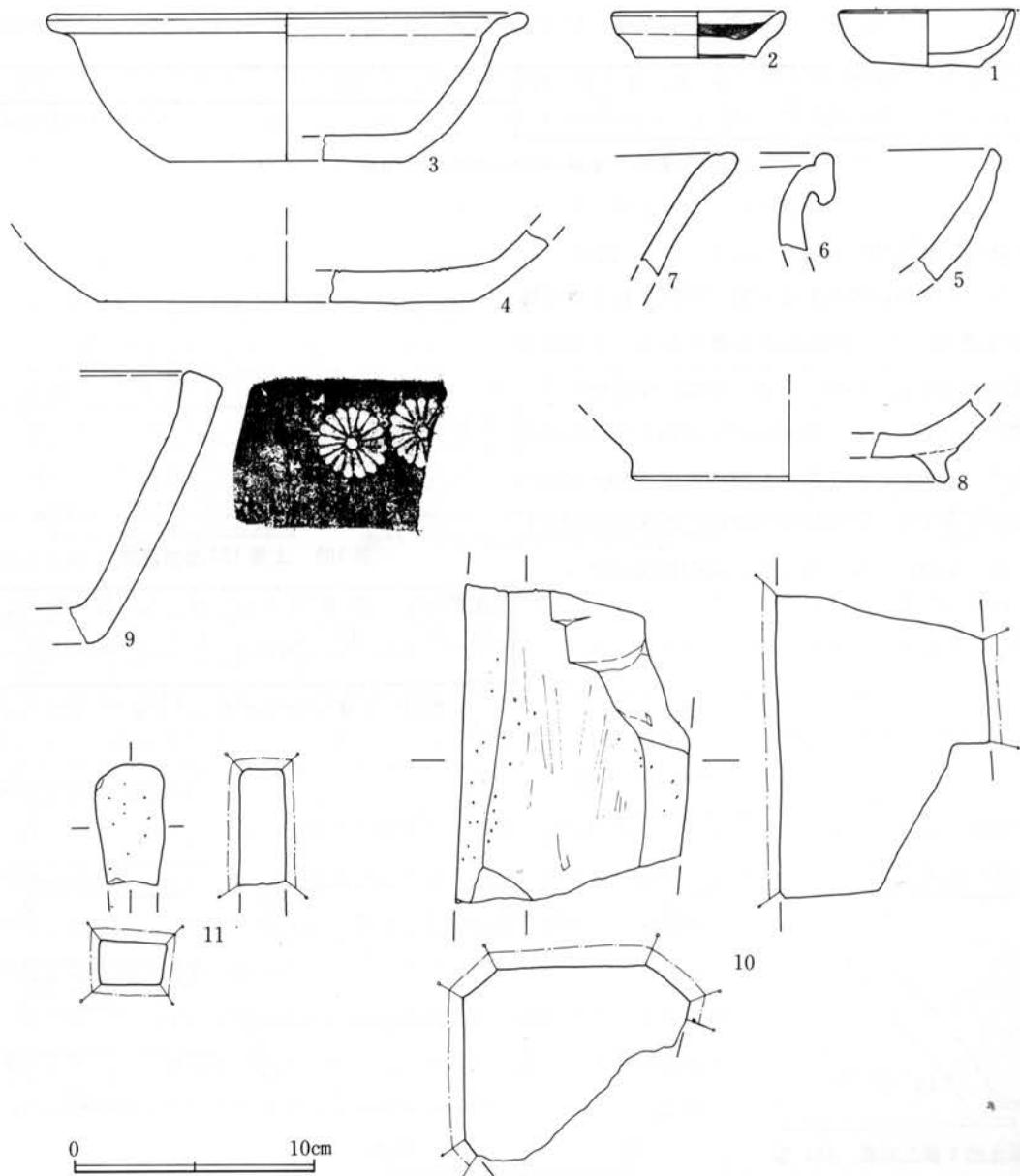


図104 土壌127出土遺物

い。焼成は良好である。

3～5は瀬戸窯の製品である。3は折縁鉢。口径19.2cm、底径9.7cm、器高6.1cm。口縁は外方へ折り曲げられる。4は底部片。底径15.4cm、内底面に4本の沈線が巡る。5は灰釉碗口縁部片。灰緑色を呈する。

6は常滑口縁部小片。口縁部はN字状に折り曲げられる。胎土は微砂含むが、良土。

7～8は山茶碗窯系のこね鉢である。7は口縁部片。灰色を呈し、胎土は白色微砂、砂粒の多い粗土。8は底部片。内面はよく磨滅している。暗灰色を呈し、粗土。

9は瓦質手焙り、菊花2個を確認。灰白色を呈し、胎土は微砂を多く含む粗土。

10、11は砥石。共に泥岩質。10は荒砥、11は中砥であろう。

(早野)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	D-127	104-2	7.0	5.0	1.7
D-127	104-1	7.2	4.6	2.3					単位(cm)

表31 土壌127出土かわらけ法量

土壌167 (図102)

D-6杭西に隣接する位置に検出された。土壌127に類似した、井戸状の土壌である。平面形の掘り方は南北2.15m、東西2.05m、確認面からの深さ0.9mを測る。底面はやや傾斜しているが平坦で、標高4.4mを測る。壁の内側で10～20cmの平場を有する。平場四方に炭化した木枠が南北1.5m、東西1.4mに残るが、残存状況は悪い。

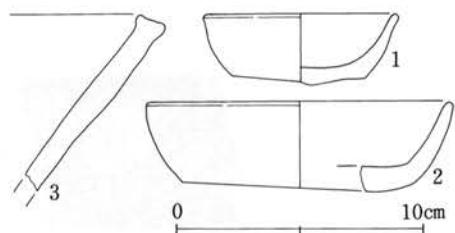


図105 土壌167出土遺物

遺構名	図番号	口径	底径	器高
D-167	105-1	7.7	5.3	2.7
	2	12.2	9.2	3.5

表32 土壌167出土かわらけ法量 単位(cm)

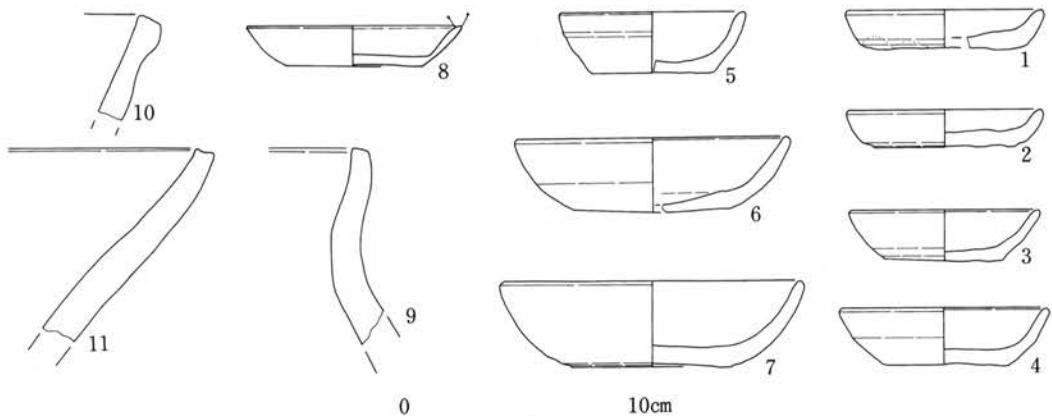


図106 土壌170出土遺物

土壤167 出土遺物 (図105)

- 1は小型のかわらけ。なだらかに立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部はスノコ痕が強い。
 2は大型のかわらけ。厚手で、やや内湾ぎみに立ち上がる。
 3は常滑こね鉢口縁小片。胎土は小石、微砂を含む。 (田代)

土壤170 (図102)

D-6グリッドに位置し、土壤167 北辺と隣接する。平面形は一辺2.0 mではほぼ正方形の井戸状の堀り方を持つ。確認面からの深さ0.5 mを測る。底面は平坦で、標高5.3 mを測る。壁の西側と東側の内面で、漆喰が検出された。土壤127 および167 と同じ形態と思われる。

土壤170出土遺物 (図106)

図106-1~5は小型の、6は中型の、7は大型のかわらけである。1は手捏ね成形。平底で体部外面の指頭痕とナデの境目は不明瞭。2~7はロクロ成形。2は口縁部が内湾する。3は器壁がやや外反しながら立ち上がる。4~5は体部外面中程に稜を持ち、器壁は直立気味に立ち上がる。6は器壁が外反しながら立ち上がる。7は体部外面下位に稜を持ち、口縁は内湾する。
 8は白磁口兀小皿。復元口径8.7 cm、底形5.5 cm、器高1.6 cm。素地は白濁色を呈し粉質。
 9は常滑の壺と思われる。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえる。器表は茶褐色を呈する。
 10・11は常滑の捏ね鉢。胎土は黒色微粒、白色微石を混じえる。器表は茶褐色。 (須佐)

遺構名	図番号	口径	底径	器高	D-170	106-4	8.2	4.8	2.3
D-170	106-1	7.8	6.6	1.5		5	7.3	4.9	1.9
	2	7.7	5.6	1.5		6	10.8	6.4	3.0
	3	7.5	4.8	2.1		7	12.0	6.4	3.0

表33 土壤170出土かわらけ法量

単位(cm)

溝状土壤1 (図102)

D-5グリッド付近で検出された。平面形は東西に長軸をもつ、長方形を呈する。東西5.85m、南北1.4 m~2.0 m、確認面からの深さ、西壁から1.3 m、東壁から0.5 mを測る。底面はほぼ平坦で、断面は箱形を呈する。長軸中央西寄りに10cmの段差が見られ、断面図から検討すると、掘り直しましたは別遺構を切った、と考えられる。底面の標高は4.2 mである。機能、用途は不明である。

溝状土壤2 (図102)

MD-1の南側に平行に並んで位置する。東壁の限界は確認できなかった。南北1.5 m、東西は限界までおおよそ5.0 m、確認面からの深さ0.7 mの規模を測る。底面はほぼ平坦で、断面は箱形を呈する。標高は4.3 mを測る。覆土の堆積状況はMD-1と類似する。

溝状土壤2出土遺物 (図107)

図-107・1.2は常滑甕口縁片。胎土は茶灰色、焼成良好。1は口縁部が外反し、口縁端部は直立する。2は口縁部を水平に外方に引き出し、口縁端部はやや直立する。 (小林)

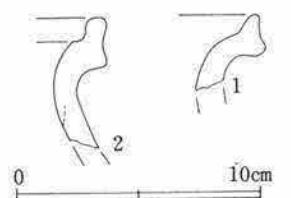


図 107 溝状土壤2出土遺物

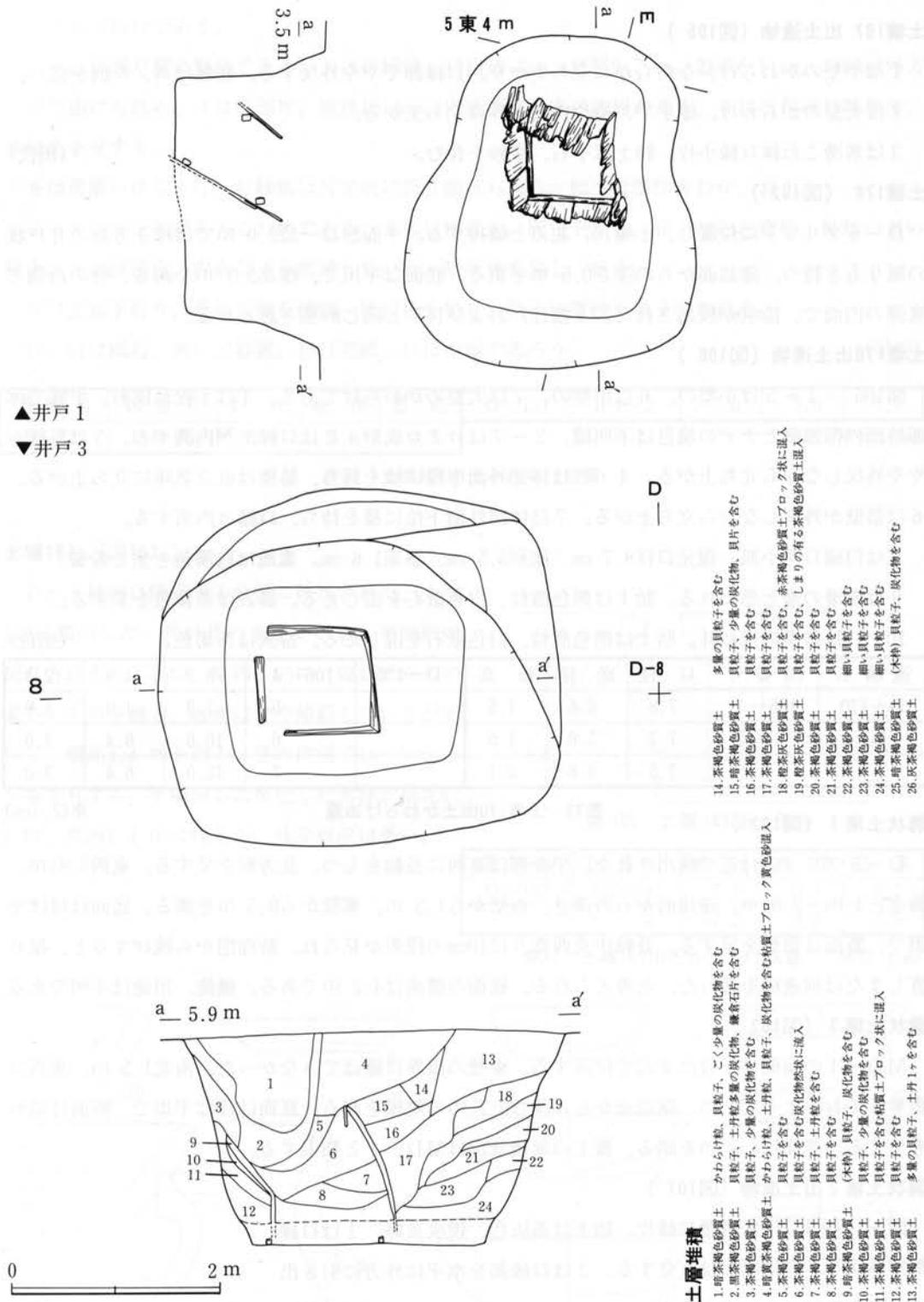


図 108 井戸 1・3

井戸 1 (図108)

D・E-5 グリッドに位置し、遺構北側で井戸 7、8 に隣接する。

掘り方は東西3.18m、東寄りで南北2.75m、西寄りで南北2m、確認面からの深さ1.25mのくずれた方形様を呈する。底面標高2.88mを測る。

井戸枠は掘り方内の西寄りに、確認面より約0.4m下方から検出された。土圧により全体に東側に傾斜し、一辺約1mを測る。検出された側板は、厚さ約3cm、南北辺に幅30cm前後のものが3枚、東西辺に幅20cm強で4枚、1列に並べられている。部分的に左右の側板のつなぎ目を補強する形で、外側に幅10cm～15cmの側板が並べられている。

側板の内側には、側板を支持する横桟が遺存し、方形横桟支柱型を呈している。横桟は幅約5cm、厚さ約8cm、長さ80cm～85cmを測る。

遺物はかわらけ、常滑、磁器、山茶碗、土師、こね鉢、骨片等が出土した。

井戸 3 (図108)

D-8・9 グリッドに位置する。

掘り方は南北3.8m、東西3.44mを測り、不整方形の平面形を呈する。調査では確認面より1.92mまで掘り下げ、横桟の一部を検出したが、壁の崩落の危険性が生じたため以下の調査は中止した。中止時点での標高は3.79mを測る。

横桟は掘り方内のやや南寄りに位置し、一辺約1mを測る。横桟の残存状況は悪いが、約6cm×6cm、長さ90cmの角材が検出された。特に南面では腐食が激しく、横桟の組方は確認できない。北西隅においては、確認面からの深さ1.59mで、緩やかな傾斜を持つ平場が形成される。

遺物はかわらけ、常滑、磁器、瀬戸、砥石、こね鉢、瓦、釘等多様な遺物が出土した他、人骨も確認された。

井戸 2・5・6 (図109)

H-5 グリッドに位置する。

井戸 2・5・6 は重複関係にあり、井戸 6 が一番古く、2・5 の新旧関係は明らかでない。

井戸 2 は東西に張り出す階段状の掘り方を持つ。掘り方上段の平面形は東西4.5m、南北2.3m、深さ0.3mを測る。そこから狭くなり、東西2.2m、南北2.0m、深さ1.3mの不整円形の掘り方となる。

井戸 2 の南側0.6mのところで、井戸 5 が検出された。南北3.3m、東西2.7m、深さ2.0mを測り、不整円形を呈する。

更に、井戸 2・5 両者に切られる形で、井戸 6 が検出された。掘り方は南北を大きく壊されて原形をとどめないが、東西2.2m、深さ0.9mを測る。

3基とも最下部において、残存状況は非常に悪いが、1辺0.7m～0.9mの木枠が検出された。

遺物の内容はいずれも同様で、かわらけ、常滑、磁器、手焙り、捏ね鉢等が出土した。 (須佐)

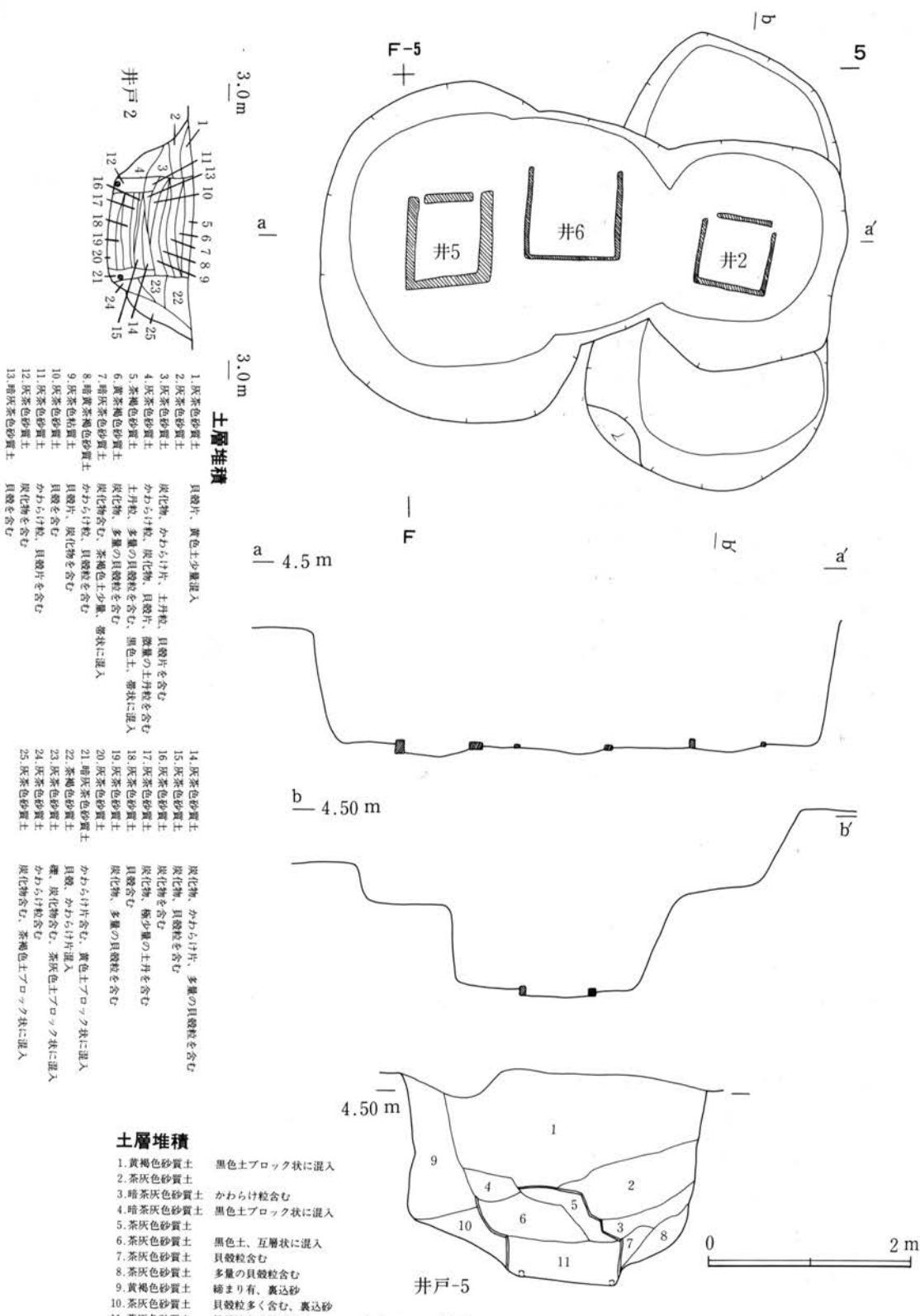


図 109 井戸 2・5・6

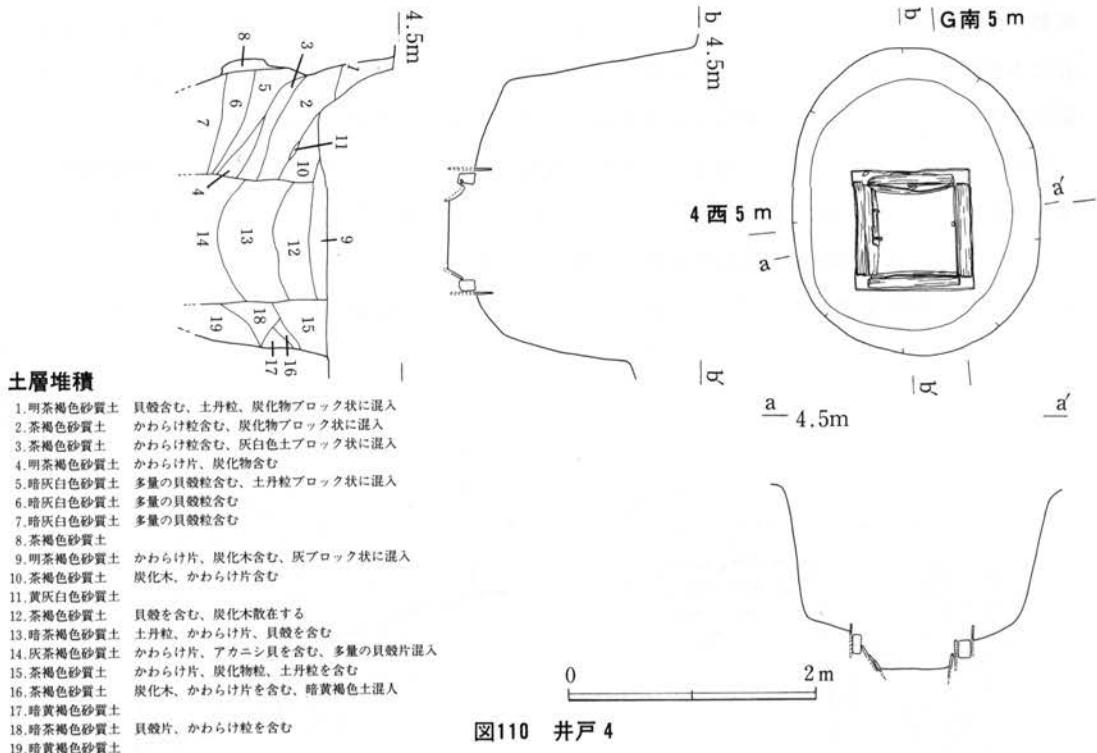


図110 井戸4

井戸4(図110)

G-4グリッドに位置する。

堀り方は南北2.5m、東西2m、確認面からの深さ3.02mを測り、不整円形を呈する。標高は2.4mを測る。

井戸枠は確認面より0.6m下方から検出された。一辺約1mを測る。側板は腐食が進み残存状況が悪い。側板内側には約9cm×12cm、長さ75cmの角材が遺存している。横桟として設置されたものであろう。各横桟の組方は両端が腐食しているため確認できない。あるいは4隅に立てられていた支柱が抜き取られた可能性も考えられる。さらに横桟の内側には厚さ2cmの横板が遺存し、それを支持する形で北辺に1本、南辺に2本の杭が検出された。

遺物はかわらけ、常滑、磁器、手焙り、瀬戸、砥石、こね鉢等が出土した。

(早野)

d. 人骨(図111. 112. 113. 114)

C-6・7間、F・G-9グリッド付近、主に方形竪穴、土壙が途切れる空間地帯の灰白色風成砂層上で数多く発見されている。灰白色風成砂層上、方形竪穴覆土中から検出されたものは、13世紀～14世紀のものと考えられる。

遊離人骨を除き単体のものは、方形竪穴及び土壙等の遺構に破壊され土壙墓としての形態を留めてはいないが確実に土壙をもって埋葬されたものであると考えられる。埋葬形態としては北頭位仰臥屈葬が9体、次いで北頭位横臥屈葬が多く見受けられ、その他に北頭位仰臥伸展葬、南頭位横臥

屈葬、西頭位仰臥屈葬等のものが見られた。また、図-113の人骨14・15・16、図-114の人骨31・32は方形竪穴、土壙等によって一部破壊されたと考えられる。図-113の入骨12は副葬品として、銅鏡を伴っていた。副葬品を伴うものは人骨12のみで、他のものからは発見されていない。

方形竪穴の覆土中から斬首、頭骨、一体分の人骨が発見されているが、これらは方竪を埋め戻す際や包含層中に埋葬されたものであろう。また方形竪穴、土壙の覆土中から遊離人骨も検出されている。方形竪穴等の遺構が土壙墓を破壊して建てられたのではないかと考えられる。このことから推定すると、墓壙及び人骨もかなりの数になるのではないかと想像される。

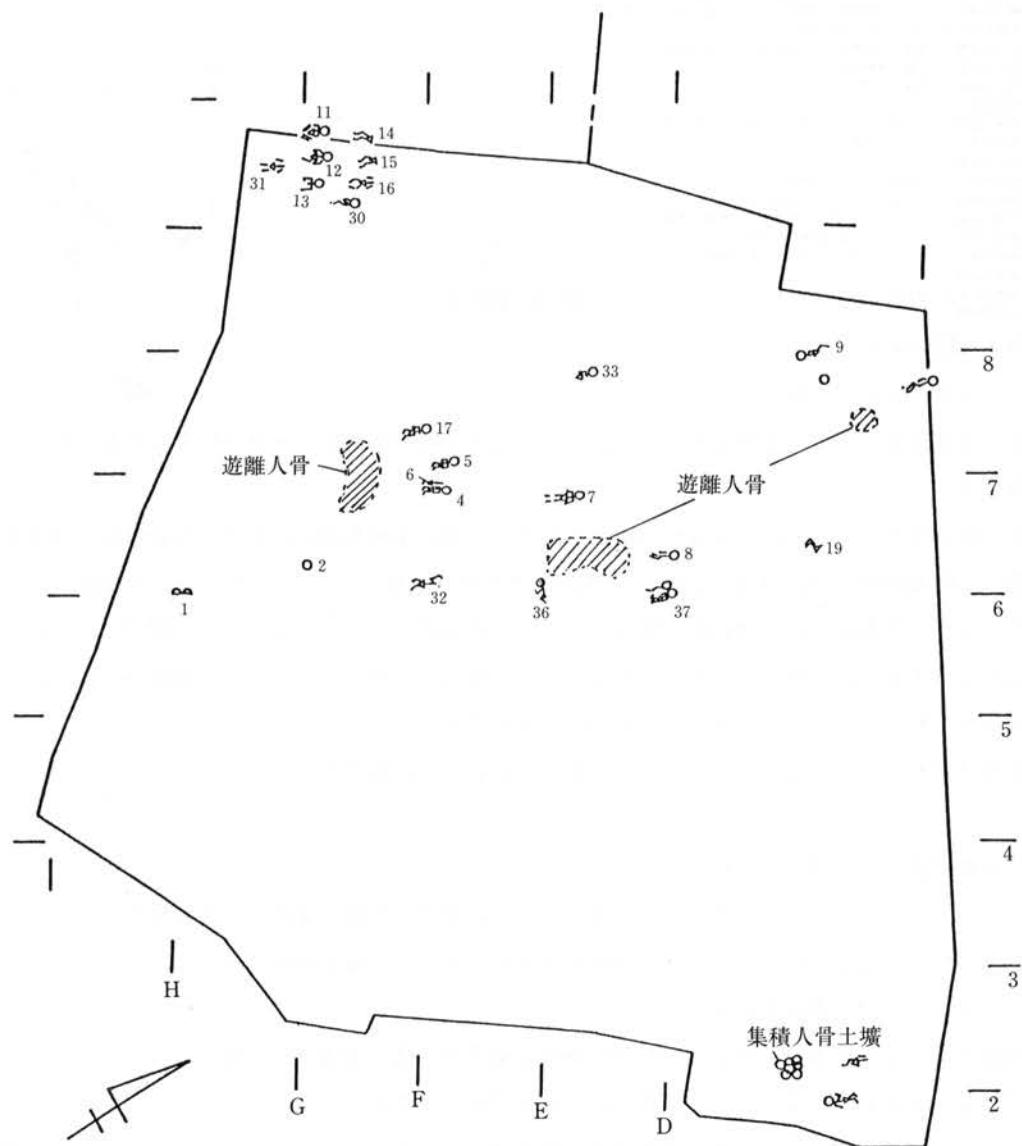


図 111 人骨出土地点概念図

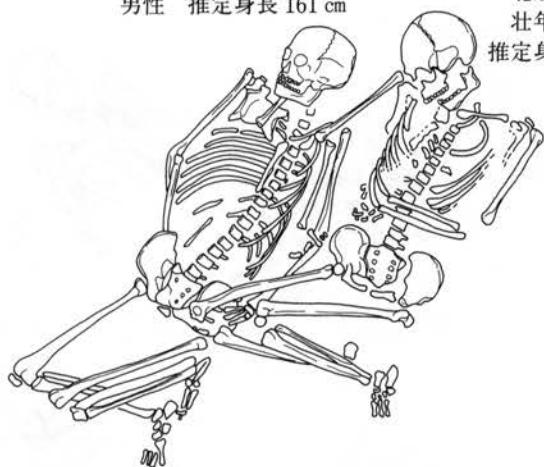
►人骨 1
遊離頭骨
下顎は失われている。



►人骨 2
遊離頭骨



▼人骨 6
北頭位仰臥屈葬
男性 推定身長 161 cm



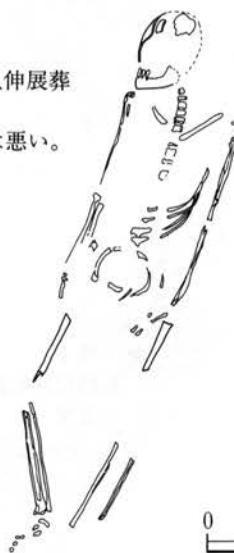
▼人骨 4
北頭位仰臥屈葬
壮年男性 (20~40 歳)
推定身長 161 cm



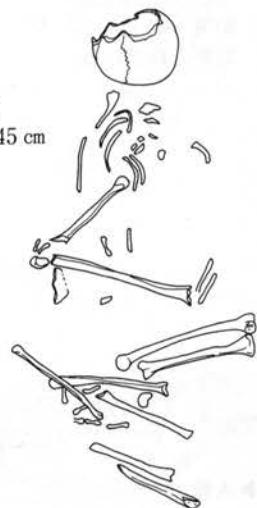
►人骨 5
北頭位仰臥屈葬
女性 推定身長 148 cm
頭骨の遺存状況は
良くない。



►人骨 7
北頭位仰臥伸展葬
女性
遺存状況は悪い。



►人骨 8
北頭位横臥屈葬
女性 推定身長 145 cm



0 1 m

図 112 出土人骨(1)



▶人骨 9
南頭位横臥屈葬
方形竪穴の覆土中
より出土。



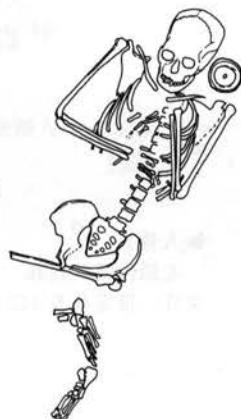
▶人骨 10
北頭位横臥屈葬
遺存状況は悪い。



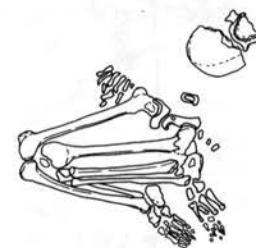
▶人骨 11
北頭位仰堅屈葬



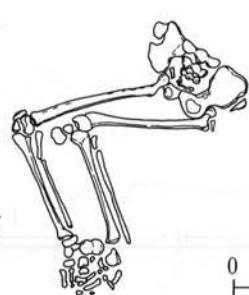
▶人骨 13
北頭位仰臥葬
下半身は土壤によって
失われている。



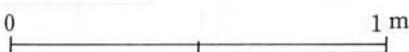
▶人骨 12
北頭位仰臥屈葬
女性、頭部左脇に
銅鏡(图 118-24)が
副葬されている。



▶人骨 14
北頭位屈葬



▶人骨 15
北頭位屈葬
上半身は土壤によって
失われている。



▶人骨 16
北頭位仰臥葬
小児骨



図 113 出土人骨(2)

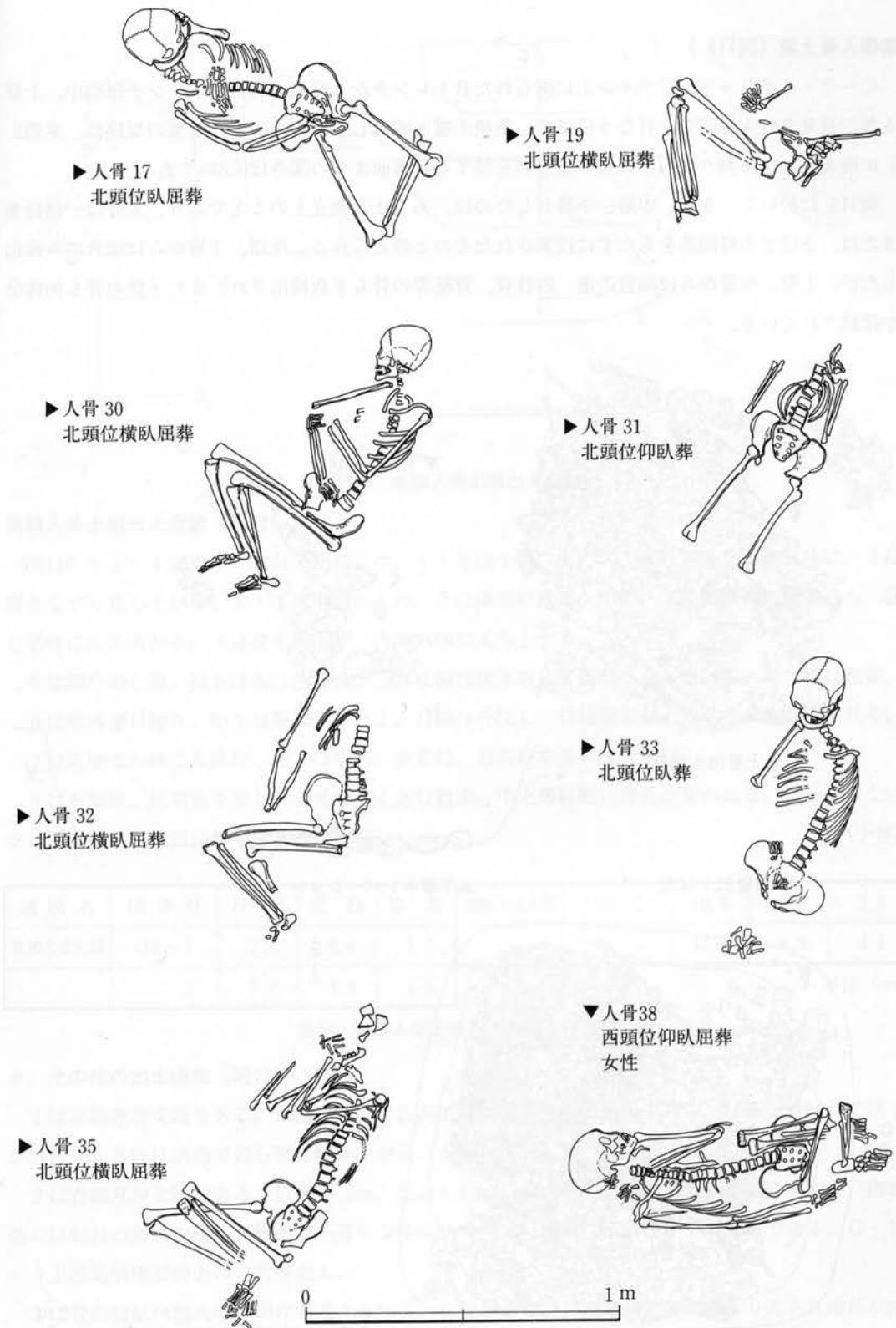


図 114 出土人骨(3)

集積人骨土壙 (図115)

C-2・3グリッド、Cライン上に掘られたBトレンチから発見された。トレンチ掘削中、上層人骨が発見され人骨調査を行なう段階で、集積土壙と確認したものである。土壙の規模は、東西5.5m南北5.3mを測り、円形に近い正方形を呈する。底面までの深さは0.8mである。

図115に於いて、上層、中層、下層としたのは、あくまで便宜上のことであり、人骨は一括投棄または、さほどの時間差をもたずに投棄されたものと考えられる。所謂、下層からは頭骨のみ検出したが、上層、中層からは頭骨の他、四肢骨、脊髄等の骨も多数検出され、また子供の骨も何体分か確認されている。

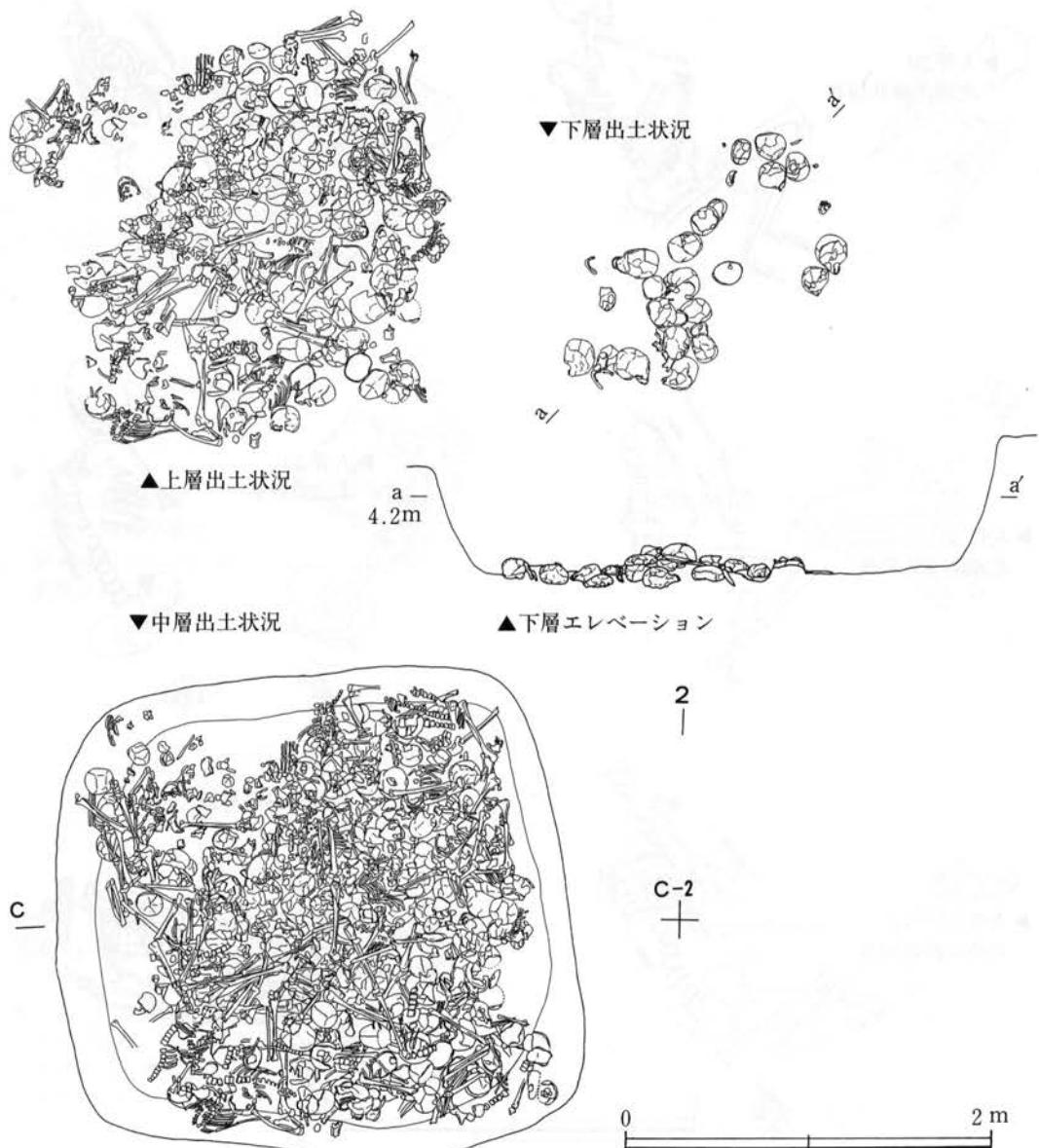


図115 集積人骨土壙

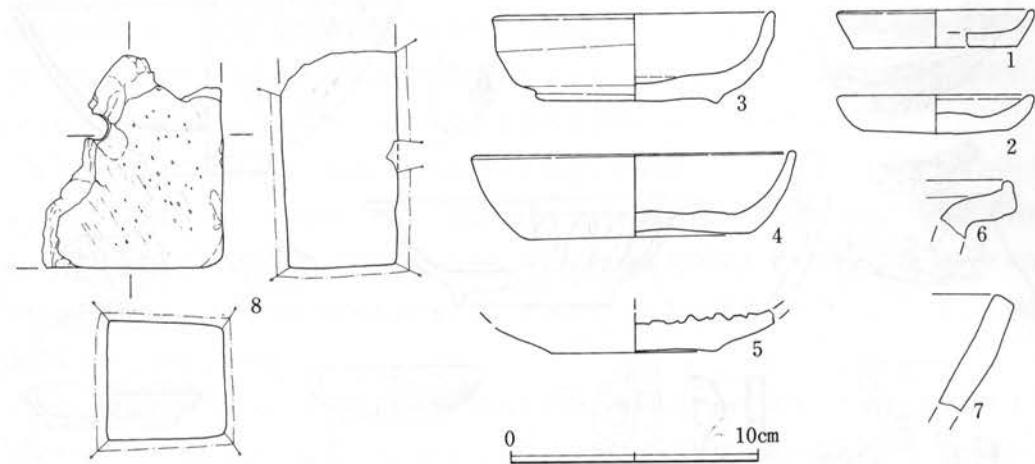


図116 集積人骨土壤出土遺物

集積人骨土壤出土遺物（図116）

図116・1～4はロクロ成形のかわらけ。1・2は小型のもの。1は底部より直立気味に、2は開きながら立ち上がる。3・4は中型のもの。3は体部口縁部、中位、下位に強めの稜をもち、直立気味にたちあがる。4は稜をもたず、内湾気味に立ち上がる。

5は瀬戸卸し皿。胎土は灰白色精良土。外底部は拭き取って露胎となっている。卸目は粗雑。

6は常滑甕口縁片。胎土は茶褐色精良土。口縁は外反し、口縁端部は上方へつまみ上げられる。

7は常滑こね鉢こね鉢片。胎土は小石、長石粒、石英粒を含み焼成良好。

8は石製品。灰褐色を呈し、石英を多く含む粗土。中央部付近に穿孔が見られる。砥石ではないかと思われるが、用途不明である。

（小林）

遺構名	図番号	口径	底径	器高	集積人骨土壤	116-3	10.8	6.9	3.5
集積人骨土壤	116-1	7.8	6.6	1.5		4	12.8	8.9	3.4
	2	7.7	5.9	1.5					単位(cm)

表34 集積人骨土壤出土かわらけ法量

e. その他の出土遺物（図117・118）

1は青磁蓮弁文碗である。口径15.8cm、器高6.9cm、高台径4.9cmである。釉薬は青緑色で厚くかけられ、素地は灰色で岩石質に焼き上がる。

2は青磁双魚文鉢である。口径14.2cm、器高4.4cm、高台径6.4cmである。外面に蓮弁文、内底面には貼付の魚文が残る。釉薬は不透明な暗緑色を呈し、素地は灰白色を呈し堅緻である。G・H-3上層遺構確認面上の包含層出土。

3は青白磁貼付龍文の香炉片と考えられる。口径9cmで、口縁端部が外側に折り返され端部が輪花状の浅い切り込みをもち、頸部は短めの「ハ」字型を呈す。龍文は胴・頸部にかけて巻きつけ、

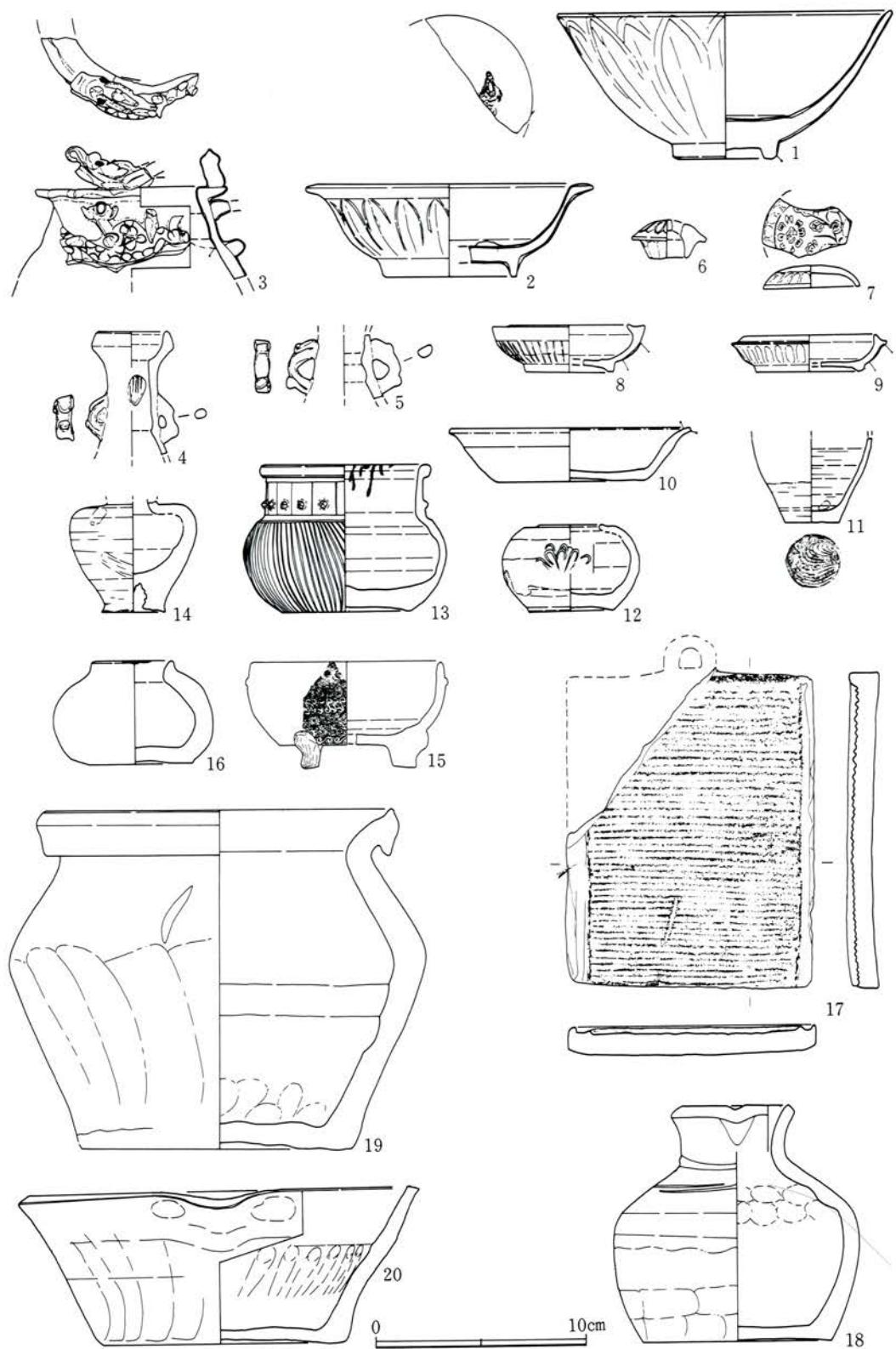


図 117 その他の出土遺物(1)

龍頭部は口縁部に貼付いている。龍の目の部分は鉄釉で黒く塗られており、胴部は細い竹管状の印刻で龍独特の肌を表現する。釉薬は透明感のある水色で、釉だまりした部分には細かな気泡が多くみられる。素地は白色の夾雜物の少ない精良なもので堅緻である。II区C井戸出土。

4・5は青白磁双耳花生である。4は口径3.5cmで、口縁部は直立しており、頸部に耳が付き、その上部に楕円状の貼付文がみられる。素地は粘りの強い灰白色土で堅緻である。釉薬は透明度の高い青水の白色を呈する。方形竪穴より出土。5は口縁部を欠失するが、頸部に取り付く耳の部分が貼り付いている。粘りの強い緻密な白色素地に青味がかった釉が薄めにかけられている。上層遺構確認面上の包含層より出土。

6は小型壺の蓋と思われる。径3.6cm、器高1.8cm、軸部高8mmである。上面には牡丹のような花文を配している。軸部には径6mm、深さ5mm程の孔がある。釉薬は薄い青緑色を呈し外面のみに施されている。素地は白色に近い精良土できわめて緻密である。方形竪穴62より出土。

7は青白磁合子の蓋である。外型作りで、頂部は中央に円を置いて描かれる牡丹文の花弁のような文様が陽刻されている。天井部は指頭でナデ廻し痕を残している。素地は黒色砂粒を多めに混入した灰白色土に、青味の強い釉薬をかけている。上層遺構確認面上の包含層より出土。

8・9は青白磁合子の身である。8は口径7.2cm、底径4.2cm、器高2.3cmを測る。側面には条線を思わせる狭い蓮弁を配する。釉薬は蓋受け部と底部付近を除いて、内面と外面上半に施されている。素地は、焼きが甘いため橙色味の残る灰色を呈し、白濁した水青色の釉がみられる。9は口径7.4cm、底径5cm、器高1.7cmを測る。側面には幅の狭い蓮弁文が配す。白色緻密な素地に比較的透明な水青色を呈した釉薬をかける。8・9ともに上層遺構確認面より出土。

10は白磁口元皿である。口径11.4cm、底径6.9cm、器高2.5cmの完形品である。底部は平底作りで体部上半から口縁部にかけて緩かに外反する。釉は青味をおびた白色で、口唇部は削りで剥き取っている。上層遺構確認面より出土。

11は江西省贛州窯の製品と思われる小壺で胴部下半の1/3程残す。底径2.6cmで回転糸切痕を残す。素地は夾雜物のない緻密なもので、釉薬は胴部下半中程まで鉄釉がかけられている。素地は茶褐色、施釉部分は褐～茶褐色の色調である。II区Cの土壙より出土。

12は瀬戸鉄釉印花文小壺である。無頸壺で口径3cm、底径4cm、器高4.2cmを測る。胴中位に菊花文印が4ヶ所以上押される。底部は回転糸切り痕を残す。胴部下半まで茶褐色の鉄釉が厚くかけられている。素地はやや微砂・小石を含むが良土である。上層遺構確認面より出土。

13は瀬戸擂座千条文小壺である。口径8.1cm、底径6cm、器高7cmである。口縁部は玉縁状につくられ、直立した高めの頸部には条線で区割りした中に小さな貼付珠文を加え、胴部から下にかけては斜めの細かい条線を刻している。黒褐色の鉄釉は内面と外面の中程までかけられている。方形竪穴59より出土。

14は瀬戸灰釉小壺である。底径3cm、最大径6cmを測り、口縁部を欠く。肩は強く張り小さめの底部につづく。釉薬は頸部および肩上の所がやや厚く（薄い緑色）かかるが胴部は薄い。

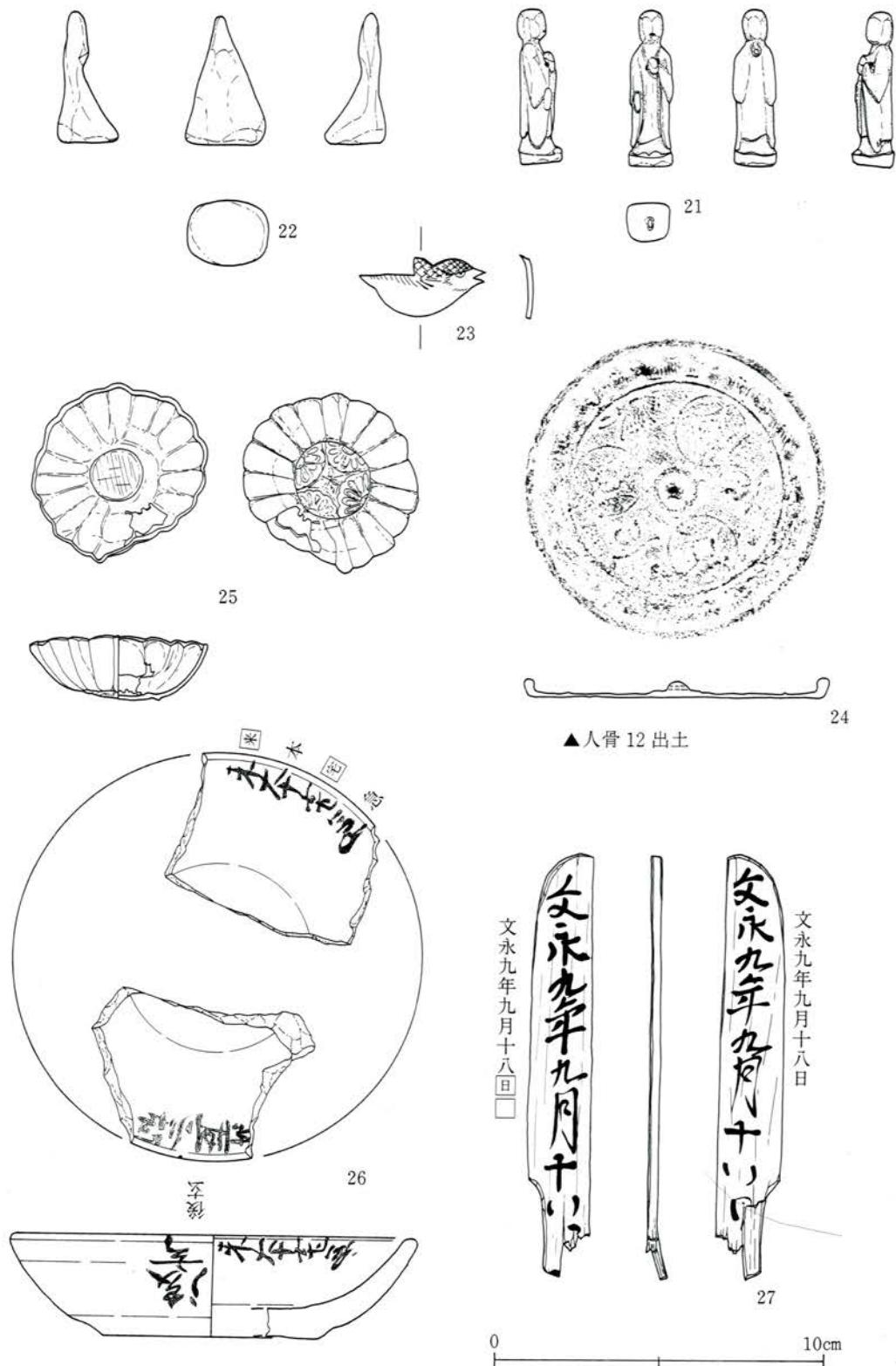


図 118 その他の出土遺物(2)

15は瓦器質に近い小型の三足付香炉である。胎土はやや橙色をおびた灰色系の良質土で、微砂と黒色微層粒を少し混じえる。器表は黒色ないし灰黒色を呈し、磨かれた光沢をもつ。外面の装飾は口縁下に貼付珠文と12弁の小菊花文押印を加え、以下は逆S字形の正位と横位にしたものが小菊花文に挟まれて押印施文されている。口径8.9 cm、器高5.1 cmを測る。B・G-8上層遺構。

16はかわらけ質で小型短頸壺の形をとる。口径3.9 cm、底径4.9 cm、器高4.9 cmである。瀬戸の茶入れをまねたものかもしれない。ロクロ成形で底部は糸切り底である。

17は常滑の卸し板と思われる製品である。長さ15.2cm以上(上部に把手が付く)、幅11.2cm、厚さは卸し部1cm、上部1.4 cm程である。卸し部分の凹凸は押印によって施される。上部中程に欠失しているが把手が取り付くような痕跡がある。周縁は上部が高く、やや低めのものが両側面にあるが下部にはない。裏面と側面は丁寧なヘラ削りで仕上げている。表面には緑灰色の自然釉が認められ、胎土・色調ともに常滑製品のそれと類似している。方形堅穴29より出土。

18は常滑鳶口である。口径5.9 cm、底径9 cm、器高11.2cmの完形品である。頸部から肩部にかけて1条の沈線が巡る。ヘラで押し出して片口部を作る。肩部付近に指頭痕、胴部下半は横位のヘラ削りで調整する。B-10上層遺構確認面より出土。

19は常滑こね鉢の完形品である。口径18cm、底径11.5cm、器高7.3 cmである。小型のもので、内面は指頭によるナデ上げ痕、外面は板ナデ痕を残しており、口縁端部は平らで、外面に強い横位ナデ調整をしている。土壙157より出土。20は常滑広口壺である。口径16.4cm、底径12.9cm、器高16 cm、最大径19.6cmである。口縁端部はN字状に折り返し、縁帶を作り出す。最大径は胴部中程よりやや上である。A-3上層遺構確認面の包含層より出土。

21は土製小型地蔵像である。像高4.7 cmである。非常に精巧に作られ、底部を除いて彩色の跡痕があり白色、黄緑色等が部分的に残る。特に口は紅色、衣の襟や袖の一部には鮮かなうぐいす色が残っている。手には彩色の様子などから宝珠をもった表現に思える。底面と背面肩部に小穿穴がみられる。E-1上層遺構確認面上包含層より出土。

23は土製人形である。像高3.9 cmと小型である。鳥帽子をかぶった人物の座像を思わせる。表面に白色物が付着し、当初は彩色を施すものか。II区上層遺構確認面より出土。

24は銅製和鏡である。径9.2 cm、厚さ2 mm、周縁幅3 mm、厚さ6 mmである。鏡背文様は3個の丸花菱文の間に雀・蝶・花様の文様を配している。中央部の鈕座は不鮮明であるが菊座仕上げである。人骨12の副葬品として出土した。

25は銀製菊花形皿である。径5.4 cm、底径2.2 cm、器高1.8 cmで化粧用具であろう。内底面には凸出した中房、外底面には半截花文を4個配した毛彫りが施される。方形堅穴37より出土。

26は墨書かわらけである。同一個体と考えられる2片より復元。口縁内面と外面の一部に墨液を残す。文字は判然としないが、外面のものが「後玄」か。内面のうち1片は図のように判読できるが、もう1片は不明。推定するに内面墨書は一周するものであり、又外面のそれも判読不可能なもう1片にも墨痕を残すことから、何ヶ所かに書かれていたと考えられる。口径12cm、底径6.4 cm、

器高3.1 cmである。方形竪穴133より出土。

27は木簡である。表面は「文永九年九月十八日□」、裏面が「文永九年九月十八日」と読める。長さは現状で13cm、幅1.9 cm、厚さ 3 mmの板の上端を片側だけを削って緩いカーブを持たせ、下端の同じ側も深めに削り込んだもので、刀形を思わせる。端部は折損して欠失している。文字の配置からみて削りを加えた後に書かれたものと考えられる。II区西端道路状遺構の第3面上の有機物腐食土包含層中より出土。

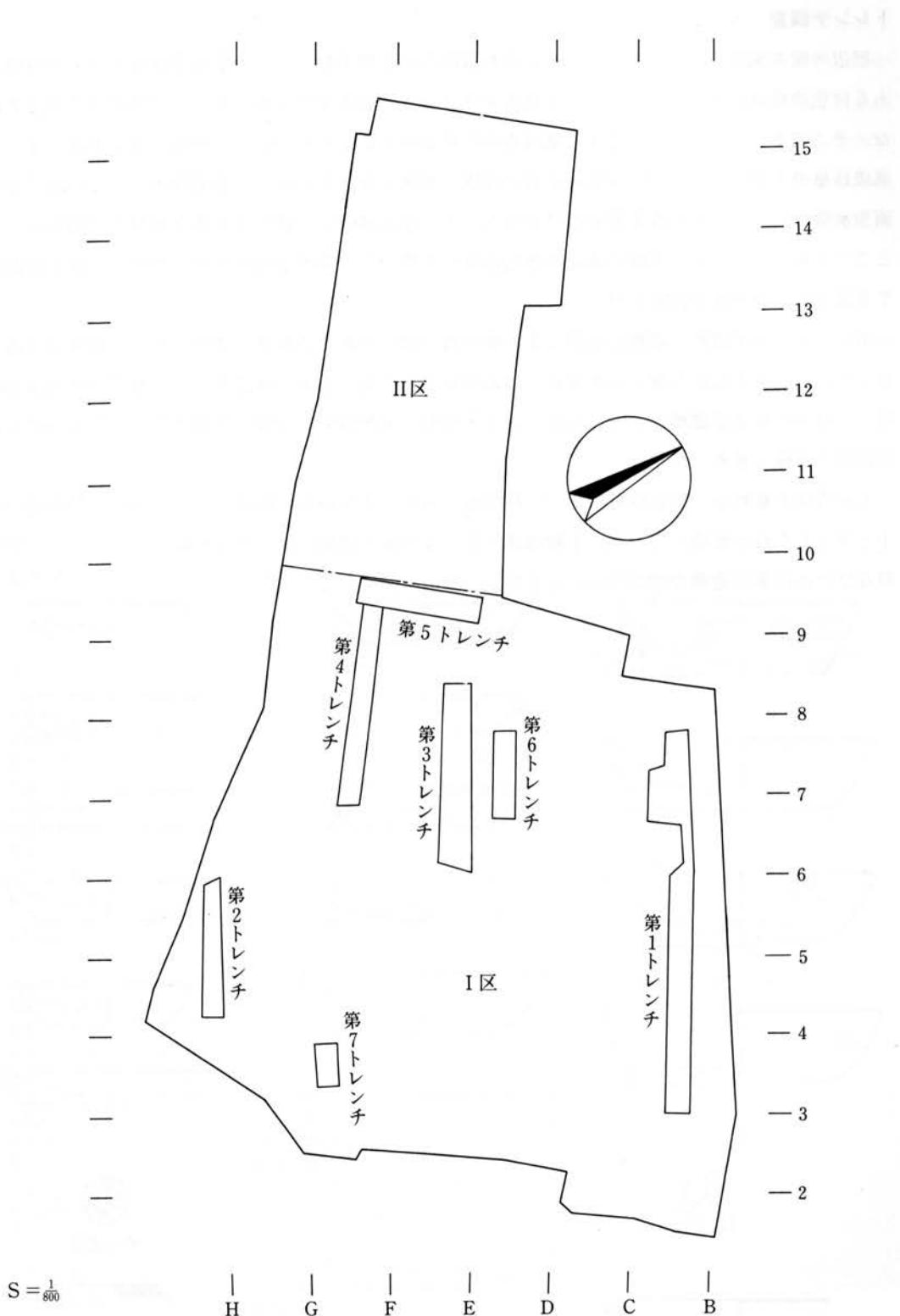


図 119 トレンチ配置図

トレンチ調査

周辺の調査成果や試掘結果から中世以前の遺構の存在が予想された。上層遺構検出時の基盤層である白色系風成砂層を掘り込んだ方形竪穴や井戸などの遺構壁や上面に人骨や遺物が若干確認された。そこでトレンチ調査は調査区に東西方向の6本のトレンチを設定し、遺構の確認をおこなった。風成砂層の上面ないし層中に古代・中世の遺構・遺物が存在するが、上層遺構のような明瞭な生活面や遺構の拡がりは把み得ず部分的であった。そこで遺構確認の難しさや調査期間との関係から、ここでは第5・6トレンチ内で溝状の落ち込みや人骨などの遺構が検出されたので、これを拡張して下層遺構の調査区を設定した。

第6トレンチでは南・北壁に地震による層の食い違いである活断層が認められた。断層は堆積土層が垂直方向にずれ動く縦ずれ断層で、南面で6本、北面で3本が確認された。地震の時期は活断層が1層の上端まで認められることから、1・2層の風成砂層が堆積した後におこったもので、13世紀後半以降と考えられる。

上層遺構の基盤層の風成砂層は1~1.4m程（西から東へ傾斜）堆積し、その下から茶褐色の若干土壌化した砂が堆積していた。上層遺構のような明確な遺構の拡がりを把握できないので、中世期及びそれ以前の遺構の確認はほとんどがこの層の上面でおこなった。

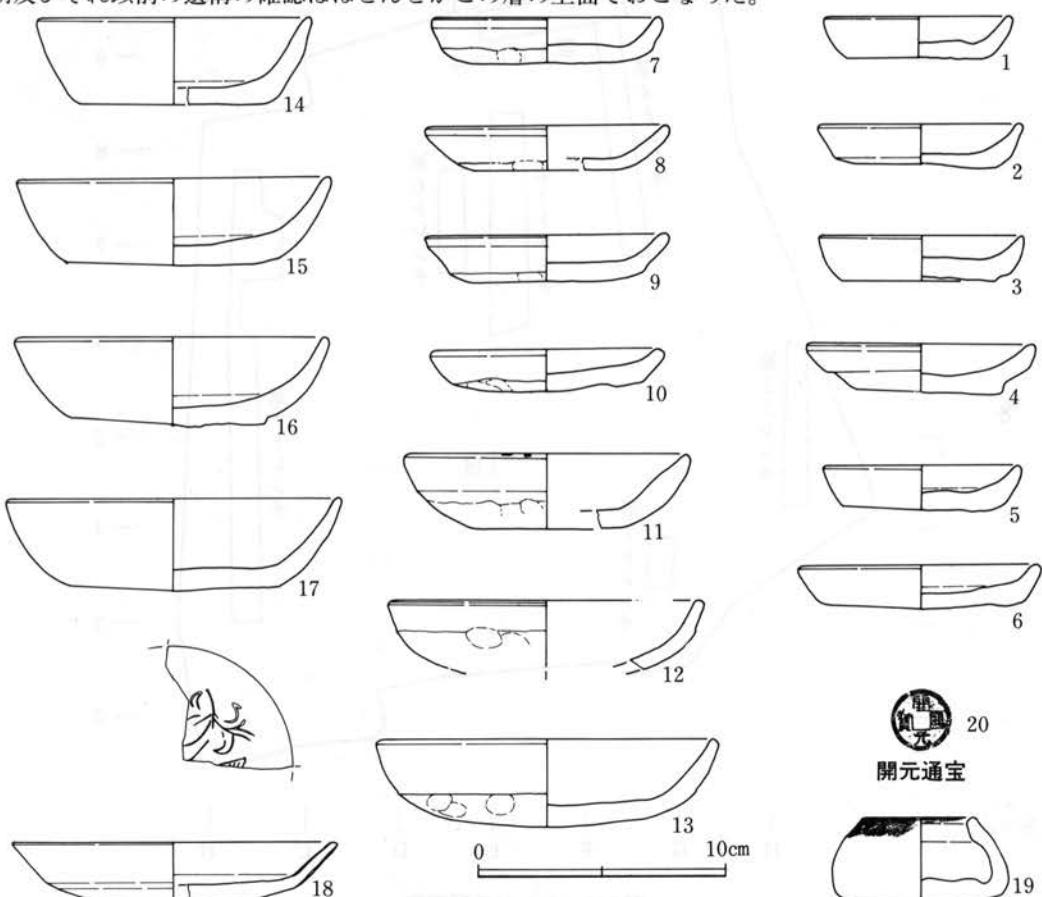


図120 各トレンチ出土遺物

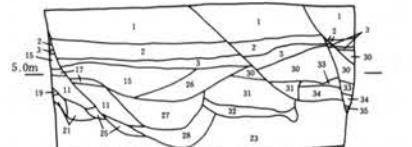
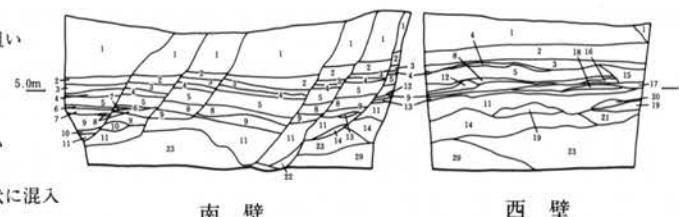
各トレンチ出土遺物（図120）

図120 1~5は小型の、6~14は中型の、15~17は大型のロクロ成形のかわらけ。7~10は小型の、11は中型の、12~13は大型の手捏ね成形のかわらけ。1~3~5は口縁部がやや内湾する。2~4は体部外面に稜を持ち、口縁部はやや外反する。6は器高が低く、器壁はやや外反しながら立ち上がる。14は器高が高く、器壁は直立気味に立ち上がる。15~17は器壁にか外反しながら立ち上がる。胎土は砂粒を含みやや粗く、色調は淡茶灰色、淡橙茶色、淡橙褐色を呈する。全て内底面にはナデ痕が、外底面には回転糸きり痕と、明瞭、不明瞭の差はあるがスノコ状圧痕が残る。7~10は平底状で器高は低い。体部外面を区画する稜は不明瞭である。11~13は体部外面の稜が明瞭である。胎土は微砂粒を含み、色調は淡橙褐色か橙褐色を呈する。18は白磁の印花文皿。素地は明茶灰白色を呈し、やや気泡を持つが比較的緻密。釉は明緑灰白色を呈し、底部は搔きおとされている。19はかわらけ質の小壺の完形品。口径4.3 cm、底径5.4 cm、器高3.3 cm。焼成は良好。色調は淡橙茶色。底部は糸切りで、口縁内外面に煤の様なものが付着している。20は開元通宝の銅錢。唐の時代のもので、初鑄は621年。字体は楷書。

(須倣)

十一層堆積

- | | | |
|-------------|--------------------------------|---|
| 1. 灰白色砂層 | 多量の貝粒子を含み、粗い
粒子が細い |  |
| 2. 灰白色砂層 | 多量の貝粒子を含み粗い | |
| 3. 灰白色砂層 | 黑褐色砂質土ブロック状に混入 | |
| 4. 茶褐色砂層 | やや粘性あり | |
| 5. 明茶褐色砂層 | 少量の炭化物を含む、しまり有り | |
| 6. 明茶褐色砂層 | 貝殻、少量の炭化物を含む（人骨 37 覆土） | |
| 7. 暗茶褐色砂層 | 灰白色砂流入 | |
| 8. 茶灰色砂層 | 貝殻を含む | |
| 9. 茶褐色砂層 | 貝殻片を含む | |
| 10. 茶褐色砂層 | 多量の貝粒子を含む | |
| 11. 暗茶褐色砂層 | やや多量の貝粒子を含む | |
| 12. 茶褐色砂層 | 多量の貝粒子を含む、粗い | |
| 13. 黑褐色砂層 | 多量の貝粒子を含む、粗い | |
| 14. 暗茶褐色砂層 | 貝片を含む、茶褐色砂混入（人骨 37 覆土） | |
| 15. 茶灰色砂層 | 少量の炭化物を含む、しまり無し（人骨 37 覆土） | |
| 16. 暗茶褐色砂層 | 貝殻を含む | |
| 17. 茶灰色砂層 | 多量の貝粒子を含む | |
| 18. 茶褐色砂層 | やや多量の貝粒子を含む | |
| 19. 黑褐色砂層 | 多量の貝粒子を含む、粗い | |
| 20. 黄茶褐色砂層 | 多量の貝粒子を含む | |
| 21. 黄茶褐色砂層 | 貝片を含む、茶褐色砂混入（人骨 37 覆土） | |
| 22. 茶褐色砂層 | 少量の炭化物を含む、しまり無し（人骨 37 覆土） | |
| 23. 黄茶色砂層 | 貝殻を含む | |
| 24. 暗茶褐色砂質土 | 多量の貝粒子を含む、粗い | |
| 25. 黄茶褐色砂質土 | 貝片を含む、茶褐色砂混入（人骨 37 覆土） | |
| 26. 茶灰色砂質土 | 少量の炭化物を含む、しまり無し（人骨 37 覆土） | |
| 27. 茶褐色砂質土 | 貝殻を含む | |
| 28. 暗茶褐色砂質土 | 多量の貝粒子を含む、粗い | |
| 29. 茶褐色砂層 | 貝片を含む、茶褐色砂混入（人骨 37 覆土） | |
| 30. 茶灰色砂層 | 少量の炭化物を含む、しまり無し（人骨 37 覆土） | |
| 31. 灰白色砂層 | 貝殻を含む | |
| 32. 暗茶褐色砂質土 | 粒子細かい
(ブロック状に混入) } (柵状遺構 3) | |
| 33. 茶褐色砂層 | | |
| 34. 黑褐色砂層 | | |



(S = 1/80)

図 121 地震断層土層図

遺構名	図番号	口径	底径	器高	各トレンチ	120-9	9.5	7.8	1.9
各トレンチ	120-1	7.3	5.4	1.7		10	9.0	7.7	1.7
	2	8.0	5.7	1.6		11	11.2	9.8	3.0
	3	8.1	6.2	1.8		12	12.3	12.0	—
	4	8.9	5.9	2.0		13	13.4	12.0	3.1
	5	7.7	5.9	1.8		14	10.8	7.5	3.5
	6	9.5	7.0	1.8		15	12.4	7.6	3.5
	7	9.0	8.4	1.8		16	12.2	7.8	3.5
	8	9.5	7.3	1.8		17	13.3	8.4	3.7

表35 各トレンチ出土遺物

単位(cm)

(2)下層遺構

a. 中世

掘立柱建物(図122)

下層では2棟の掘立柱建物が検出された。1号はC-8・9、2号はE-7グリッドに位置する。

1号は凡そ220cmを1間とする2間×2間の総柱建物で、西側に1間×1間の張り出しが付く。西半で上層井戸に切られて2穴失われ、東辺の柱穴が柵状遺構2を切っている。柱穴は上面径約20cmでほぼ円形を呈し、深さは20~30cm程である。柱穴覆土は概ね灰白色砂で、遺物は出土しなかった。規模からして仮小屋的な建物と思われる。

2号は凡そ240~250cmを1間とする2間×2間の総柱建物である。北辺の柱穴が柵状遺構3を切っている。各柱穴は上面径40~70cm、深さ15~25cmを測り、やや規格性に欠ける。柱穴覆土は灰白色砂に黒褐色土がブロック状に混じる。1号よりは構造的にしっかりしたものであろう。

1・2号とも軸線が柵状遺構の円弧の中心に向かって構築されていることから、相互に密接に関連したものであることが推測できよう。

柵状遺構(図122)

やや特殊な形状を呈する4条(1~4号)の柵状遺構が検出された。確認面は黒褐色弱粘質土上面であるが、実際には灰白色の風成砂層中から掘り込まれたものであろう。1・3・4号はいずれも上面幅70~80cm、深さ30cm程で、断面形は壁が垂直気味になる箱掘り状を呈する。底面には2~3列の小ピットが無数に開き、凹凸が激しい。2号は幅20cm、深さ8cm程であるが、径20cmのピットが一列に並んだような形状を呈する(写真図版34-2)。

本遺構は、当初いずれも溝であると思われた。しかし、砂層を箱形に掘っている事、覆土が風成砂層に類似した灰白色砂で遺物がごく少量しか出土しない事、底面に開く小ピットは杭穴と思われる事等から、溝としての機能は想定しにくく、杭を無数に立てた柵状の遺構であろうと考えた。

4条の柵状遺構はいずれも何かを囲い込む様に円弧を描きながら調査区外に伸びている。これが

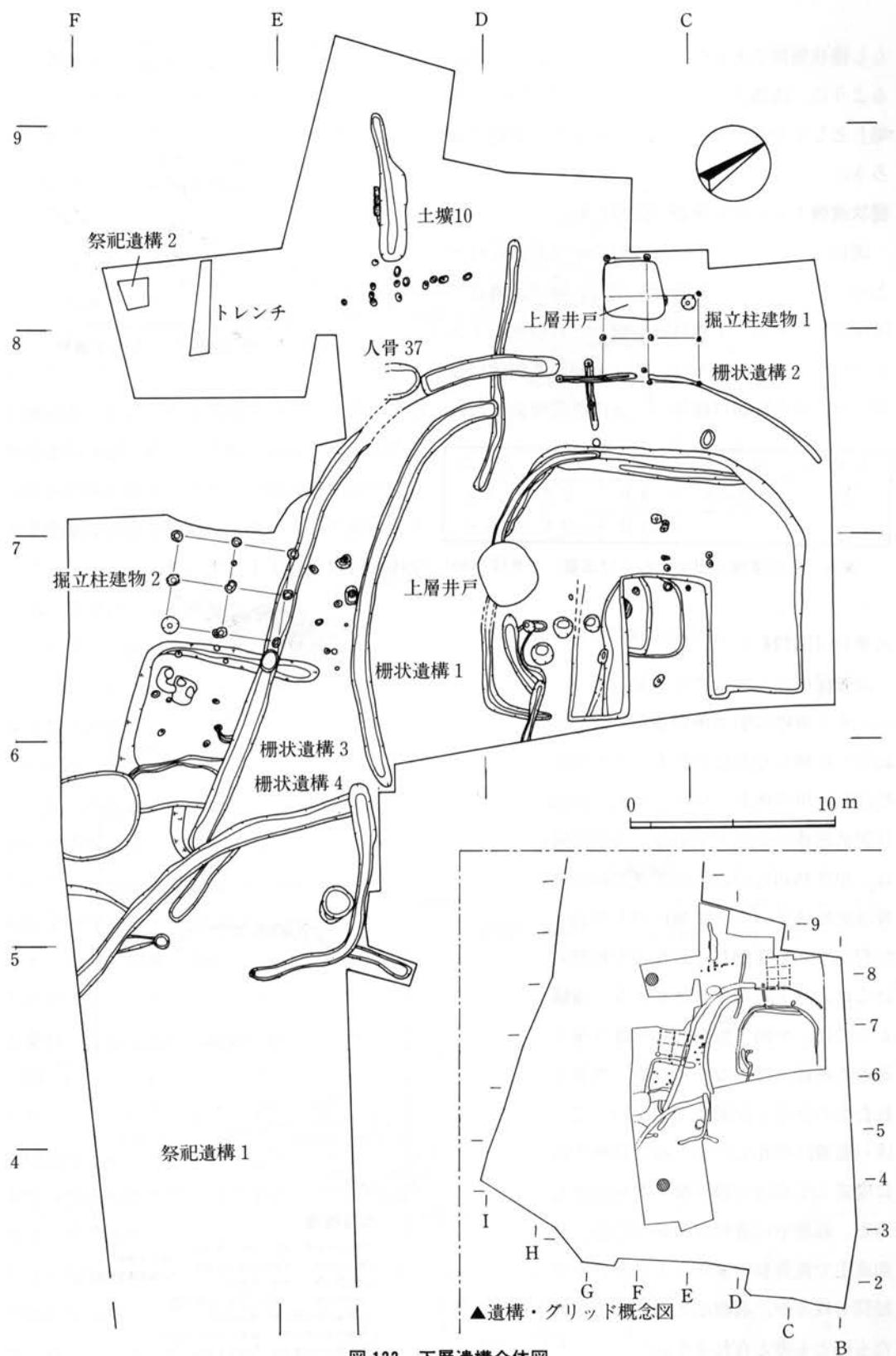


図 122 下層遺構全体図

もし柵状施設であるとすれば、『吾妻鏡』に記されるように、流鏑馬や笠懸、牛・犬追物等を行う「馬場」としての浜の風景を想起することも可能であろう。

柵状遺構 1・4 出土遺物 (図123)

図123-1・2は手捏ね成形の小型かわらけ。ともに器高は低く、外底部が平ら。胎土は精良で淡橙褐色である。1の口唇断面は三角形を呈する。2の口径はやや不安あり。3は土師器長胴甕口縁部。4は須恵器甕口縁部。5は山茶碗窯系こね鉢

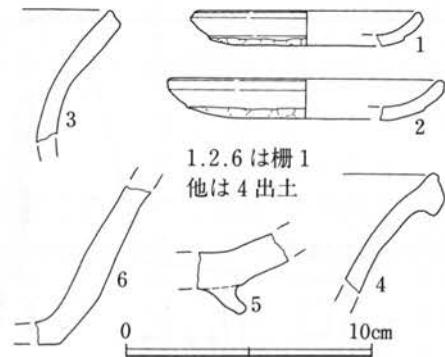


図123 柵状遺構 1・4 出土遺物

底部。胎土は小石・微砂を多く含んだ灰色粗土。高台は大きく外側に開く。6は土器質鉢形手縫り。外面中程は縦位のナデ、下部は横位の強いナデが施される。胎土は微砂を含む黄褐色粗土。全体に灰黒色にすすけている。

遺構名	図番号	口径	底径	器高
柵1	123-1	8.9	7.9	1.4
	2	11.0	9.6	1.6

表36 柵状遺構1出土かわらけ法量 単位(cm)

人骨36 (図124)

調査区中央E-7グリッド、第3ト
レンチ北東隅に引っ掛かる形で、13世
紀代に堆積したと思われる風成砂層中、
標高4.9mの所から検出された。西頭
位側臥屈葬の小児骨である。この砂層
は、中世初頭以前に形成された砂丘後
背湿地堆積層(5~7層)の上に約1
m程の厚さで堆積しており、方形竪穴
はこれより上から掘り込まれる。遺構
としては、平面・断面とも明確な掘り
込みの確認はできなかった為、埋葬さ
れたものかどうか即断できない。ごく
浅い墓壙に埋葬したか、或は砂層上面
に安置して周囲の砂で覆った可能性も
ある。砂層中に遺物はなかったが、頸
部直上で鹿角製の賽が出土した。やや
疑問も残るが、副葬品として供えられ
たものとも考えられよう。

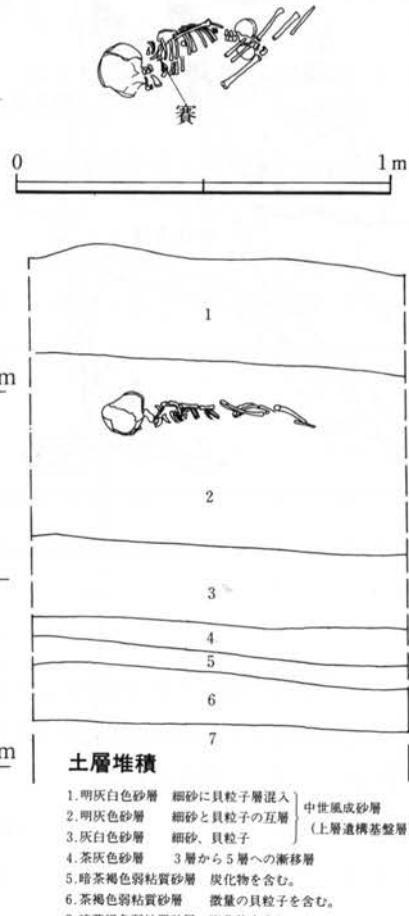


図124 人骨 36

人骨37a・b (図125)

D-8グリッドで第6トレンチ北壁に引っ掛けた形で検出された。本遺跡で明確な墓壙をもつ唯一の例である。人骨は2体が合葬されていた。aは成人骨で北頭位腹臥屈葬。bは小児骨で北頭位側臥屈葬。bの上にaが倒れ込むように覆い被さっており、埋葬というよりも土壙に投げ込んだかと思わせる様相を呈している。墓壙はトレンチによって南半を破壊されてしまっているが、平面は推定楕円形で残存長150×170 cm、深さ50cmを測る。掘り込み面は風成砂層中で棚状遺構3を切っている。底面直上で青磁劃花文碗片・笄・刀子が出土したが、副葬・供獻されたものか不明である。

人骨36・37出土遺物 (図126)

図126-1はロクロ成形の小型かわらけ。胎土は微砂粒を含む橙褐色土。2は青磁劃花文碗。素地は黒色粉粒を含む精良な白色土。釉は透明感のある灰緑色を呈し釉層は薄い。3は黒褐色で緻密な石材の砥石。4は鹿角製の賽。一辺は8 mmを測る。

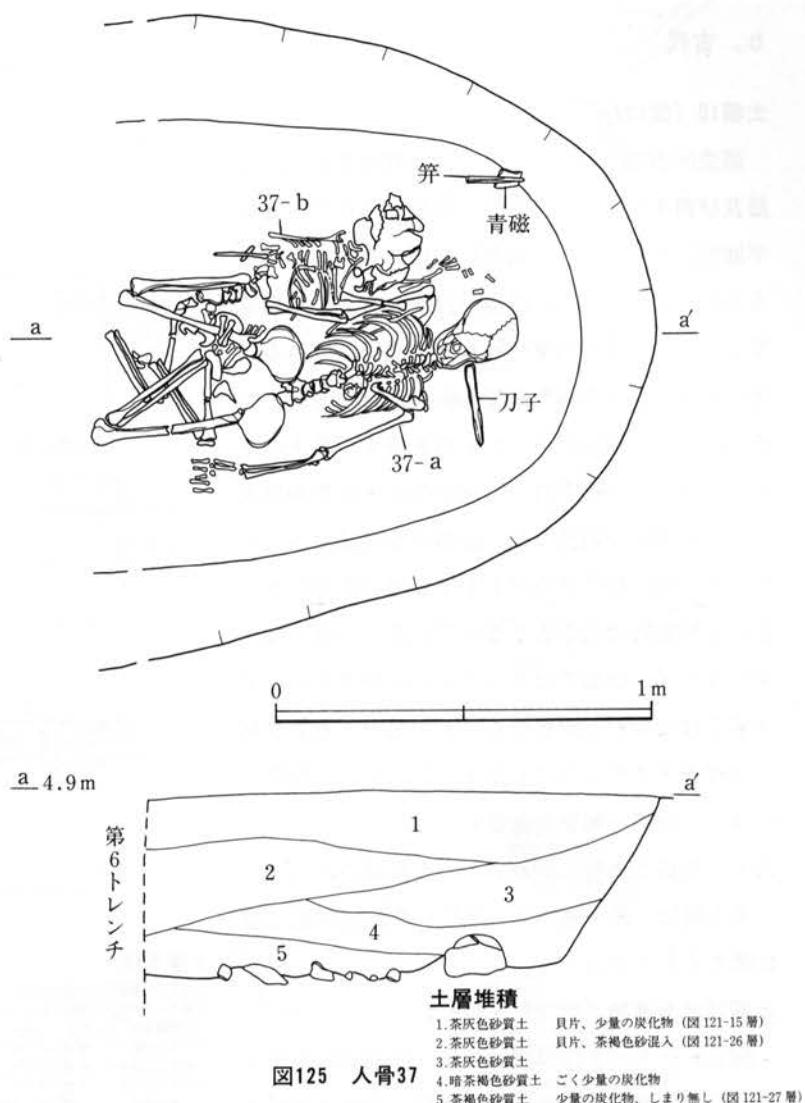


図125 人骨37

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 1.茶灰色砂質土 | 貝片、少量の炭化物 (図121-15層) |
| 2.茶灰色砂質土 | 貝片、茶褐色砂混入 (図121-26層) |
| 3.茶灰色砂質土 | ごく少量の炭化物 |
| 4.暗茶褐色砂質土 | ごく少量の炭化物、しまり無し (図121-27層) |
| 5.茶褐色砂質土 | 少量の炭化物、しまり無し |

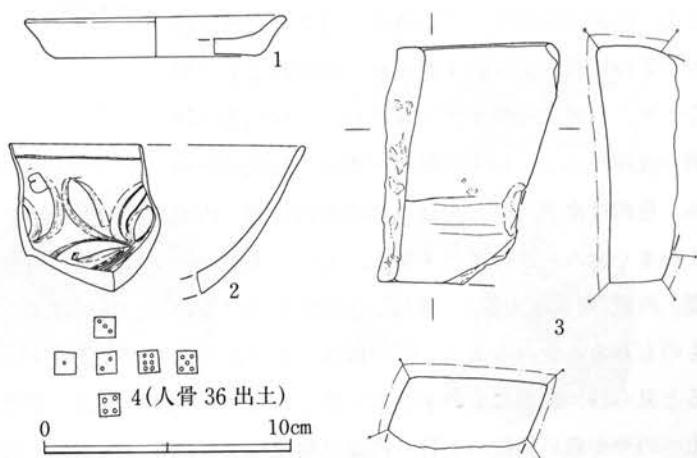


図126 人骨36・37出土遺物

b. 古代

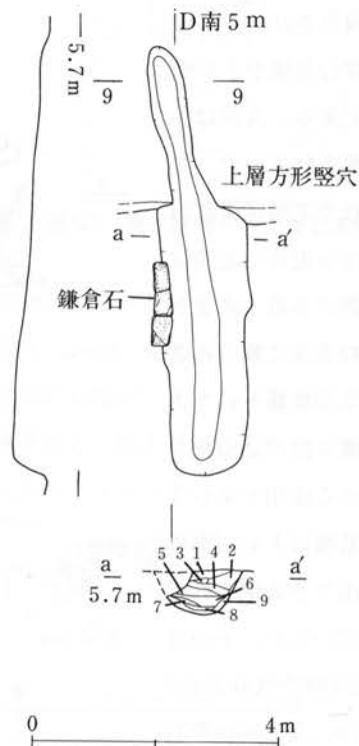
土壤10 (図127)

調査区西端、D-9グリッドで検出された。上層及び西半を方形竪穴によって削平されているが、平面形は東西6.9m、南北1.4mの長楕円形になるものと推定される。断面形は概ね丸底の碗形を呈し、底面は西から東へ緩やかに傾斜している。確認面からの深さは西端で0.8m、東端で1.2m、標高はそれぞれ5.0m、4.6mを測る。覆土中からは多量の灰・焼土丹、微量の焼土・炭化物に混じって、細かく破碎した土師器片や貝殻が多く出土した。特に貝の集中は上中下3層に大別でき、しかも種類毎に凡そまとまっている。上層ではヒメバカガイ、中層ではチョウセンハマグリ・バイ、下層ではマテガイが集中し、その他マダカアワビ・マガキ・オオノガイも出土している。土師器片の多くは所謂「類製塙土器」と考えられ、多量に出土した貝と密接に関わるものと推測される。

本土墳は、出土遺物から見て、概ね10世紀後葉に属するものであろう。

土壤10出土遺物 (図128・129)

図128 1・2はロクロ使用・底部回転糸切り離しの土師器壺。胎土は共に微砂・雲母を少量混じえ、色調淡灰褐色。2の外底にはスノコ状圧痕がかすかに残る。3は土師器鉢。内外面とも丁寧なナデ、口縁部は横ナデが施され、口縁内側には弱い沈線が巡る。胎土は微砂・雲母・白色粒を含み、色調橙褐色。4・5は土師器脚台付甕。内面は4がヘラナデ、5がハケ目調整。胎土は微砂をやや多く含み、淡橙褐色を呈す。共に二次焼成を受け外面に白色物質が付着する。6~10は土師器甕。所謂「類製塩土器」。概ね二次焼成を受けており、外面はススケ、内外面に白色物質の付着するものもある。歪みもあって同一個体と見られるものでも接合率は低い。成形は粘土紐巻き上げによると見られ、頸部はくの字状に屈曲し口辺が短く直立する。器壁は6~8mm。整形は外面が下から上へのやや粗い斜位ハケ目、内面は横位ハケ目調整が施され、内外面とも処々に指頭痕が残る。ま



土層堆積

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 1.暗茶褐色砂質土 | 細砂、貝片、土器片含む、粘性僅かに有 |
| 2.暗茶褐色砂質土 | 遺物、貝多し、黃褐色砂を微量含む |
| 3.暗褐色砂色 | 粗砂、貝粒子を含む、しまり有 |
| 4.灰褐色砂質土 | 微量の灰、焼土、炭化物含む、やや粘性有 |
| 5.暗灰褐色砂質土 | 微量の灰、焼土、炭化物、多量の土器片含む |
| 6.灰褐色砂質土 | 多量の灰、貝（チカラセハマグリ）、微量の焼土、炭化物含む |
| 7.灰褐色砂質土 | 多量の灰、土器片、微量の焼土、炭化物を含む |
| 8.灰層 | |
| 9.暗黃褐色砂 | 貝（マテガイ）を多く含む、しまり無 |

図127 土壌10

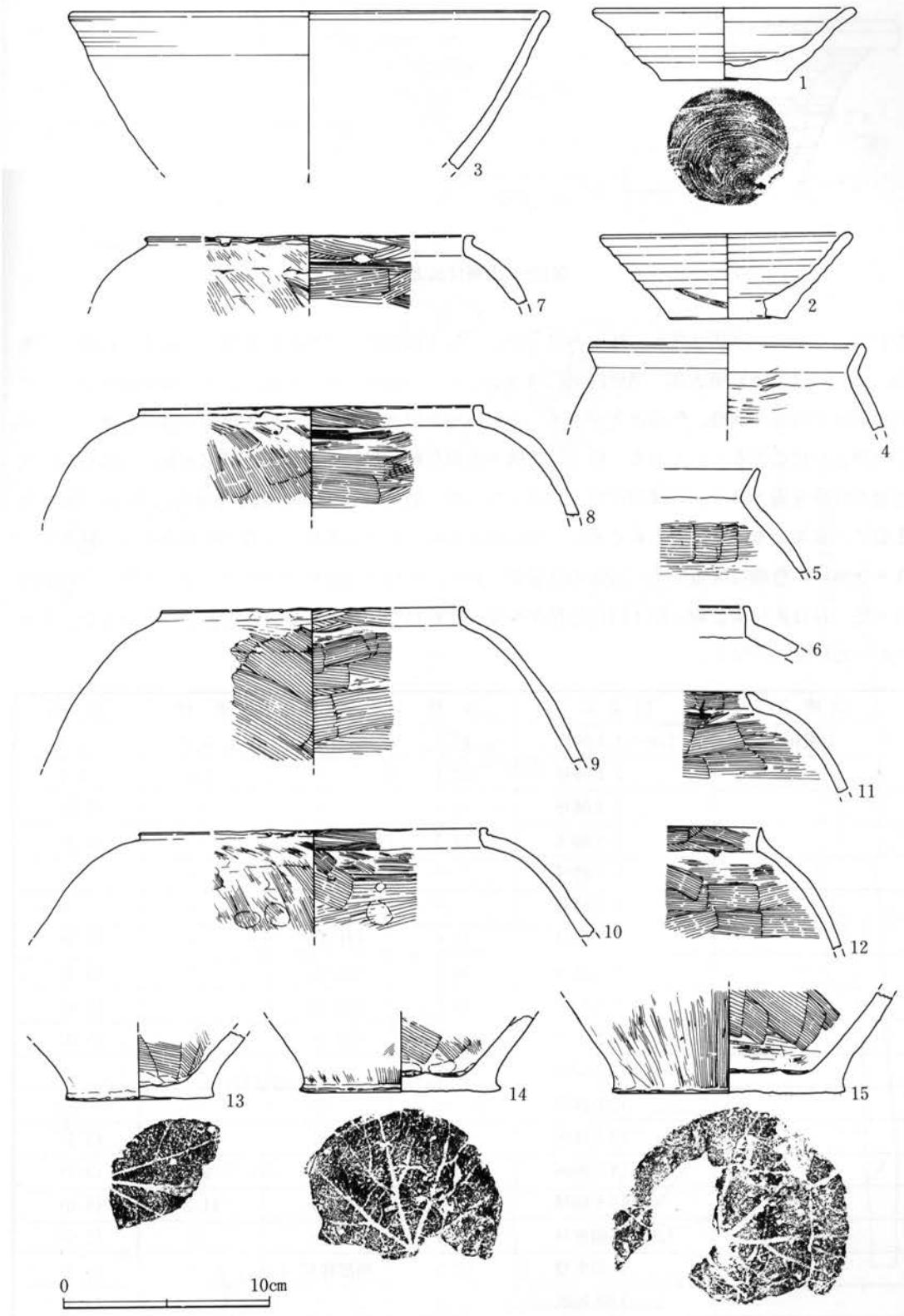


図 128 土壌 10 出土遺物(1)

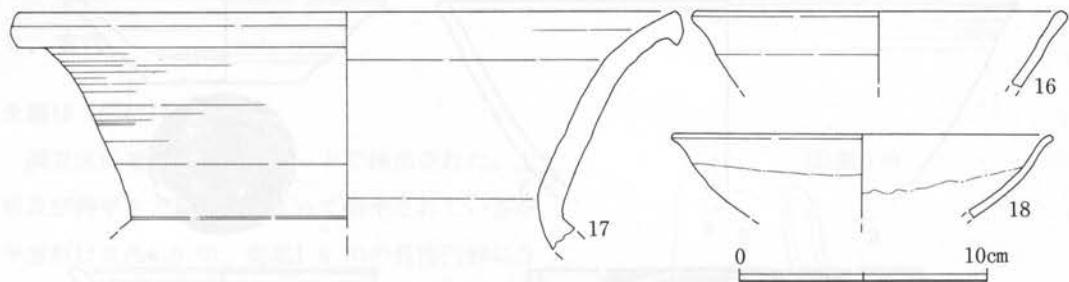


図129 土壌10出土遺物(2)

た口唇は水平にヘラ切りされ、幅が一定しない。胎土は微砂・赤褐色粒を含んで堅く、色調淡橙褐色。13~15は土師器甕底部。側壁内面には下から上への斜位ハケ目を施し、その後指頭によるナデ乃至押圧で内底を調整。外面は下から上への粗いハケ目調整で、底には木葉痕が残り黒変している。白色物質が付着するものもある。胎土は微砂・赤褐色粒・貝粒を含み、色調橙褐色。これらは相模型甕の特徴を備えるが、口縁部が出土していない事、胎土・調整等が一致する事などから、「類製塩土器」の底部と考えて差支えあるまい。16は須恵器坏。胎土は微砂・少量の小石を含み、軟質でしまりが無い。色調は淡茶灰色。17は須恵器甕。胎土は砂粒・白色粒をやや多く含んで堅い。色調暗青灰色。18は灰釉陶器碗。胎土は白色粒がやや多く軟質な灰色土。釉は殆ど剥がれているが、茶色がかかった灰白色を呈す。

遺構名	図番号	口径	胴部径	底径	器高
土壌10	128-1 土師坏	12.6	—	6.2	3.5
	2 土師坏	12.1	—	5.7	4.1
	3 土師坏	23.0	—	—	(7.6)
	4 土師坏	13.3	(15.3)	—	(3.9)
	5 土師坏	—	—	—	—
	6 土師坏	—	—	—	—
	7 土師坏	15.8	(21.1)	—	(3.3)
	8 土師坏	16.7	(26.0)	—	(5.4)
	9 土師坏	14.7	(26.2)	—	(7.6)
	10 土師坏	16.9	(27.2)	—	(5.0)
	11 土師坏	—	—	—	—
	12 土師坏	—	—	—	—
	13 土師坏	—	(10.3)	7.2	(3.1)
	14 土師坏	—	(12.8)	9.8	(3.7)
	15 土師坏	—	(15.9)	11.3	(5.0)
	129-16 須恵坏	14.7	—	—	(2.9)
	17 須恵甕	25.5	頸部径17.4	—	(8.7)
	18 灰釉碗	15.1	—	—	(3.4)

表37 土壌10出土遺物法量

単位 (cm)

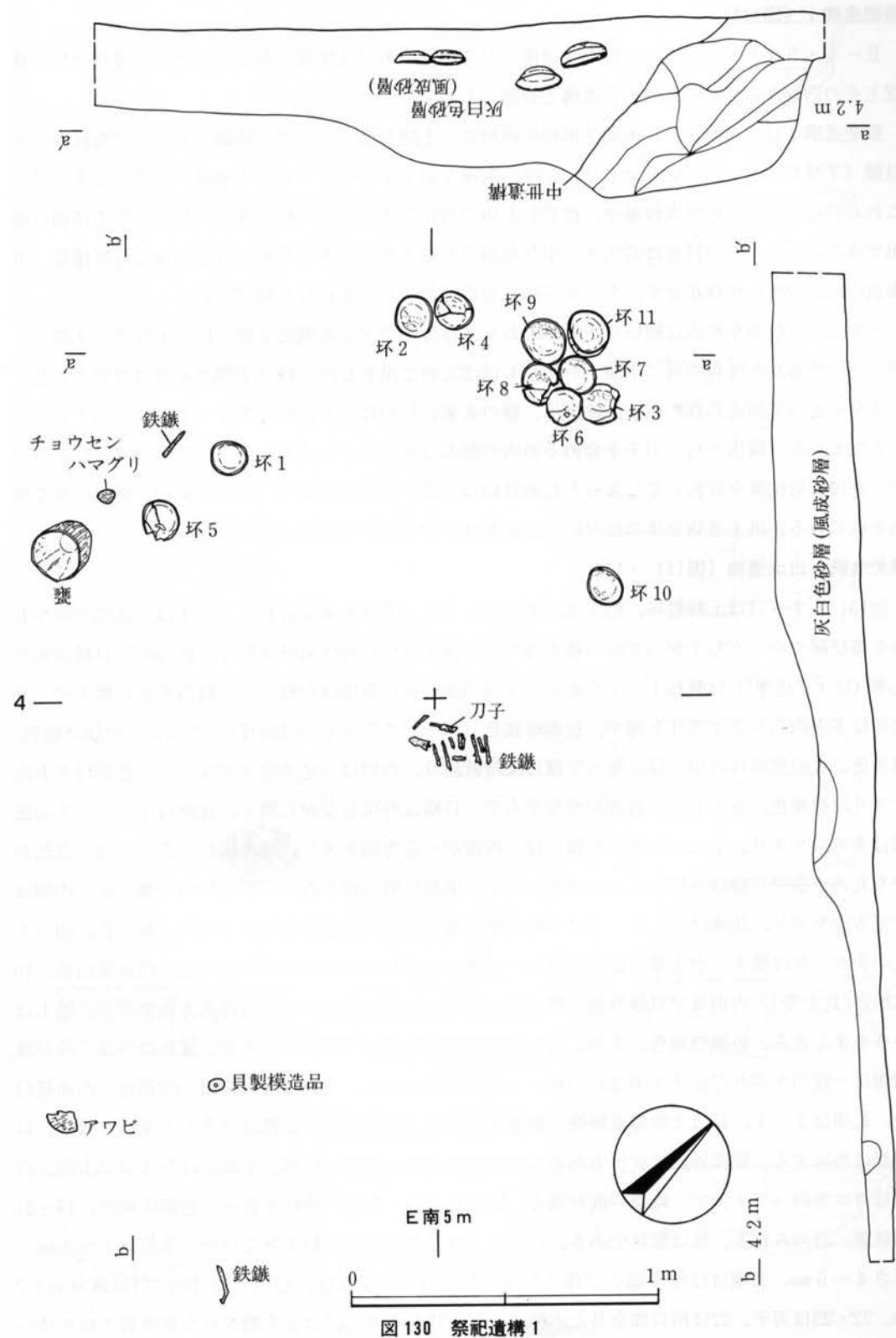


図 130 祭祀遺構 1

祭祀遺構1（図130）

E-4・5グリッドで検出された。遺構として明確な形では把握できなかったが、遺物の出土状況とその内容から、祭祀に関わる遺構と判断した。

祭祀遺構1は、東西3m、南北2m程の範囲に、土師器甕・壺の他、鉄鎌・刀子・貝製模造品・貝殻（アワビ・チョウセンハマグリ）がやや散漫な形で広がっている。土層図に示されるように、これらの遺物は灰白色風成砂層中、標高4.0mの所から出土し、これに伴う掘り込みや生活面は検出できなかった。この付近は古代末～中世初頭に形成されたと考えられている後背湿地堆積層（黒褐色弱粘質砂層）が存在せず、古くから砂丘頂部であったと思われる場所である。

土師器は、甕がやや南に傾いて正置しており、壺はそのすぐ北側に2個、1.5m程北で2個・6個、更に北東1.7m程の所に1個、いずれもほぼ完形で出土した。特に北側の6個は整然としたまとまりをもって据えられている。鉄鎌は、甕の北東1.3m程の所に殆ど集中しており、刀子もここから出土した。検出当初、刀子を含めその内の数本は地中に差し込まれたような形で直立していたが、直後に原位置を移動してしまったため詳細は不明。貝製模造品は、甕の南東約1.8mの所で検出されている。出土遺物全体の相対的な位置関係に何らかの規則性は見出だせない。

祭祀遺構1出土遺物（図131・132）

図131-1～11は土師器壺。胎土は10を除いて長石・雲母を多少含む。1～4は、底部がやや丸みを帯び緩やかに立ち上がって弱い稜を持ち、口縁部はやや外反気味に開く。底部高と口縁部高の比率（以下“比率”）は概ね1:1である。1は内面中央に指頭痕が残り、口縁内外面は横ナデ、外底部は多方向のヘラケズリを施す。色調暗褐色（以下記さないものは同様）。2は1と同様の整形。橙褐色。3の底部は外周二段に亘って横に反時計回り、内側は一定方向ケズリ。4の底部は多方向ケズリ。橙褐色。5・6は、底部がやや平らで、口縁は外反しながら開く。比率は1:2。5の底部は多方向ケズリ。6は底部外周が横二段、内側が一定方向ケズリ。暗橙褐色。7・8は、底部がやや丸みを帯び口縁は外傾してハの字状に開く。中程に弱い段を有し、底部外周は横一段、内側は一定方向ケズリ。比率は1:3。7は口唇がやや直立。8は色調橙褐色だが内面は褐白色。同一工人の手か。9は横ナデが丁寧で底部が厚い。比率は1:1.5。色調は外面橙褐色、内面褐白色。10は所謂「比企型」。内面及び口縁外面は横ナデ、底部は外周一段が横、内側は他方向ケズリ。胎土は長石を多く含み、色調橙褐色。赤彩。11は丸底で口縁は内傾気味に直立する。底部は外周二段が横、内側は一段のケズリだがナデ消され、粗いミガキが施される。色調は外面橙褐～暗褐色、内面褐白色。比率は3:1。12は土師器長胴甕。胴部最大径が上半にあり、底部は小さく木葉痕を残す。口縁部は外反する。胴部外面はタテ方向のヘラケズリだが、下半は斜め、下部では殆どヨコ方向。内面はヨコ方向ヘラナデで、輪積み痕が残る。胎土は長石・雲母・砂粒を含み、色調暗褐色。13～21は鉄鎌。21のみ有茎、他は鑿状である。いずれも腐食が激しく完形ではないが、茎部幅7～8mm、厚さ4～5mm。先端ははや幅広で薄くなる。13・14の残存長は、13.1・12.1cm。21は鎌身長4.7cm。22・23は刀子。22は柄口部金具と木柄の一部が残存する。23はよく磨かれた鹿角製の柄を持つ。

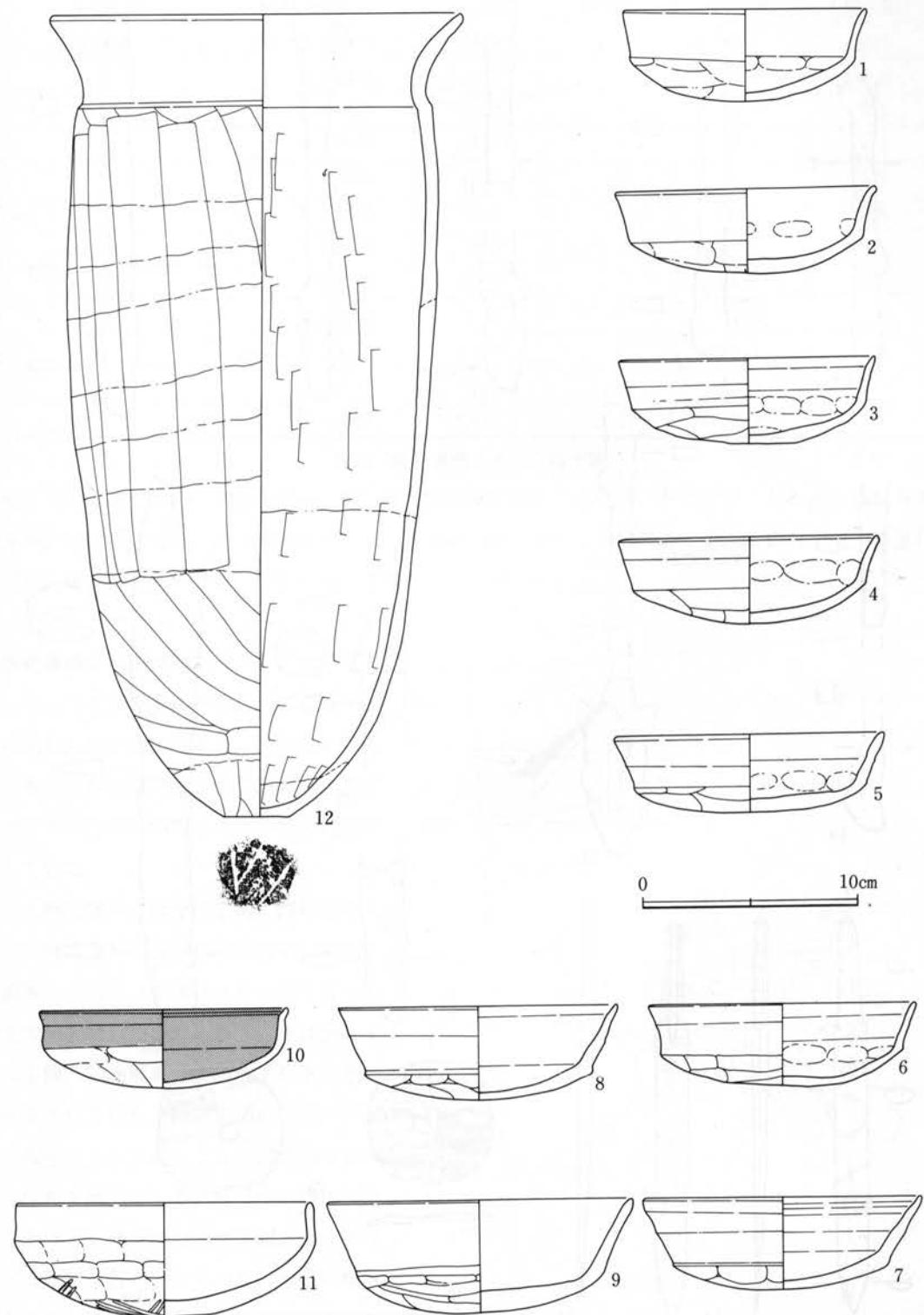


図 131 祭祀遺構 1 出土遺物(1)

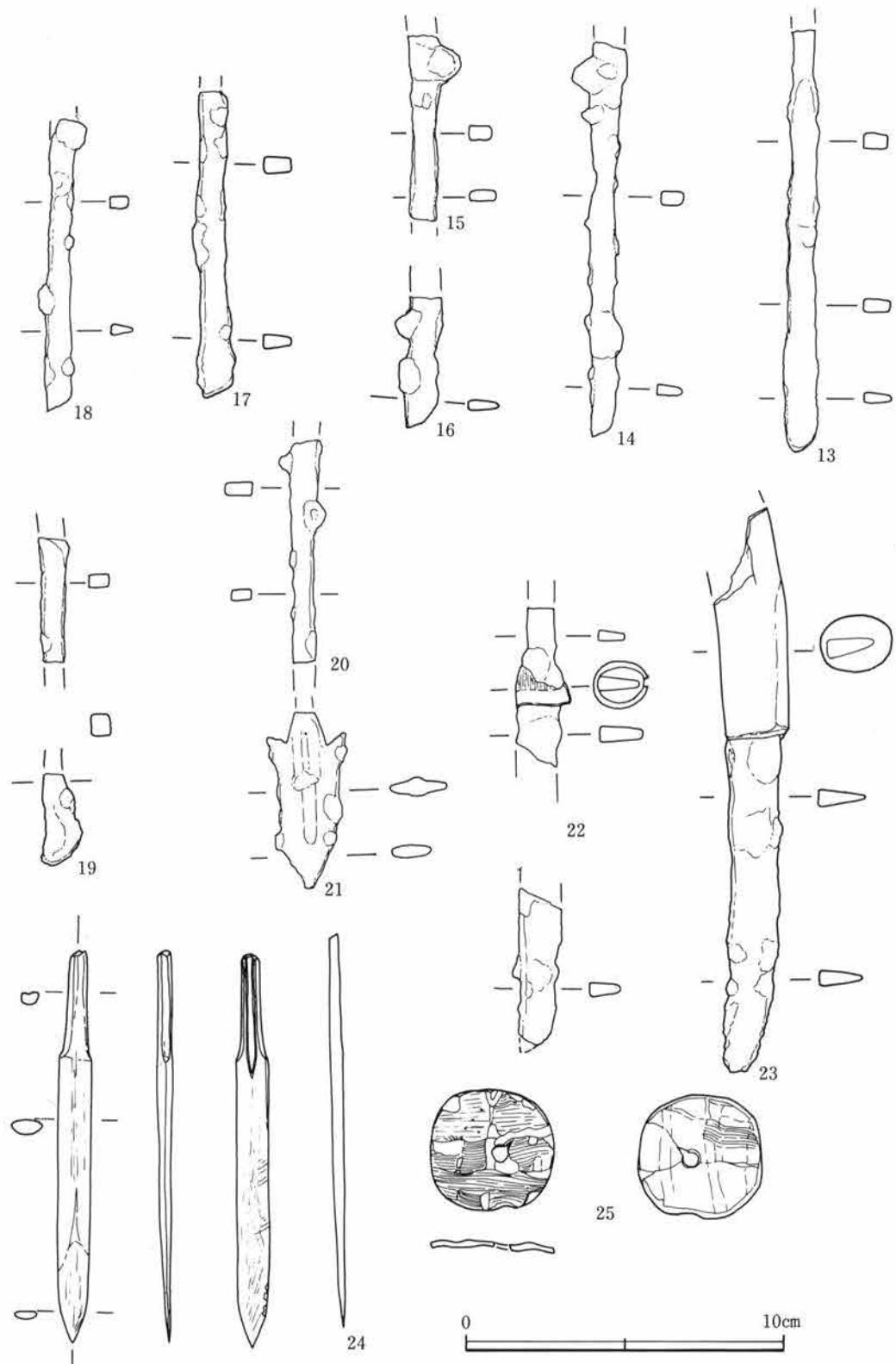


図 132 祭祀遺構 1 出土遺物(2)

遺構名	図番号	口径	胴部径	底径	器高
祭祀遺構 1	131-1 土師壺	11.2	—	10.6	4.3
	2 土師壺	12.1	—	10.9	3.9
	3 土師壺	11.9	—	10.9	4.0
	4 土師壺	11.7	—	10.9	4.0
	5 土師壺	12.5	—	10.9	3.6
	6 土師壺	12.1	—	11.3	3.8
	7 土師壺	12.7	—	10.0	4.3
	8 土師壺	12.9	—	10.6	4.4
	9 土師壺	14.1	—	11.5	5.3
	10 土師壺	11.4	—	11.1	3.6
	11 土師壺	13.6	—	13.9	5.3
	12 土師甕	18.9	17.2	2.9	36.7

表38 祭祀遺構1 出土土器法量

単位(cm)

残存長は刀身10.4cm、柄部7.2 cm。幅・厚さは刀身で1.5 · 0.6 cm、柄部2.2 · 1.8 cm。24は骨鎌。茎部片面に溝を持ち、よく磨かれている。全長12.3cm、幅1.0 cm、厚さ0.45cm。25はアワビ製単孔円盤。模造鏡であろうか。径3.8 cm、孔径0.6 cm、厚さ0.2 cm。

祭祀遺構2(図133)

E-9グリッドの灰白色風成砂層中、標高4.9 mで検出された。祭祀に関わると考えられる遺物は土師器甕・壺、鉄鎌、アワビで、約1m四方の狭い範囲に集中していた。

土師器甕はほぼ中央で南に倒れ込むよう検出された。口縁部片は更に南側に遊離しており、本来は直立正置していたものが倒壊したのである。壺は甕直下に1個、50cm程東に3個いずれも完形で並置されていた。特に東側の壺はアワビ2枚をひっくり返して互いに重ね合わせた様相を呈している。壺は他に検出途中で上げてしまったものが1個ある。アワビは原形を留めないものを含め約10個体。その他、鉄鎌が2本出土した。

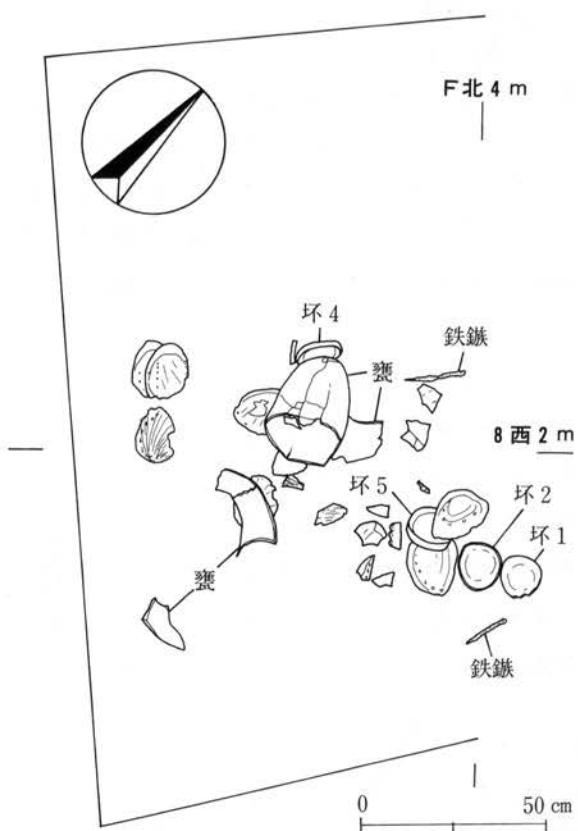


図133 祭祀遺構2

祭祀遺構 2 出土遺物 (図134)

図134 1～5は土師器坏。1は底部がやや平らで口縁は外反する。比率は1:1.5。2はやや丸底で口縁外反。比率は1:1。1・2ともに底部外周は横一段、内側は一定方向ヘラケズリ。3・4はやや丸底で口縁は外反気味に開く。3は底部外周が横一段、内側は多方向ケズリ。比率1:1.5。4は内底に指頭痕、外底は全体に回るようなケズリ。比率1:1。5は深い丸底で口縁は直立、上半で外反する。外底は一定方向ケズリ。比率1:1。6は土師器長胴甕。胴部外面は斜位ヘラケズリ。内面斜位ヘラナデ。口縁は大きく外反し、口唇に一条の沈線が巡る。 (佐藤)

遺構名	図番号	口径	胸部径	底径	器高
祭祀遺構 2	134-1 土師坏	10.9	—	10.0	3.1
	2 土師坏	10.8	—	10.2	3.5
	3 土師坏	11.4	—	10.4	3.5
	4 土師坏	11.1	—	9.9	3.6
	5 土師坏	11.8	—	11.3	4.6
	6 土師甕	21.7	18.0	4.5	33.9

表39 祭祀遺構 2 出土土器法量

単位 (cm)

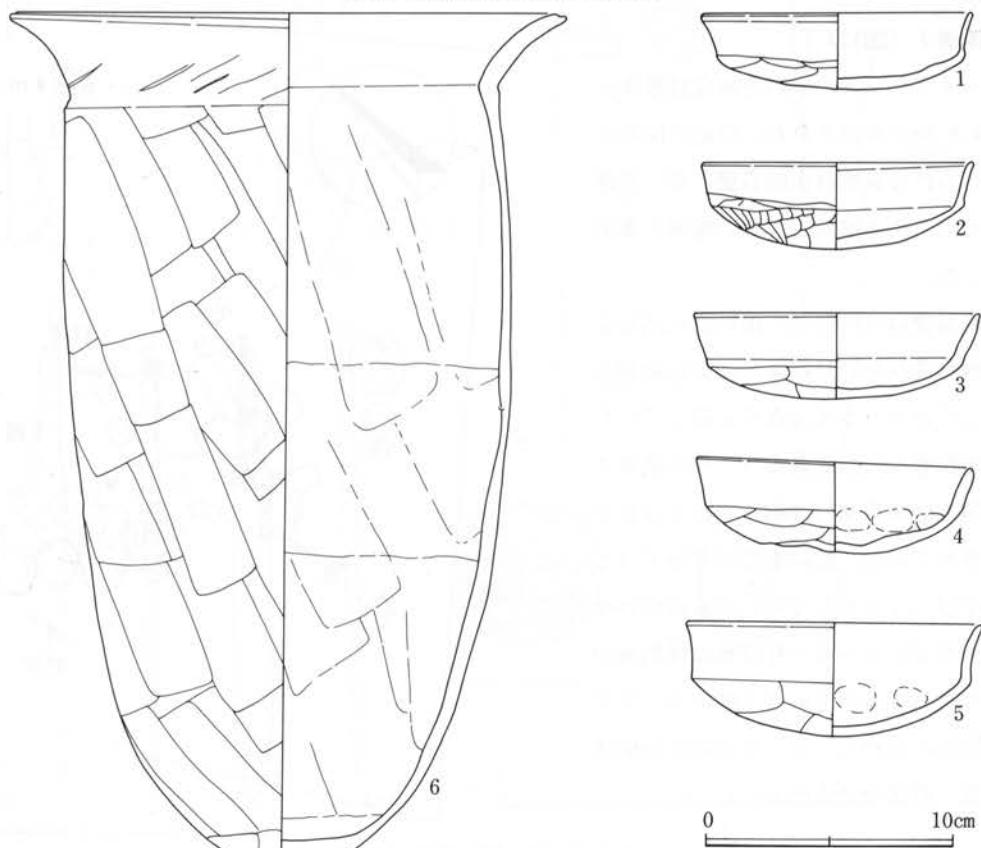


図134 祭祀遺構 2 出土遺物

ト骨 (図135)

ト骨は I 区下層遺構の確認面上から 5 点出土した。これらは肋骨(素材は不明)を小刀のようなもので切削して半載・整形し、片面が長方形を呈した鑽を彫り込み、その底面に焼灼を加えている。灼痕の形状は、十字形かそれに近いものがほとんどであり、場合によっては焼け抜けた例も認められた。以下に比較的残存状態の良好な 2 例について述べる。

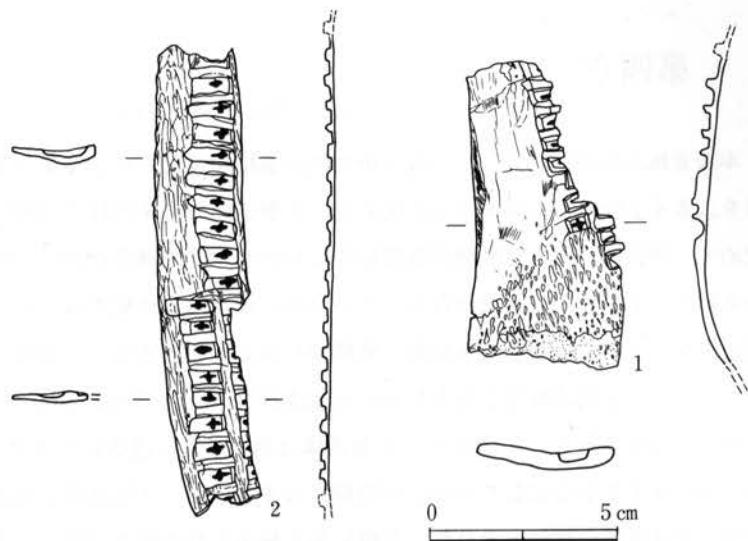


図 135 下層遺構確認面上出土ト骨

1 は上下部を欠失するが、長さは現状で 12.6cm、幅 2.4cm、厚さ 2 ~ 3 mm である。骨を半載した面に鑽を彫り込んでいる。鑽は 10 × 4 mm 前後の横位の長方形を呈し、上半部は 1 列 (10 個) で下半部は 2 列 (18 個) に列状の配置をなす。いずれも幅狭なノミ状工具で彫り込んでいる。反対側の面は骨本来の原形に近い肌と湾曲を残しており、側面にのみ削り調整を施している。C-6 グリッド出土。この周辺から他に 2 片出土したが接合できず同一個体かどうか不明である。

2 は現状で長さ 7.7cm、幅 4 cm、厚さ 4 mm 前後である。鑽は 1 に比べやや小型であるが形崩れはしていないもので、7 × 4 mm 前後の横位の長方形を呈す。焼灼は鑽の底面に行われている。灼痕の形状は残存する一ヶ所が十字形になる他は欠損していて確認しえない。反対側の面は未調整で縦横共に骨の持つ湾曲を示している。D-6・7 グリッドより出土。

ト骨の出土例は市内では中世集団墓地遺跡の図 1-3・4・6 地点で確認されている。これらは肋骨を半載・整形し、平面長方形の鑽を列状に配置し、灼痕も十字形を呈するものが多く本地点出土例に極めて近い。また市外では三浦半島の砂丘上集落遺跡である浜諸磯遺跡 (ト骨は 1 の例に近い、ト甲も出土・奈良時代)、間口洞窟遺跡 (ト甲・古墳時代後期) 等から出土している。この他県外では宮城県裏杉ノ入遺跡や千葉県印内遺跡 (共に古墳時代後期) の例、奈良時代の例が静岡県伊場遺跡からもト骨の出土例が知られているが、これらはともに同じ形式によるト骨・ト甲である。本例は下層遺構の確認面上に出土したもので確かな年代観は与え難いが、周辺の出土遺物から見て 7 世紀後半から 8 世紀頃の所産と思われる。

第四章 まとめ

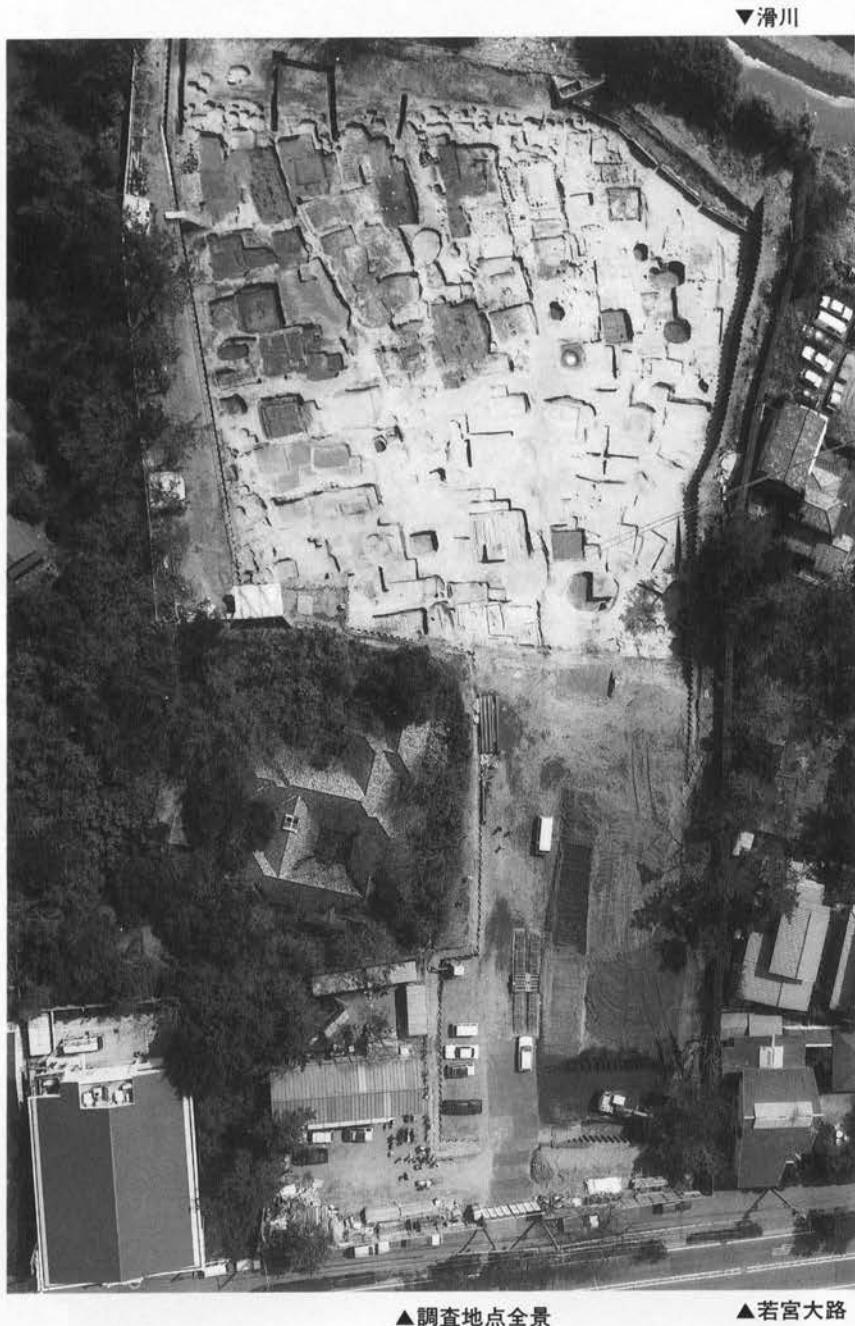
本調査地点の発掘調査で、古代・中世期の遺構が検出され、多量の遺物が出土した。調査では中世を大きく2時期の遺構群として捉えた。上層遺構は若干の柱穴は検出されたものの建物としては把めず、建物の主体は方形竪穴建築址でこれに井戸や土壙等が伴い、更に道路や通路を基本としたある程度の地割り的な区画が存在していたことが遺構群の配置から見てとれる。また方形竪穴建築址と重複しながらも墓址（単独葬、集積葬）はある程度密集して墓域・葬地的な空間も作り出されている（13世紀代に堆積したと思われる風成砂層の上面で検出した例は、これらの遺構群よりも若干遡る可能性もある）。このように上層遺構は密度の高い遺構群と多量の遺物が検出され、年代は概ね14世紀前半を中心にして前後した時期も含まれよう。下層遺構で検出した中世期の遺構は掘立柱建物、柵状遺構、墓址（単独葬、合葬）等を検出したが密度は低く、それに伴う出土遺物も極めて少量であり、余り生活の匂いが感じられない様相を示す。確認面は砂丘後背湿地堆積層の上面（中世初頭以前に形成された黒褐色弱粘質土）であるが、実際には風成砂層中から営まれたものである。掘立柱建物と柵状遺構の軸方位からして、相互に密接に関連した様子を窺い知ることができよう。堆測の域を出ないが柵状施設とそれに伴う建物であるとすれば、『吾妻鏡』の記事のように流鏑馬や笠懸、牛・犬追物などを行った「馬場」としての浜の風景を想起することも可能であろう。人骨37の遺構は柵状施設の一部を壊して埋葬されており、時期的に細分することも可能であるが、良好な出土遺物が少なくここでは13世紀後半までの遺構群として捉えておき、今後の調査成果に期待したいところである。

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡や長谷小路周辺遺跡での発掘調査では、中世層の下から古代の遺構・遺物が検出される例が多く、かなりの範囲にわたり大小の集落が形成されていたことが明らかになりつつある。今回の調査で明瞭な遺構としては、Eライン沿いの南側で7世紀中頃と考えられる2ヶ所の祭祀遺構を検出した。この遺構付近には後背湿地堆積層がなく、古くから砂丘頂部であった可能性があり、祭祀はこの頂部に営まれたと堆測できる。

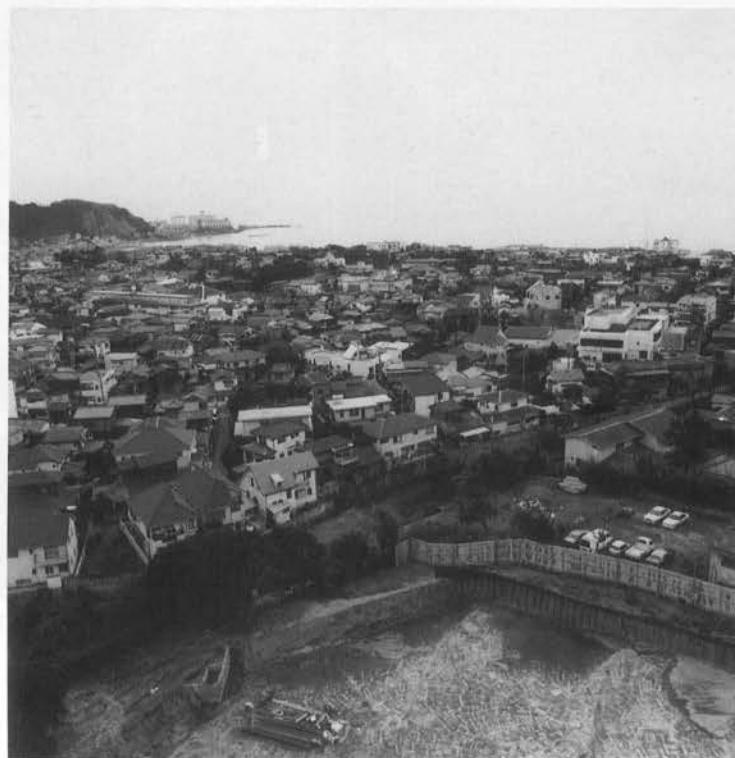
歯科医の鳥巣秀男氏から興味深い御意見をいただいた。人骨12の銅鏡を副葬する成人女性は下顎前歯部に叢生が認められた。これは顎の骨の大きさと歯牙の大きさの不調和からおきる不正咬合で、食生活と密接な関係があるという。今回の調査で出土した他の人骨は良い歯並びで、しかも摩耗が激しく象牙質にまで及んでいた例が多く、固い食物を取っていたことを物語る（図1-6地点出土人骨の観察でも見られなかった）。本例のような不正咬合（叢生）は、当時の食生活から考えると1世代だけではまず起こりえず、その原因は2・3世代にわたり軟らかな食物の摂取から生まれる現象で、たぶん数代続いた豊かな食生活を営んだ結果によるものであろうとの指摘を受けた。このことは当時浜で生活していた人々、この地に埋葬された人々の身分や階層を知る手がかりであるとともに浜の性格を考えていく上で、重要な示唆が含まれているように思われてならない。

写 真 図 版





図版2





1. 方形竪穴1・2(西から)

▼2. 方形竪穴1(北から)



図版4



▲1. 方形竪穴1・2(東から)

▼2. 方形竪穴1(南から)





▲1.方形竪穴6(東から)



▲2.方形竪穴8完掘状況(東から)

図版6

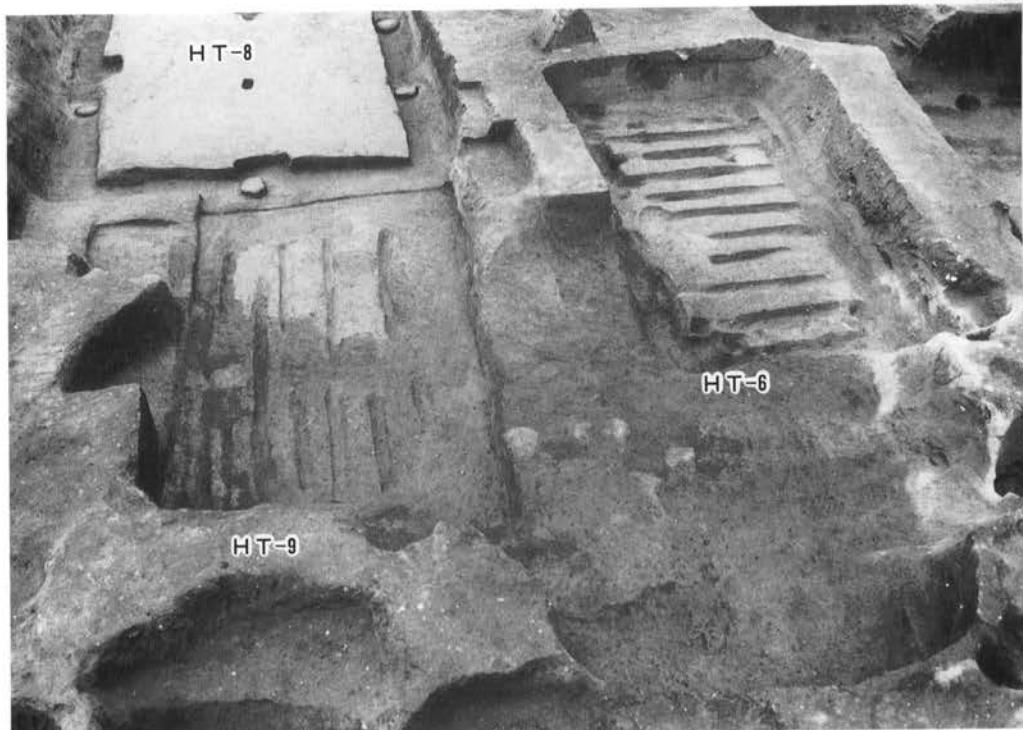


▲1. 方形竪穴 8 (西から)



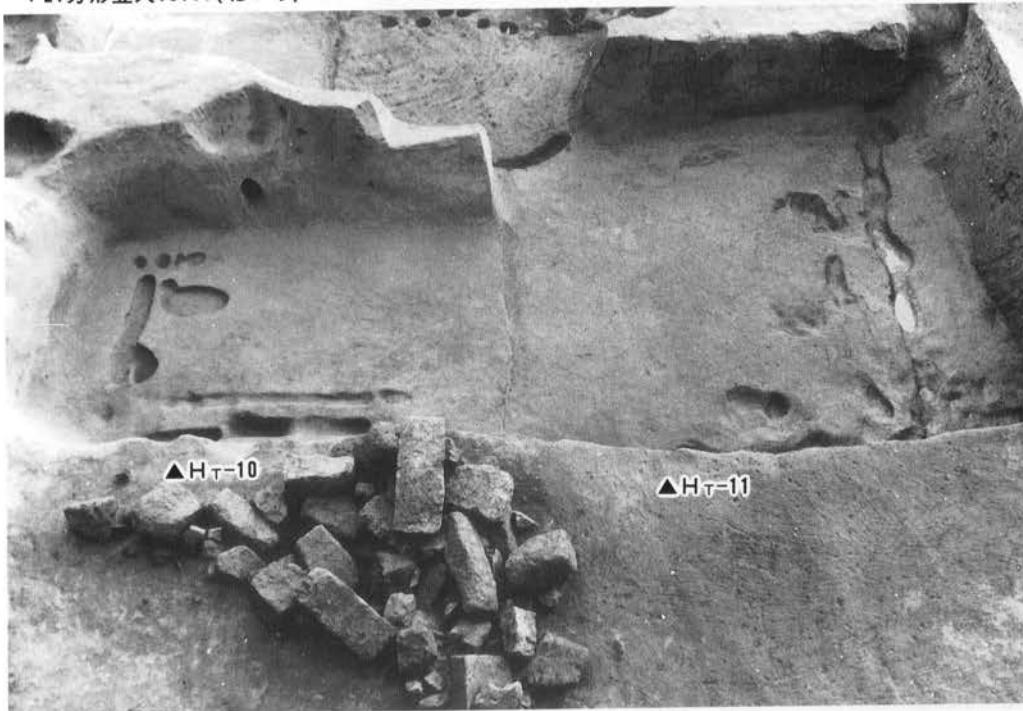
▲2. 方形竪穴 8 (東から)

◎上・下の写真は床面と考えられる部分に白砂を10cm程の厚さに敷いている。柱あたりの痕跡はこの白砂の面上で確認できるので、柱を建てた後に床面に撒かれたものであろう。



▲1. 方形豎穴6.8.9(東から)

▼2. 方形豎穴10.11(北から)





◀ 1. 方形竪穴 16 (西から)



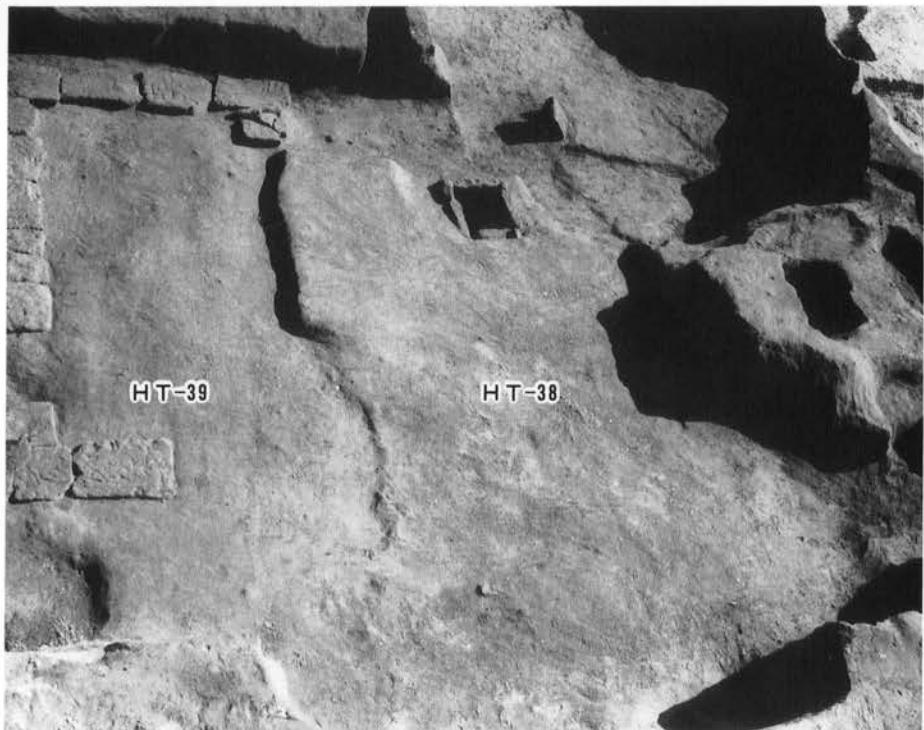
◀ 2. 方形竪穴 20
(西から)



◀1. 方形豎穴21
(西から)

▼2. 方形豎穴33(西から)





▲1. 方形竪穴38(西から)

▼2. 方形竪穴39(西から)





1. 方形豎穴
39



2. 同上 地覆石と炭化材
（地覆石上の毛引きは地覆材）
の芯出しがと思われる。



1. 方形竪穴 41 (東から)



2. 方形竪穴
33 • 38 • 39 • 48 (西から)

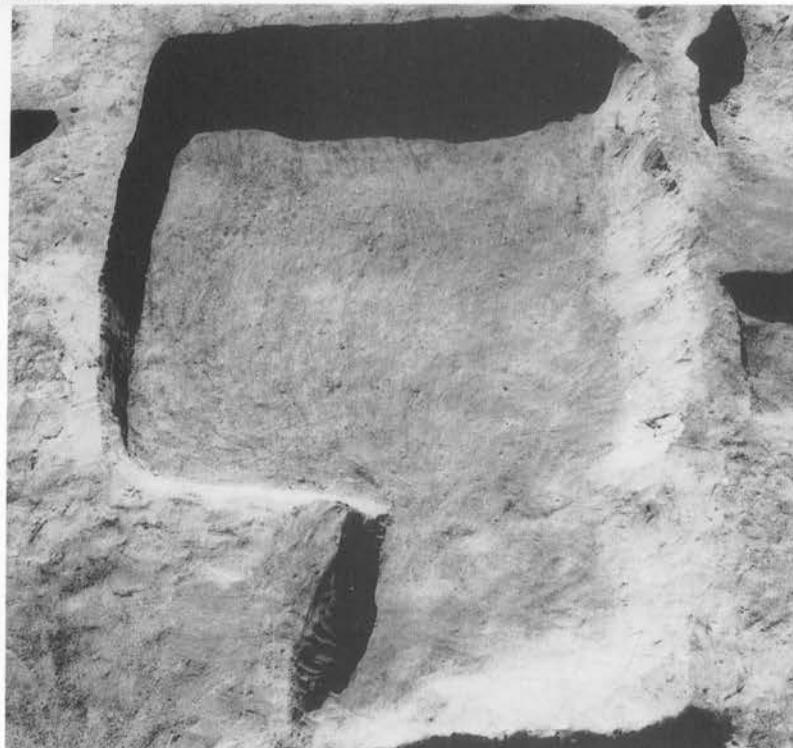


▲1. 方形竪穴48(西から)

▼2. 同上掘り方(西から)



図版14



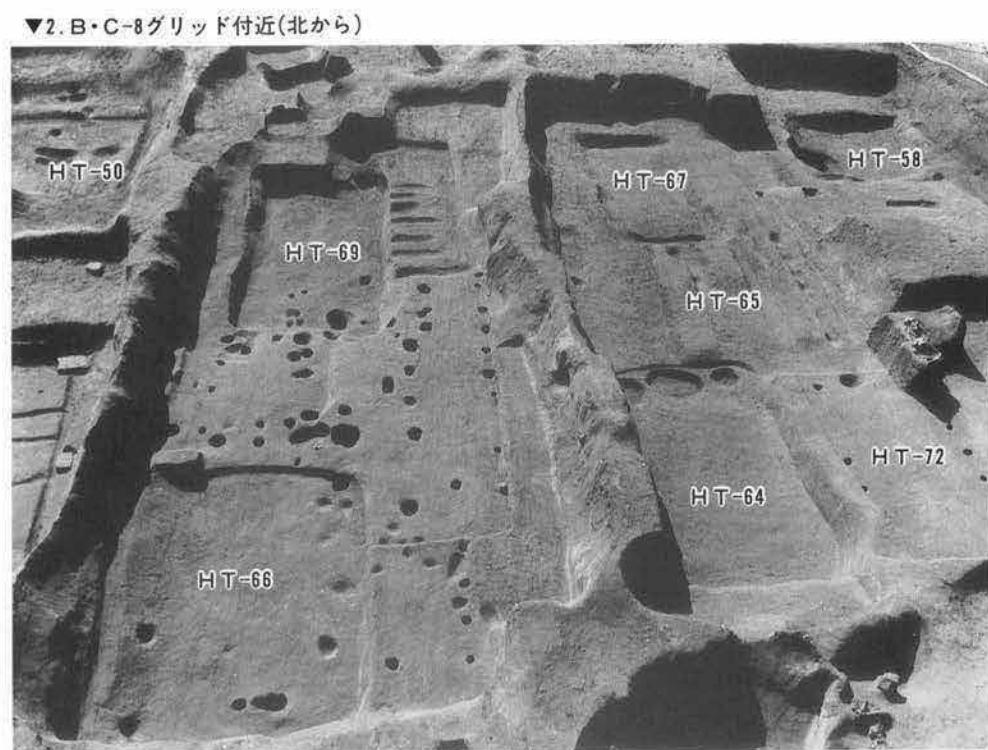
◀1. 方形竪穴50
(北から)

▼2. 方形竪穴58(西から)

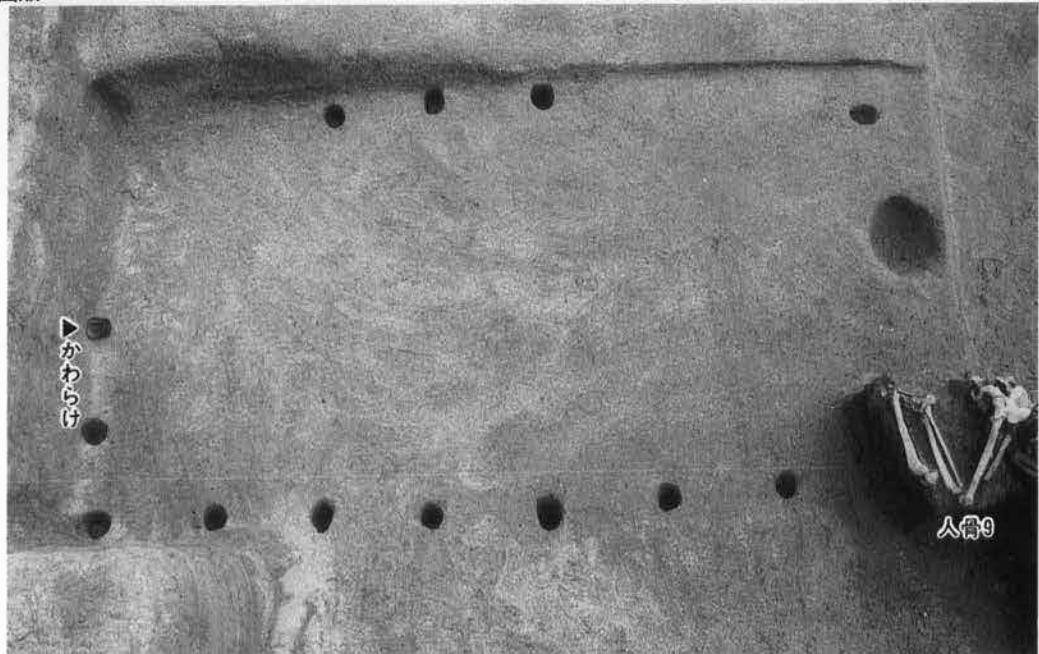




▲1. B・C-1グリッド付近(西から)



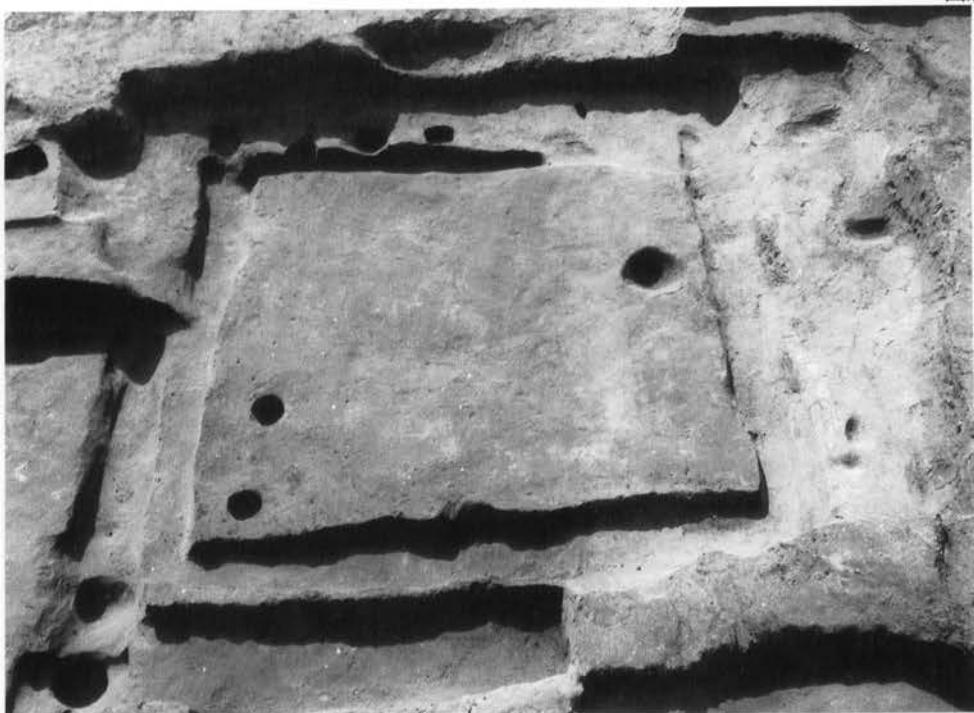
図版16



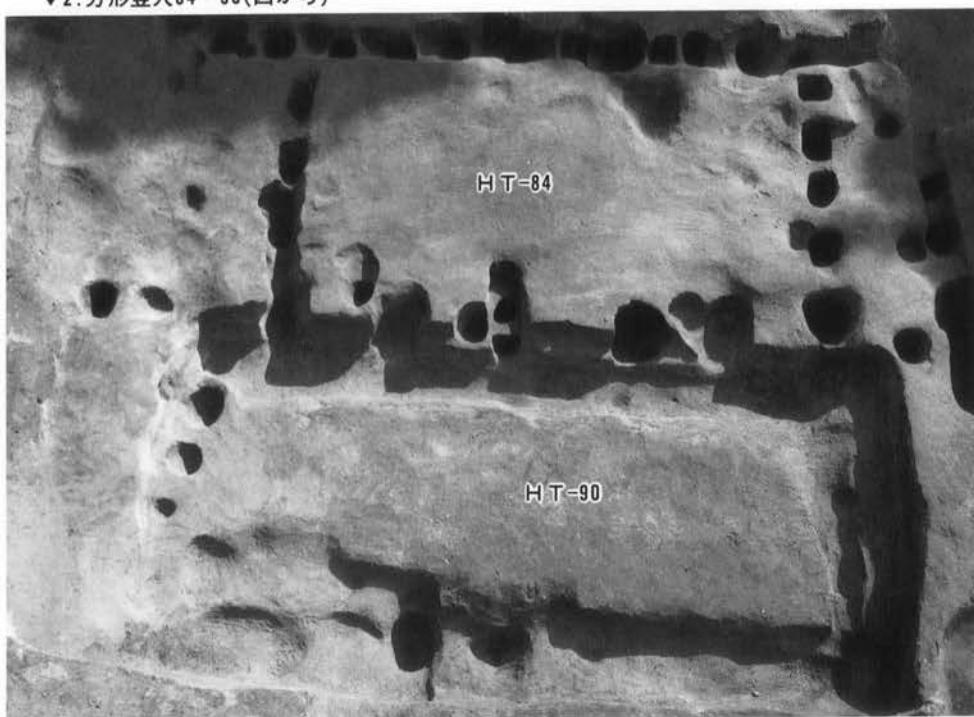
▲1. 方形竪穴72(西から)



▼2. 同上北壁直下かわらけ出土状況(南から)



▲1. 方形竪穴82(北から)



▼2. 方形竪穴84・90(西から)



▲1. 方形竪穴91(西から)



▼2. 方形竪穴108(東から)

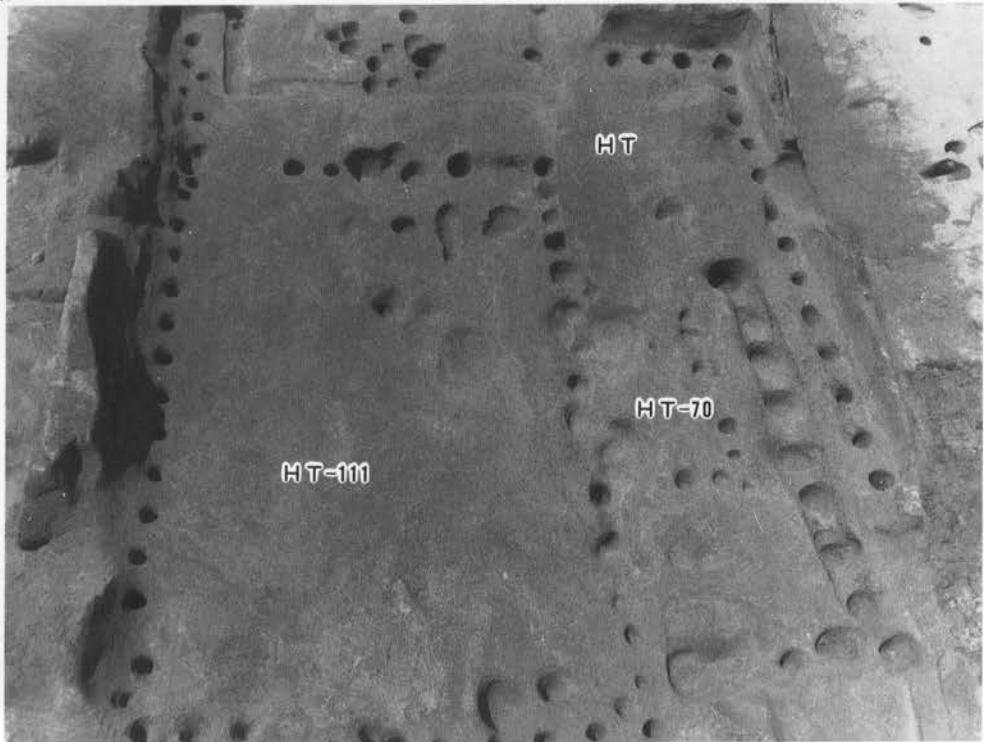


▲1. 方形竪穴 99 全景(東から)



▲2. 同上床面検出のかわらけ留り(東から)

図版20



▲1. 方形竪穴111(東から)

▼2. 方形竪穴116(北から)





▲1. 方形竪穴118(東から)

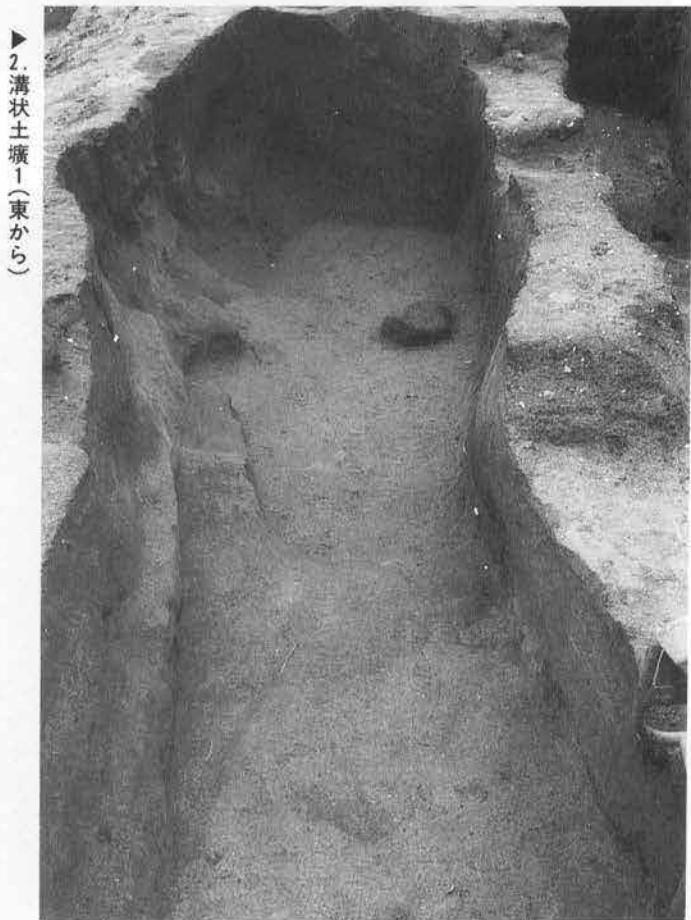
▼2. 方形竪穴123(東から)



図版22



▲1. 方形豎穴 129 (西から)



▶2. 溝状土壙 1 (東から)



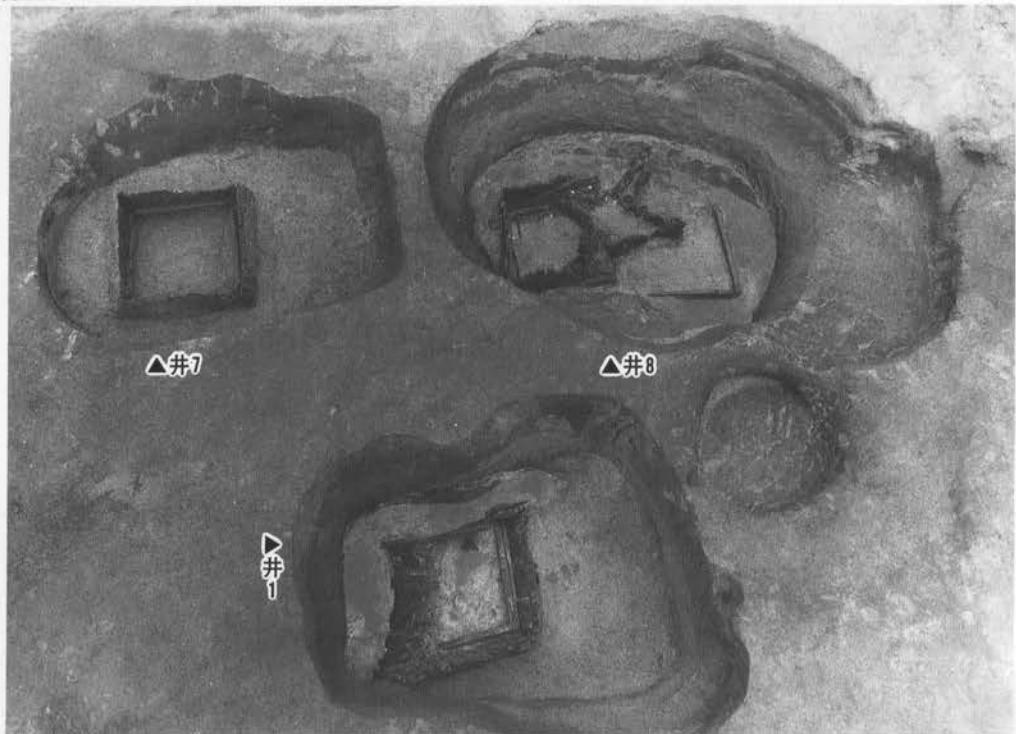
▼土壤167



◀3. 土壌167(井戸枠状の炭化状況)



図版24



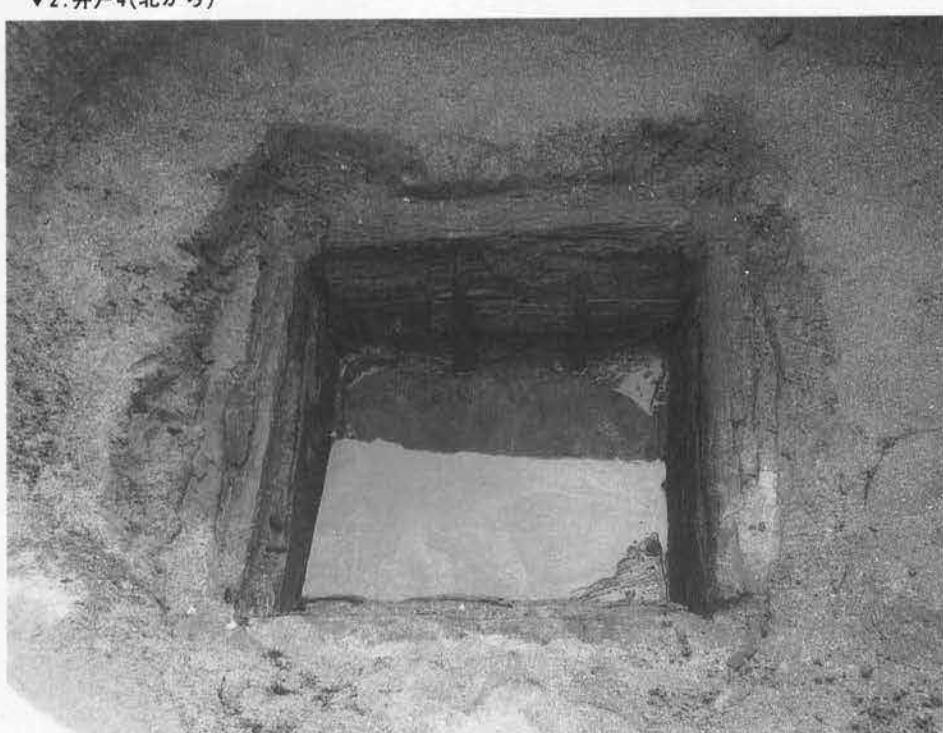
▲1. 井戸1.7.8(南から)

▼2. 井戸2.4.5.6(西から)





▲1. 井戸3(東から)

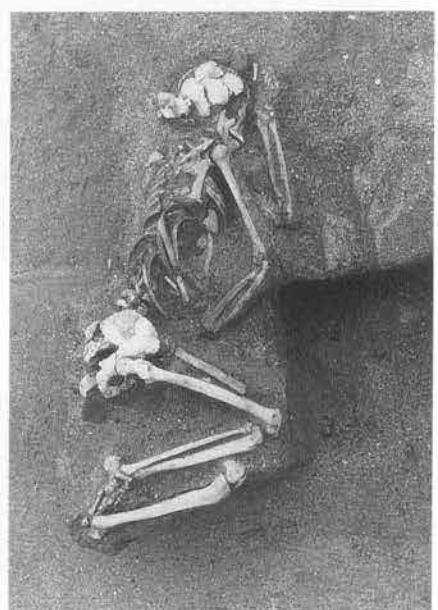


▼2. 井戸4(北から)

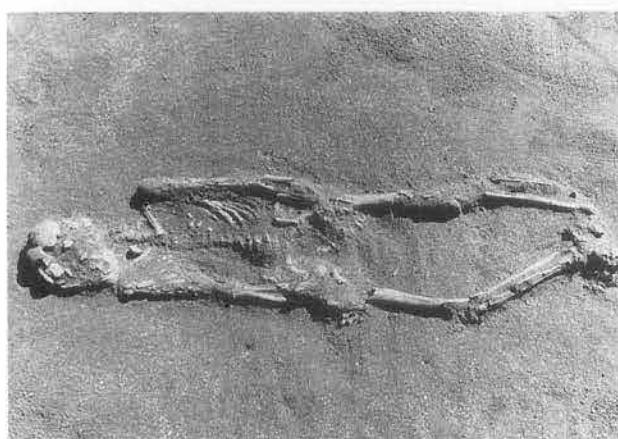
人骨2▶



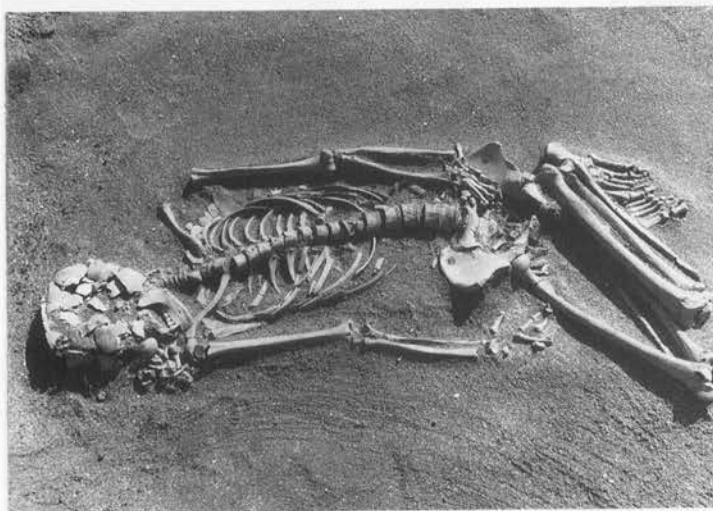
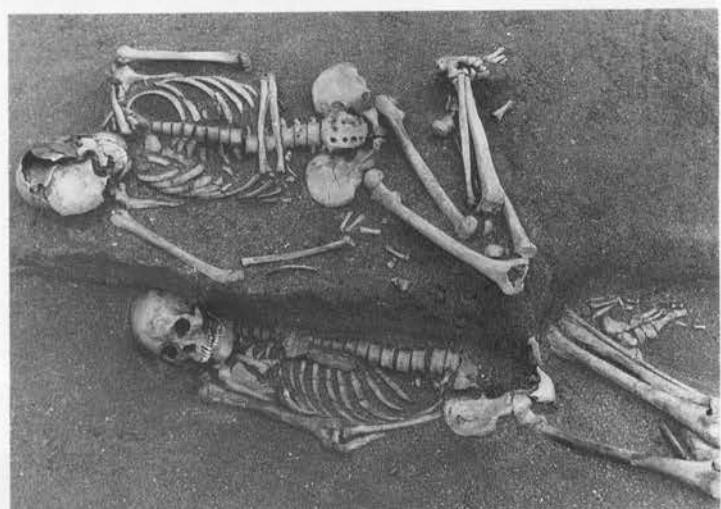
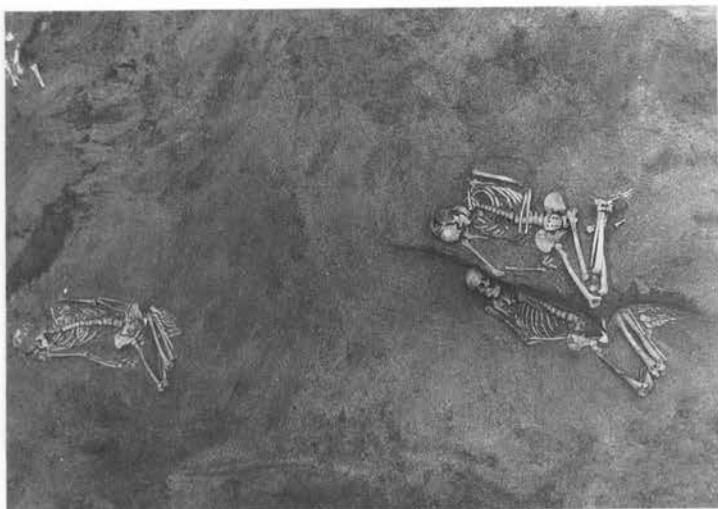
▲人骨30



▲人骨9



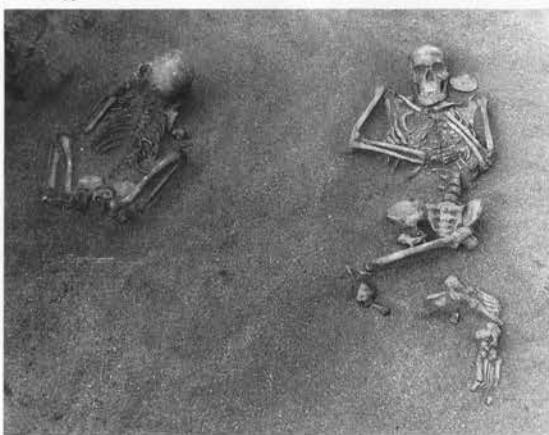
◀人骨7



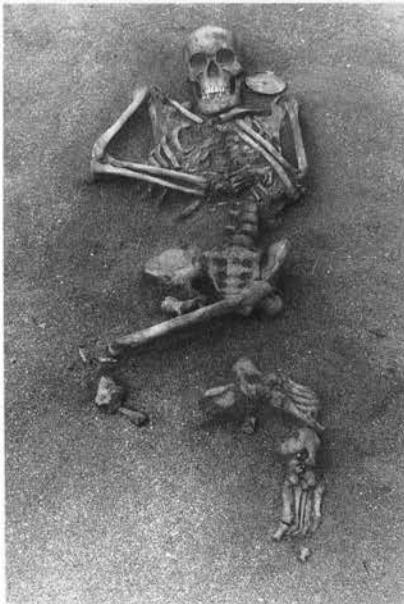
►G・H-9付近人骨群



▼人骨11・12

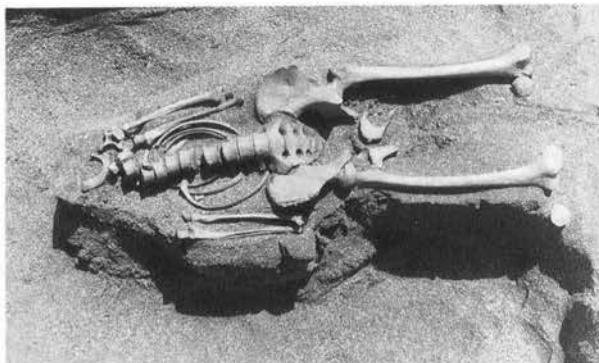


◀人骨12

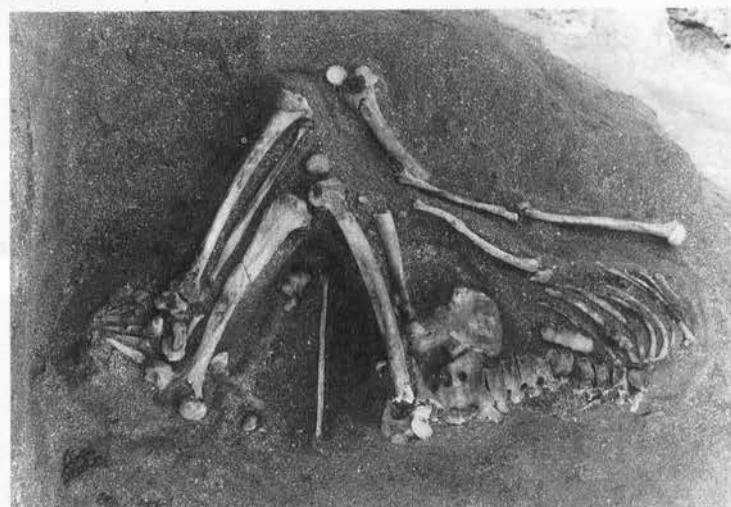


►銅鏡出土状況





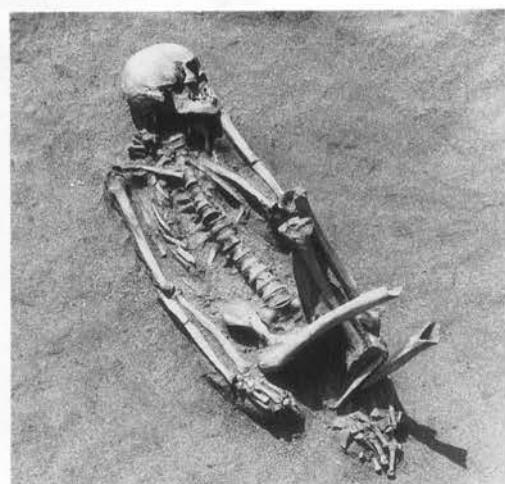
◀人骨31



人骨32 ▶



◀人骨33



▲人骨39

▼同完掘状況



►集積人骨土壤遠景(北から)

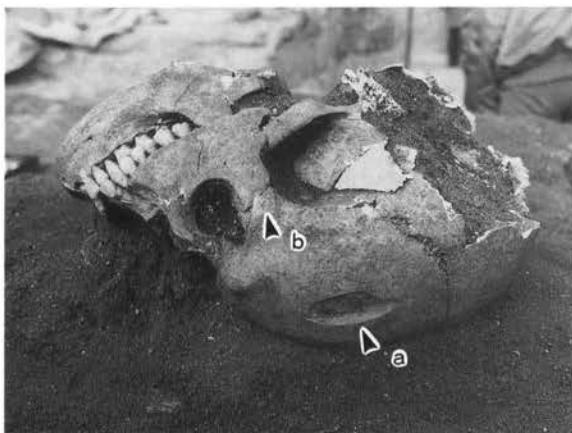


►同中層



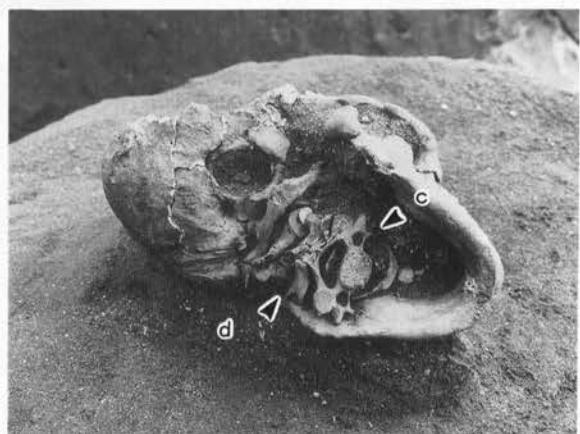
◀同上層





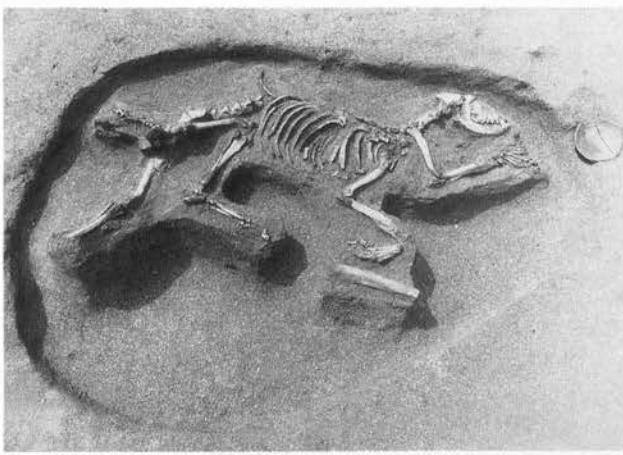
a. > 刃創
b.

▲斬首人骨



c. > 斬首時の刃創痕
d.

▲斬首人骨

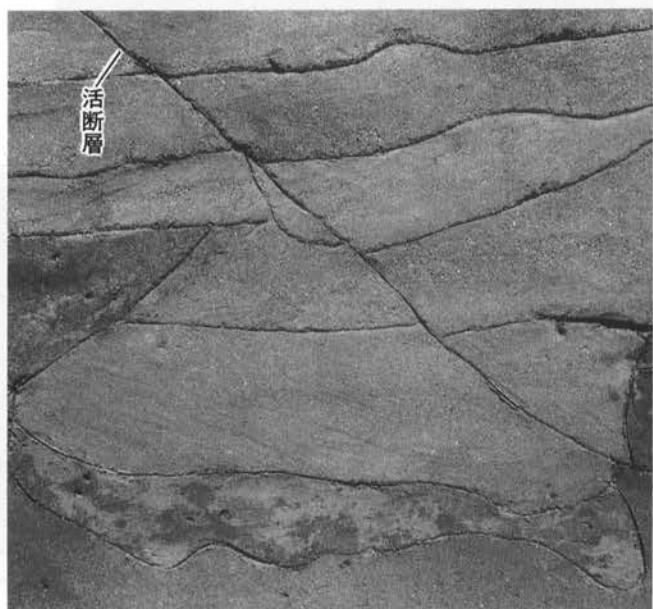


▲犬埋葬状況

▼馬頭出土状況



図版32



▲1. I区下層遺構全景（上が北）



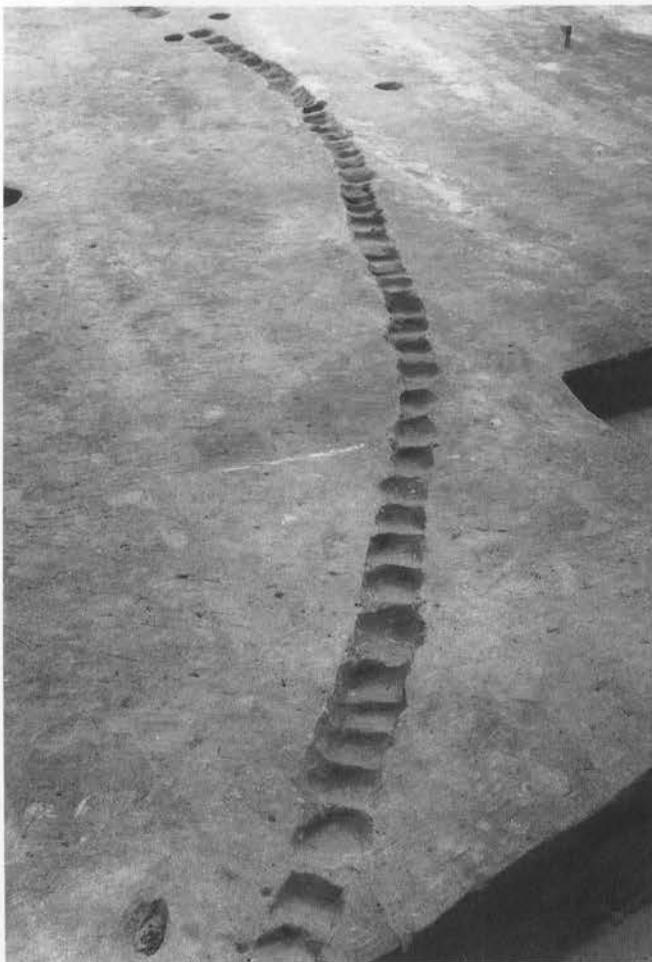
►2. 棚状遺構（円弧を描いた溝状の遺構）



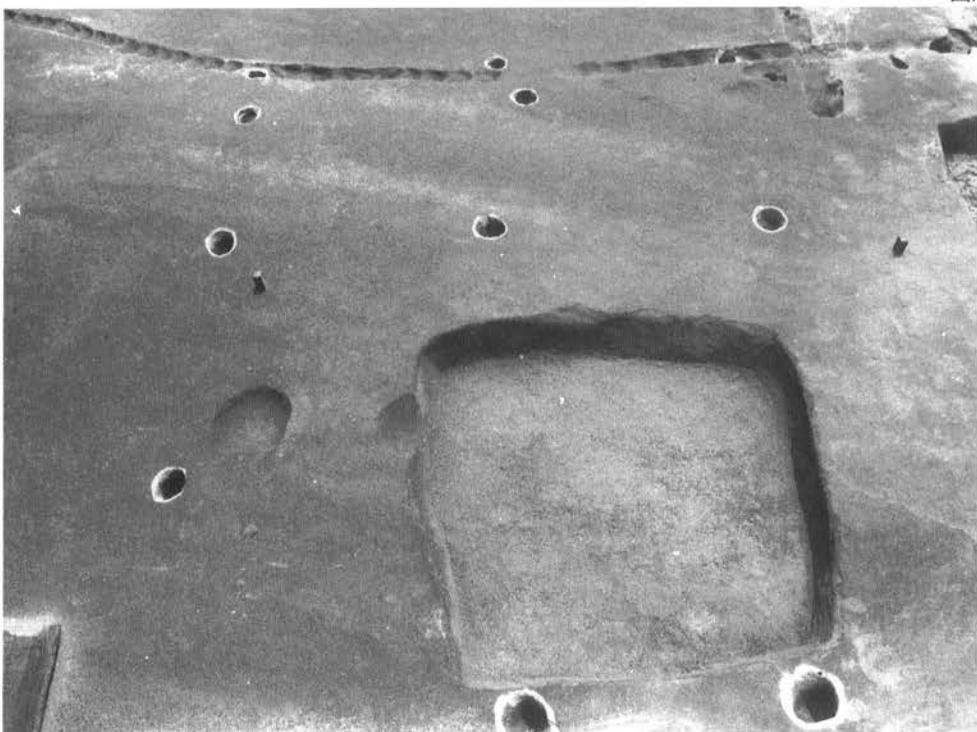
図版34



▲1.柵状遺構1・3・4(南から)
底面には2・3列の小ビットが確認された



▲2.柵状遺構3北端から同じ円弧で続いている。
柵状遺構2(北から)



▲掘立柱建物 1 (西から)



▼掘立柱建物 2 と柵状遺構 3 (西から)

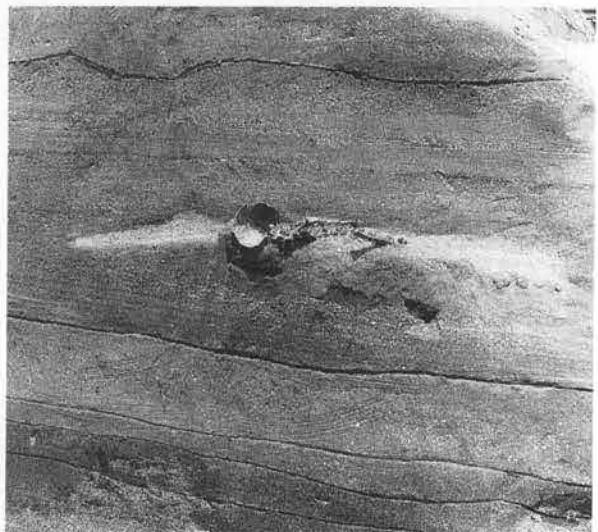
図版36



◀人骨36(幼児・北から)

矢印はサイコロ

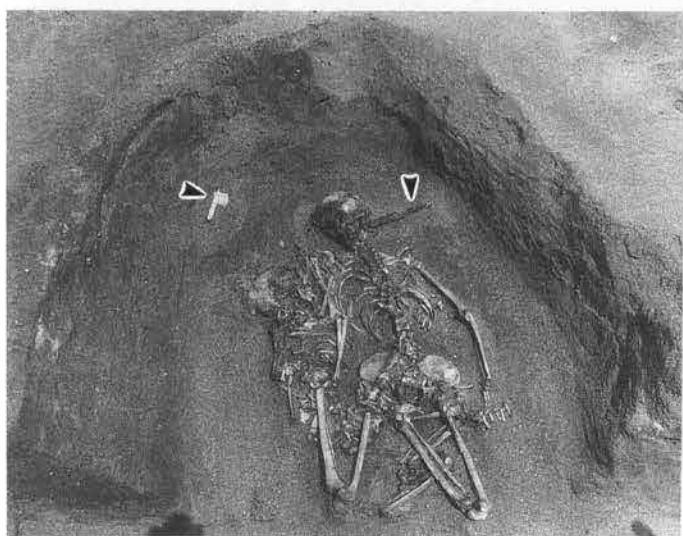
同上 出土状況と土層堆積▶



◀人骨37(南から)

矢印左：骨製笄・青磁割花文碗

右：刀子



▼古代土壙10



▲遺物出土状況

▲同上完掘状況(西から)



図版38



▲全景(東から)

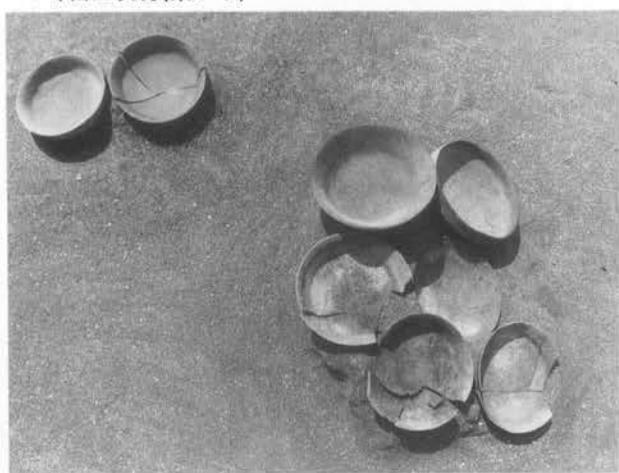
祭祀遺構 1

▼壺・坏出土状況(北西から)

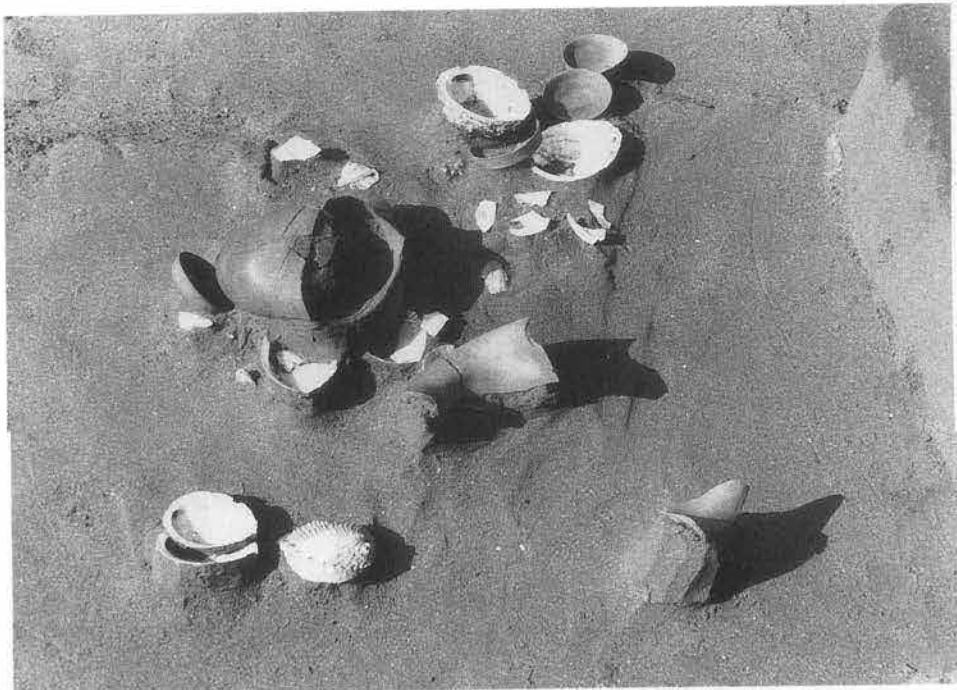


矢印は鉄鏃

▼坏出土状況(東から)



▲全景(南から)



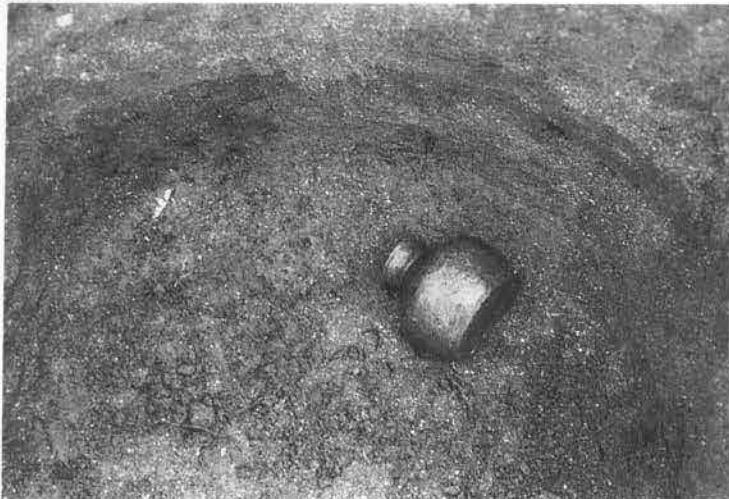
祭祀遺構 2

矢印は鉄鏃

▲アワビと坏が重なっている



図版40



置物出土状況

▲常滑窯口壺

►土製地蔵像



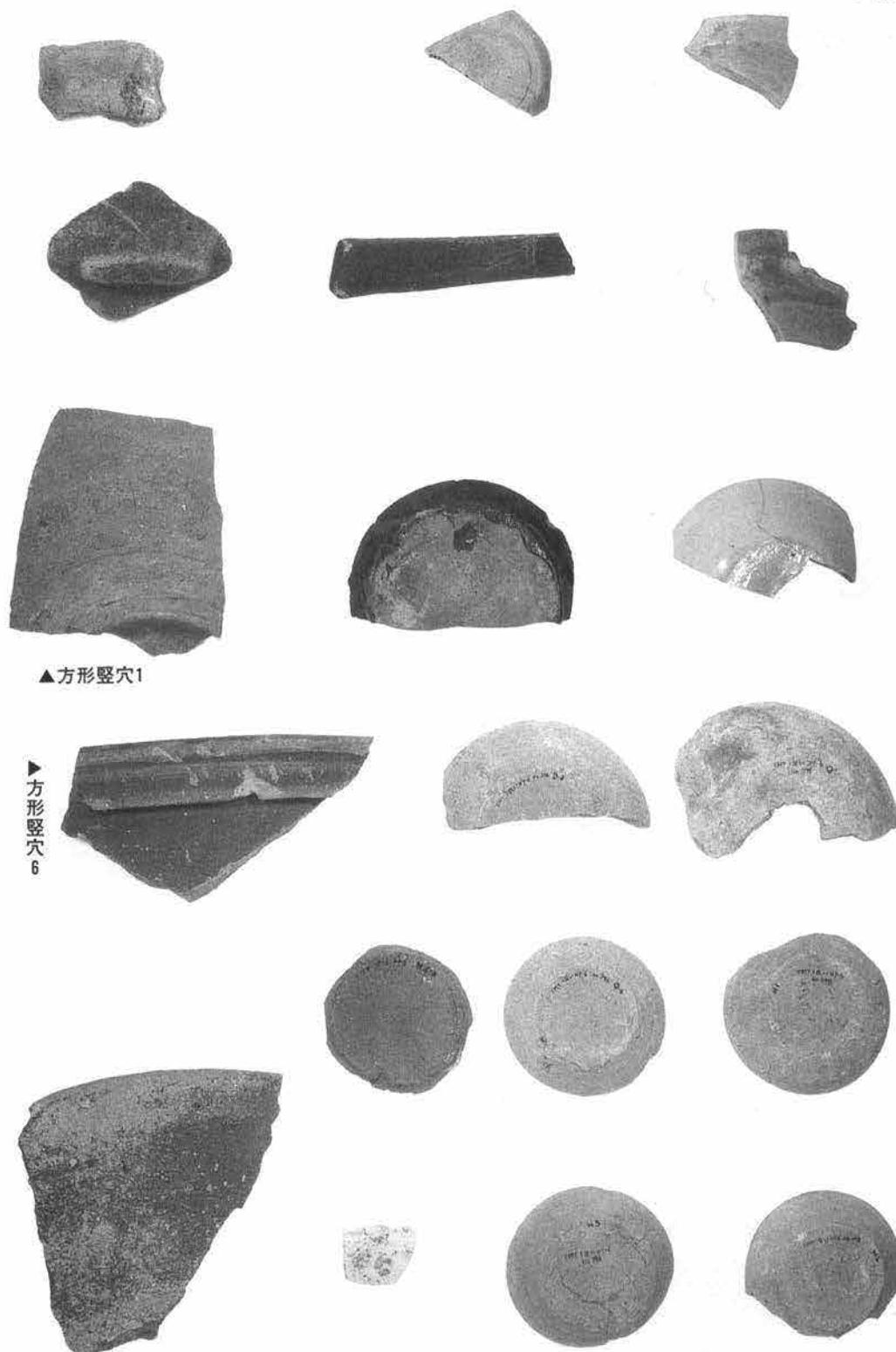
▼かわらけ質仏華瓶



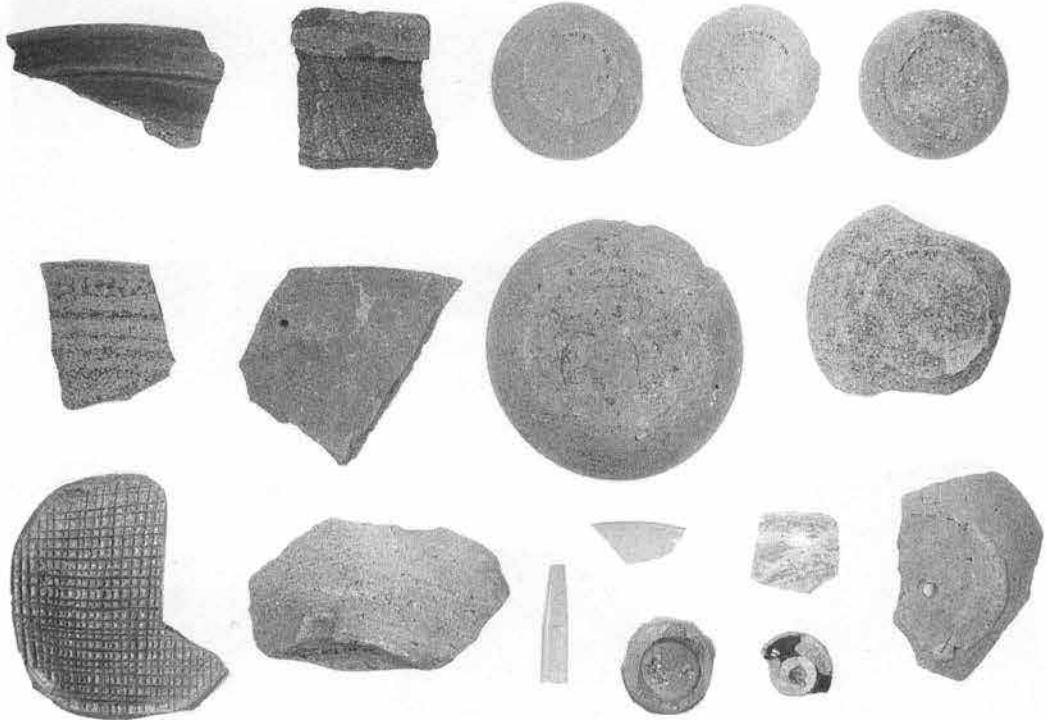
▼青磁蓮弁文碗

▼瀬戸小壺



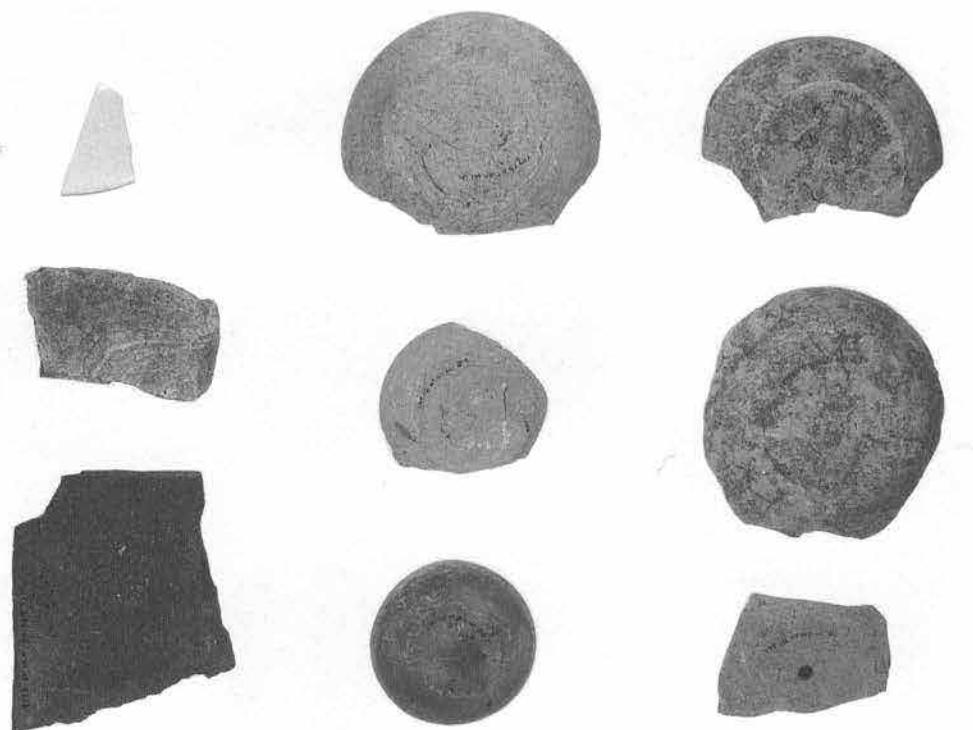


図版42



▲方形豎穴 8

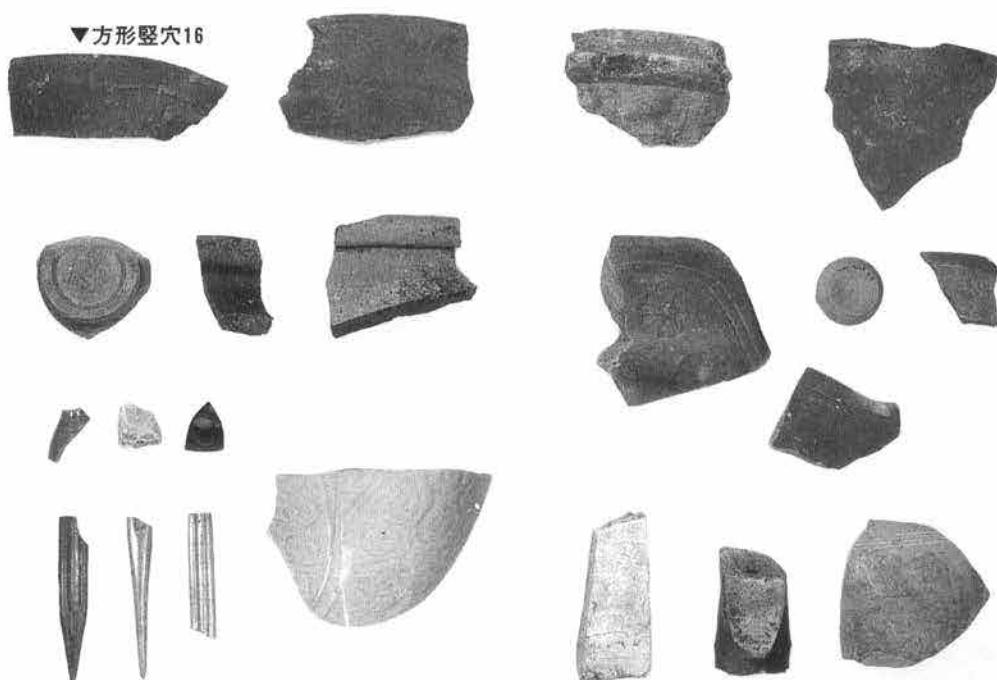
▼方形豎穴10





▲方形竪穴2

▲方形竪穴12



▼方形竪穴16

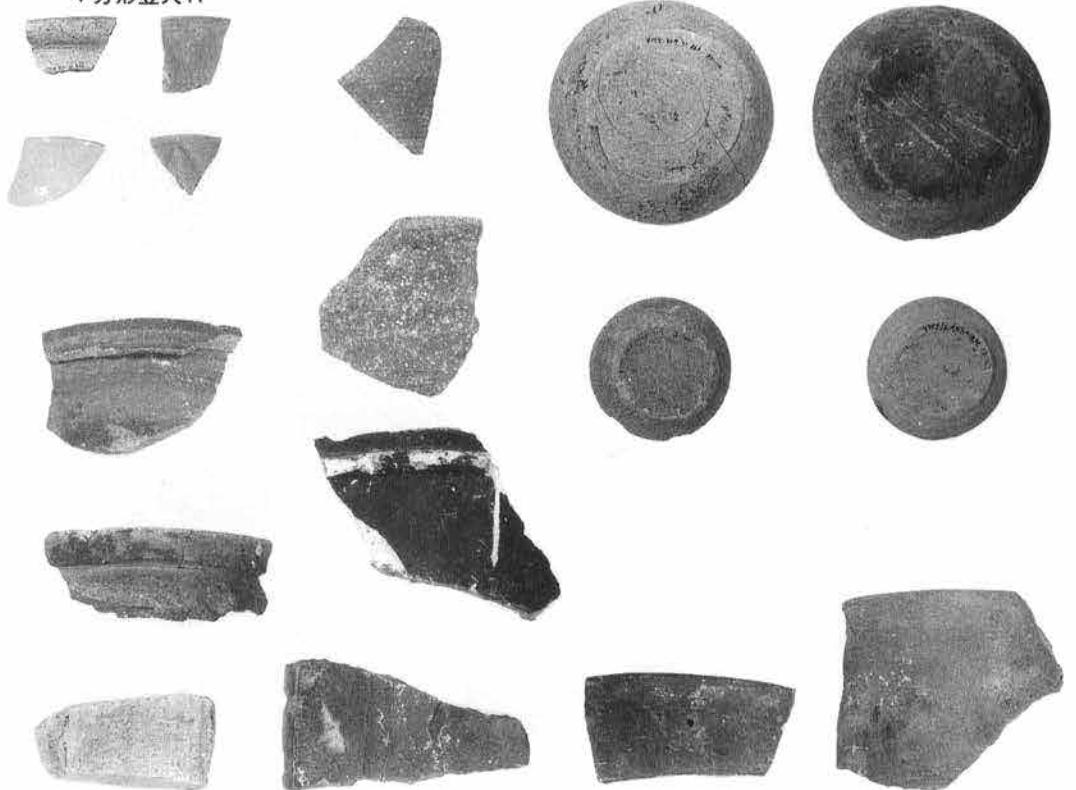
図版44



▼方形竪穴20



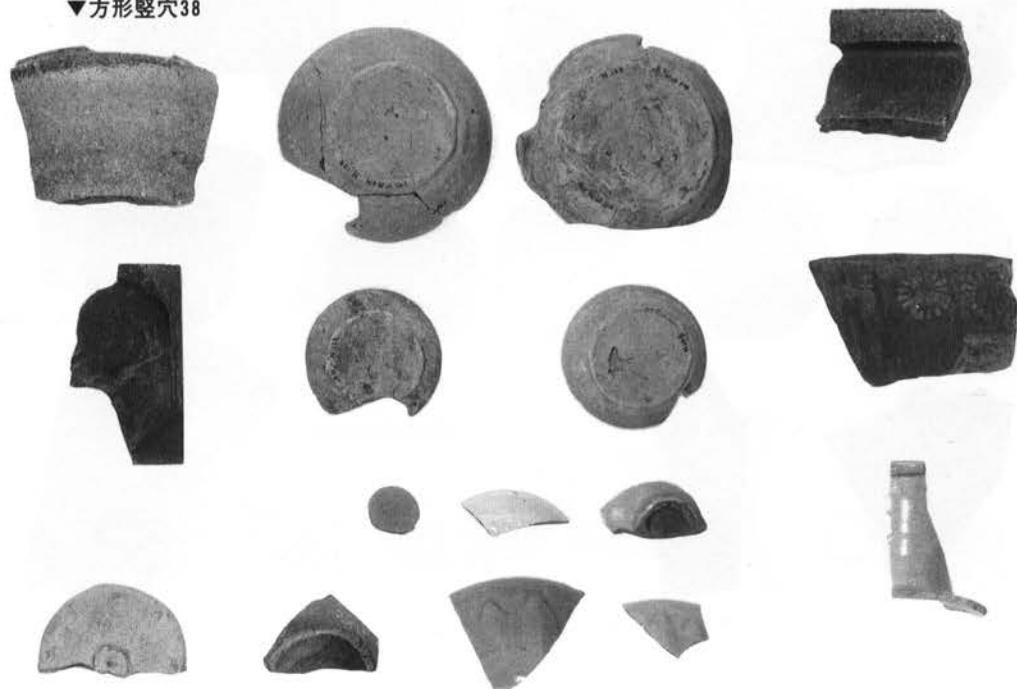
▼方形竪穴41





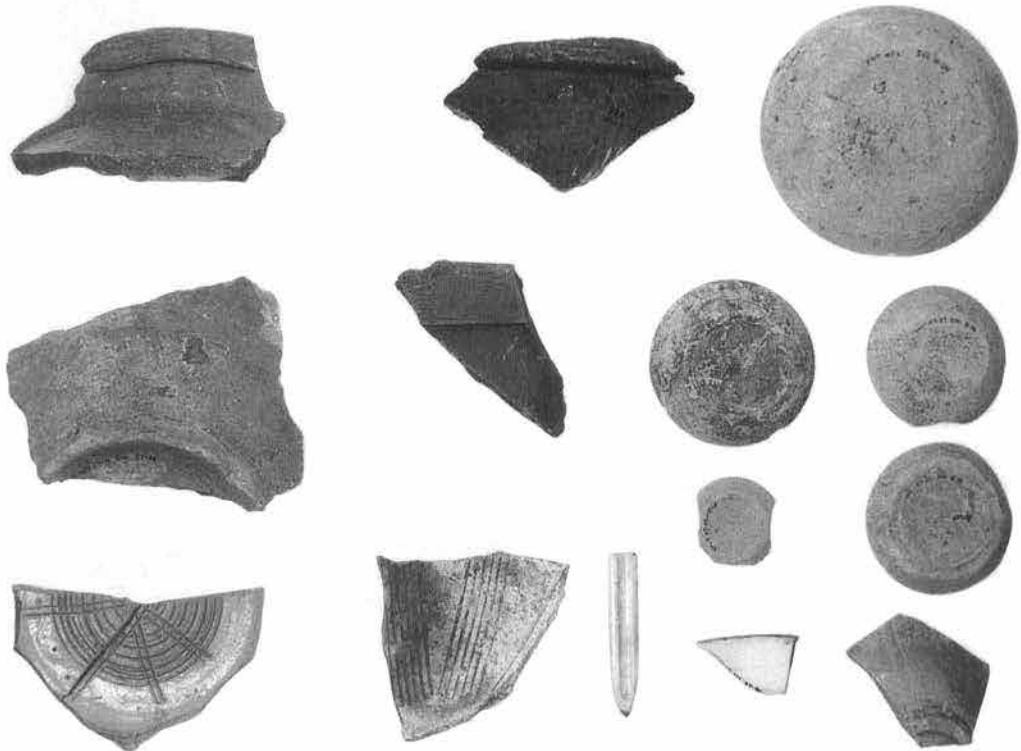
▲方形竪穴33

▼方形竪穴38



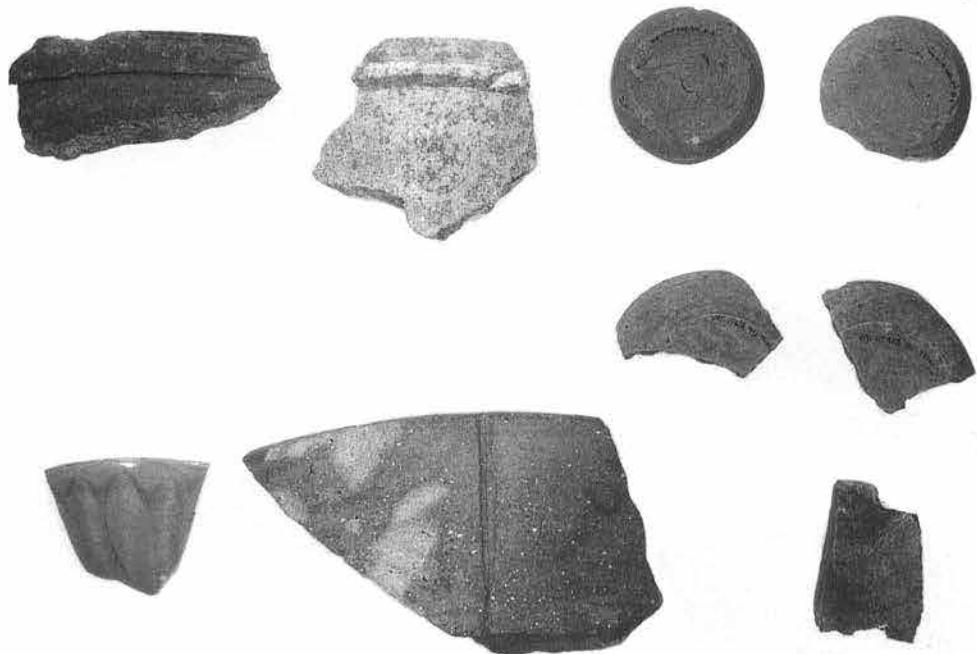
図版46

▼方形竪穴39



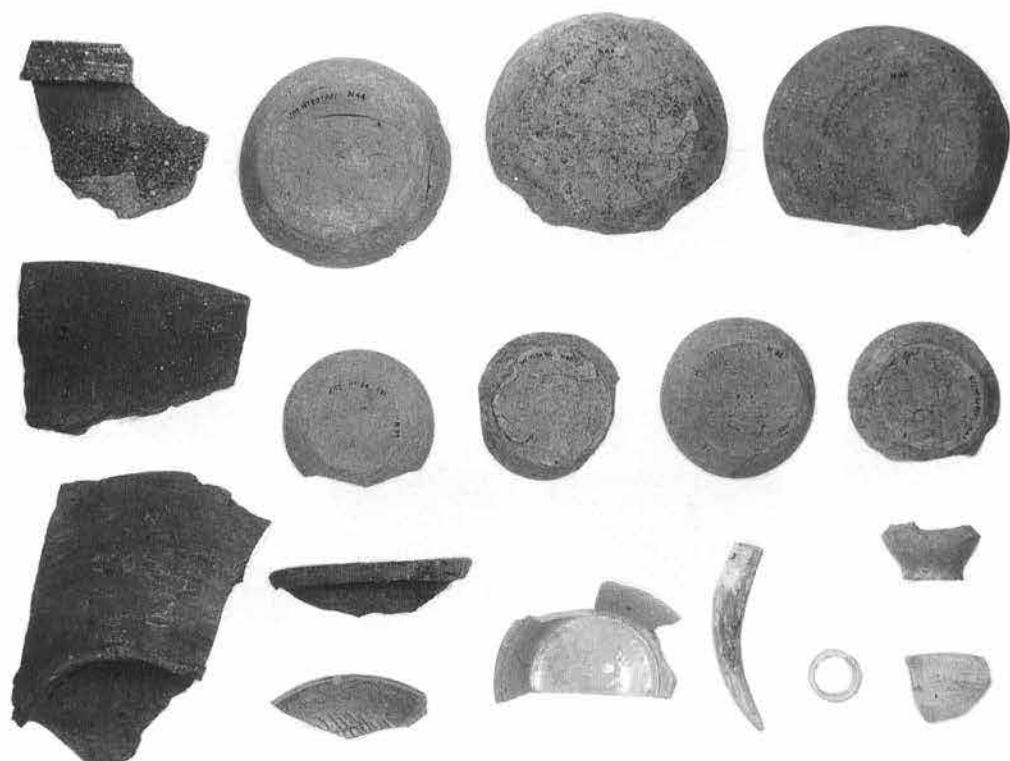
▼方形竪穴43



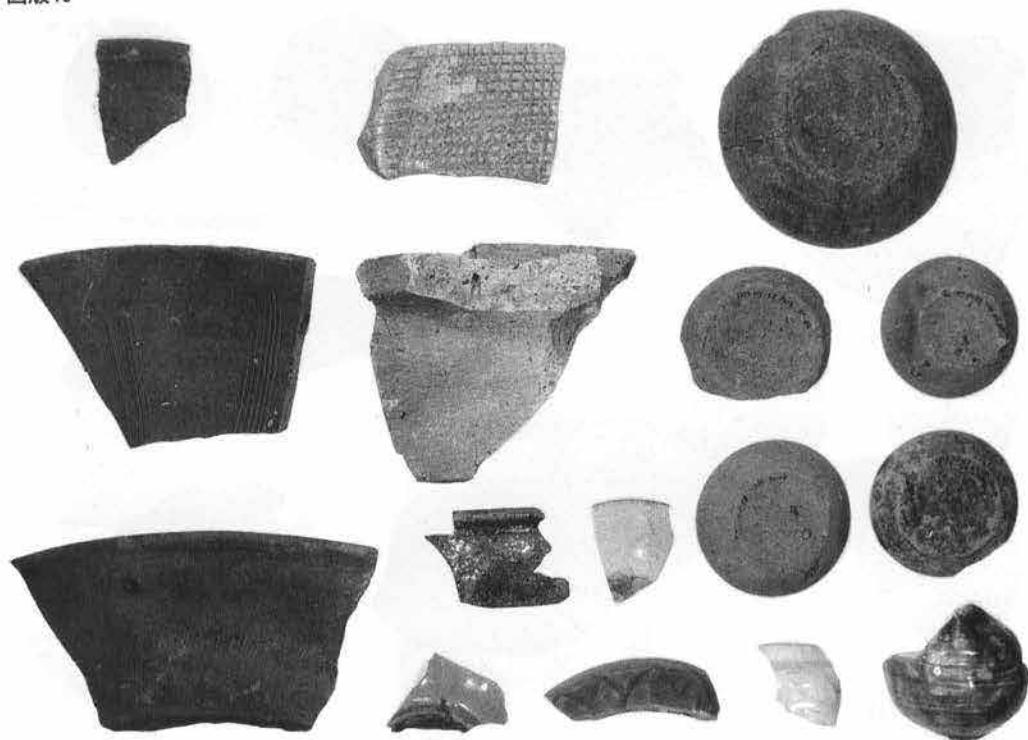


▲方形竪穴48

▼方形竪穴50

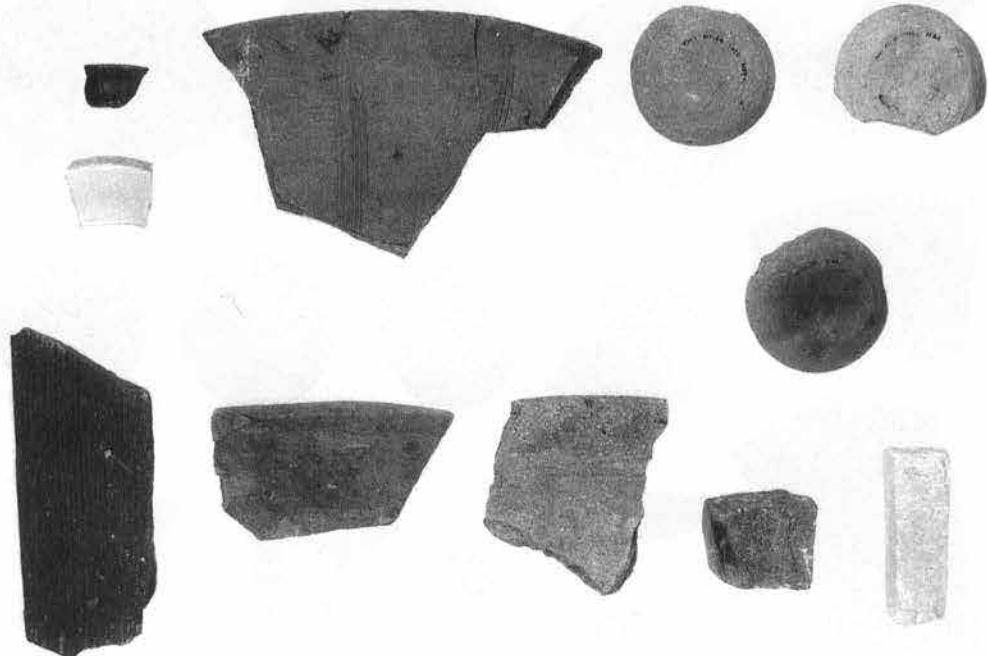


図版48

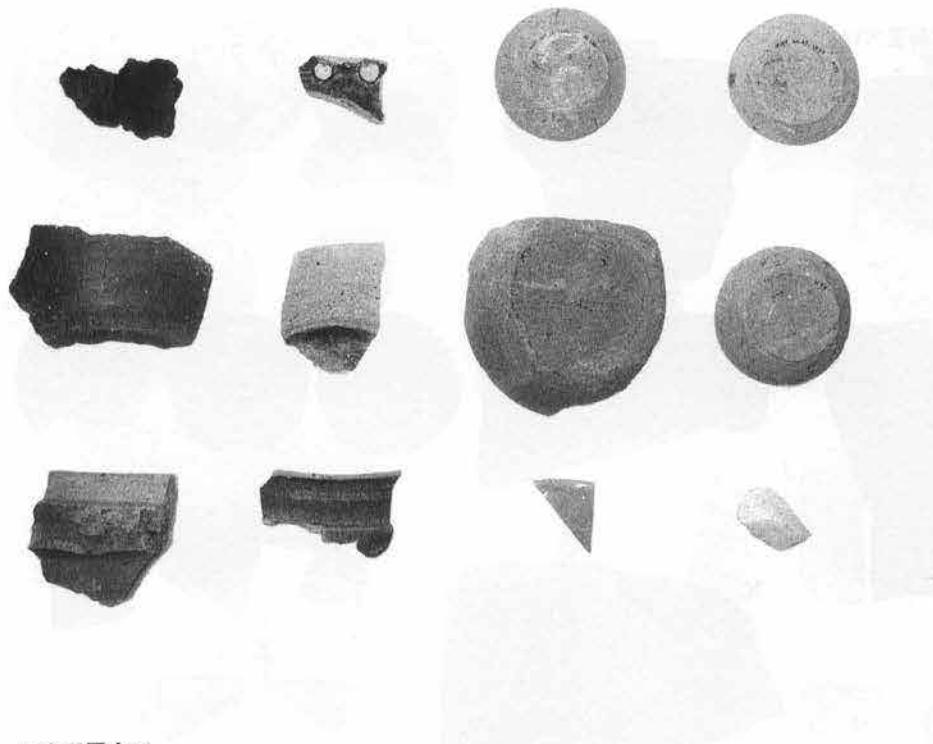


▲方形竪穴58

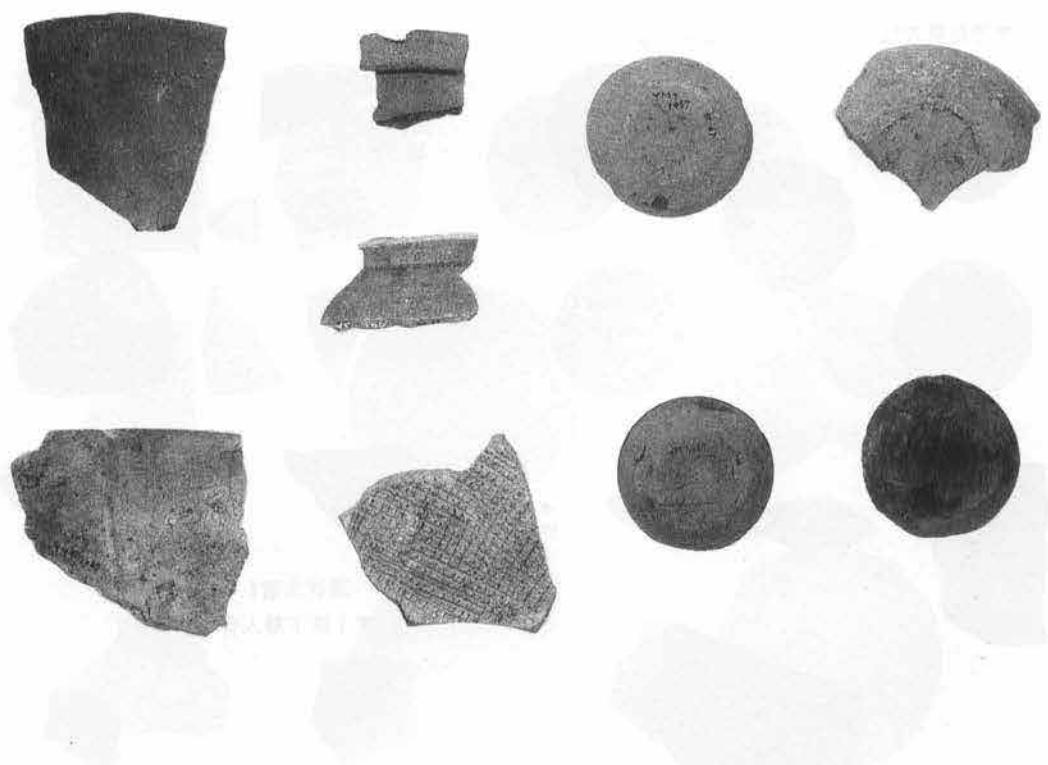
▼方形竪穴64



▲方形竪穴
65

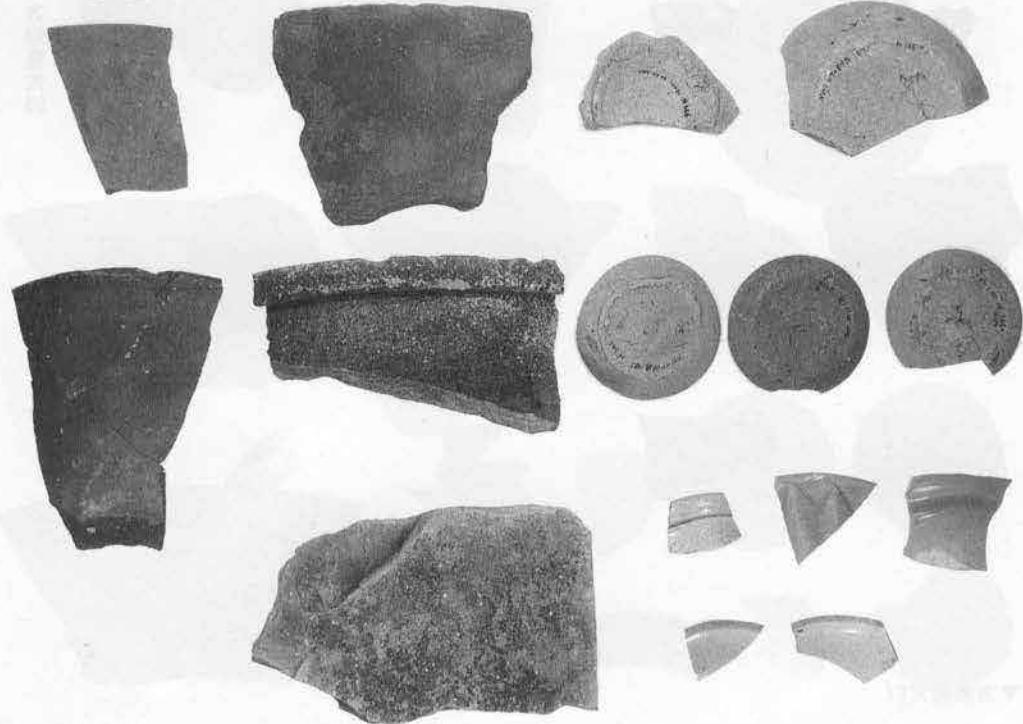


▼方形竪穴67

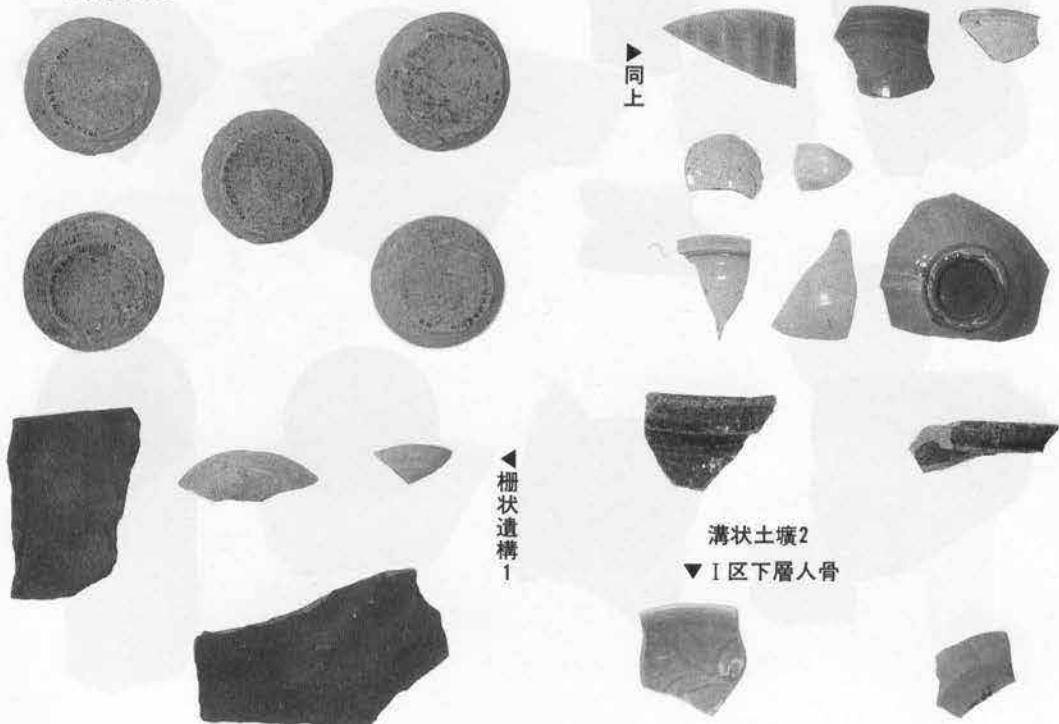


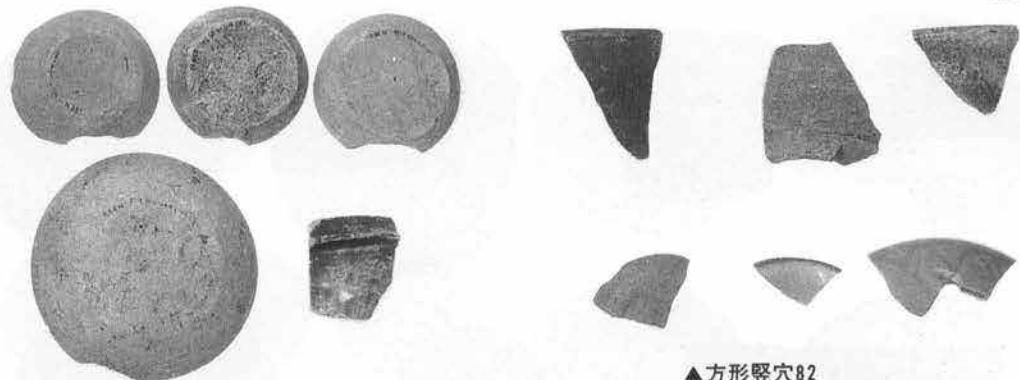
図版50

▼方形竪穴69

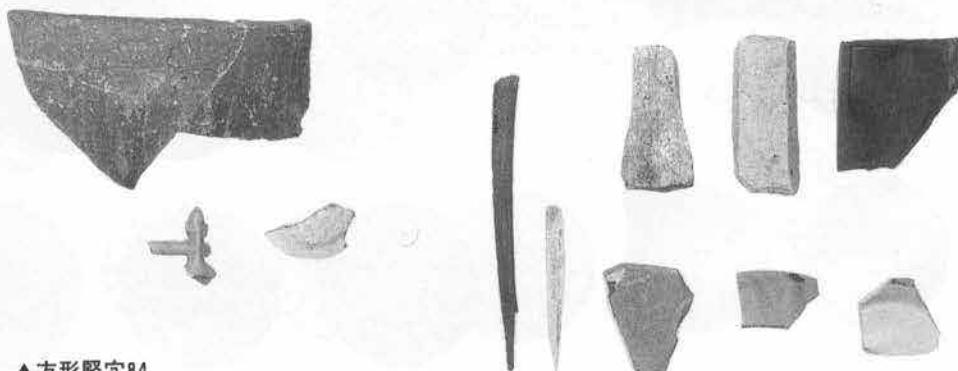


▼方形竪穴72





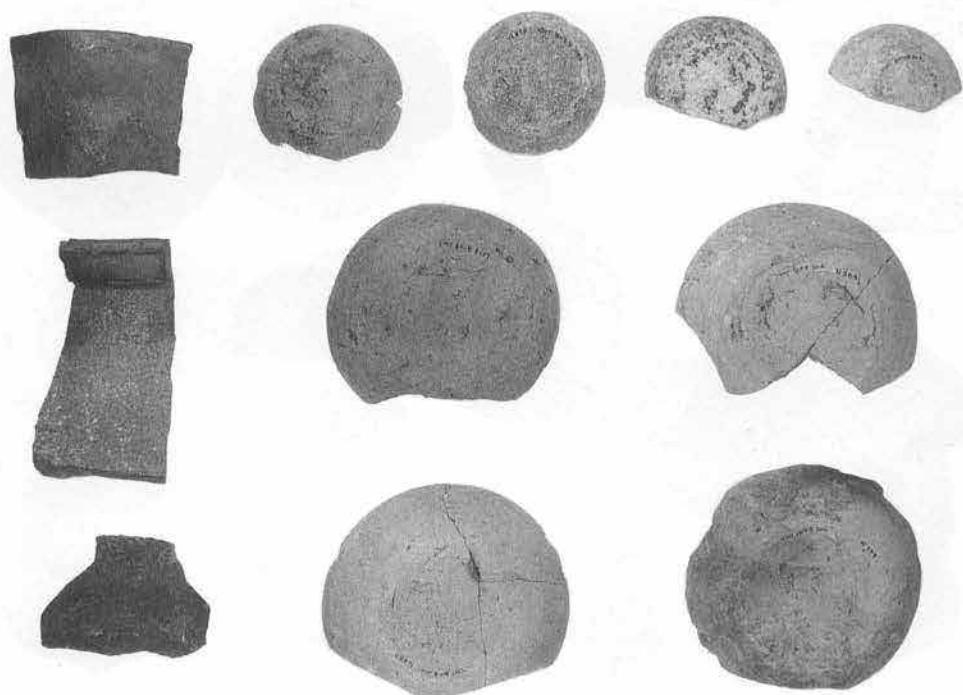
▲方形竪穴82



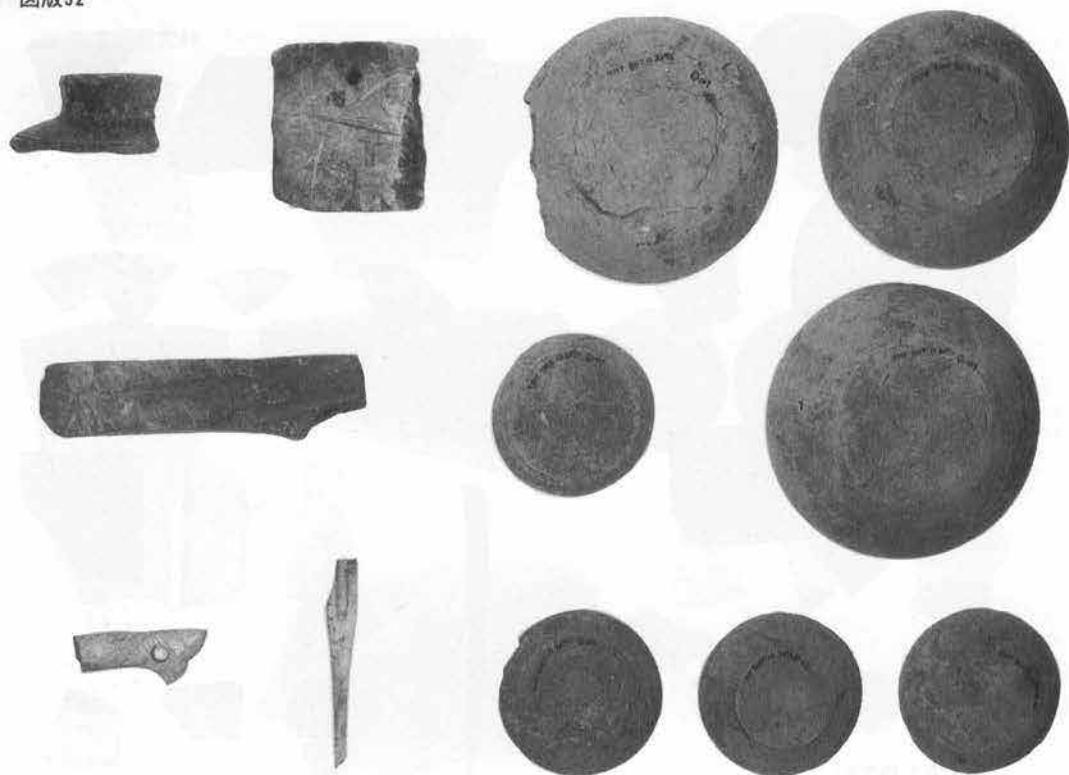
▲方形竪穴84

▼方形竪穴85

▲方形竪穴84



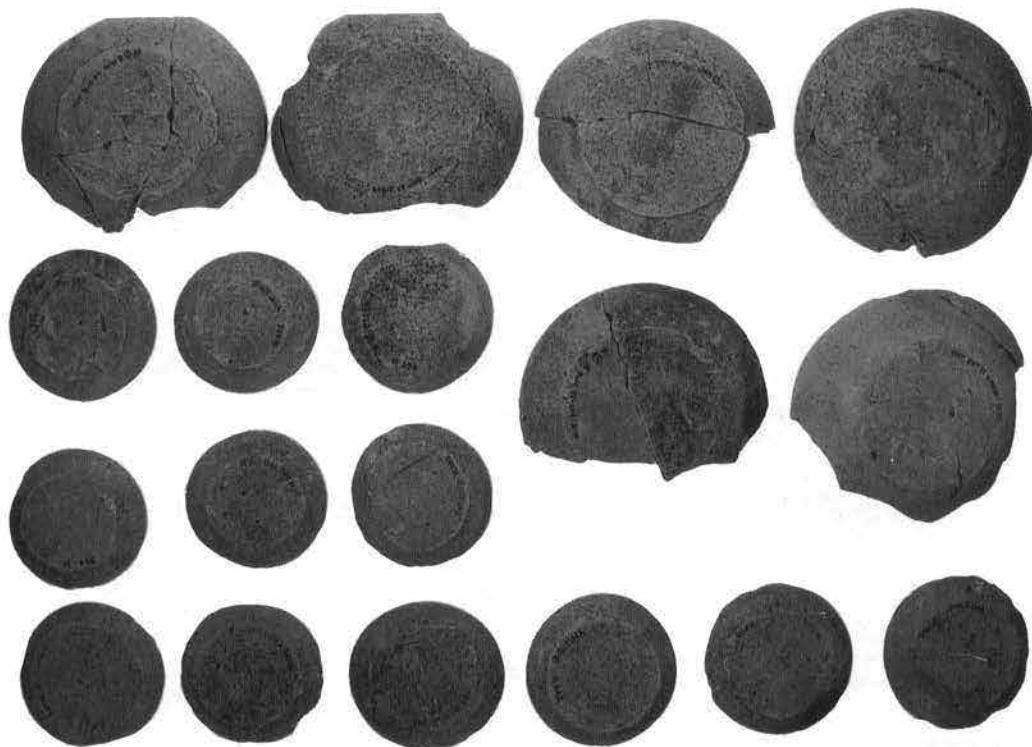
図版52



▲方形竪穴90

▼方形竪穴91



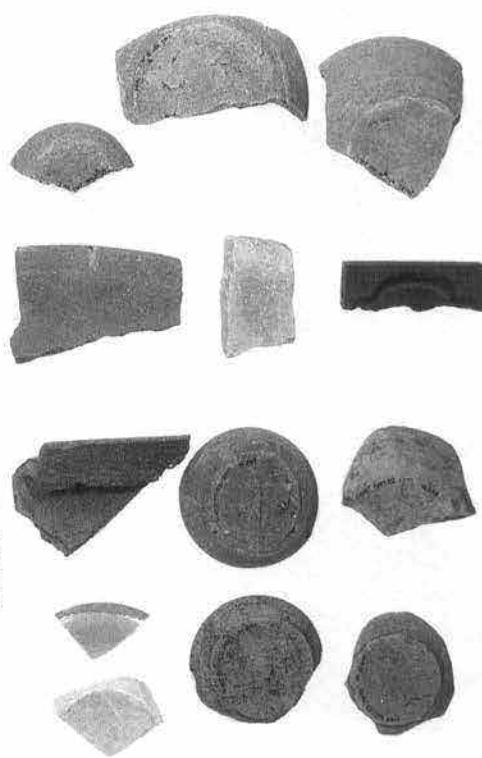


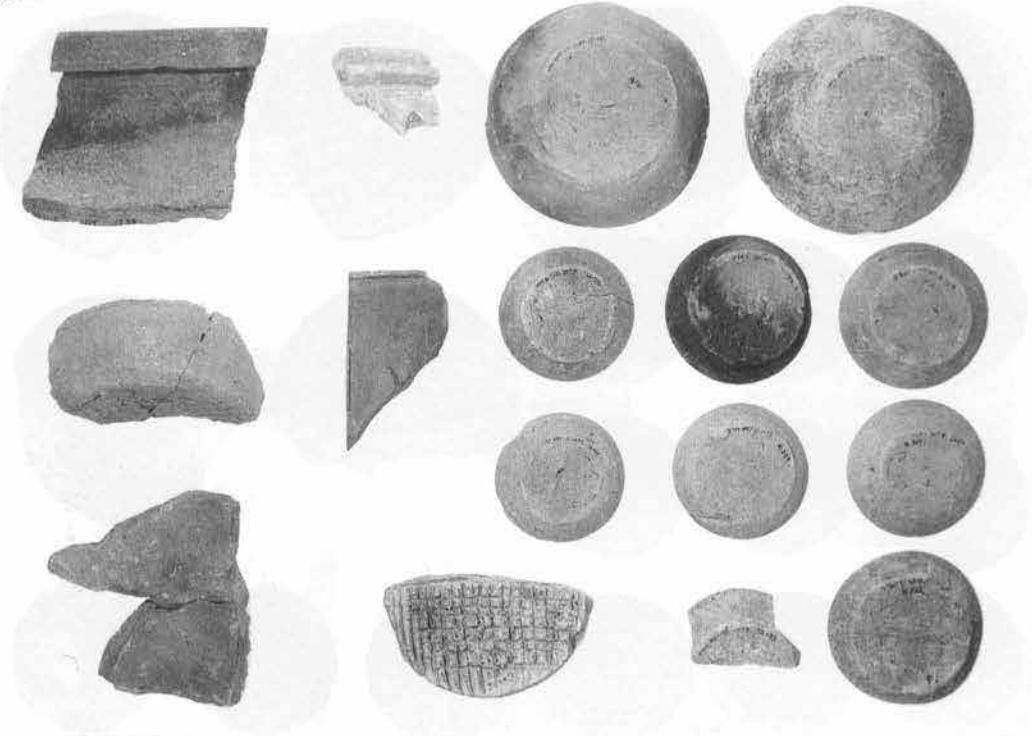
◆方形竪穴99



►方形竪穴 104

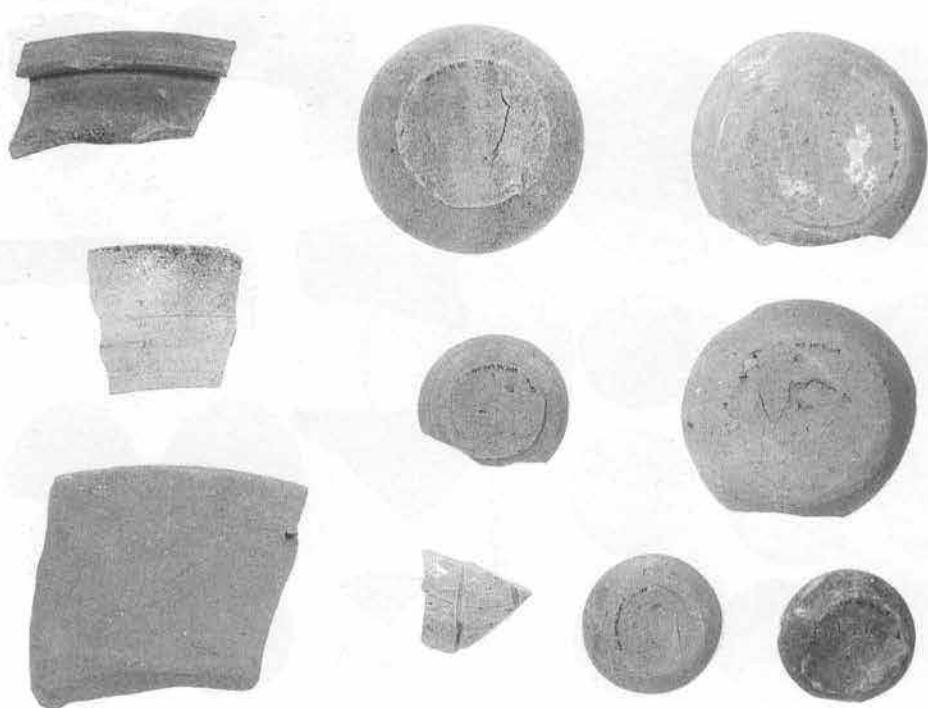
►方形竪穴 124

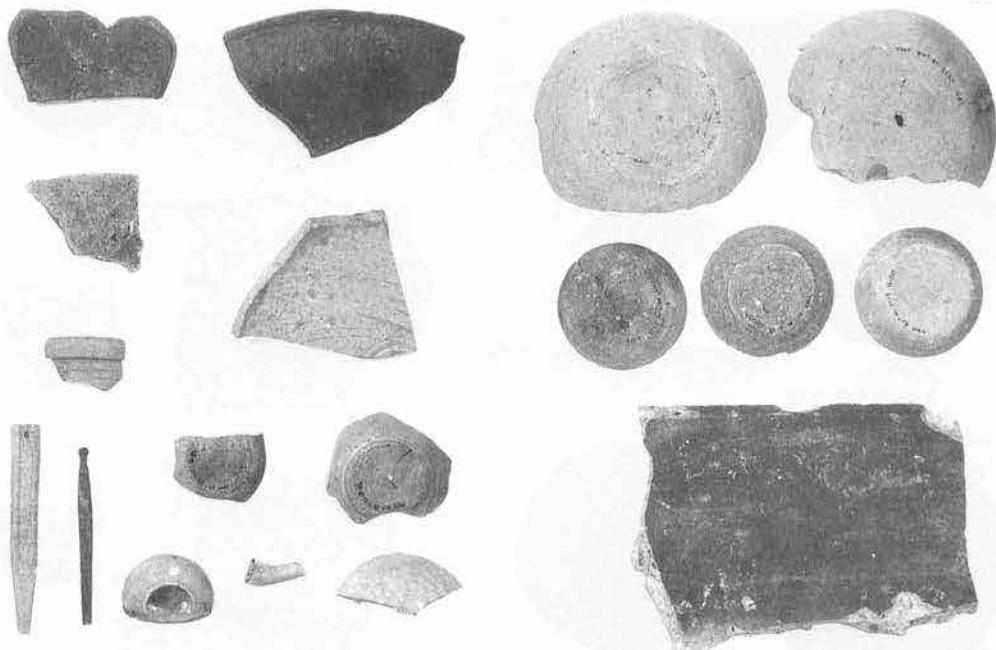




▲方形竪穴108

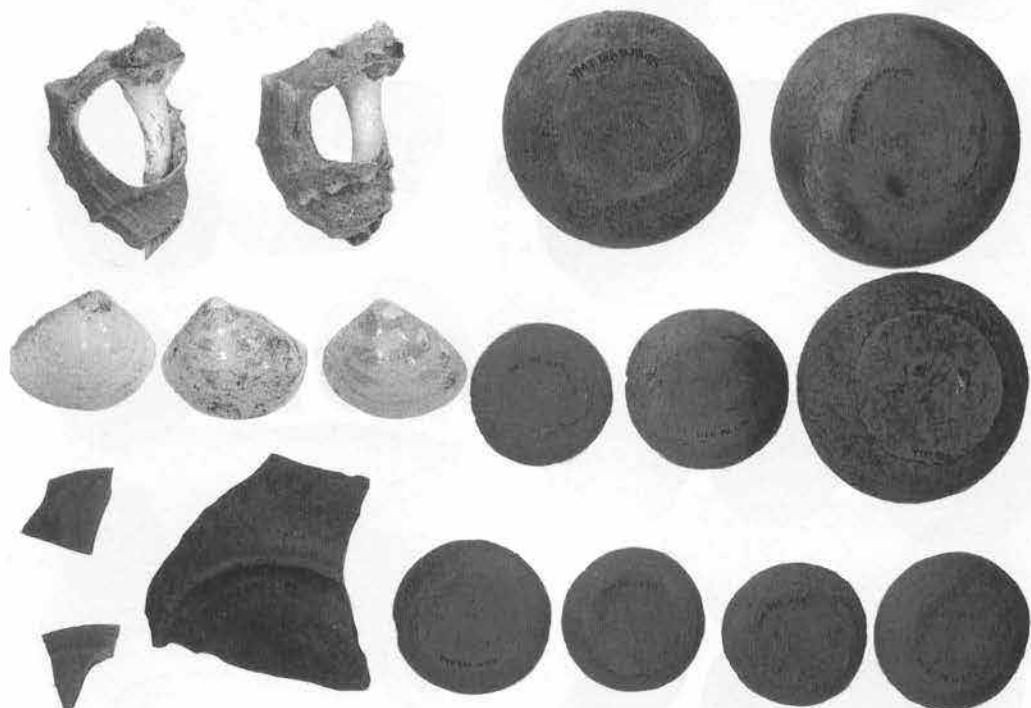
▼方形竪穴111



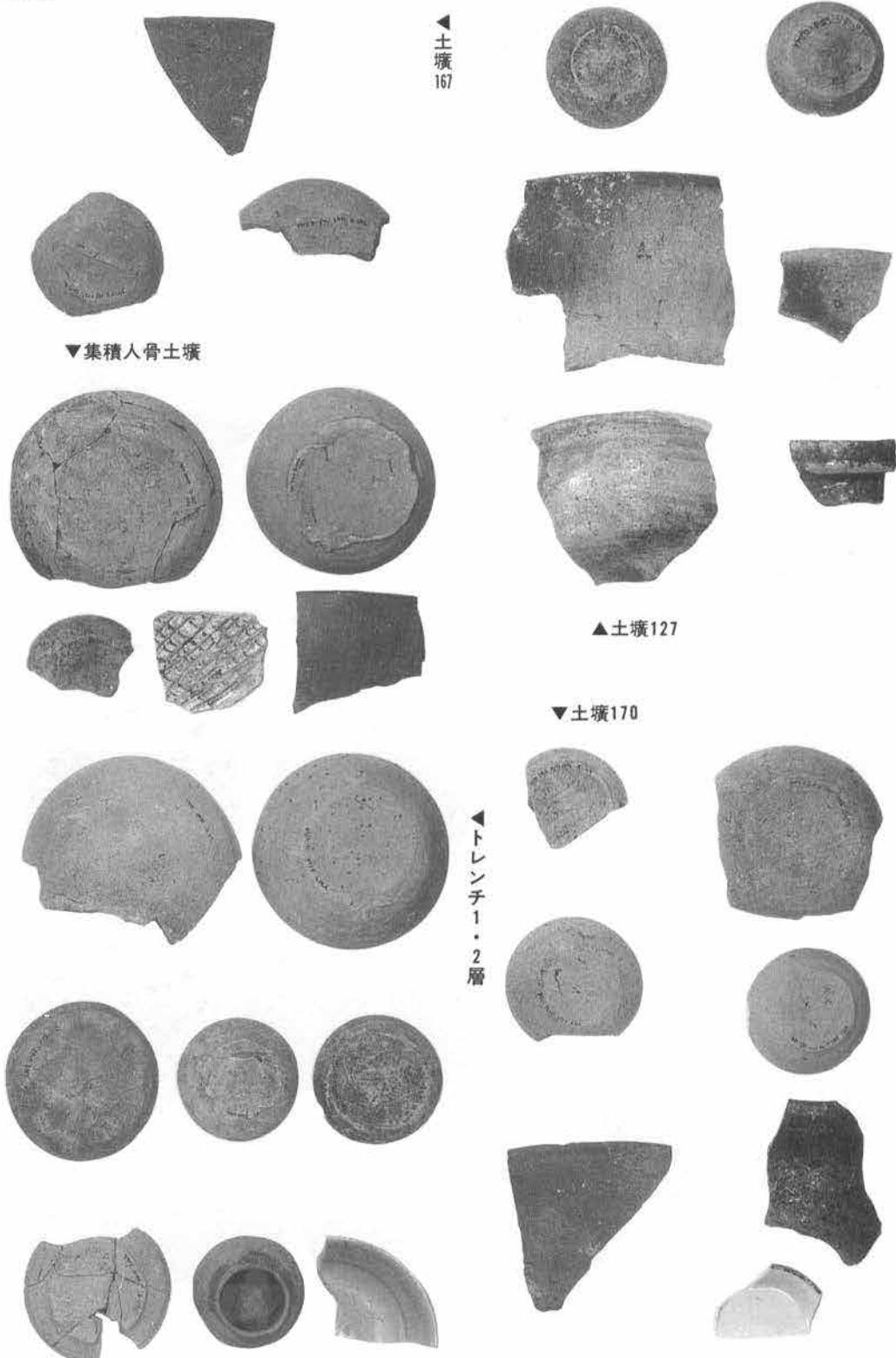


▲方形竪穴125

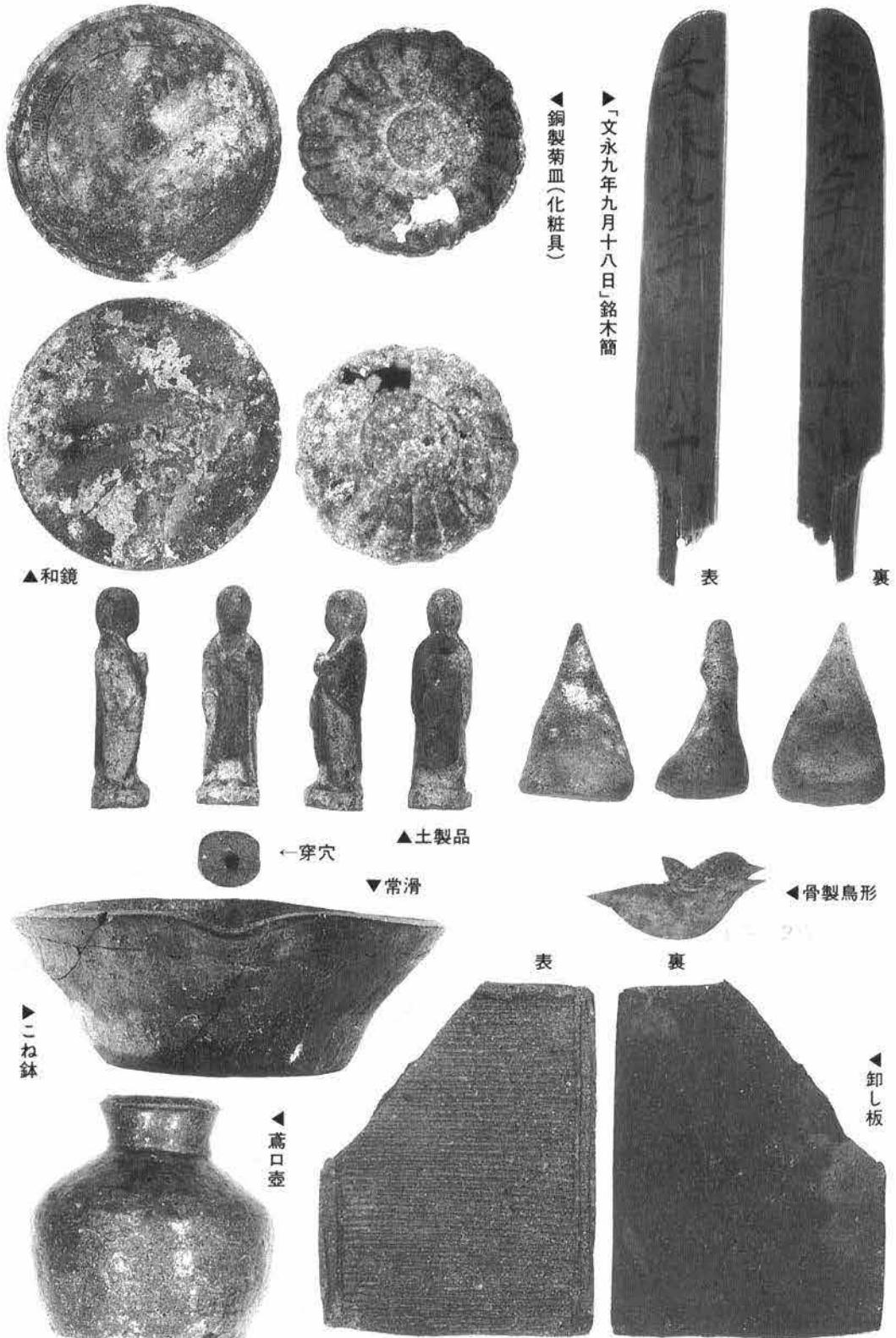
▲方形竪穴118



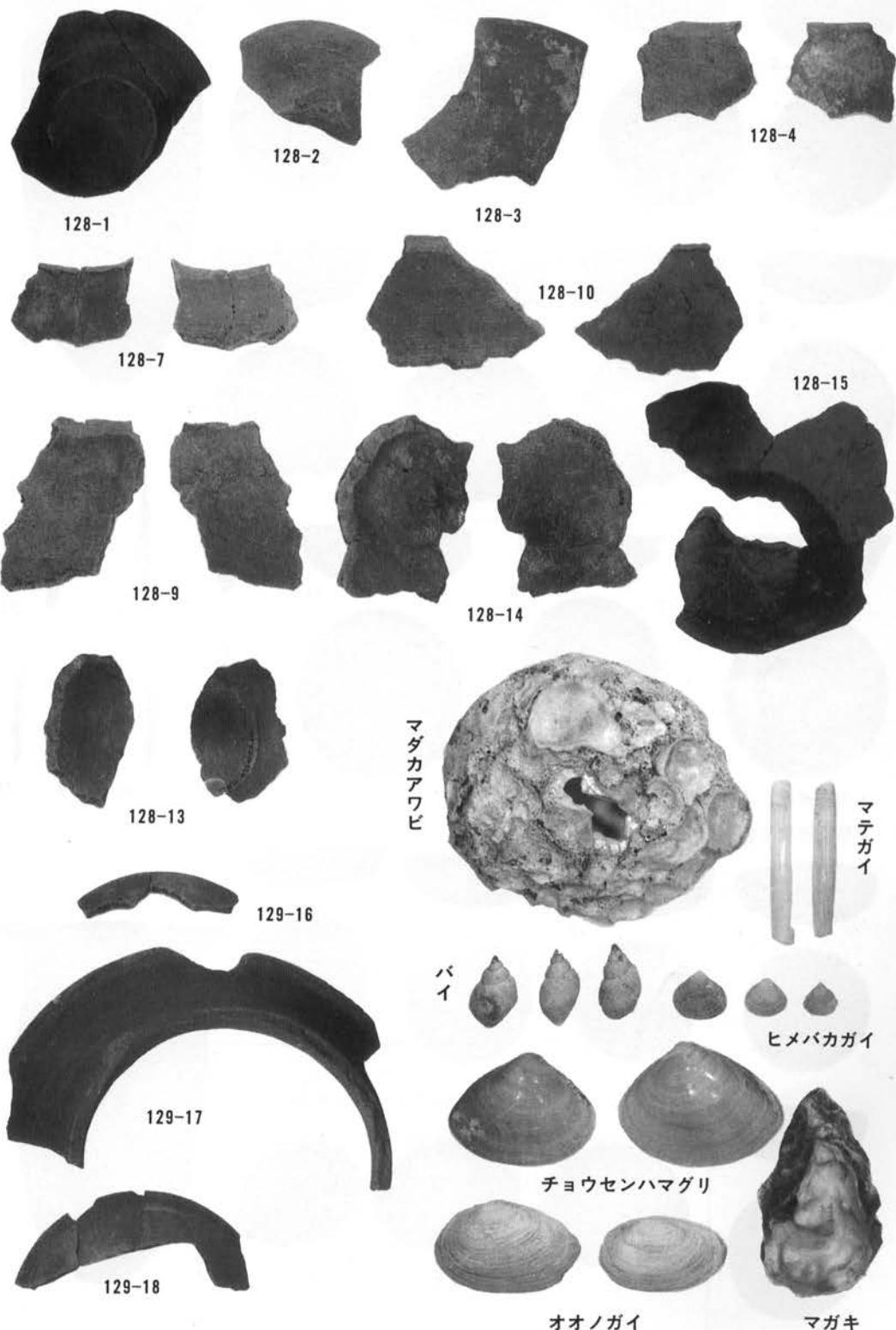
▲土壤70



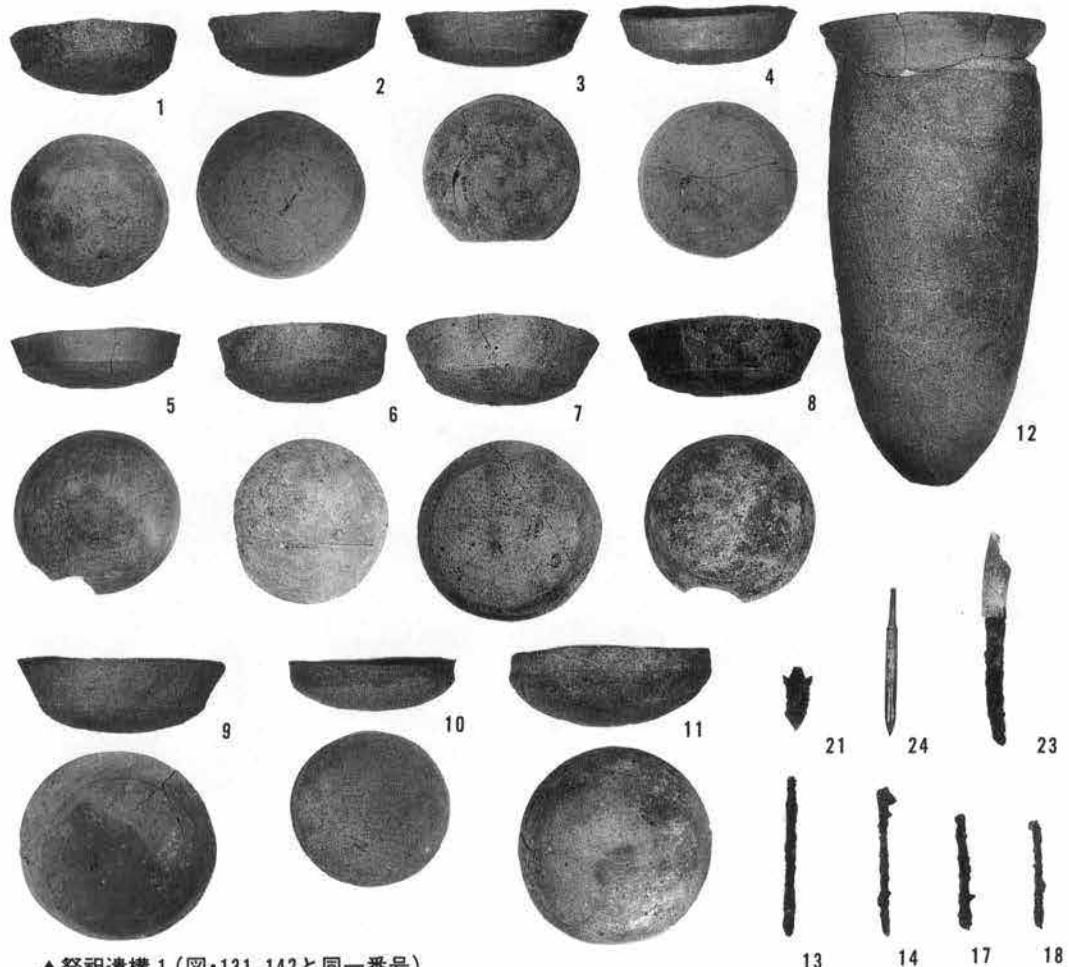




▼土壤10



圖版60



▲祭祀遺構 1(図・131,142と同一番号)

▼祭祀遺構 2 (図・134 と同一番号)

